

Illustration of a woman in a long dress and hat, possibly a historical or allegorical figure, standing in a landscape.

前編社會育教本日大

五册

五六號

架

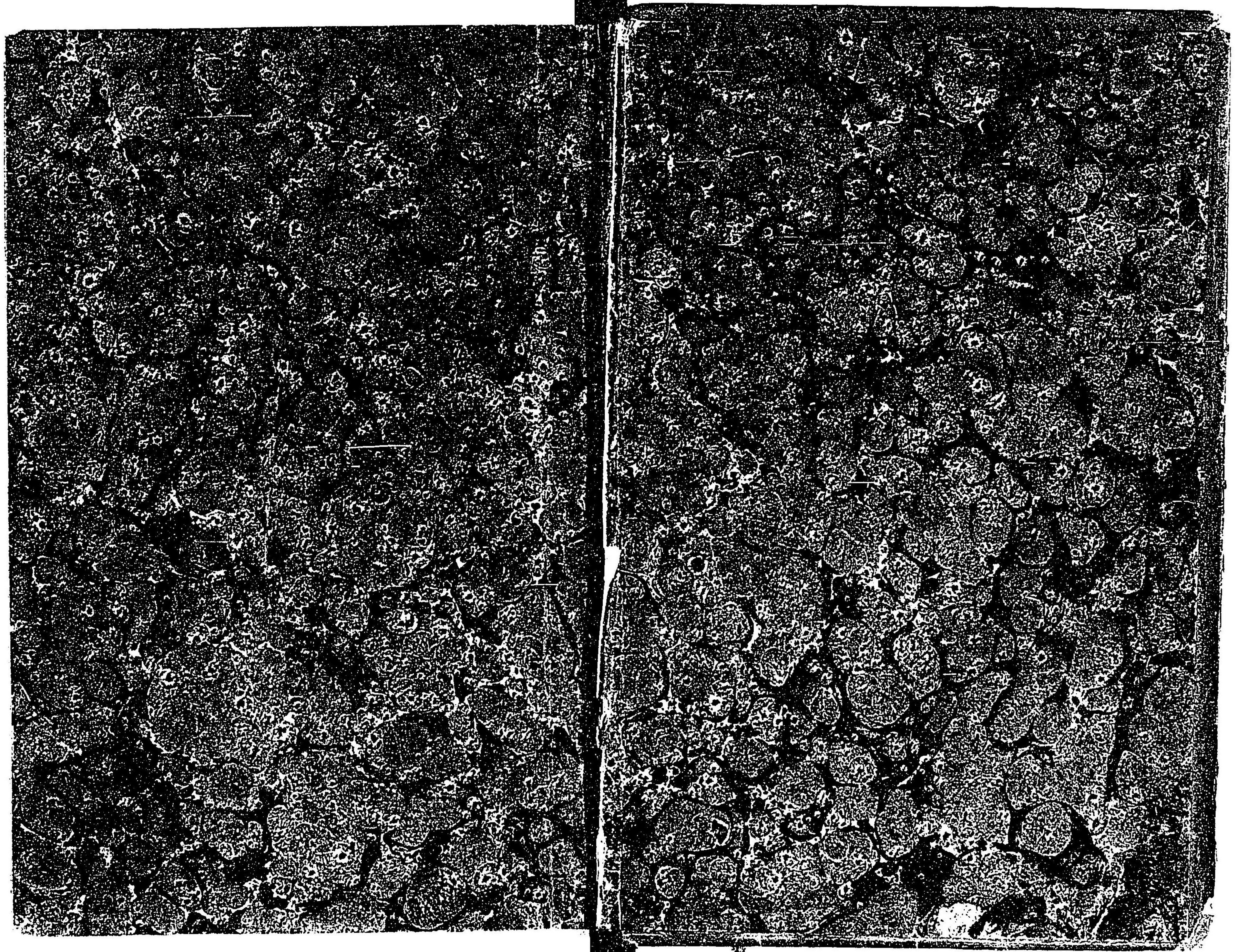
函

World 世界

# 萬國名國圖













特62

貸

548

ILLUSTRATED  
**WORLD BOOK**  
 FOR TRAVELLERS  
 THROUGH THE WORLD.  
 BY T. AWOKI & J. SINSUKA

萬國名所圖繪

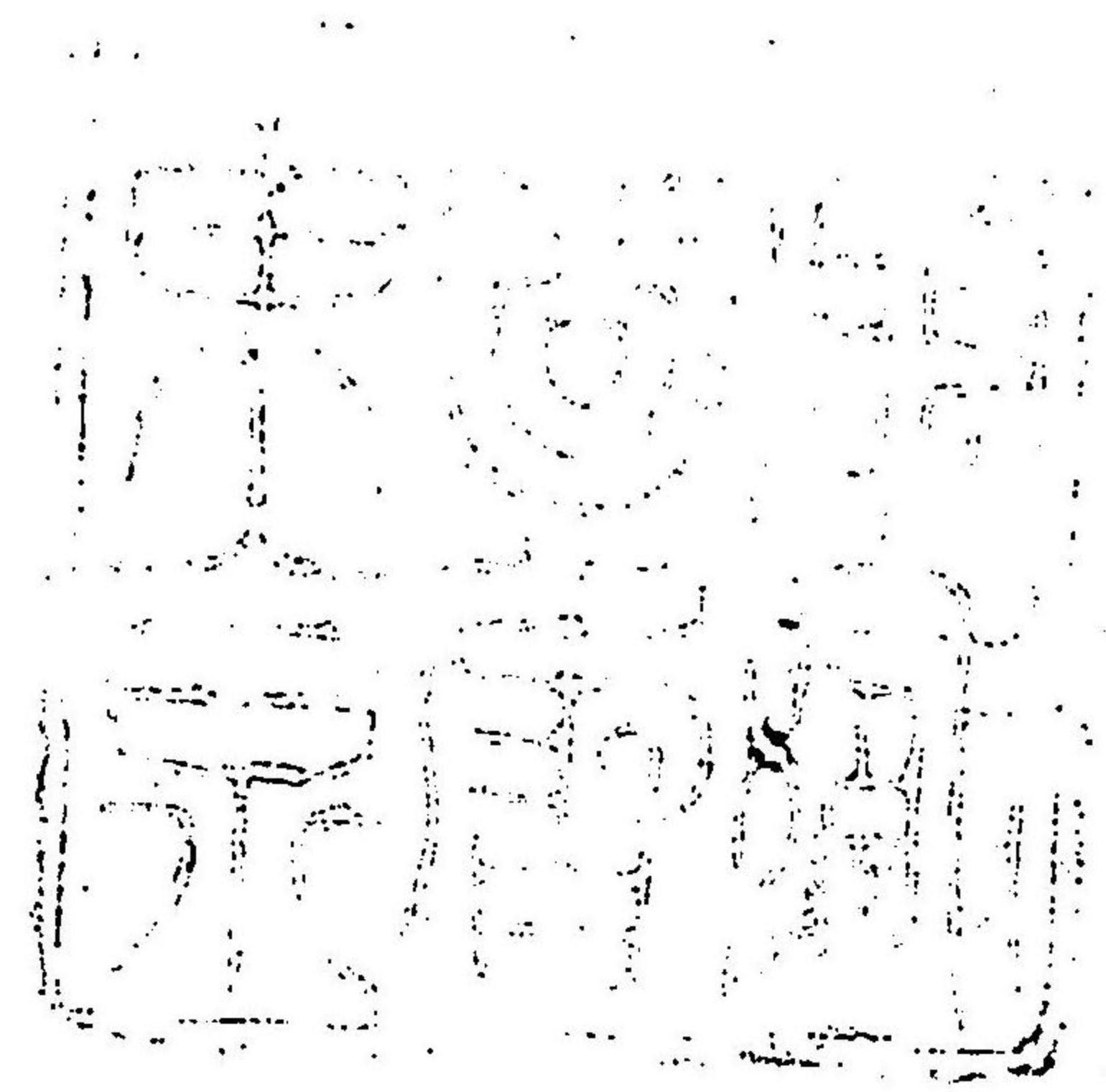
河津祐之先生題字  
 土居通豫先生序  
 南枝醇先生閱  
 青木恒三郎編輯

亞細亞 土耳其 阿剌比亞 波斯  
 土耳其 斯坦 阿非業斯 坦  
 皮路直 印度 又天竺 西藏

嵩山堂梓

OSAKA  
 AWOKI SZANDOW.

明治十九年七月廿八日 內務省 贈付





TOMB OF BUDDHA, CEYLON.

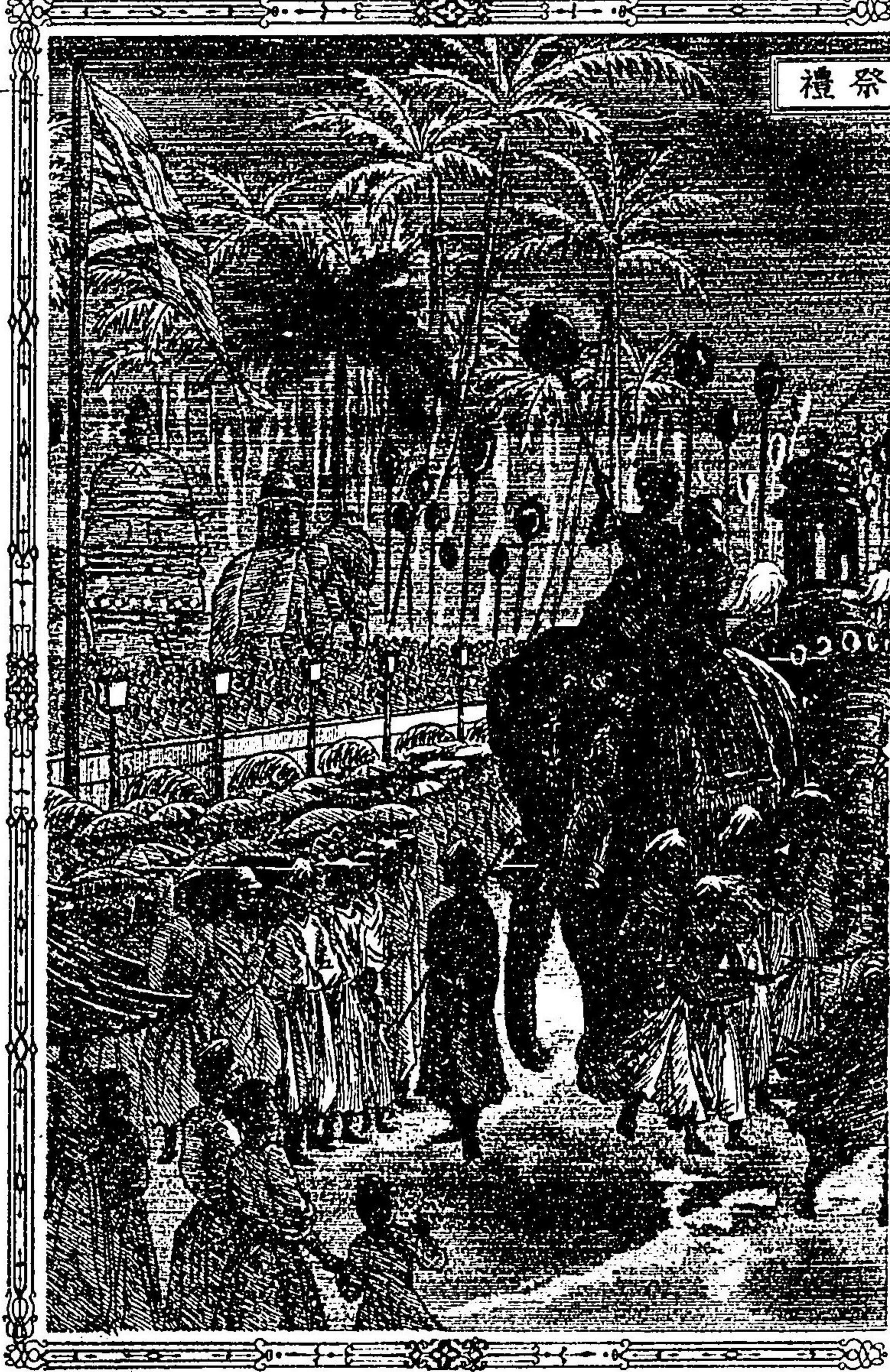


中井測

錫蘭萬佛來之碑

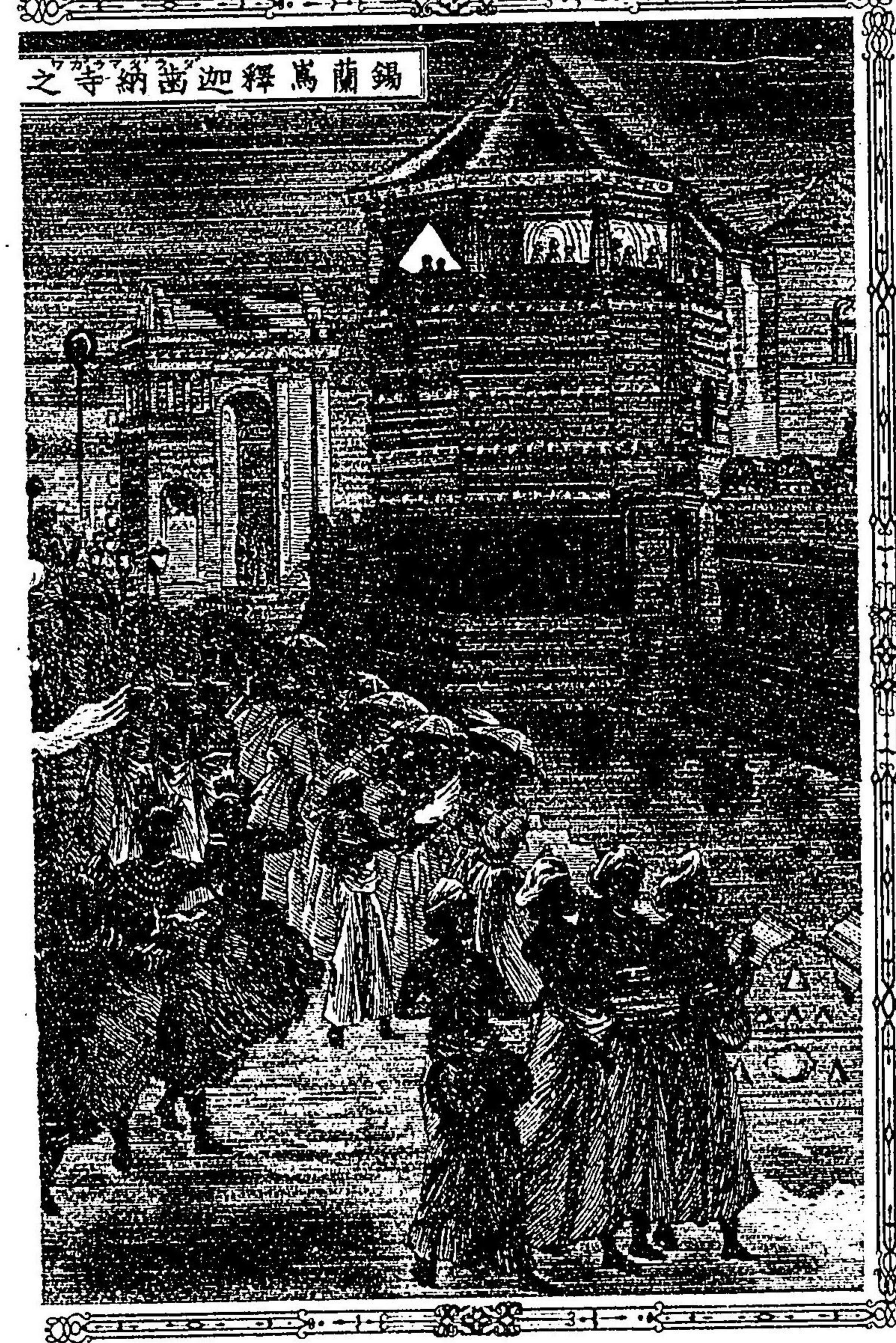


三 SACRIFICE OF DALADA, MALAGAWA, 二



禮祭

二 A BUDDHIST TEMPLE AT CEVLON. 三



錫蘭馬蘭寺之



亞細亞は諸君も知る如く  
 宇内進歩の源にして  
 然るに從來我國も  
 其實際の蓄を掲げ  
 怪む可きに至りあり  
 不便ありしを固るを  
 今由細重を旅行し  
 人情政治宗教や  
 名所古跡や地理略史

世界最古の開化國  
 見るべし聞くべきもの多し  
 数限りなき書籍中  
 之を説く者稀あるは  
 是き蓋し交通此  
 此書は即ち名の如く  
 其國々の風俗や  
 學術技藝物産や  
 奇事珍談を漏らさば

緒言

四 BRAHMINS OFFERS CHILDREN AS A VICTIM INTO THE GANGES RIVER.



モラバニ教徒ガジンガ河ニ見ル犠牲ノ供也

中井 扇昇 堂 刻

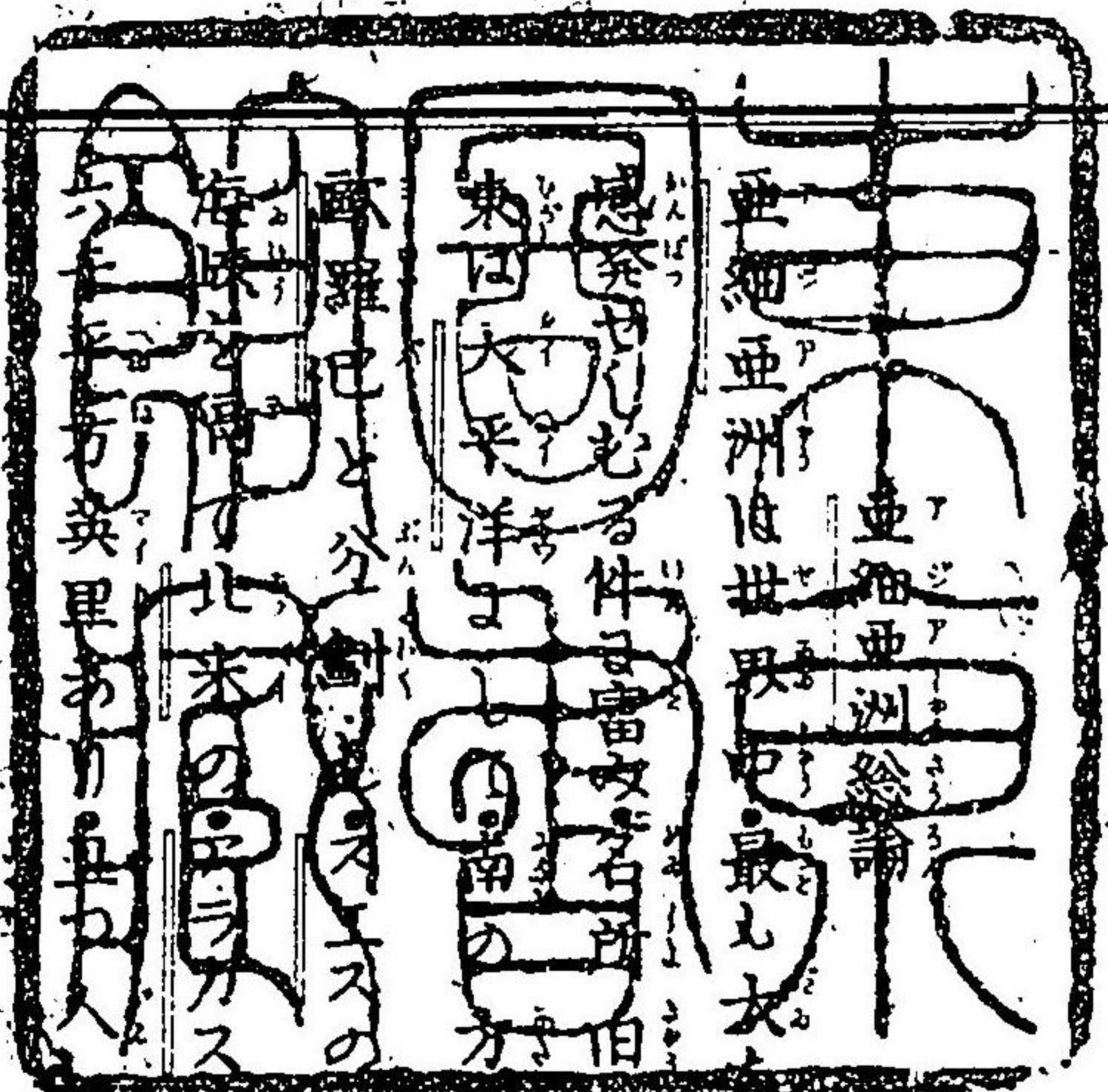


説き示したる者はして  
 殊に這回は名も高き  
 釋迦を耶蘇とマホメド  
 三大教祖が靈跡に  
 寫真番畫も多くなり  
 且つ各宗の要旨を  
 聊か説明為したきは  
 讀者宜しく注意して  
 緋閱せらるる事乞

明治十九年七月

編者識

世界萬國名所圖繪卷之六

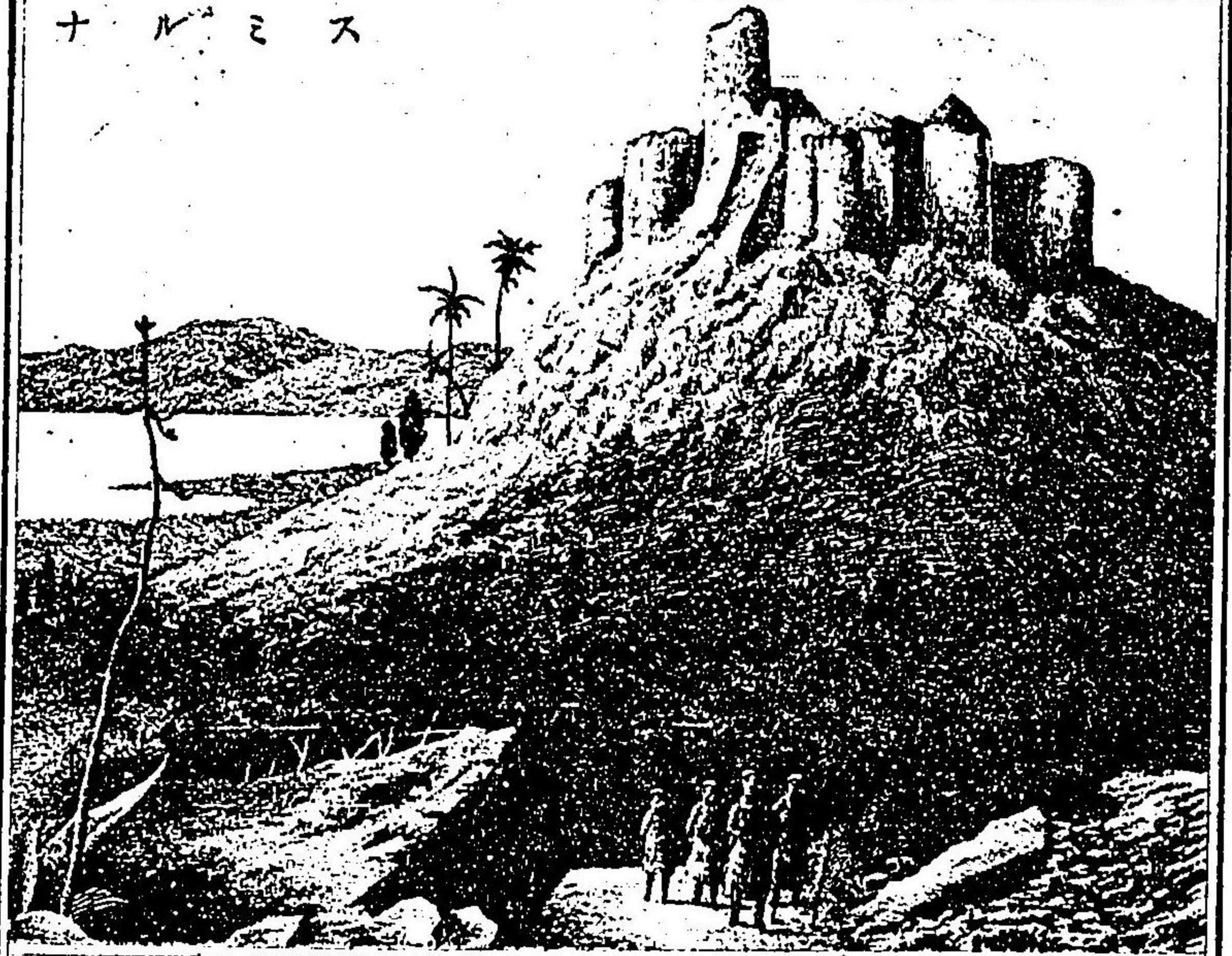


南枝 醇校閱  
 青木恒三郎編輯

東洋は世界最大なる陸地にて古來人事の歴史上善々人心を攪動し  
 感發せしむる件も富むる所也  
 東洋は北米のメラカス地方と相對す其幅員の總計は一千六百十四万  
 餘里あり其面積は六億五千四百萬此大洲の表面は  
 江河浸灌せらるる沃野もあきは氷雪に埋没せらるる寒地あり炎天暴露せらるる  
 燥地もあきは草や樹の鬱澤並に高山や大陵叢原沙漠等疆域各地に雜糅し  
 千狀萬態一様な總括解説すなからず其詳細は各國の條下に就て知り給へ

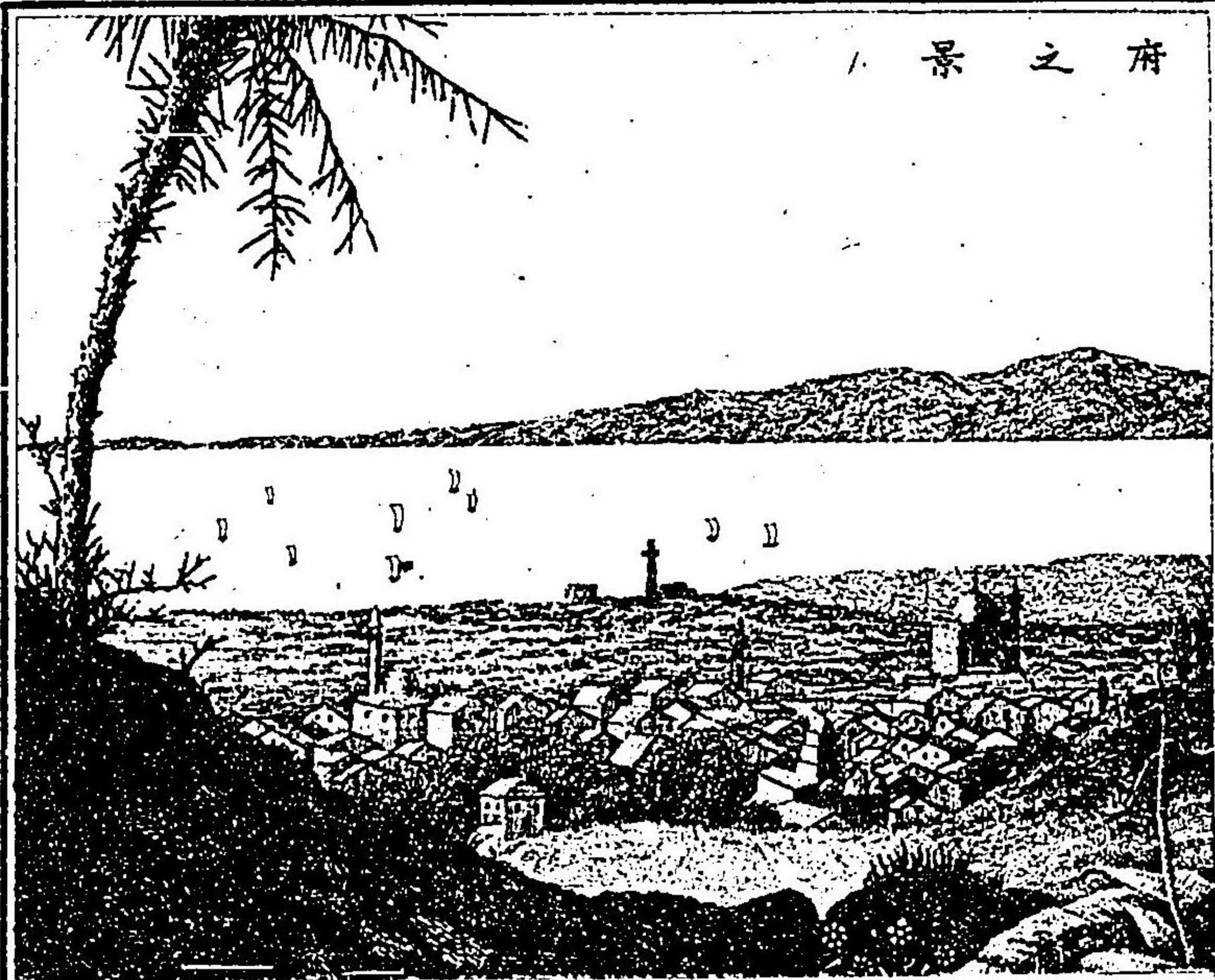


ナルミス



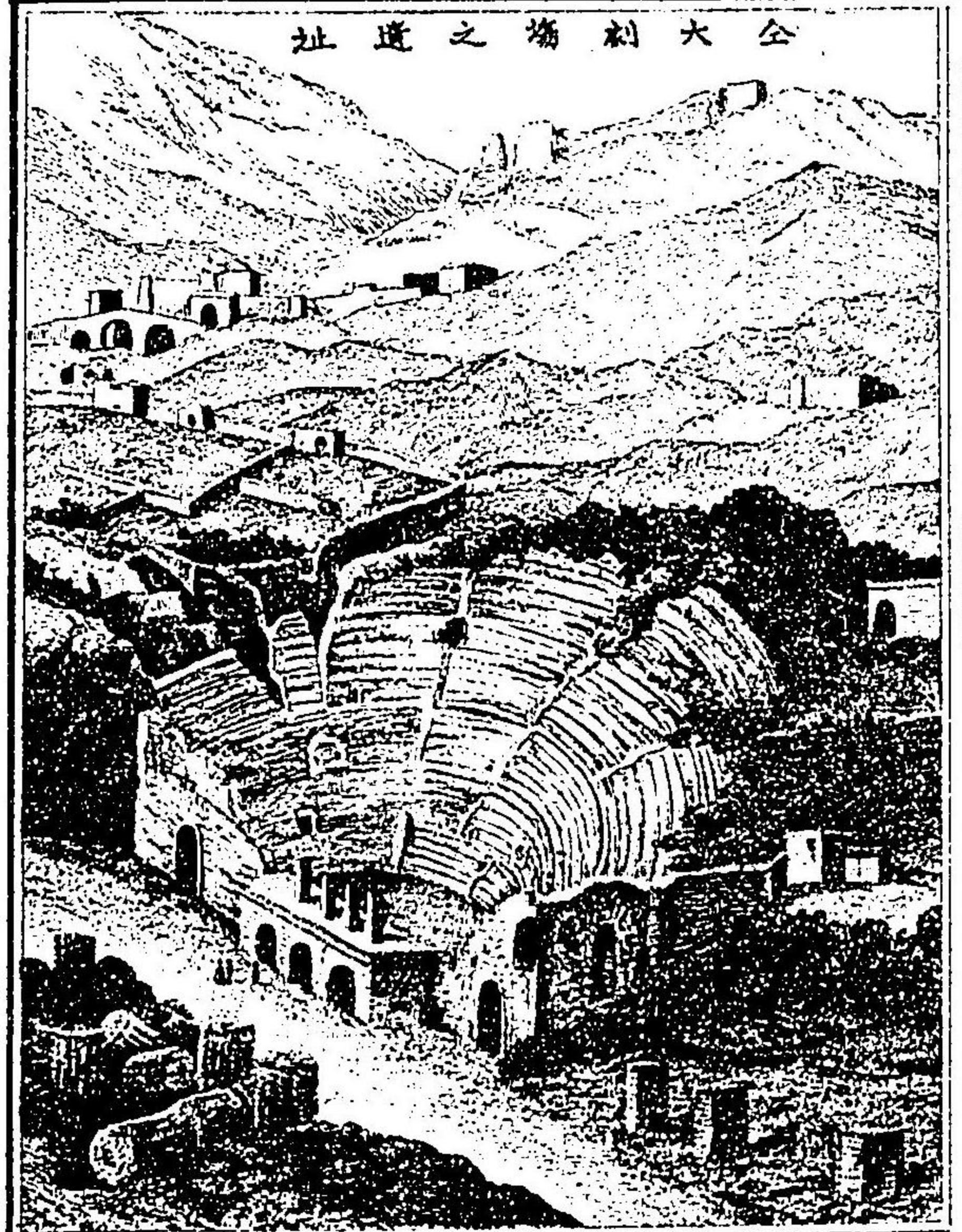
亞細亞土耳其國之部土耳其國の領地あり故日本書紀卷五十六以下參看せよ  
 亞細亞土耳其其は亞細亞洲最西隅に位置を占め  
 西方狹き海峡を隔て土耳其本部と相對し  
 東はペルシヤに連りて南アラビヤに跨りて  
 阿非利加洲と相望み北黒海に傍ひ東北は  
 魯西亞國と隣接す面積七十二万九千  
 三百五十方英里人口一千六百十  
 七万三千余人あり地勢山脈連亘し  
 西南方には沙漠あり氣候温和地味腴  
 金屬木綿無花果や煙草藥種橙葡萄  
 最も多々産出す  
 城内四部に大別し西北の部は小亞細亞  
 西南部はシリヤにて東北の部はアルメニア

府之景



中央及南部をばメソポタミアと総稱す  
 各部に土耳其の鎮臺あり候伯ありて統轄す  
 此候伯をパシヤとひ刑罰出納兵馬の權  
 皆掌握し歸し其威權何せも王に讓るるを  
 各自邦土を私有して半獨立の姿あり  
 人種言語は錯雜すをせと其中主たるは  
 土耳其アラビヤ希臘人猶太人を多しとす  
 宗教一般回教を奉ずと雖も人種の  
 區別によりて耶教や猶太教や其他の  
 異教を信する者もあり風俗固陋野鄙にして  
 亞刺比亞人等は邊境に遊牧却掠するもあり  
 スミルナ府之記  
 埃及國アレキサンデリア府  
 より西北海路六百五十英里  
 スミルナ府は小亞細亞西岸イキアン灣にあり





址遺之場劇大全

方形にして小窓あり商家は毛布咖啡や果物を多々販賣す。  
 エペソ之記 スミルナ府より四十英里  
 スミルナ府より西南にエペソと云へる處あり。瀛車瞬間に達すべし。是又古代希臘の

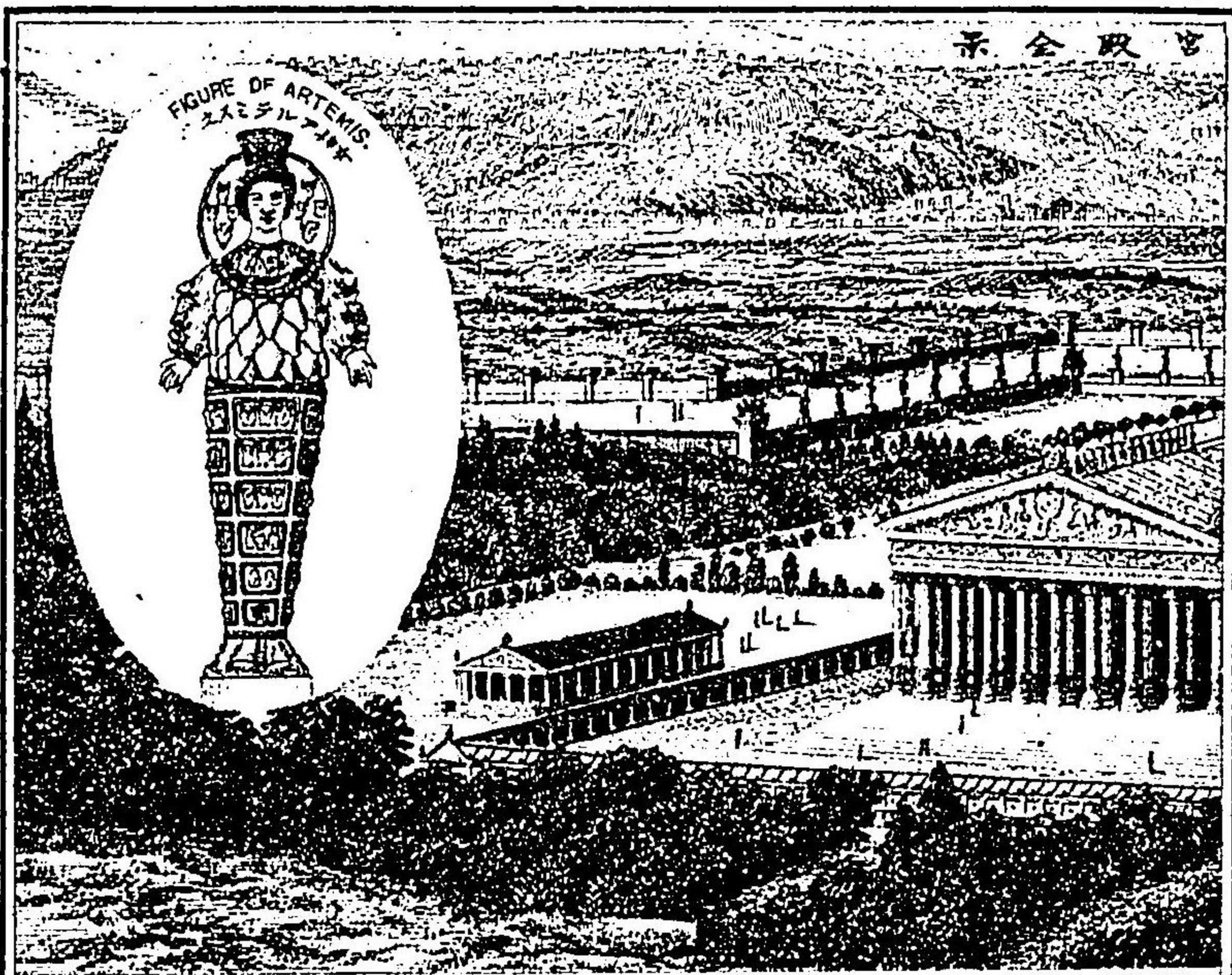
繁盛都府の一として古昔の遺物多々あり。上欄に掲げし劇場は罪人猛獸を場に入せ決死の勇を格闘し娛樂を極めし場處として觀者五万を容を得。其丘上にあるものは機敷を設けし跡と知せし。本書第四卷九十八ページ以下に示せし羅馬の部を参考せよ。◎左に示したる宮殿は古代名高きものとして世にダイアナの宮と云ひ世界七奇の一ありし其建方の概略は



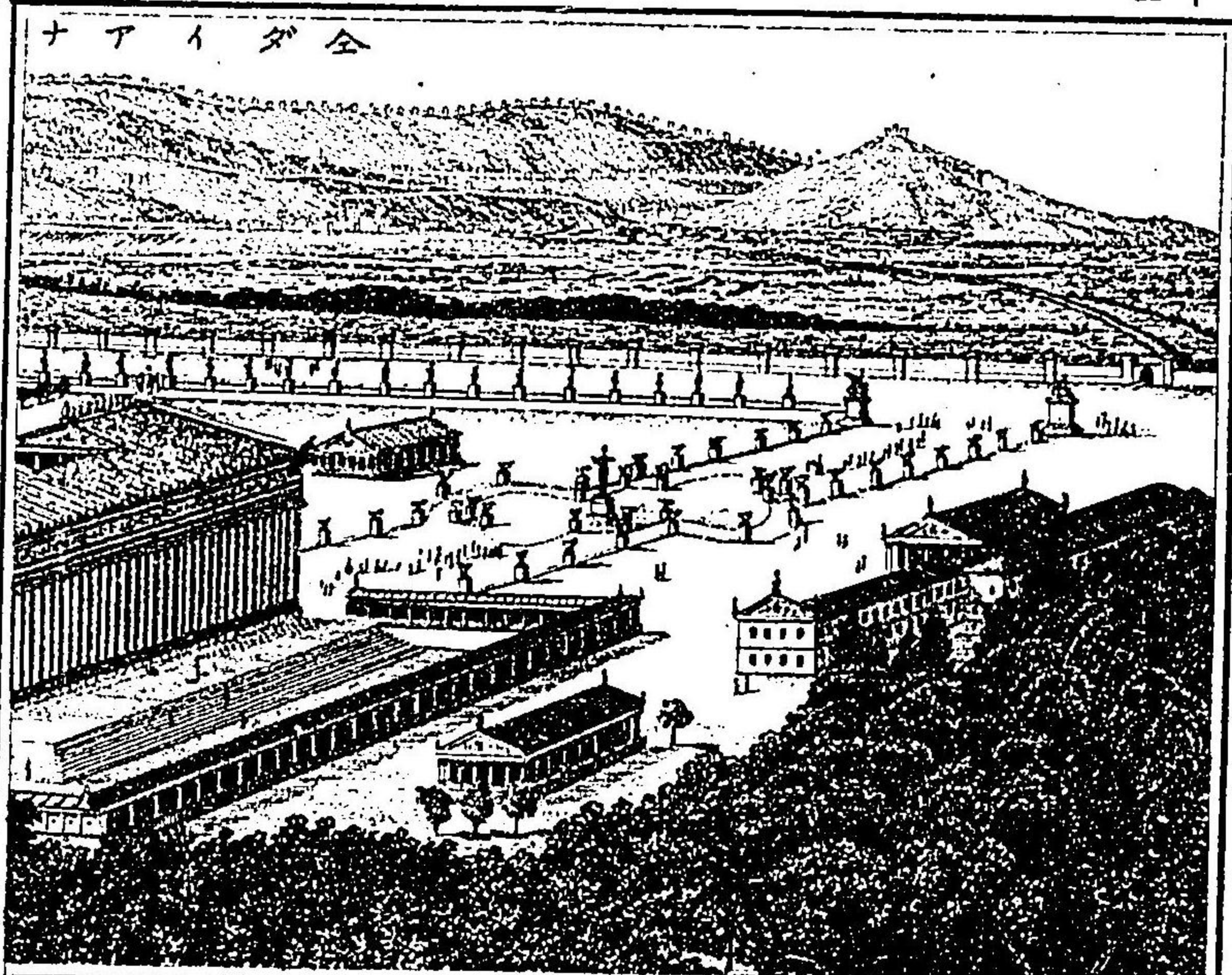
景之ソベエ

亞細亞土耳其の大都會人口十有九万あり。元來当府は往昔の希臘盛都の一としてアレキサンデル大王は曾て此府を修築し。爾來茲に數年間貿易樞要の土地とある。現今英米澳佛や其他諸國の商船は港内國旗を翻へし。商戰甚な繁昌あり。此處には土耳其の官衙あり。各國公使駐在す。府の南方の丘上に古代築きし城砦あり。郭壁處々遺存せり。丘下にメソスの河流あり。市内の水道に注入し。稍運漕の便を得。然るに街路凸凹し。修繕する事稀にして。兩中泥濘歩し難。歐米商館華美をせど。土民の家屋は粗造して。屋根は總体平坦に





此アルテミスの御神は、蒼穹より降りし救者と  
 厚を信じて疑はず且つ信者は此宮殿を  
 萬代無難の場所といひ競て空物を持来り  
 偶像の傍に陳列す其中最も貴きは  
 アレキサンデル大帝の像を畫きし軸として  
 價値二十余万弗其他ピリアスの彫刻物や  
 アペラス繪畫の美術等遂一算ふに違まなし  
 以て廣且美麗なる想像するに足ぬべし  
 ブリユサ府之記 東北百八十英里  
 ブリユサは昔レプルサといひマルモラ海に程近き  
 オリムパス山西方の高原上の勝地なり  
 市街の周圍六英里東西二區に大列す  
 区内に深谷溝渠あり數十の橋を架設せり



当時世上に名の高き匠長數人を使役して  
 臘石夥多を持ち運び且つ遠近の富貴なる  
 婦女は自身の寶玉や指環耳飾を寄進して  
 之を飾る宮殿の長を四百五十尺  
 幅員二百二十尺又某王より寄送せし  
 彫刻極めし臘石の大柱一百二十本  
 内外要處に建て連ね起工せしより星霜を経る  
 二百二十余年間為めり費す金額は  
 幾千萬の數知らず  
 扱て宮殿の中央にアルテミスの巨大なる  
 木像を安置尊拜す胸部に數個の乳房あり  
 蓋し衆の人民を保養ふ権力ある事を  
 表明したるものぞかし愚昧の人民皆曰を



或る橋上の兩側に市鄣駢列脈はしき長を九十歩余ありて廣を十有六歩あり市街は給て清潔に木石尖塔處處にあり民口七万三千人其内一万一千はアルメニア人種とす。

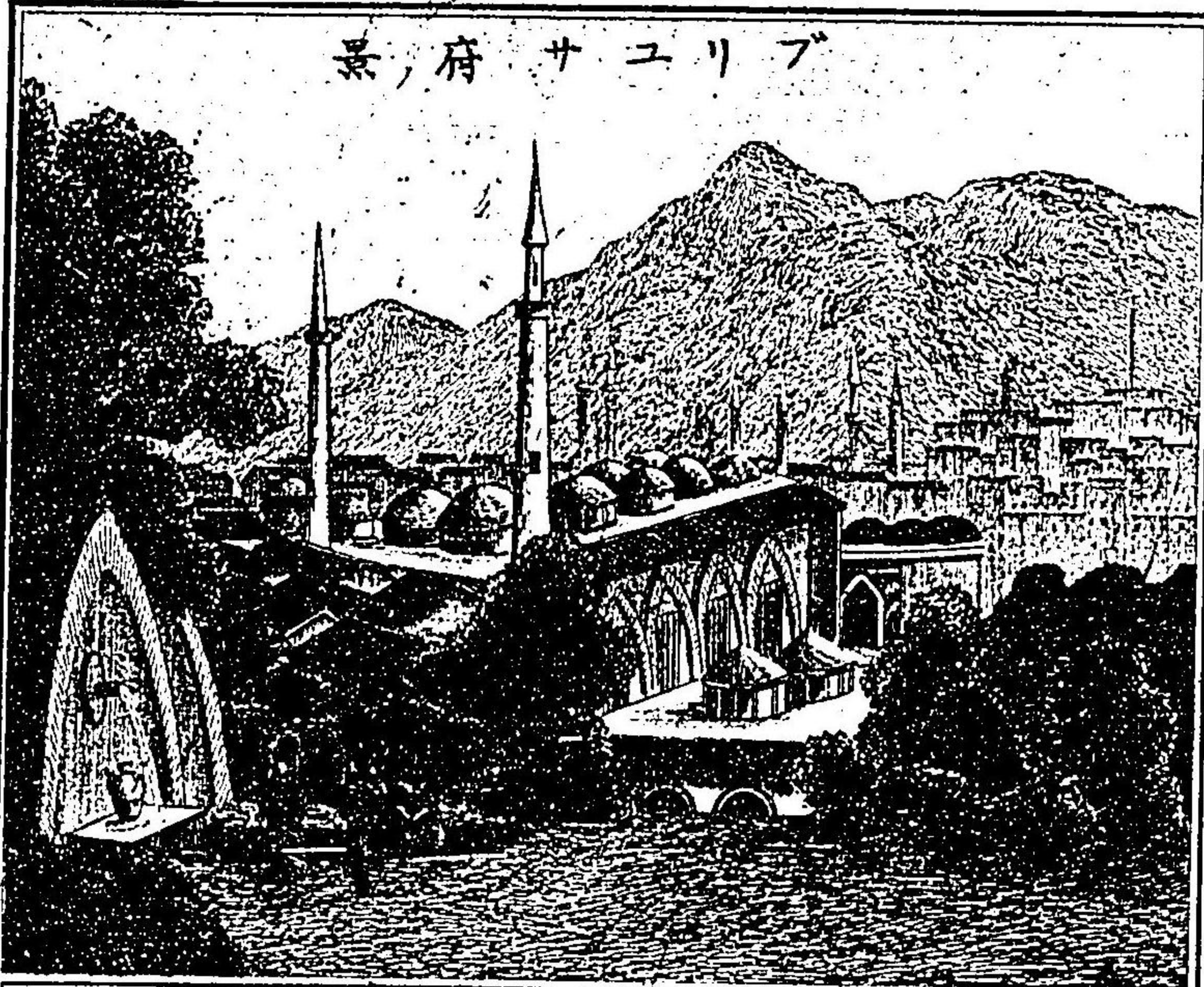
商業可なり繁昌し産物絹帛主とせり歐洲各地の人民は此地の絹を賞讃し需要者甚だ多とす實に然るべし府の周圍廣原上には桑の樹の鬱蒼繁茂するを視る此地震災時々ありて屢々害を被せり又古昔より名の高きセルマルバステふ泉あり土人は之を尊めり。

元來此府はビシニヤ王プリユキヤスといふ者の創建したるにて一千三百五十有六年に彼の土耳其の第二の王なるオトマンの太子オルカンてふ者が攻略せらる其より後土耳其國の首府となり非常の繁華を極めたり一百年を経たりしが土都は此時對岸の歐洲に在るコンスタンチノープルに移されて當府は漸々衰頽し今の姿となりけり

ロデス島之記

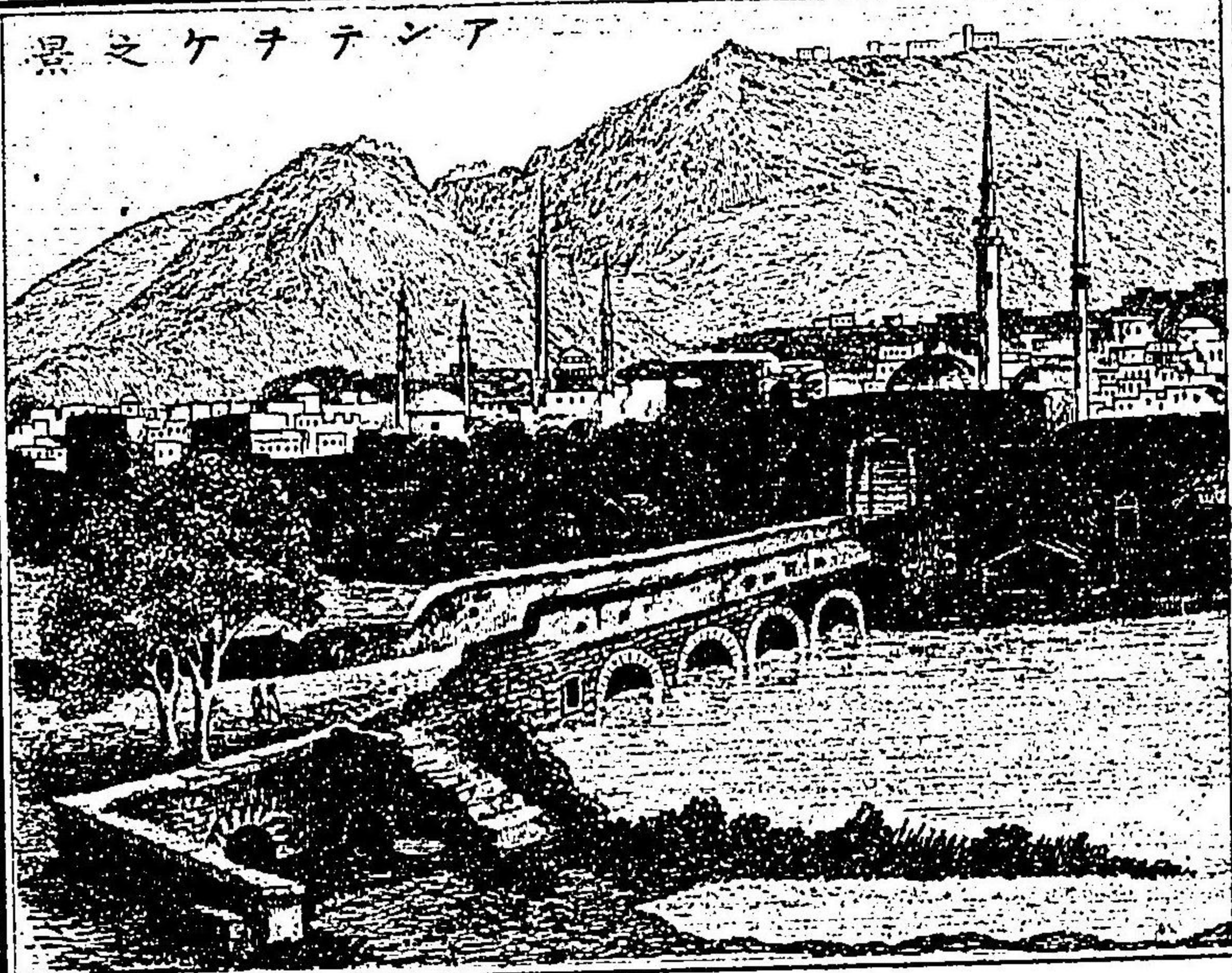
亞細亞土耳其の領地にて地中海のアナトリア灣内にある孤島あり島中一の市邑あり

景、府、サ、ユ、リ、ブ



ロデスと稱し古代より世に知らるる都會あり現今人口二万余古昔は此地の港口の左右の岸に臘石の基礎を高を累積し臺上壹百尺余の黄銅造りの大偶像右手に至大の矢を持ち左手には巨燭を高捧げ沖を睨下跨立せり之をロデスのコロソスと世界七奇の一なりし。蓋し右の大像は鑄工カルレスてふ者となせしと云へる兩人が王命をうけ鑄造す内身全を空洞にして左足の内部に旋梯あり段階數層昇るべし漸々掌に達すきは巨燭ありて點火ありおき燈臺の代りにて航海鐵路を遠照す其跨下高を潤き故





景之ケヲテンア

高さ五十尺ありて厚さ十有五尺あり又オロンデスの河岸に水車を設けて網を織り内外各地へ輸出せり街衢総体清潔にして古代の遺物を散見す歴史に就て原ぬる元来此府は降世前三百年にシリユコスニケトルある者創建しアンテナコスエドワロス大ひに此地を改良しヘロデ王の時代は倍々昌盛の都府なり其中心の大街は長さ四英里余ありて幅は五百五十尺両側圓柱二本宛四本を列樹て其上に屋脊を掩ひて色々の奇功を極めしギリシヤ風の彫刻をかし潤飾とし間々樹蔭の道ありて清潔華麗の有様は今の佛國巴黎府の

像偶大スデロ



四月前

巨艦の出入自由なり然るに今を去る事二千一百六年前大震に遇ひ沈没す本書の初巻に掲げたる米國自由の巨像とは稍小なきと太古中如斯の巨物あり以て亜細亞の進化せる当時の形情察すべし

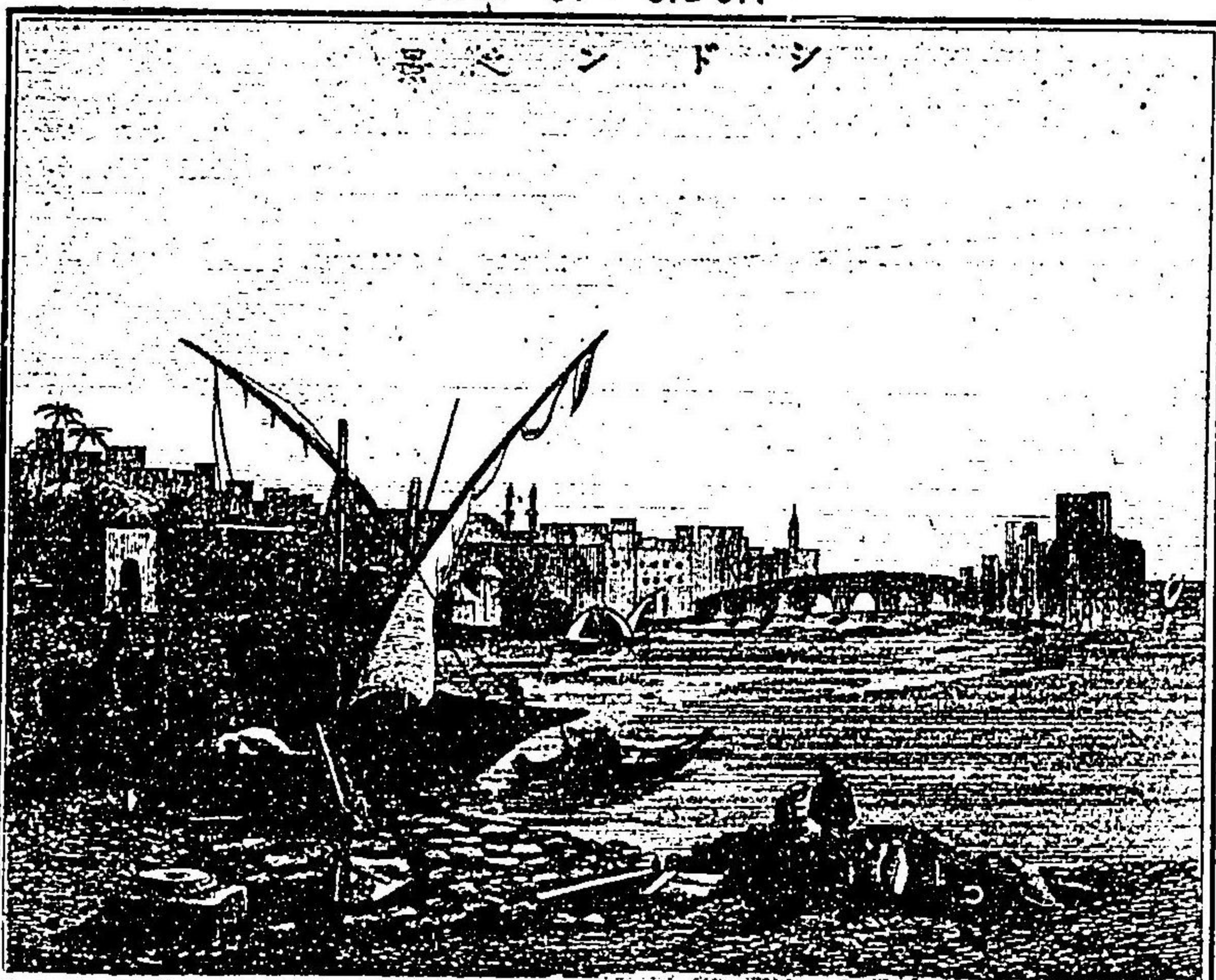
アンテナケ府之記 ロデス島より四百五十英里 ロスを解纜東航しアフリカを左に眺シフランス島を右に瞥て進航すきはシリヤの部オロンデス河を浜る二十英里の左岸の地是は羅馬の時代より世に名も高きアンテナケ現今人口一万人背後にレパノン山を負ひ近傍一小湖水あり之をアイオルダーと云府を繞らせる郭壁は



玻璃を履いし華街より心雅味を添へて且羨あり（当時佛國の如き亦英國の如きは現今のアフリカ内地の野蠻と均しかりし）  
 羅馬の大將ポンペーは（本書四卷百二ページ以下を参考ナベ）此地より来て水道や浴室等を建設し  
 宮殿公廨全備して人口五十余万人羅馬三位の都府なりし爾來此府の人民は  
 奢侈と放蕩皆耽り貴族は紫色の衣を着し風を切て横行し競馬舞踏や行列や  
 賭博淫遊盛んよて人情風俗紊乱す此時耶蕪の傳道師ポロ来りて傳道し  
 真の道は誘導へり蓋し耶蕪の公會を異邦に建てしは志を以て創ふりとし信者をば  
 クリスチヤンと稱へし（亦此の公會より始まざり）  
 爾后數年間繁盛の都會なりしが不幸にして十有五回の戦乱と七回地震と遭遇し  
 人家大半荒廢（トルコ、土耳古の虐政承しより今の姿となりたりき）

シドン之記

オロンテス河を乗出でてシリアの沖を南航す二百英里の左岸の地シドン一名セータと云ひ  
 民口一千余人あり此地は四千余年前フエニア國隆盛の時代昌の市府として  
 古來此國歴史上關係多き處かり陸地を離れし沖中一小島あり周圍をば



ツロ之記

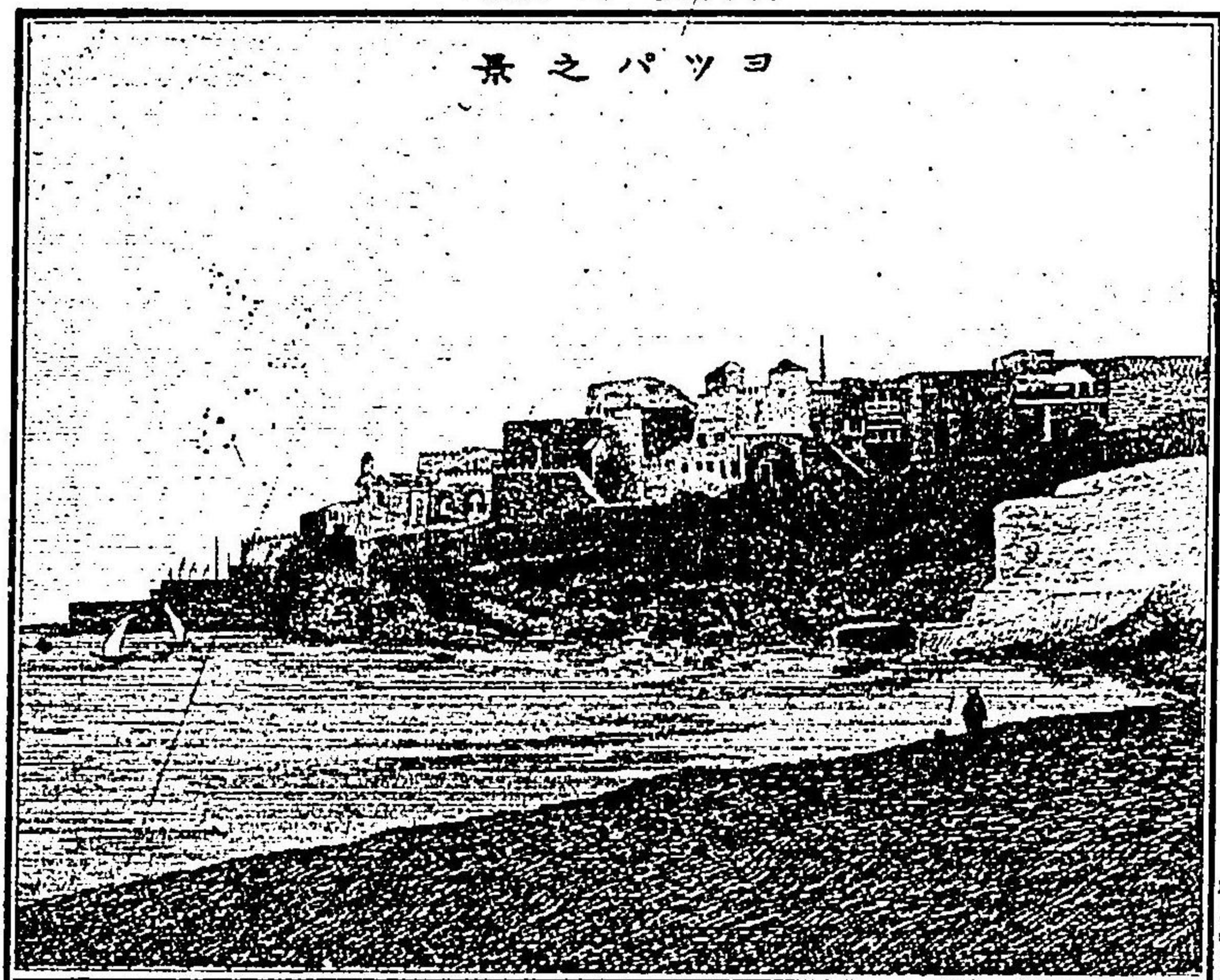
シドンの南二十英里ツロと云へる處あり  
 現今人口五千入此地は耶蕪の降世前  
 三百三十有二年アレキサンデル大王が  
 刺戦したる處よて其後數回の變革あり

石垣を以て繞らせり生産物は絹果物  
 最も多々就中橙佳味且名高し  
 此府も太古は貿易と學問及富有と  
 玻璃の製造等より世に名を博せし土地なりし  
 然るに今は衰へて纔か古跡のみ存す  
 其遺物中觀るべきは宗教上の大戦争  
 十字軍のありし時建築したる城砦あり  
 廣潤堅固人をして懐古の念を發せしむ



VIEW OF JOPPA

景之パツヨ

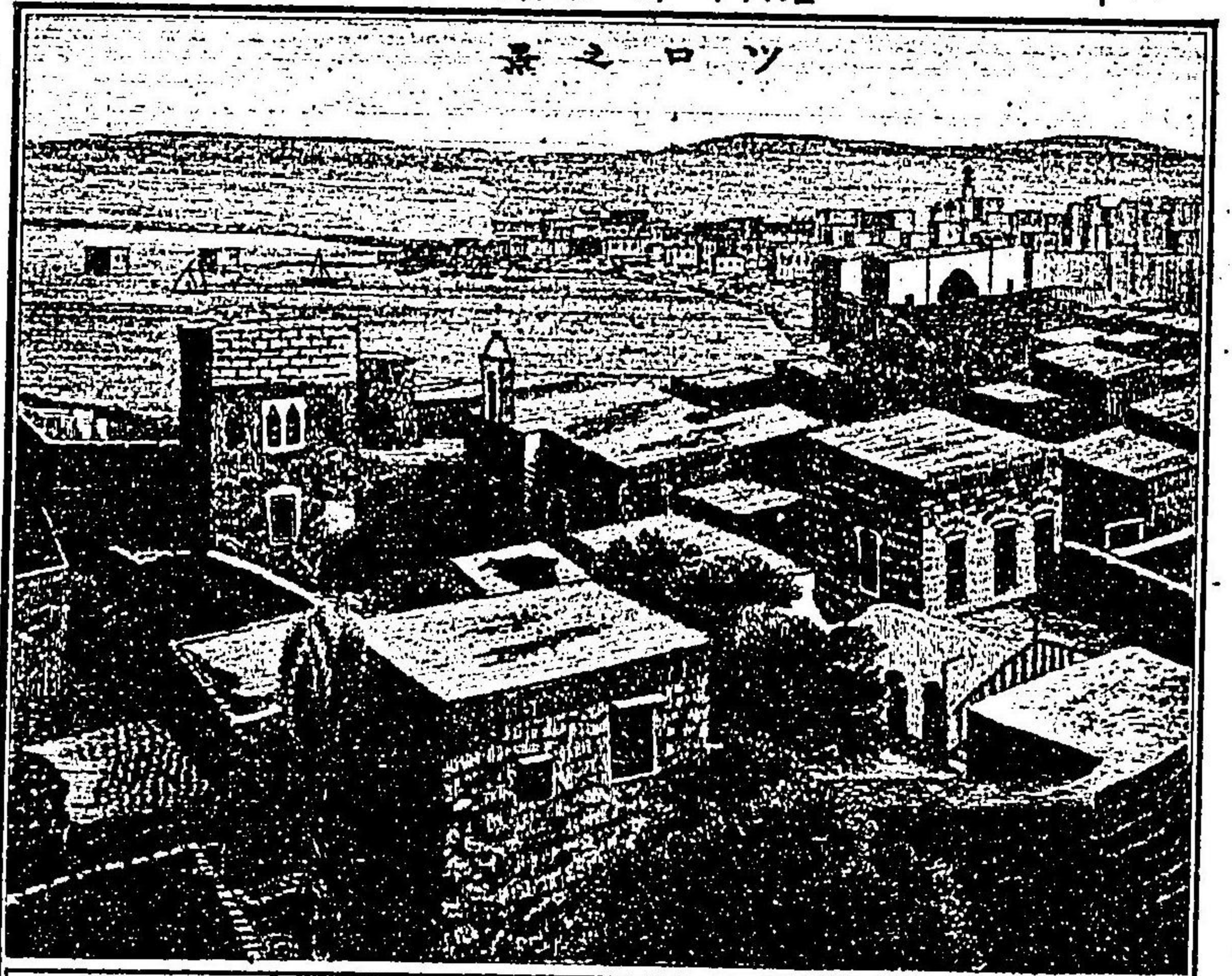


此月繪製

商家は綿や穀物や果物を夥多賣鬻ぐ  
 人口八千余人あり  
 凡ろ字内各國の基督其他の信者らが  
 エルサレム府の旧跡をぞぞらん為め来る者  
 皆おの邑に上陸し馬車を備ふて出發す  
 シヤロンの豊けき野を通り山路猶太に近ければ  
 此海邊の地名パレスチナと云ふ南地  
 の一州を言ふ也パレスチナと云ふ事は上  
 田の次第に詳説を要す  
 談河は古史の名も高きタビデがコイヤなる者を  
 殺せし時小石を拾ひしと云ふ古跡あり  
 其より進めば時あり始めて聖地を望見す  
 エルサレムの記  
 漸々此地に達すきは入口一大門ありて  
 古色蒼然破損せり是より市内へ入り得る

VIEW OF TYRE

景之ロツ



此月繪製

古代の歴史を讀む時は關係多き市街あり  
 此地産物多き中貝類より得る紫色の  
 染料は貴重なる者にして羅馬の帝は平常に  
 紫服を着し今色の袍衣は王者の表號とし  
 貴顯紳士はあはさせば溢りて用る事を得ず  
 其原質は稀有なる貝類中の咽喉に  
 唯一滴を存すのみ是は此地に特有の  
 名高き産物なるを以て参考の爲り一言す  
 ヨツパ之記  
 ツロより南進一百英里ヨツパと云ふ港あり  
 港口淺々大船は半里の沖に投錨す  
 船に乗りて上陸し此所彼方を睨むるに  
 人家はチユファ石で建て形は前府と大差なし



JERUSALEM FROM  
THE MOUNT OF OLIVES.

三二

橄欖山よりエルサレムと望む



樓上放觀する時は猶太アラビヤ地中海  
眼前見下す其佳景實に勝致を極めなり  
蓋し当時の戦具なる彈藥大砲等はなを  
唯破城槌といひ城を攻む時檣上より  
鐵頭を附せし巨大なる横木を一本吊卸し  
城壁に向つて之を撞ち或は弓矢劍戟を  
使用したるのみならずは金城鐵壁帝ならず  
羅馬皇帝も此府には屢々驚嘆せしといふ  
然せども此府の名高きは城は非ず神殿として  
神殿はモリヤの山上に結構壯麗巍然たり  
全體良材臘石や象牙を用ひ鏤むる  
金銀寶玉以てせり基礎の石は平方  
七十尺あり其上に臘石圓柱列び立つ

二二

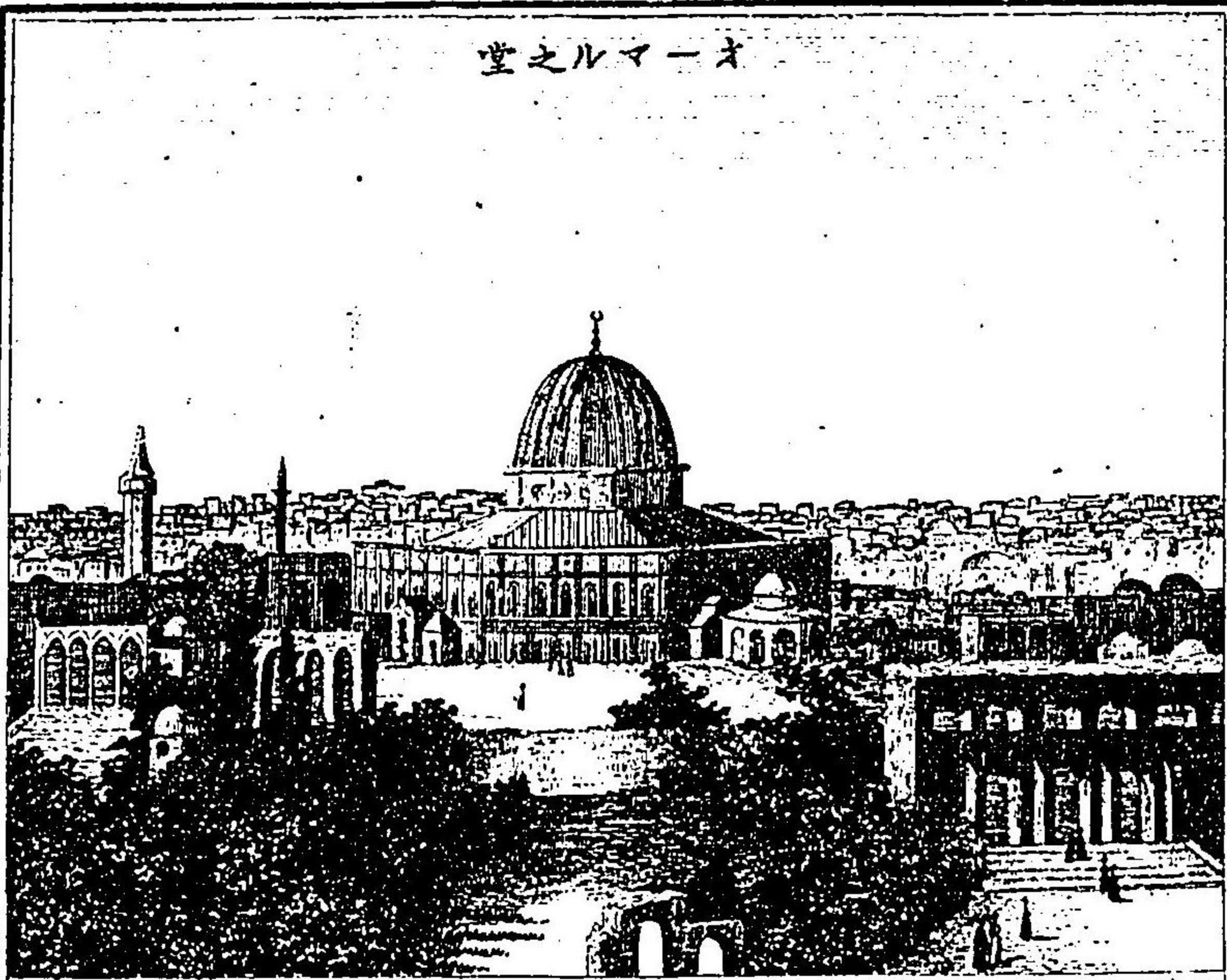
蓋し地勢は海面を抜く二千五百有余尺此高原は皆総て石灰質より成立てり  
南峯高々聳ゆるはシナン山と名稱し是より北方アブラハム溪谷を以て其東  
元然時あるモリヤ岳モリヤの東北橄欖山その亦北にある嶺をカルバリー山といひ  
耶蘇基督の十字架を磔げらせしといふ處なり  
抑心此地は耶蘇教の根元といふ土地にして古來最も著名あり創建年紀は古にして  
詳知するを得ざせどもアブラハムの時代より  
降て耶蘇の時代には堅固無比なる城ありて巨石を以て作なる三つの石垣あるのみか  
道路狹隘通行上甚難敵兵を防禦するに屈強の要地ありし第一の  
石垣(セタ)を圍繞せり一個の石の横巾は三十五尺半ありて縦は四十五尺半  
其厚き事十九尺以て壘積重疊す第二の垣は諺市の中央を貫通アントニア  
堅城まで連絡し第三の垣はシナン山を繞らせり長さ殆ど五英里余  
九百八十尺毎に臘石造の高檣あり高さ何れも一百尺番兵常に捍衛す  
且第一の石垣はプロファイナ高檣あり八角形に築造し高さ一百四十尺



THE MOSQUE OF OMAR  
AND THE HARAM AREA.

五二

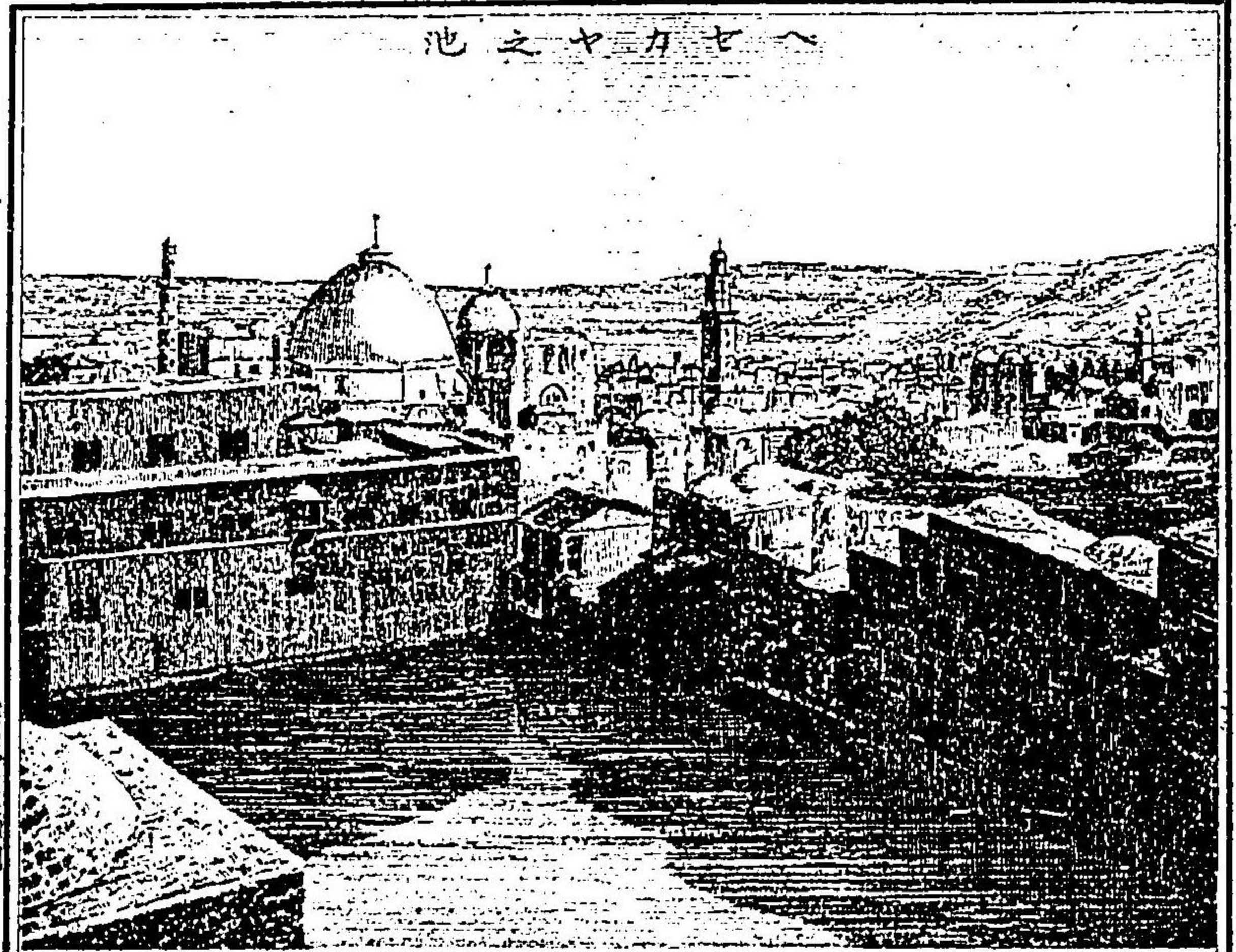
堂之ルマーオ



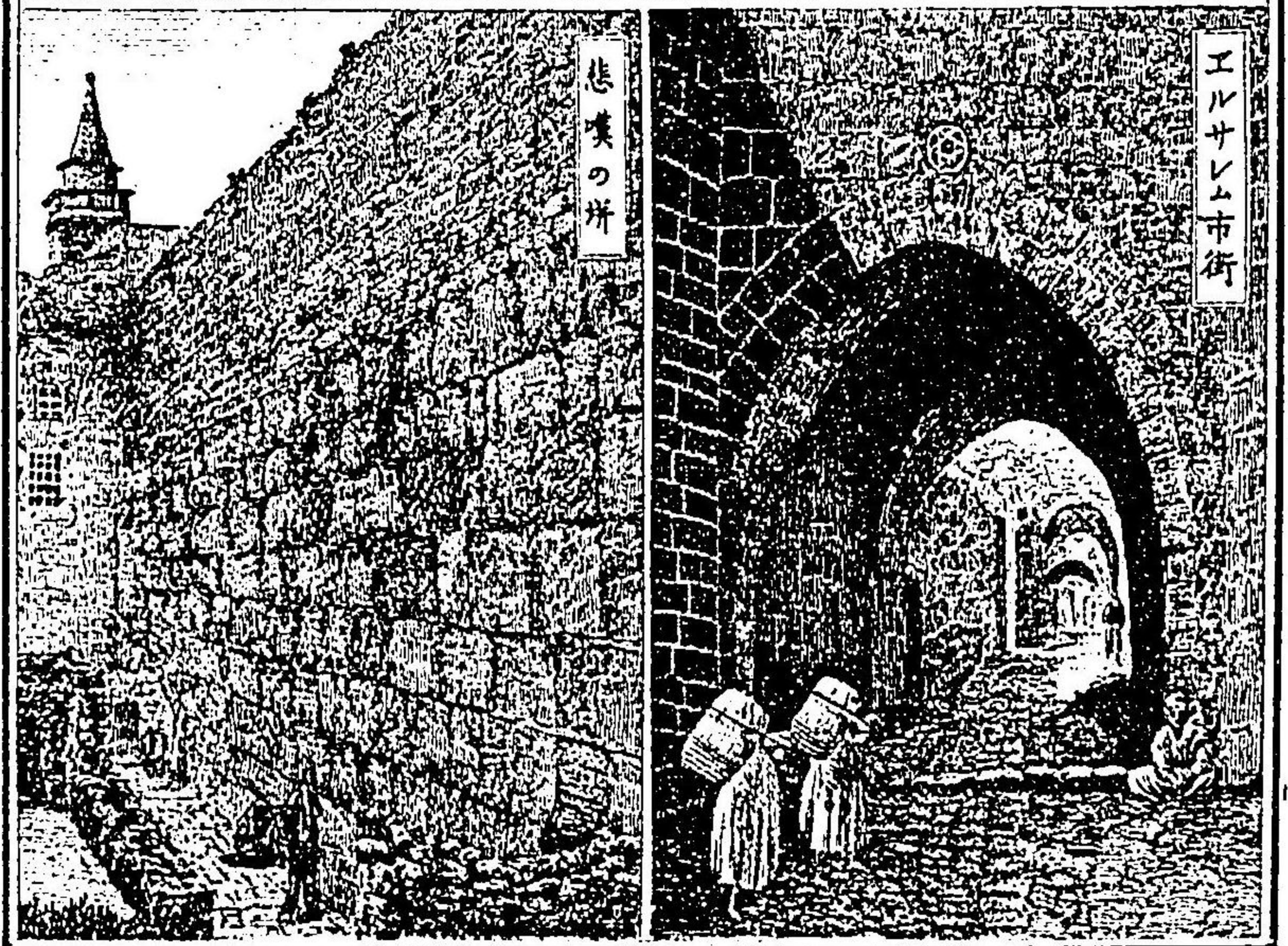
一百六十二本あり高さ四十有二尺  
白色雪かと疑はせ光澤煌々入を  
怕明らしむ頂格は檜を用ひ彫刺す  
又九つの大門は高さ四十三尺余  
金銀以て飾とす中より一際目立しは  
中央至大の門にして高さ八十七尺余  
門の櫓は金銀の薄き板にて掩ひ包み  
之を美門と名けたり神殿中は偶像無  
唯金を以て包みたる彼の契約の函ありて  
馬奈を納め金の壺アロンの杖と石碑あり  
〔石碑は二個あり蓋し十歳を刺し一者也の十歳〕  
の全文は後葉シーナイ山の樹下に掲げ四十七歳  
且金製の燭臺と金で作りし臺ありて  
之は供物を置たりき又屋上には金製の

POOL OF HEZEKIAH.  
WALL OF WAILING. STREET IN JERUSALEM. 四二

池之ヤカセハ



松岡室長画



悲嘆の所

エルサレム市街



墓之デビダ上山ノオシ



聖地と尊ぶ此土地を我領地と為さんとし  
 羅馬法王の謀りしが法王アルバン第二世は  
 忽ち之を煽動し一千九十有六年  
 数十万の軍勢を此地に向けて戦へり  
 之を十字軍といふ爾來二百余年間  
 兩軍刺戟絶ゆるかゝ此地を略し又取らる  
 屢々勝敗ありし後元の土耳其の物となり  
 回教徒の手で落ちて今あるものは左の如し  
 ダビデの城址及墓マリヤ並にヨセフの碑  
 (ゼカヤの池悲嘆の井ピラトの裁判所跡や  
 回教の王オマルの堂耶穌基督が十字架を  
 釘けらるゝてふ旧跡や附屬の宮殿等となす

俗風の人太猶

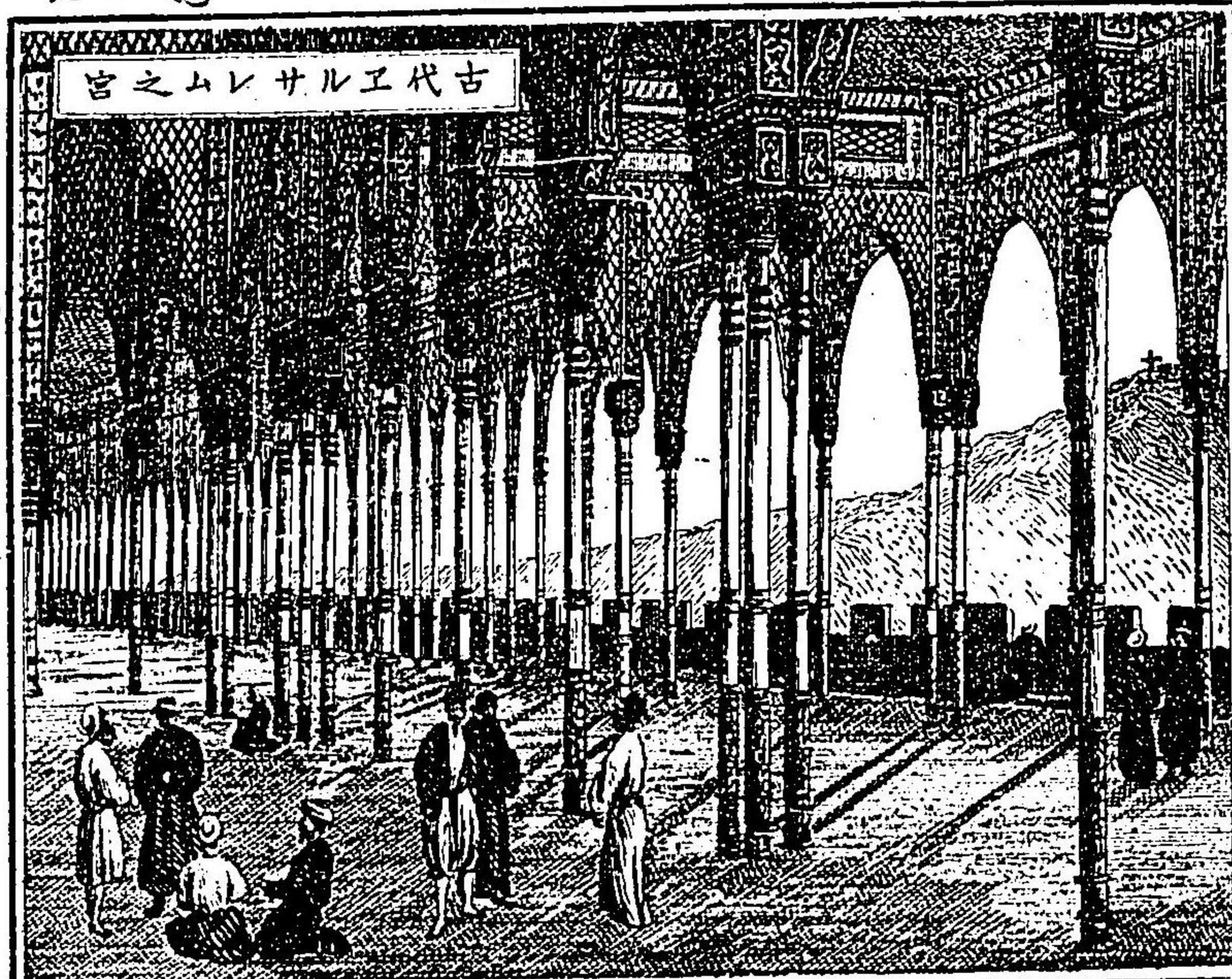


尖りし大なる釘を打鳥の糞すを防ぎたり  
 遠方神殿を眺むれば冷も雪間金柱の  
 林立する異ならず如斯比ひなき  
 神殿をかば猶太人常に此を愛慕して  
 年々是地を集合し厚を禮拜したる心  
 實に理とふ可けき然るに紀元七十年  
 ロマの皇帝タイタスは自ら兵を將として  
 此處を攻陥陥没し神殿都城を燼滅す  
 爾來歲月推移してアラビヤ國の領となり  
 最後は全を土耳其の版圖に歸せり去る程に  
 當時土耳其の人民は概略回教徒にして  
 歐洲耶穌の信者らが此地に巡拜する者を  
 痛々虐遇したるより耶穌教中の無智の民



THE TEMPLE OF JERUSALEM  
IN ANCIENT TIME.

九二〇



出入するを禁じたり（回教の宗旨及マホメットの事は後文アラビヤの部詳らかにあり）  
 ○叔て以上の旧跡を面覽するに路傍には  
 乞食多く徘徊し見るに哀れの姿にて  
 錢を乞ひ亦或る者は旅客を靈所を誘ひて  
 職とする者夥多あり然るに府民二万中  
 大半回教徒にして基督信者稀きは  
 余輩の如き宗教に最も暗きものより  
 猶且つ彼等らは暗として濫りに虚誕の言を放ち  
 錢を貫ふを業とせり府民は総体貧乏にして  
 道路人家は皆不潔露店を視るは代呂物を  
 織き布にて被ひせり何故あるかと尋ぬるに  
 土耳其の悪漢掠奪し逃走するを以てなり  
 素より警署の設けなきに政府重税民に課し

VALLEY OF JEHOSEPHAT.

八二



附屬の宮殿華表として天主並にギリイキ教  
 アルにニヤ教三宗が以上の三宗皆耶蘇旧教也  
 區分を為して守り居り其地を聖なる處とし  
 常に夥多の燈明を照して以て奉祀せり  
 ○悲嘆の坪は猶太教信徒の悲む場所にして  
（猶太教徒はモーセや預言者を信じ耶蘇基督を棄て信ぜずとせし神は一にして耶蘇教と同じモーセの事は後文シナイ山の條下見よ）  
 毎金曜日一教百人ソロモン宮趾の前より  
 旧約全書預言者の祈禱の文と書を讀みて  
 猶太國の滅亡と其衰へに付男女と心  
 聲を放ちて泣哭す  
 ○又オームルの宮殿は回教王の堂として  
 前より掲げし神殿の跡ありて金銀や  
 珠玉を以て修飾す近年迄は他宗者の



DESCENDANCE  
OF JESUS CHRIST AT BETHLEHEM.

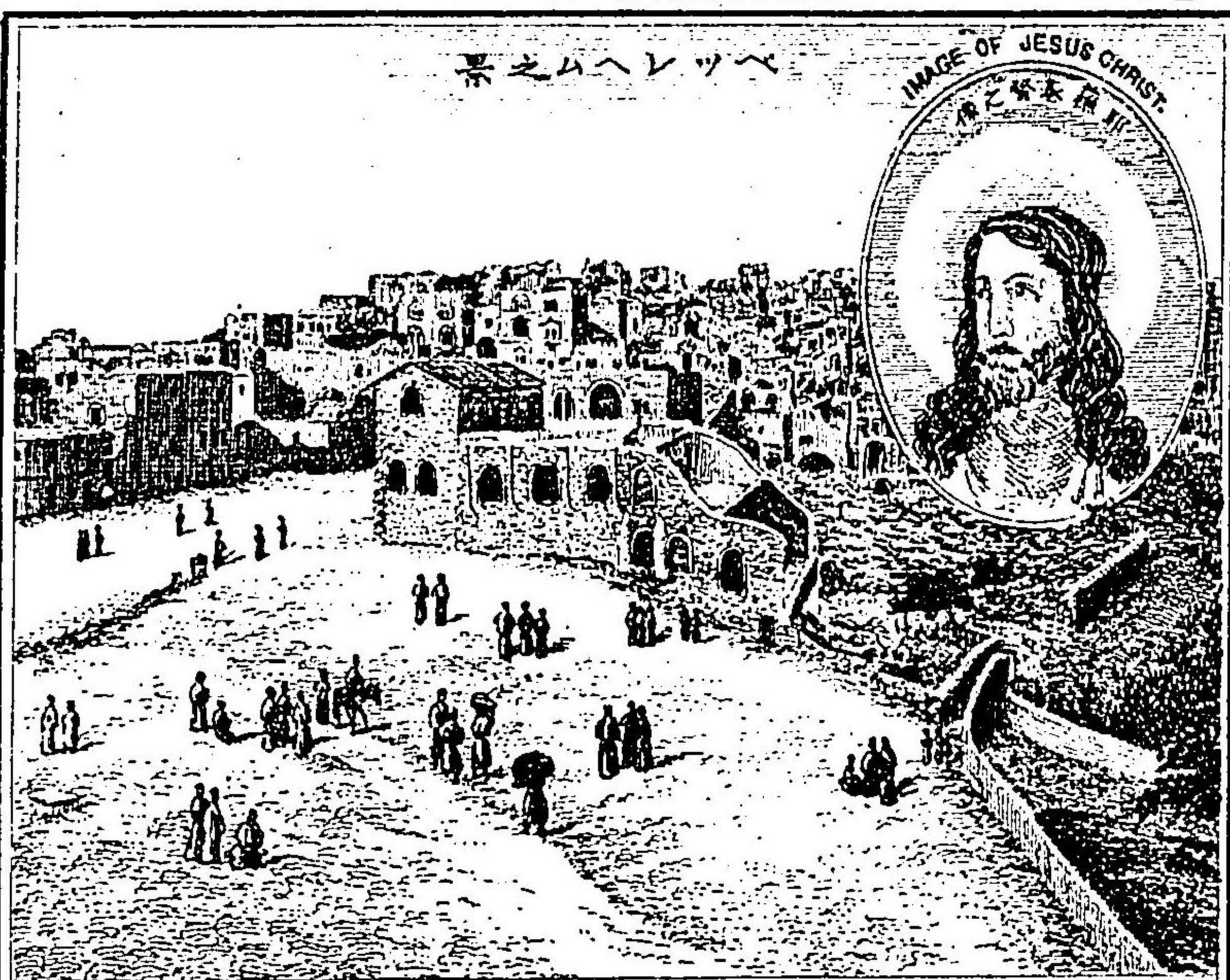


耶穌基督降世

編者曰本書第五卷の末葉は於て第六卷は耶穌教佛教回教の三宗旨を説明する事を讀者諸君に約し置きたり故に予は今耶穌基督の降世したるベツレヘムに到達したるを以て先づ耶穌の略傳を述べ併せて教育を説明せんと欲す然りと或も斯の如き一小冊子に於て充分説明を為さ能はざるは勿論の事おきは只主眼の條を摘載したるのみ故に讀者は濫りに其可否を決すべからず編者の意は多々の名所古跡上に於て三宗教の大關係する所あるを以て諸書に就き世人の最も正確なりと公認する者を採り讀者諸君に示したる而已

（佛教は印度ガヤの部に回教は阿剌比  
重ノツカの部に説明せり讀者諸君

VIEW OF BETHLEHEM.



ベツレヘム之景

IMAGE OF JESUS CHRIST  
耶穌基督之像

猶且つ民の保護をせず哀む可きの至かり  
ベツレヘム之記  
エルサレムより南方へ二英里半はベツレヘム一名ダビデの村といひ耶穌の降世したる土地古來著名の處なり。  
邑の四面は豊饒にて橄欖葡萄無花果や柘榴等の果實類並に大麥小麦等最も多々産出す。耶穌の生せし時代は四面の原野は牧羊の盛んなりし處かり又イエスが産せたる牛部屋ありし所は現今大なる堂宇あり四邊の人家は概かて村人石で造りたる小家の内は山羊羊驢馬と共に雜居せり。



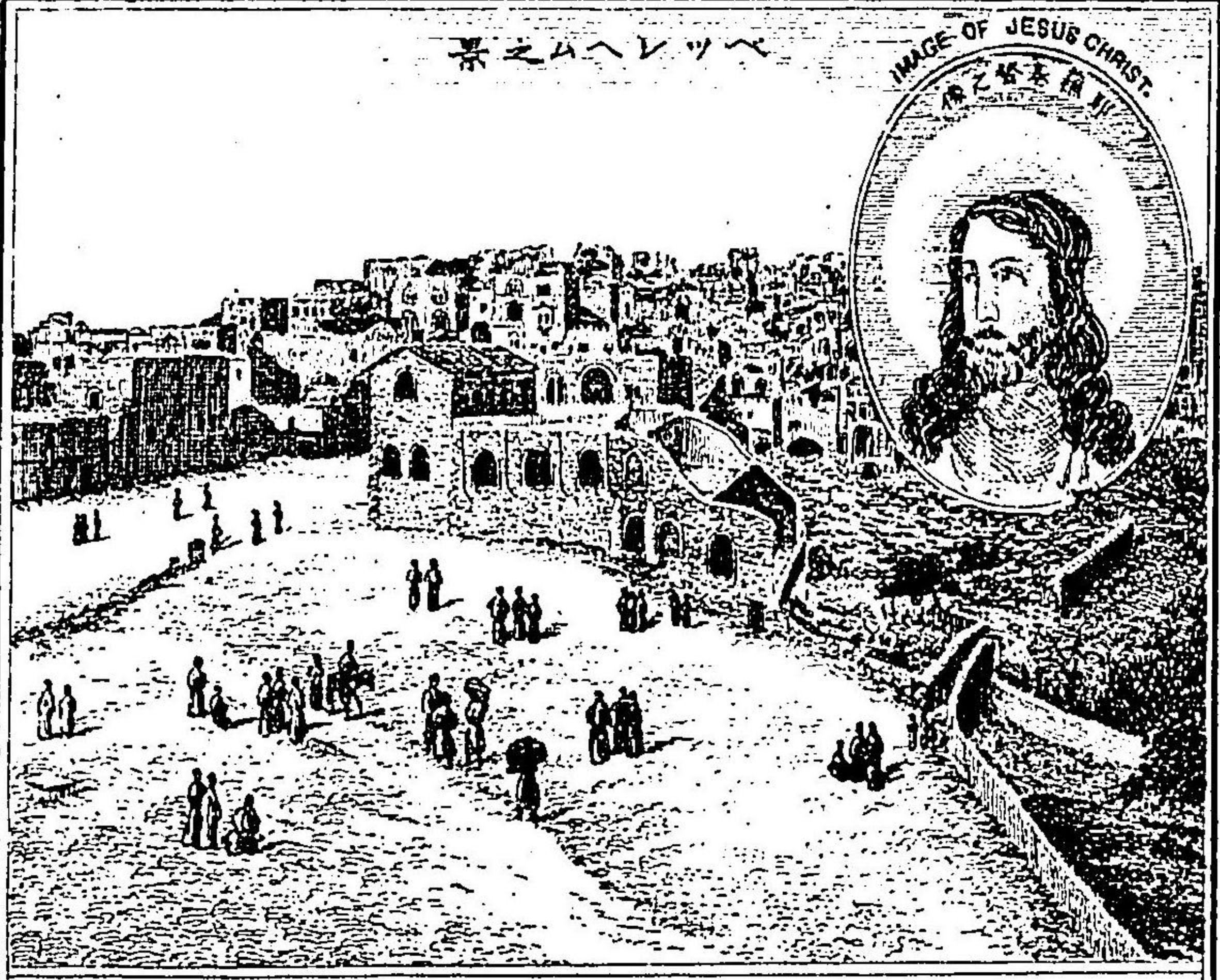
DESCENDANCE  
OF JESUS CHRIST AT BETHLEHEM.



耶蘇基督降世

編者曰本書第五卷の末葉に於て第六卷は  
耶蘇教佛教回教の三宗旨を説明する事を讀  
者諸君に約し置きたり故に予は今耶蘇基督  
の降世したるベツレヘムに到達したるを以  
て先づ耶蘇の略傳を述べ併せて教旨を説明  
せんと欲す然りと雖も斯の如き一小冊子に  
於て充分説明を為さざるは勿論の事か  
きは只主眼の一條を摘載したるのみ故に讀  
者は濫りに其可否を決すべからず編者の意  
は多々の名所古跡上に於て三宗教の大関  
係する所あるを以て諸書を就き世人の最も  
正確かりと公認する者を探り讀者諸君に示  
したる而已（佛敎は印度ガヤの部に回教は阿剌比  
亞ノツカの部に説明せり讀者諸君諒焉）

VIEW OF BETHLEHEM.



景之ムヘレツベ



猶且つ民の保護をせしむ可きの至かり  
ベツレヘム之記  
エルサレムより南方へ一英里半はベツレヘム  
一名ダビデの村といひ耶蘇の降世したる土地  
古來著名の處なり。  
邑の四面は豊饒にて橄欖葡萄無花果や  
柘榴等の果實類並に大麥小麦等  
最も多を産出す耶蘇の生れし時代は  
四面の原野は牧羊の盛んなりし處かり  
又イエスが産せたる牛部屋ありし所は  
現今大なる堂宇あり四邊の人家は櫛かまて  
村人石で造りたる小家の内は山羊羊  
驢馬と共に雜居せり。



抑も今を去せる事一千九百余年強且大なる名を得たる羅馬國は其領地  
 亞細亞阿非利加歐羅巴三大洲に跨りて威權他國に比類かや皇帝オゴストスの時  
 國教禮義壞敗し衆生惡道に陷溺す時耶蘇基督は此小邑に降世し  
 民を救はん事を期す耶蘇三十歳迄はナザレの父母の許に居り孝道をのみ盡せしか  
 羅馬チベリユス帝の時（猶太は當時ローマの配下にして始めに近傍パレステナ都邑を周ねて巡遊し  
 道を説く事三年間其説を所皆終て萬世不朽の名言に非ざるはかや其間  
 至妙の訓戒靈異をば屢々顯したるより信する者や日多し然るに此時猶太人  
 パリサイ人やサドカイ人吾が教法を固執して深々耶蘇を惡みは、數々之を凌辱し  
 最後耶蘇を教門の罪人羅馬の敵となし羅馬の出張官吏たるポンテラピラトに告訴せり  
 ピラトは耶蘇を罪なきを再三辨護したきども猶太の君民暴擧して之に服せぬのみならず  
 遂に耶蘇を十字架の刑に處せり而して耶蘇十字架に釘きし時天を仰いで大聲に  
 父よ彼せらの罪を赦し給へ彼せらは為す事を知らざればかりと又曰々事終せりト最後曰  
 父よあなたの手で我魂しのを渡すト終にエルサレム府に於て其魂を發ちたり



耶蘇衆人  
に  
説教す

後三日にして甦へり門徒の爲めに出現し  
 教を奉ずる者の爲め天に昇りて預め  
 居所を求めぬりと云ふ耶蘇道を説きぬるも  
 自ら一書を著はさず門徒四人は基督の  
 訓戒口授を書き筆し之を後世に遺傳せり  
 之をパンジリと云ふ則ち四福音書なり  
 門徒ら耶蘇の没する後益々志を奮起して  
 各地に教旨を傳道す是を耶蘇の使徒といふ  
 使徒の父ペテロは殊更布教に盡力し  
 洗禮を受け歸する者忽ち數万の上に出ず  
 羅馬の皇帝子口其他異教の人民皆惡み  
 之を絶滅せんとして教徒を酷き刑に處し  
 虐殺する事教知らずペテロはタイベル河傍にて



十字架刑は行はせ、ポロロも斬首せらせたり。やせども教徒ら屈すなく。一致の精神相投じ、力剣火焰の下に立ち、猶上帝に祈禱して、讚美の歌を暗誦し、身を毫毛より軽くして、靈を耶蘇に任せつゝ、怡然として戮に就き、或は遠誦せらる者、却て教旨を散漫し、道を護持する三百年、当時羅馬の盛んなる、腕力優勝、劣敗の時、當りて教徒らは、身は寸鐵を帯ぶるみく、コンスタンチン大帝を、門下し降して公然と、周ね々四海に弘行し、現今宇内教徒の教、四億万人以上あり。

〔耶穌教羅馬本國は傳播せし以來、宗派東西二派に分き、一千五百年代西派羅馬法王の威福増長し、百弊陳を現ふて入り、全を基督の教旨に成りたるを以て、マルチンルーテル出て、教法を回復したる事は、載せ四卷九十一ページに詳かなり、是に於て基督教後び分きて、東派プロテスタント、西派カトリック、新教プロテスタントの三大宗とあせり、而して各派其教旨法式を異す、すも、或も煩を厭ひ、迷一之を記載せず、余は耶穌基督の教旨に、教旨の要領左の如し、背かずと云へる新教即プロテスタントの要旨を、諸君に示して足せりと信ず。〕

- 神は唯一にして父と子と聖靈と三ツの名稱ある事
- 神は天地萬物を創造し且つ之を保護し之を撫育す
- 神は己の像に像りて人間を造り之を靈魂を與へて之を愛す故に神を眞の父と云ふ

- 神は在ざる處なを能はざる如なきを知らざる如なき故に黎民の己きよ近きより尙近き黎民は之より由て生き又動きまた生命ある者あり
- 神は全聖全義なきは法を置て悪を行ふ者を罰す
- 法とは即ち十誡也 〔後文四十七ページに、ゲイカイ山の條に詳せ〕
- 神は法を知らざる者は良心に之を知らしめり故に良心に及して行ふ者、彼等は其行為の外に現をざるも既に心の裡に犯したる者、心之を罪となし必ず責罰す
- 始祖の原罪よりて人は皆罪を犯す者となりたる事
- 基督降世して人間の罪を贖ひし功績より中保となりて信者を天父にあらはし又おきが為め父に祈り、終て教會の首となりて護り居る事
- 神は其生たる獨子御子を賜ふ程に世の人を愛す此は凡て彼を信する者は亡ぶる事なくして永生を受しめんが為めなり
- 汝心を盡し精神を盡し意を盡して主なる汝の神を愛し又己の如き隣を愛し且己を為らせんと思ふ事を入は施するし 〔以下十誡を看よ〕



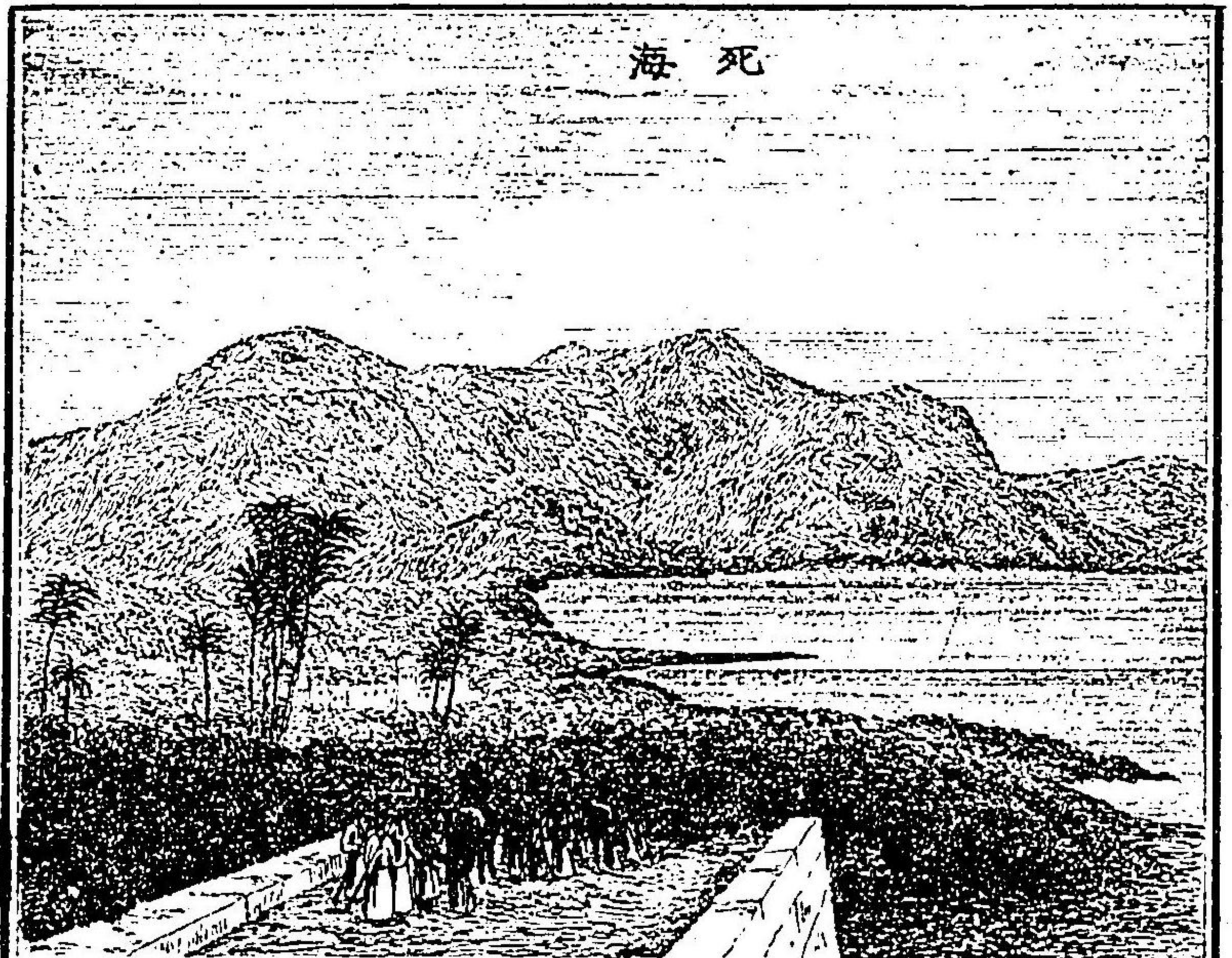
墓之ゼーモ



直径一尺五寸余長さ三尺余りあり  
 一房購ひ賞味して旅の弊をば慰めつ  
 ヨルダン河の西岸を北へ北へと派り  
 若干英里を経たりしが是地一ツの堂宇あり  
 土人はモーゼの墓と云ふ毎年四月中旬に  
 土耳其アラビヤ其他の人民是地を参詣して  
 將に堂宇に近ければ男子は銃を砲発し  
 婦女子は大鼓を打敲き安着しなを祝すと云ふ  
 然るに古史を按するにモーゼは神の命により  
 エルサレム府に入らずしてネボ山上に攀ち登り  
 エルサレム府を望みし後何き一行しか明記せず  
 果して然らば夫き之をモーゼの墓とはひ難し  
 他日識者質ねんと疑ひながらうこそ過ぎ

卷之六

海死



死海及びヨルダン河之記  
 ベツレヘムの觀終り旅装を脱ぎての一人の  
 案内者と兩人の警護人をは雇ひつゝ  
 警護人は何れも小銃と刀劍を携へて此邊を  
 警護せり此邊盜賊甚多故也東南方へ進む事  
 十五英里に死海あり之を一名鹹湖と云ひ  
 ヨルダン河を始めとして周圍の細流みな注ぐ  
 湖水塩分を含む事殊に多きを魚鱉類  
 一も生ぜず而してヨルダン河の治流は  
 世界中に比類なき深谷にして此谷は  
 海の面より低き事一千三百尺余  
 地球上の表面に斯の如きの低き地は  
 又見る事を得ざるべし然るに四望地味膏腴  
 果穀多きを生産す就中葡萄の一房は

吐月館切



街市コスマダ



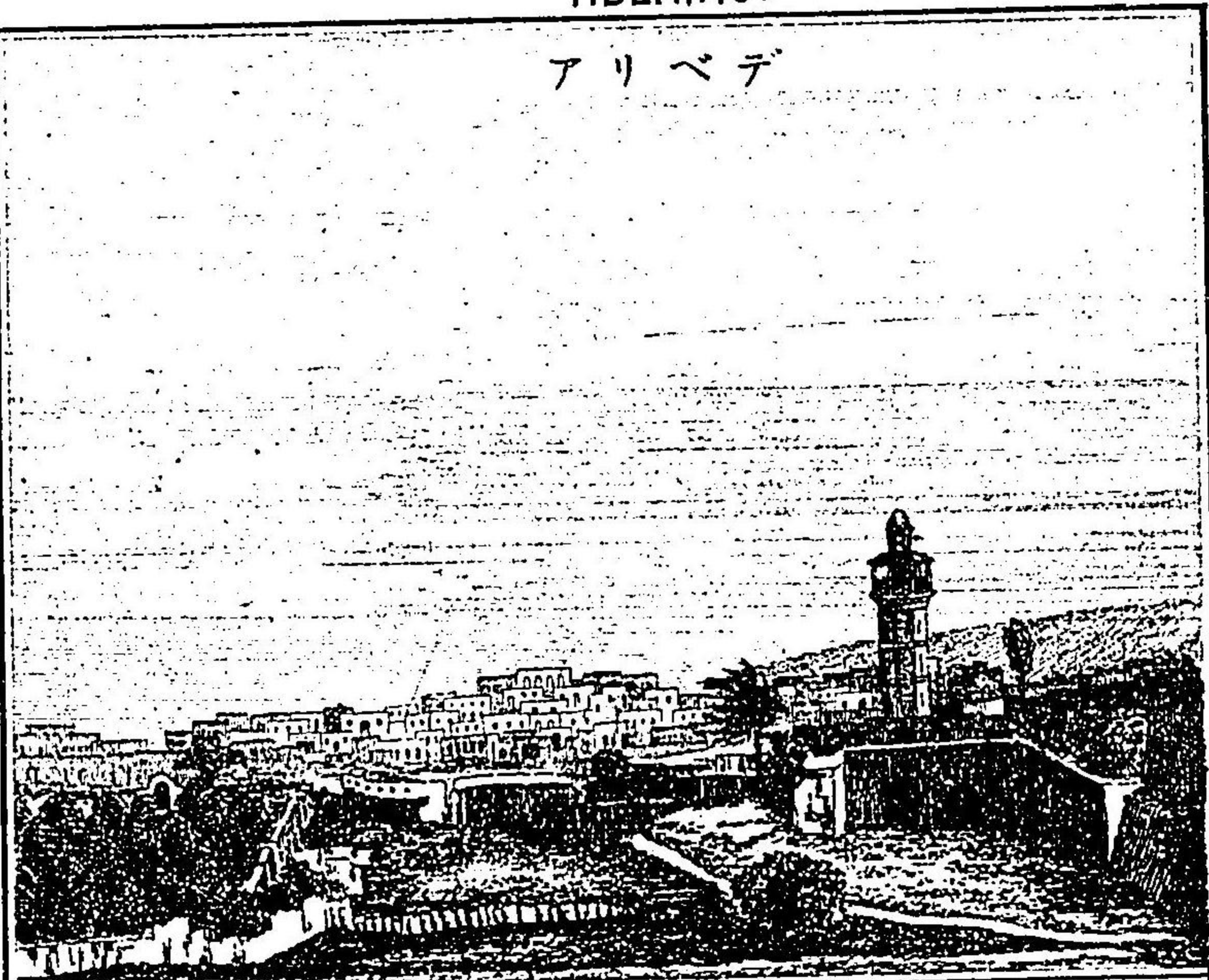
其名を稱號し程なきは古代の史上は著名なり昔嘶しは止こして次の驛へと進まふん  
 テベリヤ邑を出立し東北五十英里余にダマスコといふ大都あり既に此府に近ければ  
 幽香時來て衣を襲ひ忽ち精神を  
 爽快せり怪み四方を眺むせば  
 西北レバノン山脈の一派沃野を  
 繞して嵐光蔚然聳あり  
 南方遙か望むせば曠野千里ア  
 ラビヤの沙漠に連り際涯か々  
 駱駝に騎りし隊商は煙霧の間  
 缥缈と松の如く見ゆるのみ  
 一歩々々芳氣増し衣裾盡く  
 香しを忽ち至大の花園あり

ダマスコ府之記

松成堂刊

卷之六

アリベテ



吐月館刊

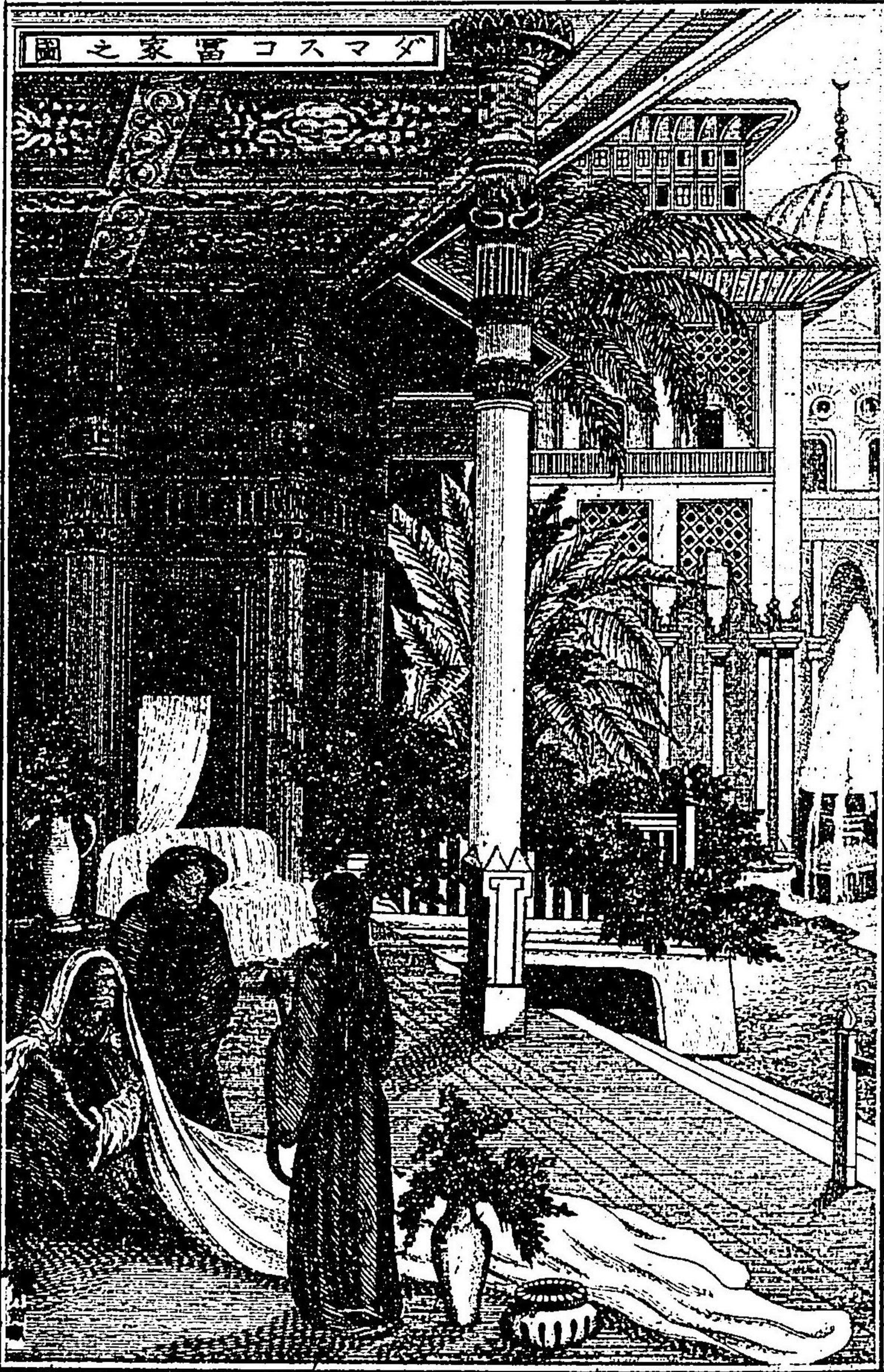
エリコを通過しヨルダンの水路を北へ派る  
 逕路崎仄し騎し難く河幅は甚る廣をして  
 五英里乃至八英里河面の堤防より低き事  
 十尺乃至五十尺破綻千尋測る莫し  
 蜿蜒屈曲幾百回三泊進行二百余英里  
 テベリア邑は著しなり

テベリヤ之記

叔て此邑はテベリヤ湖一名ガリラヤの海と云  
 西岸にある一僻地汚物全市に充滿し  
 人を穢し鼻を裂き不潔凄惨の象あり  
 土耳其の出張官衙ありアラビヤ人は評し云ふ  
 蚤の王はテベリヤに公廨を設けりと然せども  
 羅馬の管轄なりし時テベリヤ帝の名譽は



ダマスコス富家之園



一望紅白野に充て雲影花光と相映し異卉秀葩遂一之を名辨すべからず  
 大池に噴水佳亭あり茶菓を嚮きて客を待つ東西洋の旅人はこれに此世の樂園と  
 假稱するも宜なりき或人回教を此府に誘導せんとせば時回を立ち入る事を辭みしことありせば一回こゝに  
 遊びおぼた天國の樂園に入ること出来まると臆測せし由きり其光景想ひ知るべし  
 花園を通りて市に入れば東洋一般の風として案外街衢は汚穢ありきと此國の首府は  
 隊商四方より來集し通商甚熾にて人口十有五方あり富家豪商又多を  
 家屋の外面粗なせとも内部は甚清潔と頗る裝飾る風ありて華麗の建築見るに足る  
 ユフレット河チグリス河アラハット山及古今ハビロンの話

是より路を良しとり二百英里を進行時はメソポタミアの部分にておと二つの大河あり  
 一をユフレット河と云ひ一をチグリス河と云ふ共巽へと流を行末にて合しと云り  
 ペルシヤ灣に注入す扱て此河名は太古史を閱卷せば第一に記載せらるるものにして  
 人類の祖アダマイブ創めて神を造らきつユフレット河に程近き以典の園に住せしと  
 アダムとイブの後胤ノアと云へる者ありて神の報告に預め天災あるを知らば  
 大なる方舟を造營し親族及び各種の動物雌雄を集載す然るに大雨歇まずして



VIEW OF MT ARARAT.



三月月を経たりしが地球上の萬國は洪水の爲め浸せり然るはノアの方舟はアラツトと云ふ高山のアラツトト云ふ高山の絶頂より停まきり此時ノアの一族や各種の動物方舟を出で宇内を蕃殖せしと云ふ関元始の名所なり又バビロン府はユーピト下流の名高き古跡とて世界最初の建國と世の名も高きアツシリヤ第一等の首府なりし當時今より四千年前諸建築の美麗なる快くべきものかりし城壁高さ一百尺厚さ數十尺ありて車六輛並列し馬を装して馳するとも轉墜するの患なき周圍長程百英里あり

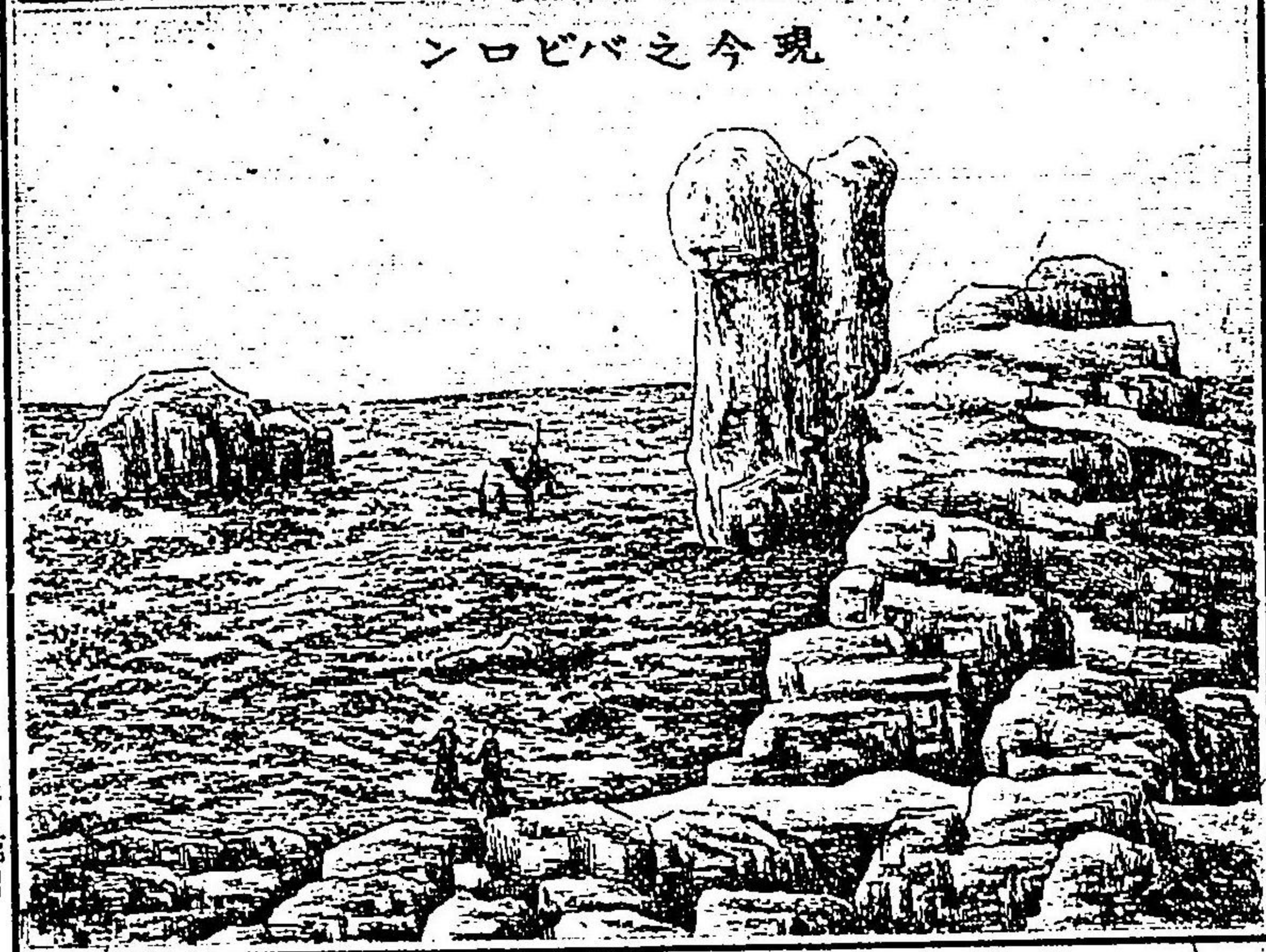
卷之六

ANCIENT BABYLON. MODERN BABYLON.

シロビバ之代古



シロビバ之今現



吐月館刊



五四 HUNTING OF ARABIAN HORSES.



アラビア馬を狩る

人口八万五六千内地や近隣各國と通商今盛んなり。

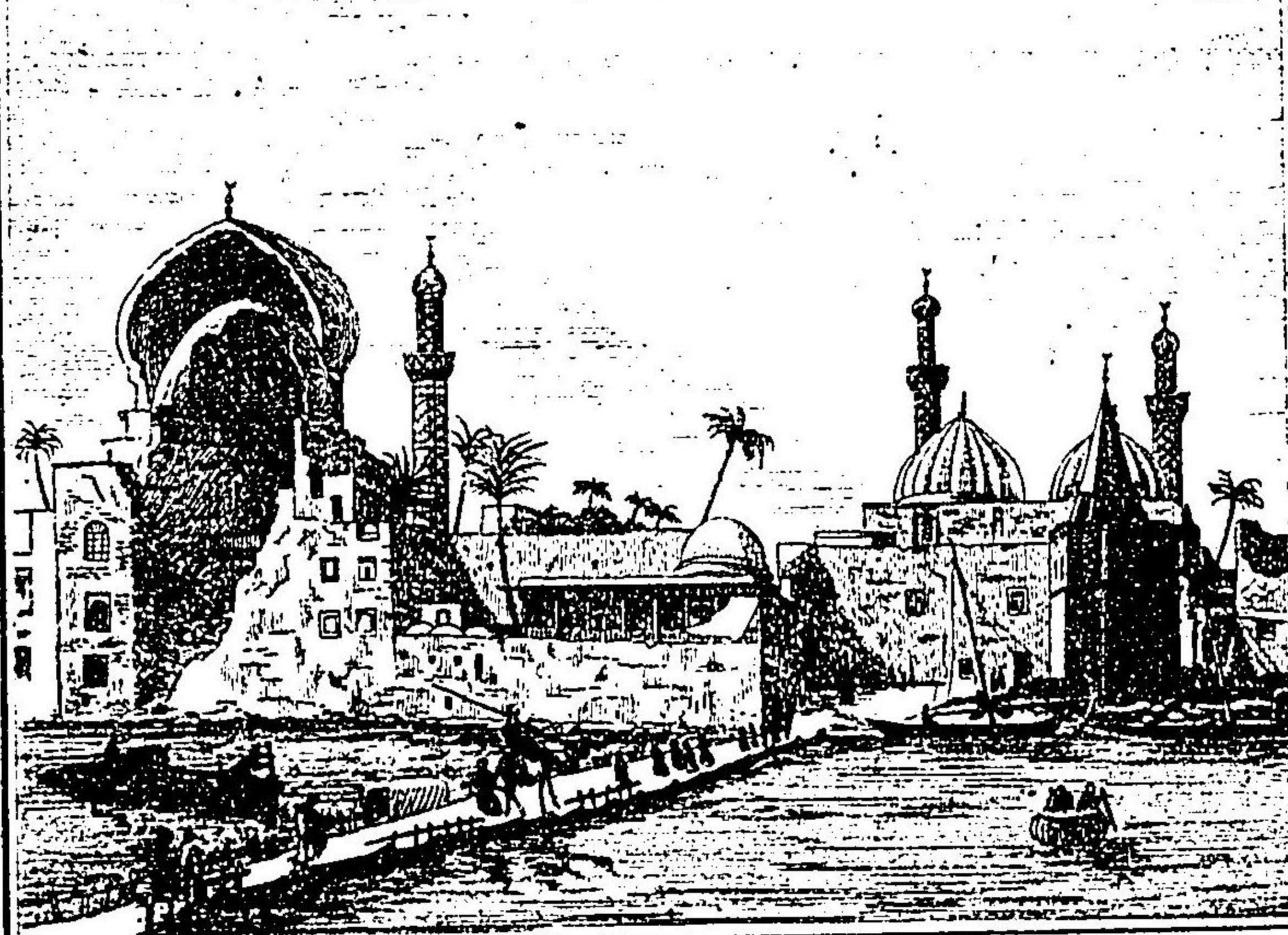
阿刺比亞國之部

阿刺比亞國は大なる一の半島國にして東はエウレツ河及びペルシヤ灣に境あり北はシリヤに連接して西紅海に瀕臨し南の方は一面向アラビヤ海を繞らせり疆域甚大なを内には茫々たる沙漠にして赤地の高原連亘し周年降雨あらずして氣候酷熱燬々如く面積二十万方英里入口七百余方あり。

東西南の海岸は稍々豊饒の土地ありて

RAGDAD: BRIDGE OF BOATS OVER THE RIVER TIGRIS 四四

バグダットの橋と政廳



又王宮に屬したる清楚を極めし園ありて石壇高々壘積し大樹花木や萬種の花草を植へ空中に懸りし如く其景色實に絶佳を極めつ園中至大の祠宇ありて内には高さ四十尺のペリユス神の金像を安置したりさる程今は瓦礫の山となり石柱點々遺存のみ。

バグダットの府之記

扱てバビロンの遺跡より東北五十英里余のチグリス河の東岸にバグダットといふ一府あり此地はメソポタミアの第一等の都會にて六百余年前迄は回教王の首府なりし故に回教宮殿や寺院夥多存在す

吐月館刊

卷之六



繁盛の都府教所あり。全土を四部に分ち大列す。其西方をヂヤスと云ひ、西南方をエーメンと云ひ、東南方をオーモンと云ひ、其中央をホエツと云ふ。又南方の海岸をハドラモートと名けたり。ヘヂヤスの地方は國中より人口多き部分にて之を土耳其の領地とす。又エーメンの中アデン府は大英國の領地にて餘は大小の部落のみ會長之を統轄す。餘は内地の人民は平常居處を定むるも水草を逐ひ移轉して遊牧盜賊業と爲し、婦の類を食として生活する者夥多あり。國民一般回教を奉ずる者多し。生産品の主なるは良馬駱駝や真珠や咖啡護膜を多しす。

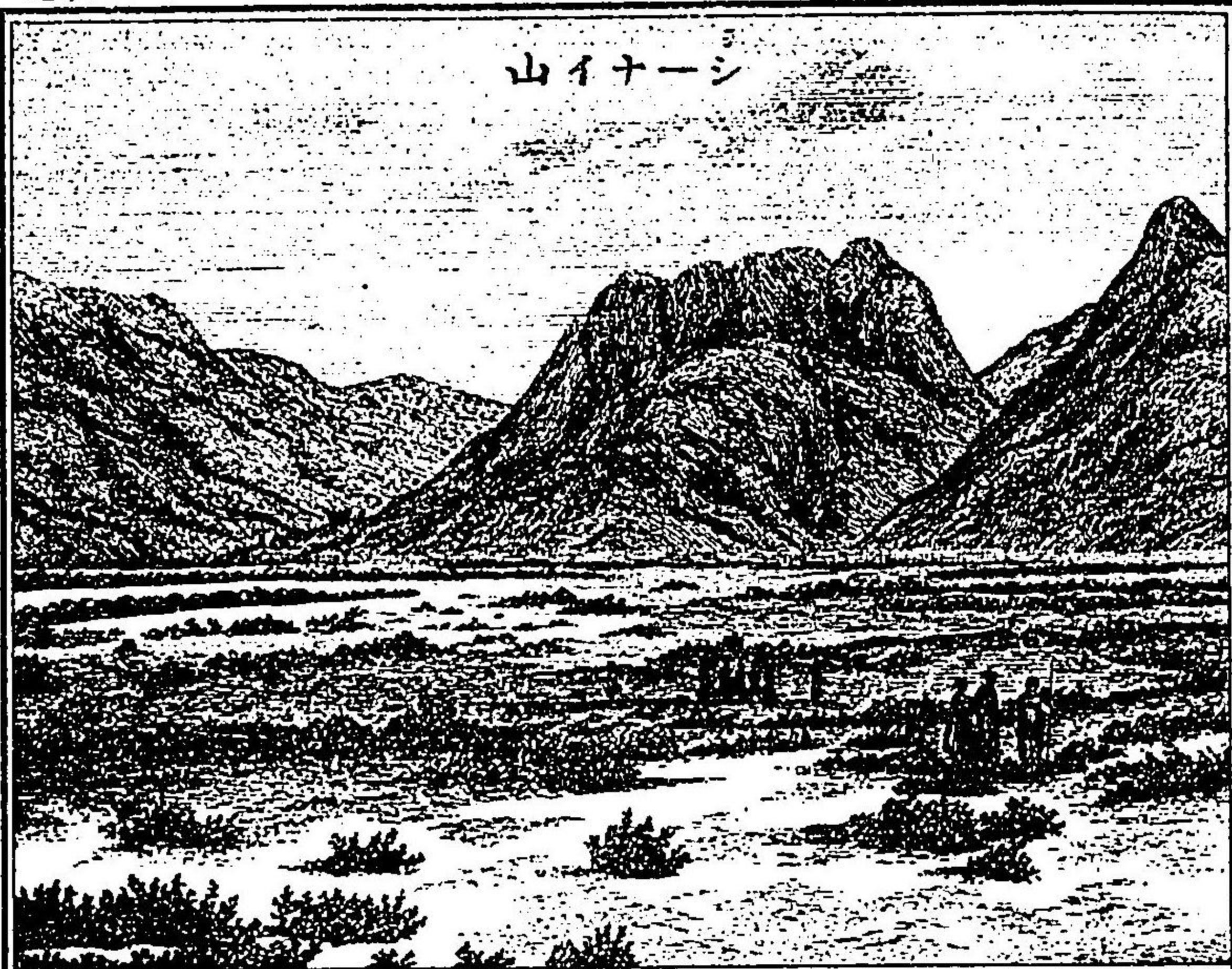
シナイ山之記

扱てヘヂヤス部の北方にスエスとアカバの兩灣を左右にひかへて紅海へ突出し居る處あり。之をシナイ半島と云ふ。宇内より名高き處なり。此地は死山重疊し峻嶒山骨暴露して波濤の如く起伏せり。其中勢ひ峻峭として巋然特立するものをシナイ山と名稱す。海面を抜く九千尺。上古モーゼと云ふ人此山に入り天父より十條誡を受しとす。則ち前記したるエルサレム府の神殿に安置したる盟約の金櫃に藏めしものとして

中井

卷之六

山イナ一シ



此十誡は猶太教及び耶蘇基督の教徒が神の法律とし最も貴ぶものとして教旨の大本ありと云ふ其十誡の全文を記載する事左の如し

第一誡 汝我前我の外神ありとすべからず

第二誡 汝を造る像また上は天下は地或は地の中の水あるすべての形像を作ること勿き

これに伏て奉ること勿き汝の神主なる我は妬の神なきはなり

第三誡





シナイ山と近傍  
ホレフ山上  
セントカザリンの寺院

第五誡

女僕婢畜類及び門内のある旅客も総ての業を為す事勿き主は六日の間は天地と海とその  
中の萬物を造りて第七日は安息しよよりてあり故に主安息日を幸福して之を聖日とせり

汝々の神ある主の名を叨  
よ云ふも勿き主は其名  
を叨りよ云ふ者を罪かし  
とせざるをし

第四誡

汝安息日を聖とするを注  
意せよ汝六日働きて総て  
汝の業を為すなり第七日  
は汝の神ある主の安息日  
あり其日は汝と汝の子

第六誡

汝父母に孝行せよ亦汝の神ある主の與へし地は久し住らんが為なり

汝殺す事勿き

第七誡

汝姦淫する事勿き

第八誡

汝盜む事勿き

第九誡

汝々の隣は汝はりの証據を立る勿き

第十誡

汝隣の家を食るかかき又隣の家及び僕婢牛驢馬総て隣に在る所の物を食る勿き

以上の十誡と前葉に記載せし耶蘇の教旨を参照せば基督教の大意自ら明也

右に掲げし一圖はシナイ山の中にあるホレフと云へる山中に孤立したる堂として

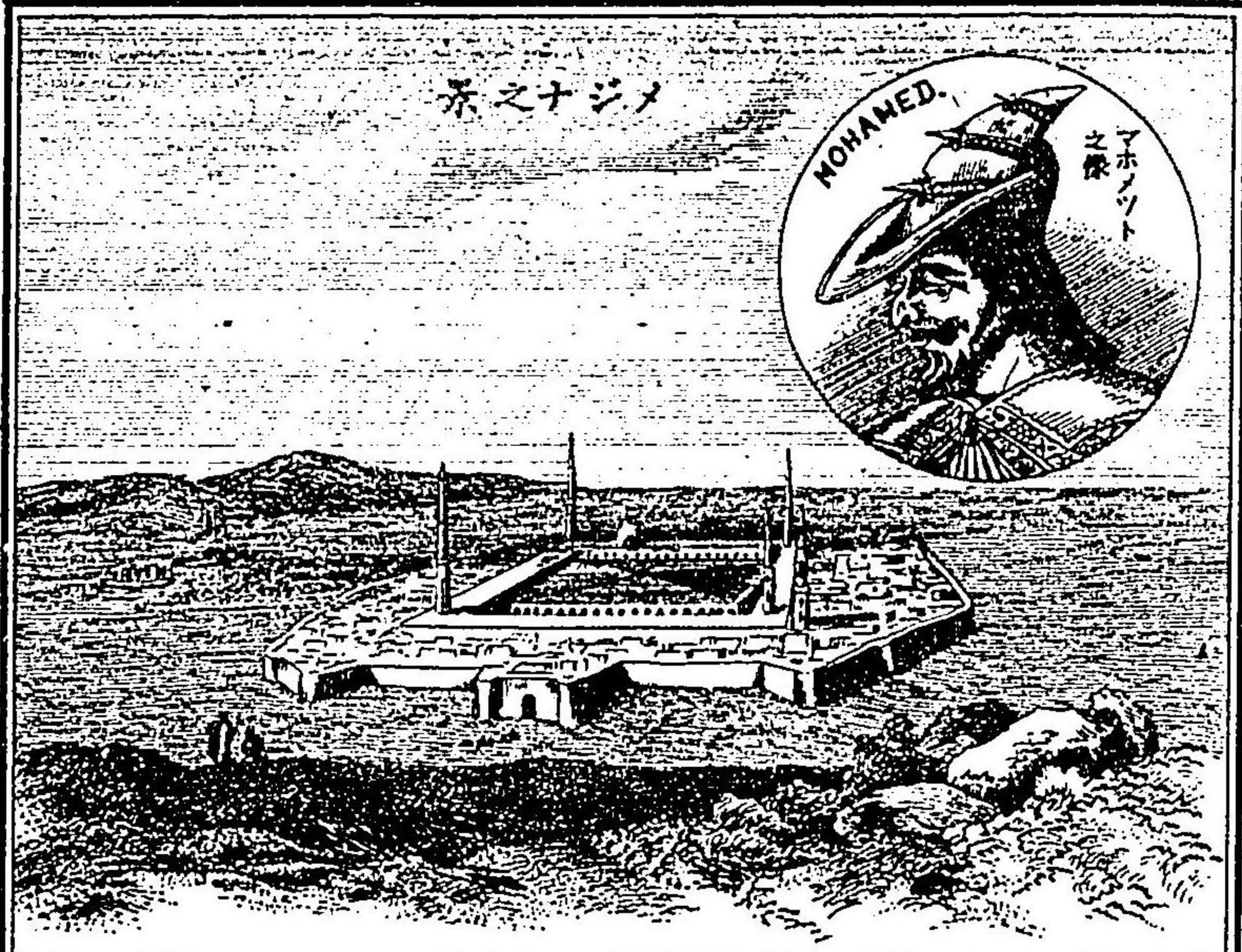


是は元來羅馬國・コンスタンチン帝の母ヘレナの創建しものと云ふ羅馬の歴史を按ずるに  
 コンスタンチン大帝は第四世紀の頃此山へ大小教個の會堂を建築したる事ありと  
 蓋し天父が十誡をモーゼに授けし靈跡を後世に知らさん為かりと然るに現今遺存ものは  
 右の古堂のみにしてギリキ教の僧侶が二三十人住居せり。

◎是よりアカバの灣を沿ひ東北一百英里余にアカバと云へる驛ありて其より道を右に取  
 りテブクビゼルの驛を過ぎ熱帯地方の山路をば艱難辛苦し行程に二日の驛に著したり

メジナ府之記 シナイ山より  
通計五百余英里

当府は人家八百戸・民口九千余人あり此處は回教開祖たる彼のメソットの死せし土地  
 市内に大なる寺院あり是はメソットが存命中自ら建しものにして全堂四百有余の  
 彫刻極めし柱あり金銀箔にて裝飾す其中央の靈所は純金以て鑲めし  
 貴き鐵の棺ありて棺の内にはメソット一世の遺骸を収めつ三百有余の銀燈は  
 平常光輝燦然と四邊を照して静かなり傍にはアビウバーカルと嗣子オマルの墳墓あり  
二人ともメソットの子孫にして之をカリフと云ふ後文に詳せ結構何せも略似たり墳墓は聖き場所なせば信者と云ども直接に



拜觀するを許すなを尙圍は錦の幕を張り  
 内部は入を嚴禁す 此幕は土耳其帝の即位する毎に  
新調奉獻するを例とせり  
 歴史と云へる老人は客傳教言を尋ねるに  
 ◎扱てメソットは紀元後五百七十一年に 此は五百七十  
一年と云ふ  
 アラビヤメッカに誕生す元來父はメッカ府の  
 政權を執りまゝ兼てカバの守護職たりし  
メッカ府カバの守護職の五十四代にして  
ありメッカとはアラビヤ全國宗教聖地なり然るに其家貧にして  
 遺産等もなかりしが廿五歳の時となり  
メッカ府の富商カチアト  
此時四十歳結婚を爲し資を蓄めて  
 隊商夥多を引率し各地へ通商貿易す  
 是より先き國民は已に猶太と耶蘇教を  
 信奉する者多かりしメソットは両教を  
 研究て之を焼き直し別な教旨を闡かんと



兼々思索し居たりしが、六百十有三年、吾親族あるメッカ府の酋長某の會場、突然發言して曰く、吾を天神の命を受け、將てアラビヤ全國の宗教及習俗を改良せんと欲す、吾は今より三年前、獨り荒野に食齋す、偶ま神使來り曰ふ、天汝を擢で、アラビヤ預言者となす、汝夫を稱を勉めよ、吾豈神の命令を忽てなす可けんや、此時、年齢四十三、是より已が新教を宣示せしが、衆人は彼は狂なり、奸なりと、却て之を侮笑せり、モホメットは挫屈せず、儘かの徒弟を集めつ、神道を説き筆記して、一卷を爲す、此書を可蘭經と云ひ、宗旨をば回教之教と号けたり、然るに衆人襲撃し、教々危難に遭しかば、徒弟とメチチと逃せたり、此時、蘇丹國は六百二十二年十月十六日、回教は今日此年を以て紀元とす爾來主人は靡然とし、教に従ふ數万人、教徒は深く尊崇し、閔祖の法王と號へしが、終に兵力利用して、四隣に逼りて、其教に従はざる者は殺戮し、未だ十年からざるにアラビヤ全國服従す、モホメット又外國に播布せんと欲せしむ、六百三十有二年、熱を病て没したり、閔祖は既没せしむ、嗣て位に登る者、神裔と號し、權強く教法土地を擴張し、未だ百年からざるに、版圖は亞細亞の西部より、ベルギー、印度も九で吞み

鞞鞞内地も又取りて、西は阿非利加北部より、對岸歐洲、西班牙を門下し、降して兵を増し、伊太利國の南部より、地中海の諸島まで、悉皆攻略版圖とし、暴威を以て布教せり、初め神裔の法王は、皆タムゴを都府となし、後ちバグダットを遷都して、至大の領地を統轄し、威權世界に震動す、然るに法王アロンアル・アシットの世に、版圖をば三子に分與したるより、互に親睦せぬのみか、屢戦闘し、とるより、邦土分裂、皆叛き、今より六百余年、前蒙古の爲め、京城のバグダット府も陥せ、法王の號亡滅せ、せども、現今各國の寺院は依然存在し、各幹事あり守護して、信者一億三千万、宇内各地に住居せり、○ 編者曰、凡そ宗教と申者は、人類天賦の本性より生ずるものにして、之を人生自然の感情とも云ふべし、故に文明の民は概して無形高尚の神を信し、又蒙昧野蠻の民と雖も必ず仮神偶像を拜せざるなく、而して其神種の多き我日本一國にても、八百万の教ある由あるを、今仮に青膏を以て料紙とし、海水を以て墨汁となし、百鳥の翅管を以て筆と致すも、猶ほ且つ記する能はず然せども、一神多神の二者は出でず、而して其一神を以て教を立つる所の宗教は、猶太教之を要する、一神多神の二者は出でず、而して其一神を以て教を立つる所の宗教は、猶太教  
○ 回教は元來猶太教と耶補教を合併して、更之を燒きあふし、なる者、過ぎざるは、逐一其教旨の條を記載するも、却て讀者の嫌厭を招く、其の恐めをば、故に主は回教コーラン中の耶補教と異なる所を摘載すべし  
○ 其コーランと申者は、即ち回教の經文として、全書百十四篇に分てり、其篇名を例せば、牝牛、イスラム、婦人、抄掠、ジヨナス、ジヨセフ、アブラハム、夜行、空洞、會議、新聞、離婚、無花果、再生、等の類にして、或は天神の垂訓、或は教法、脩身、法律、等のことを載せ



毎篇卷首より卷尾に至る迄一貫の主義なし、然せとも之を大別せば教義と教事の二類となせり今其要領を摘録する事左の如し

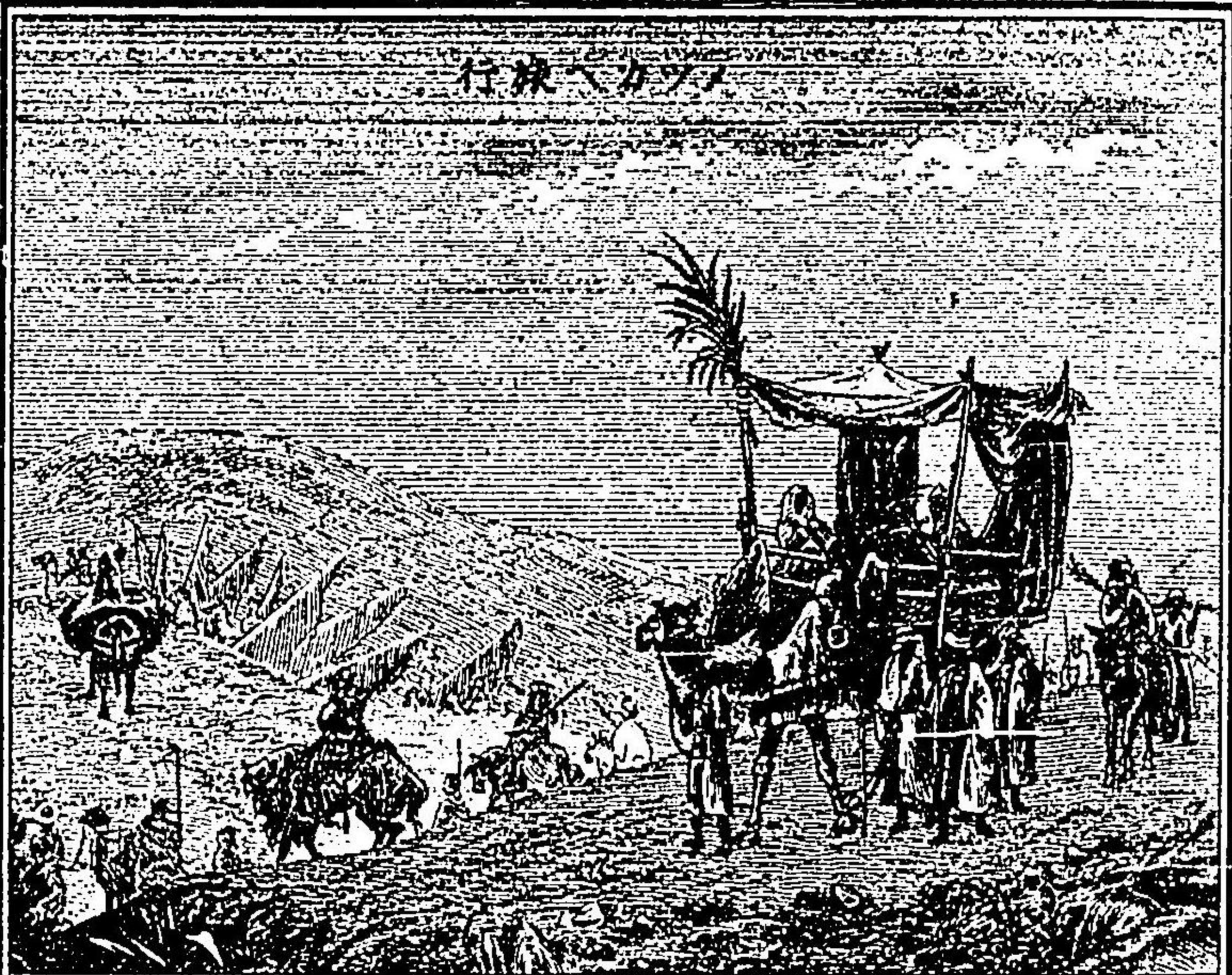
**回教之要旨** 左の文中汝と云ふ語は回教信者のみと對するの語、非せ世界総ての動物に對しての語なり又我とあるはマホメット自身を指す

一汝上帝の外復た一神なく而して特ニ神の垂訓を受る者は我なる事を平常のふらず記應せよ

一古より親しく神の垂訓を受け之を人間に通ぜし所の者教人あり其神語の筆記して書を為す者通計一百四卷ありて其中十卷は上帝之をアダムに賜まひ五十卷はセスに賜まひ三十卷はエノックに賜まひ其餘四卷を分かちて之をモーゼ、ダビデ、耶穌及よび我れの四人に賜まひし此の四卷を除く外は皆余逸亡して傳たわらず且つ我れより後方は再び預言者の出づる事なし又我れは凡そ預言者中の最とも至聖なる者なり故へこ之をを疑かふ者は必ず上帝の嚴罰を受くべし

一汝神を奉じ我を信じて疑はざるは之を稱して善者神意に順ふ者となし且つ無上の幸福を授與すべし

一汝真ニ神を奉じ我を信じて善行を為し決して悪事を為すべからず火より成り立



ちたる所の神使二名常ニ汝の身に隨ひ其言行を筆記して必ず上帝に告ぐべし

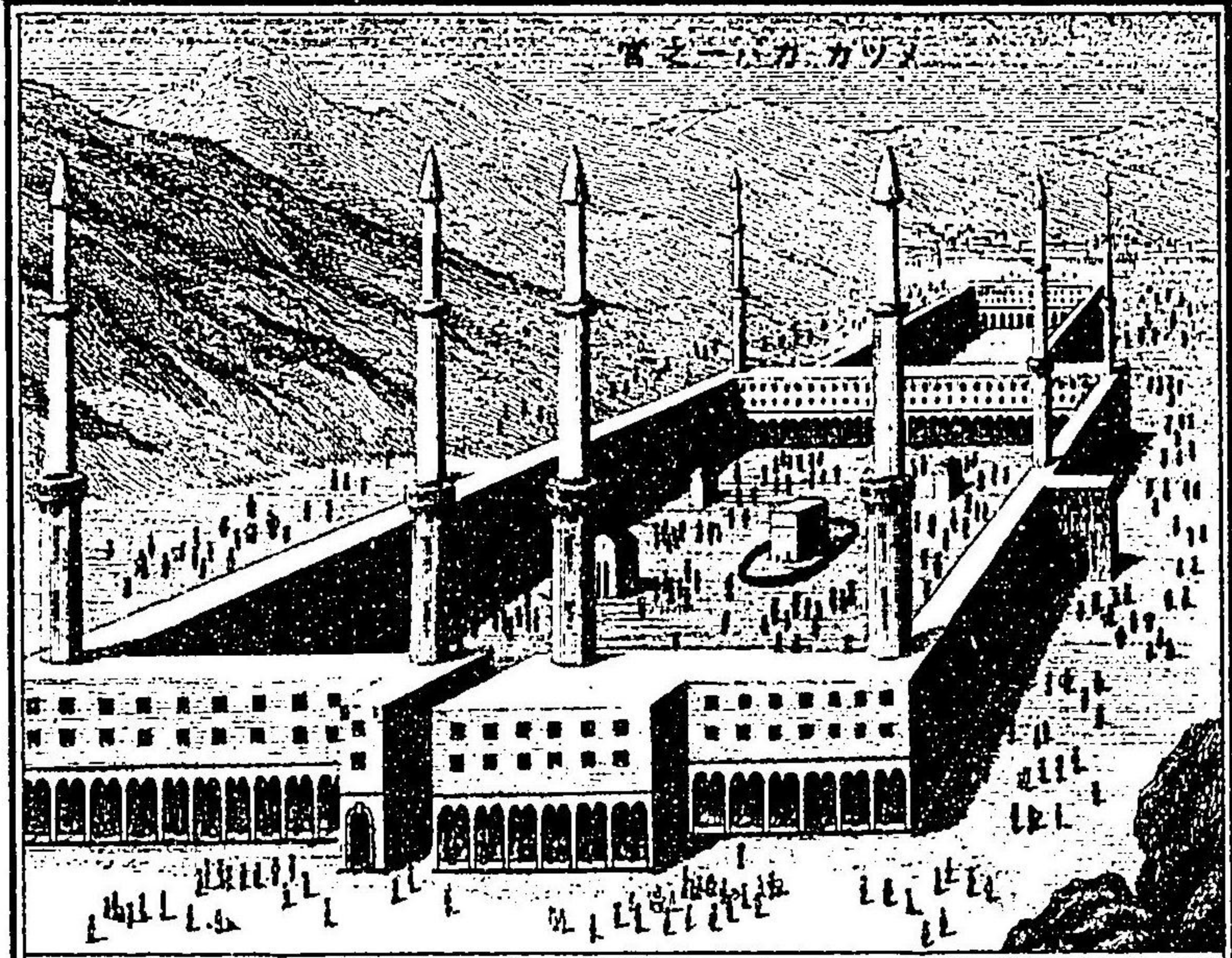
神使は一をホーリースピリットと云ふ  
二をカブリールと云ふ

一汝死して將に墳坑に入んとする時イスラエルと稱する神使喇以を吹きて汝の死をモークル及ナキルと云ふ二人の審官に報ずべし

此二人は共に顔色輝赫なる黒人にして汝の前より立ち汝を叱起して其生前能く真神唯一の教を奉ぜしや否や又我を預言者として疑はざりしや否を問ふべし

一汝其時答ふる所正しければ其屍ふたゝび墓穴の中は安臥して長を極樂の清風を受るを得若し或ひは然らざれば審官鐵棍をもつて





汝の願願を打ち其號哭の聲萬物皆を聞かざるよとなつて止む但し其聲人間は聞

一神使は又其の善行を記するところの簿冊と悪事を記するところの簿冊とを天秤の左右に懸け其の經重は因つて罪の多少を定む汝若し横害を蒙ふむりしとあらば其の害を為せしもの善行幾分を割きて汝は與へ尚ほ毫末の善行を除ますときは神使必らず之を上帝に報じて曰はん其生善惡の較量了わりて後尚ほ一蟻の重量の齊としき些かの餘善ありて上帝すなはる特は其の量二倍し以つて極樂に至るものと得せしむる也

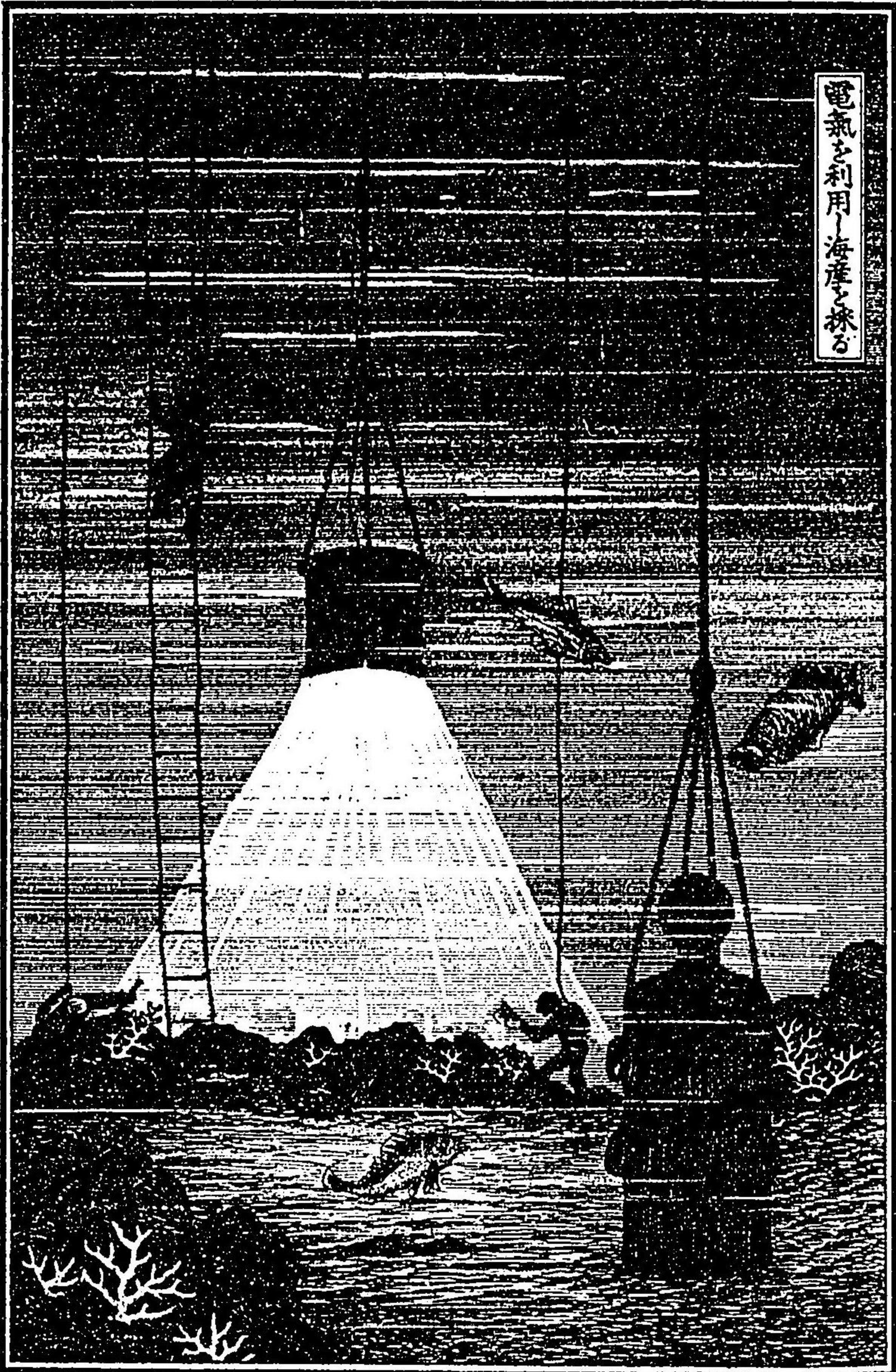
一汝計較を受け惡事憤ひ盡して尚ほ足らざる時は上帝又其量倍し地獄に送りて其罰を蒙らしむべし又我教を信ぜざりし者は刑罰永世免期なき其惡行は坐して蒙る罰は幾年を経せば便ち放免せらるゝ事を得ず

一審判の會散じて其極樂に趣く者は右路より地獄に趣く者は左路より由らしむ路路の前より橋を架す善惡人共之を渡らざるを得ずアラビヤ語を以て之をアルシラットと名く其橋身は毛髪より細き又刀刃より薄き者也

一汝神を我を信じて極樂を行くべし極樂は七層天の上にして直に上帝の坐下あり其地境宇清麗樹幹皆金玉にして其中福樹と名づる者は凡そ我回教信者の飲食は供すべきもの一切生ぜざるなし又男子の極樂に到るを得る者は其至賤の者と虽も尚八万の從僕ありて且其人間在の同伴ふ所の妻の外極樂の美女七十二人を擁して妻妾と為す事を得る其の平生の住居は眞珠イアミス及びイメラルド其を以て飾る所の幣にして其食物は皆金銀に盛り其酒は過量に放飲するも皆昏醉狂乱の患なし

一凡そ我回教の信者なる者は貧困或は疾病の爲め妨げらるゝとあらざれば其終身の間必ず一回メガの塔に詣賽すべし以下省略し今よりメガは行て右に示しする命を付説明せん





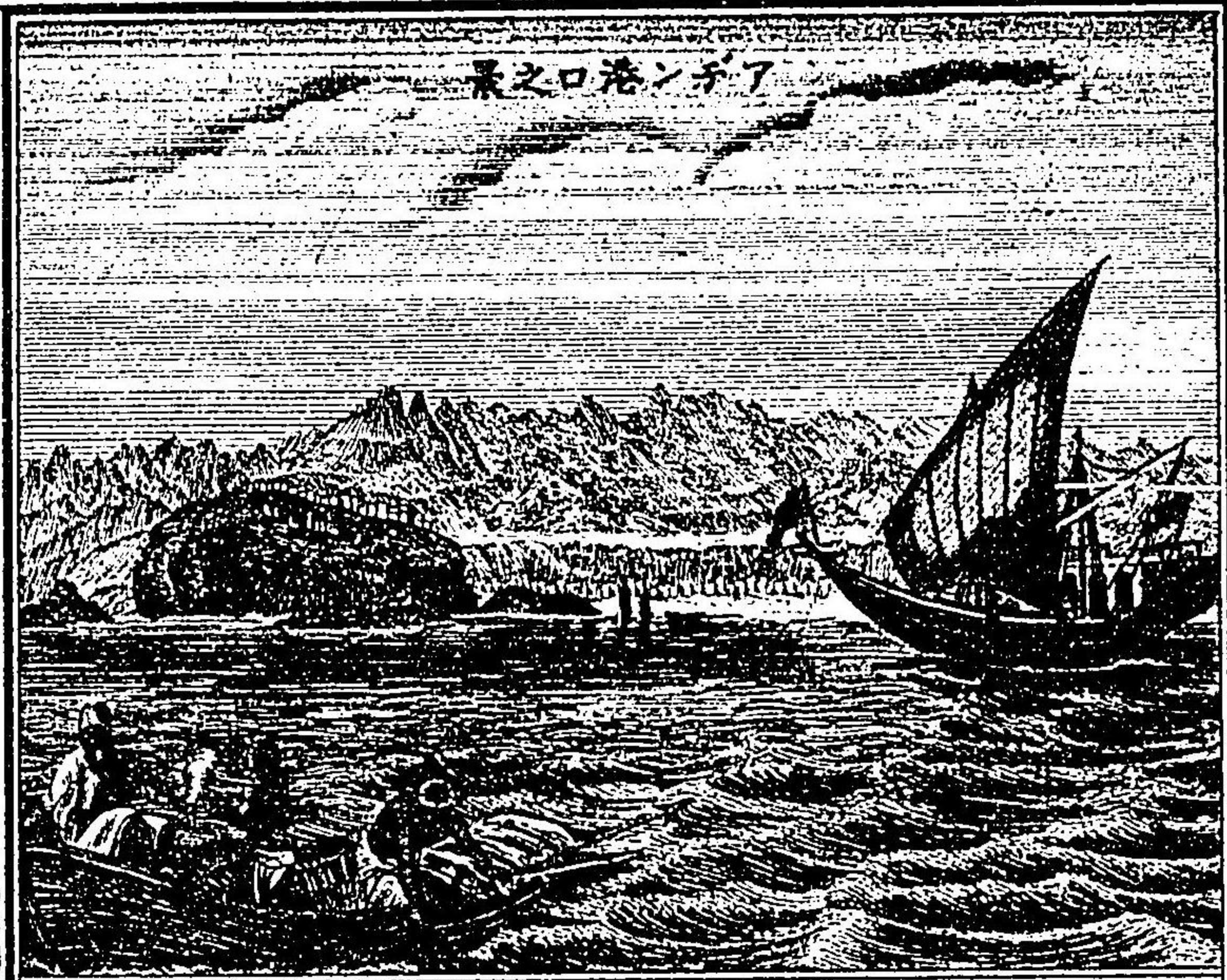
電氣を利用し海産を採る

メツカ之記

メチナ府より南二百五十英里地位バテアルタラマエン河に瀕し亮山と沙石ノ高原に圍繞  
 此地は即ちマホメツト誕生しける處なり。現今人口五万あり。家屋は何れも石材の  
 三階四階造りて室内甚美麗なり。府の中央カバと云ふ一の名高き宮ありて  
 尖塔大石大井とアラフラハムの一子ある。イスマイルの墳墓とは最も貴き靈所とす  
 官の城内甚だ廣濶にして三万五千人を容るべく、塔の敷は七基有り之を各所に配置し其間  
 十九の大門有門柱の高さ二十尺皆大理石を以て造り銀の金物を附して之を飾り各門に黒色の幕を張せり  
 官内多くの室あり各室は白色の幕に赤絹の縁取を為せし大幕を張り又附するは金銀の  
 飾を以てす天井は黄金のランプを釣下し其結構甚美なり  
 ①セムゼムの井は十七方尺ありて深き數十尋三組の華籠を釣下す桁は白色の臘石に緻密の  
 彫刻を為したり井水は清澄透明なりと雖も稍塩分を含み甚重量なり  
 ②又アラックスストーンと云へるもの官の東南隅にあり是は一大石にて表面に凹處あり之をアラ  
 ハムの足跡なりと云へり其高さ四十二尺ありて厚さ一尺余ある純銀の大輪を嵌す土人皆曰く此石  
 は元來赤色の光輝爛然たる瑪瑙石なりしが曾て汚せし婦人の之に觸せしより黒色と變たりと  
 年々巡礼の此地に來る者幾万あるを知らず、巡礼メツカに到着せば先づ身軀を清潔し  
 官の北方平和門に行きて鞋を脱し數千人 視よ視よ聖なる神の家を視よト其  
 群集し門内に入れば一 群聲を揃へて大音に  
 カバの靈所を廻り毎回一種の讚美歌を唱へ且つセムゼムの井に行き水を飲む事幾回あるを知らず終  
 臨んで皆曰く大なる哉神徳至仁至愛萬物の父母終審を司るの大王我今神の威徳を拜し謹んで其冥助の手を垂  
 ん事を祈る神其我を導き正路に由らしめ我をして神の嘉みする所の人と途を共にするを得せしめよ其  
 惡む所の人と共にせしむる勿せ又其導く所の途に由らざる人と共にせしむる勿せと祈禱を為して退散す

アテン 府之記





メジカの名所を見終りて西北方へ進むと  
七十英里にジッダイトの港ありて此地より  
紅海上を南航す。此海は珊瑚を産す。モント  
右方より前巻旅行せし阿非利加東部の山脈を  
渺茫中に見送りて進行する事七百英里  
英属ペリオン小島の燈臺前を經過せり  
左方にはニヤの西南端モンチア海角として右方にはアフリカ州ノモリ地  
方なり是をモンチア海峡と云ひ幅僅かに三英里重紅海の咽喉なり  
其より航路を東折し一百二十英里を經  
アデンの港へ着たり。

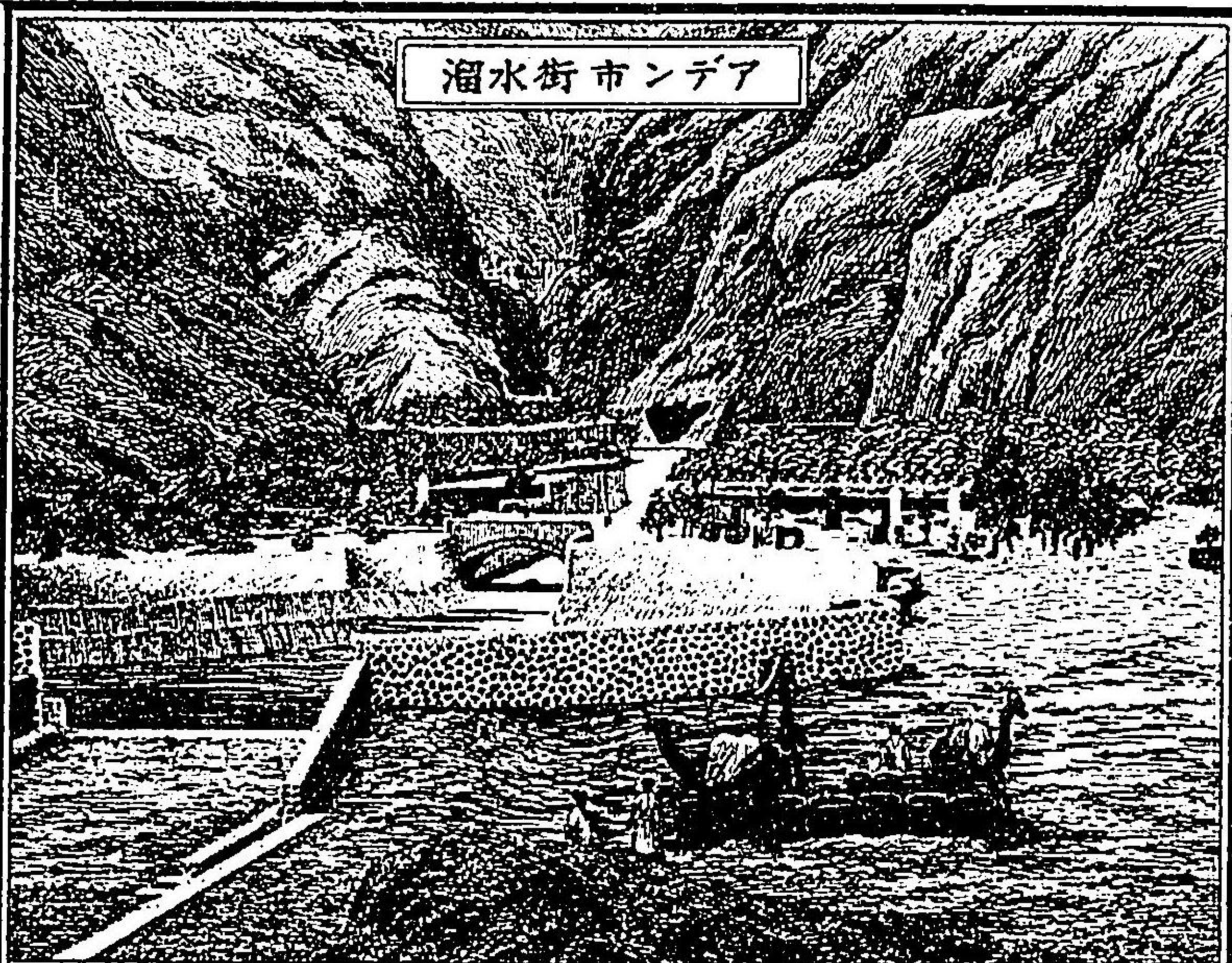
◎アデンはエーメン部あり東西南洋航通必  
必ず此港に碇泊し世に良港の名高  
彼の紅海の咽喉なり然し七十四年前  
英國此地を買取りて郵驛とす現今は

人口四万余ありて其海濱の埠頭には赤岩嶺然聳立し前面一の沙場あり  
此に廟舎や憩亭や旅館驛舎等を見る市街は一の山を越へ二英里奥の谷にあり  
馬車を憮ふて進行す車は粗なを走馬は良く瞬間東の山岬に着く岩石恰も鋸の如く  
之を削りて砲墩とし碑壁内部に連續す英軍二千屯在せり山口一の門ありて  
是を出せば市街なり。

市中の壯觀溜池にて紀元以前此地の王ソルモンある人此邊の地勢を按じ岩洞に  
石灰を塗り創築す蓋し此地は一年中四五月頃は一田の驟雨來せるのみにして  
地下に水派あらざるは雨水を蓄し一年中飲用す然るに近年英人は  
之を脩築改造し廣濶前時は十倍す中道石磴設置して石橋を架し白堊なる  
池上を行かしむ縦横は一千余尺皆池なり深さ六十五六尺池口一の花苑あり  
榕樹や佳木翁鬱たり。

市街は石屋多くして堅固に見せし粗造なり貧家は椰樹の葉を編みて屋根を蓋ひしものあり  
恰も鳩の巢の如し或る廣街は高樓の白堊左右に駢列るは歐洲人の居館あり





溜水街市ンデア

一齊波間を跳飛せり高さ三十間乃至四十余間及び落つ其狀千鳥の飛ぶ如く松の中へも落来る是を所謂飛魚の一種類にて賭廣く賣となして飛べるあり仰ぎ見れば松は早アラビヤ海を北に折せオモン灣に入らんす故に此邊はアラビヤ中否か地球上極熱の地方なきは堪へ難く華氏寒暖計百度より百三十度昇降すアラビヤ人の方言に地獄と云へる處なり松はオモン峽を過ぎバルシヤ灣へと進み入り右にバルシヤの山を見て五百五十英里を經バルシヤ國の一市巴シール港に着りけり

アラビヤ海は英國其花と呼ばるる水は

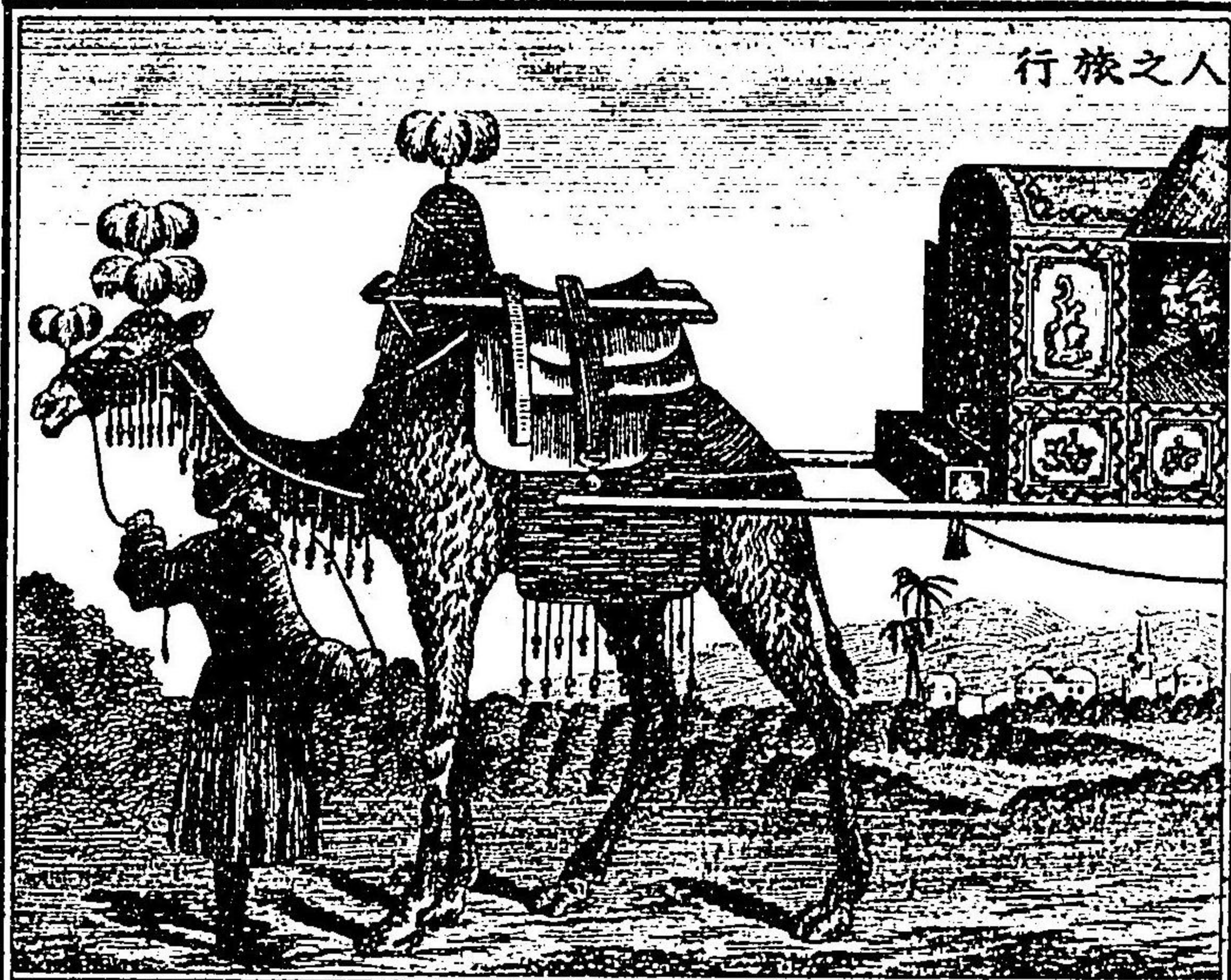
本土の人の服制は大抵半身裸跡にて腰は長き棉布を巻く裾裾の如し穿袖の單衣は上の服として之を着用するものは上流社會の人とあす貧乏人は一幅の白布を腰に着ぐるのみ頭は散髪多くして黄土の如きものを塗り上は白き布を以て盤渦を巻いて帽とあす美質の琥珀を貫きて胸部にかざる者もあり婦女子の衣服も大異かし只衣袴共紅色の棉布や花布を用ふのみ此地も貧民多くして乞食蠅集厭ふべし或は駝鳥の羽を賣り價値を眩する数倍なり

其より埠頭立歸り舟に乗りて本船へ槽行く途中貧童は客に銀貨を投せしめ水底深々潜遊し之を拾ふて十に一失ふ事なし大松の底を潜りて出る車蛙の水もある如く游泳甚だ自由なり

◎漁笛一聲抜錨しアラビヤ海へと乗り出せし四方を眺めは一點の山をも見とめず波荒く舢板上に灑ぎ來て松の撼動甚し五百英里を馳りしに南に大なる島を眺る之をソントラ島と云ふ其陰蔽より風浪も較靜穩なかりたきは病む者起て拾べり此邊海面魚ありて形は長さ七八寸脊は碧く腹白く鱗を張りて數十箇

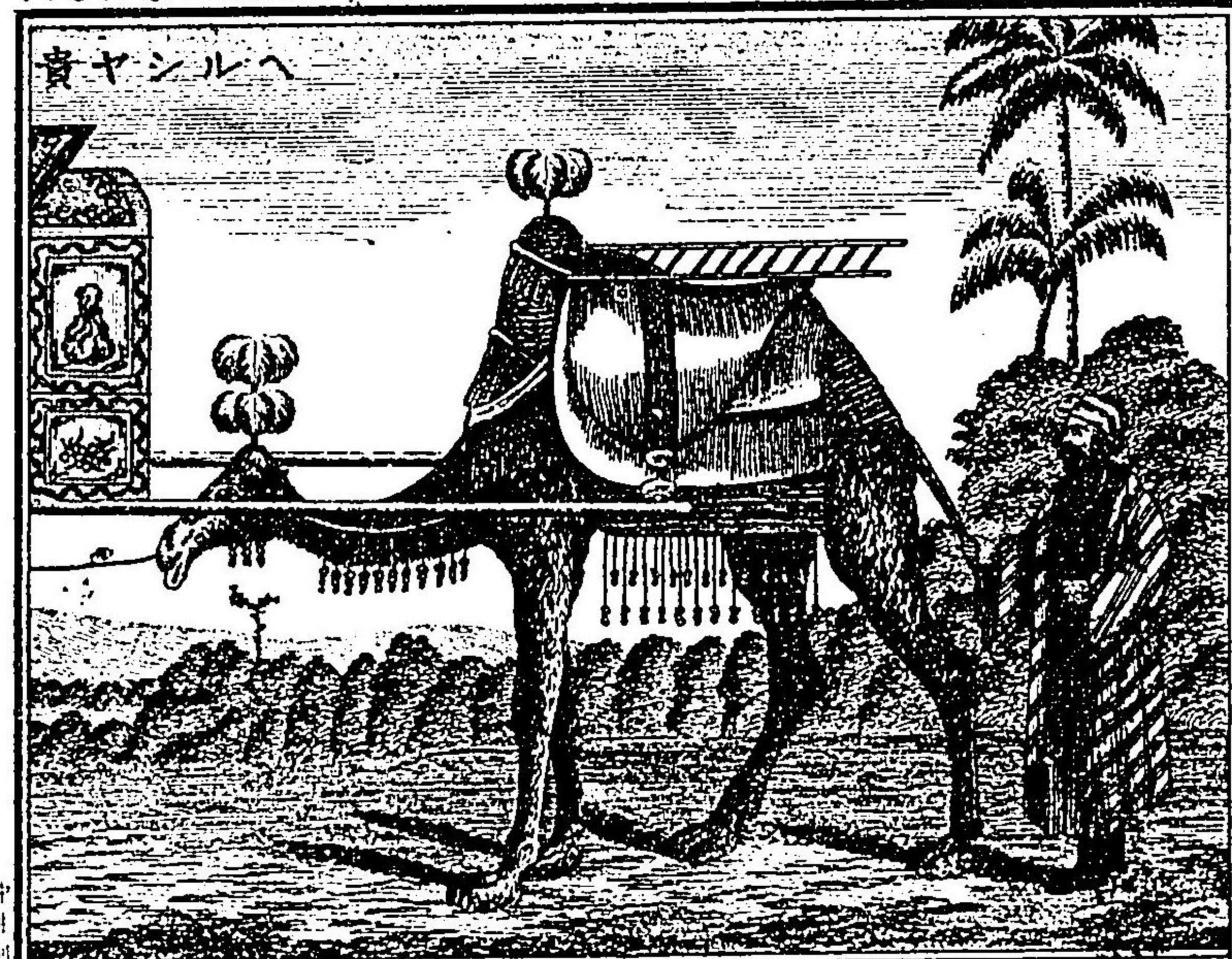


行旅之人



其地の方東海より西部は山脈連亘し最高二万千尺自然草木繁茂して積豊饒の土地を見る元來ペルシヤの人民は農業上巧みよて溝渠を穿ち水を引き智力を盡して園藝し能く力作を為を以て米麥青黛藥艸や木綿絹糸煙艸や鴉片砂糖や果物類殊外多量に産出す國民王を尊びてシヤと稱す今王はナッスルエドデインと云ふ一千八百四十有八年九月父王殂し今月王位を繼承す國教一般マホメット王は教祖の長を兼ね生殺與奪の權を執る制度は回教經典のコーランを以て基とす近時は歐洲文明の

貴ヤシルハ



波斯國之部  
 ペルシヤ一名イランと云ひ東はアフガニスタンとベルチスタンに境して東北方はトルキスタン北は裏海の濱に沿ひ西は亞細亞土耳其にて西南方は一面にペルシヤ灣に瀕臨しアラビヤ國と相對す其面積の概略は六十一万方英里人口七百六十有五万三千六百人地勢南部の海邊より内地一般低地にて暑を酷しを檳榔と椰樹の外は繁茂せず中央並に東方は高原速り盡く沙磧の原野のみにして水流草木等を見ず彼の隊商と遊牧の野民の外は人畜の往來するを見ざるなり

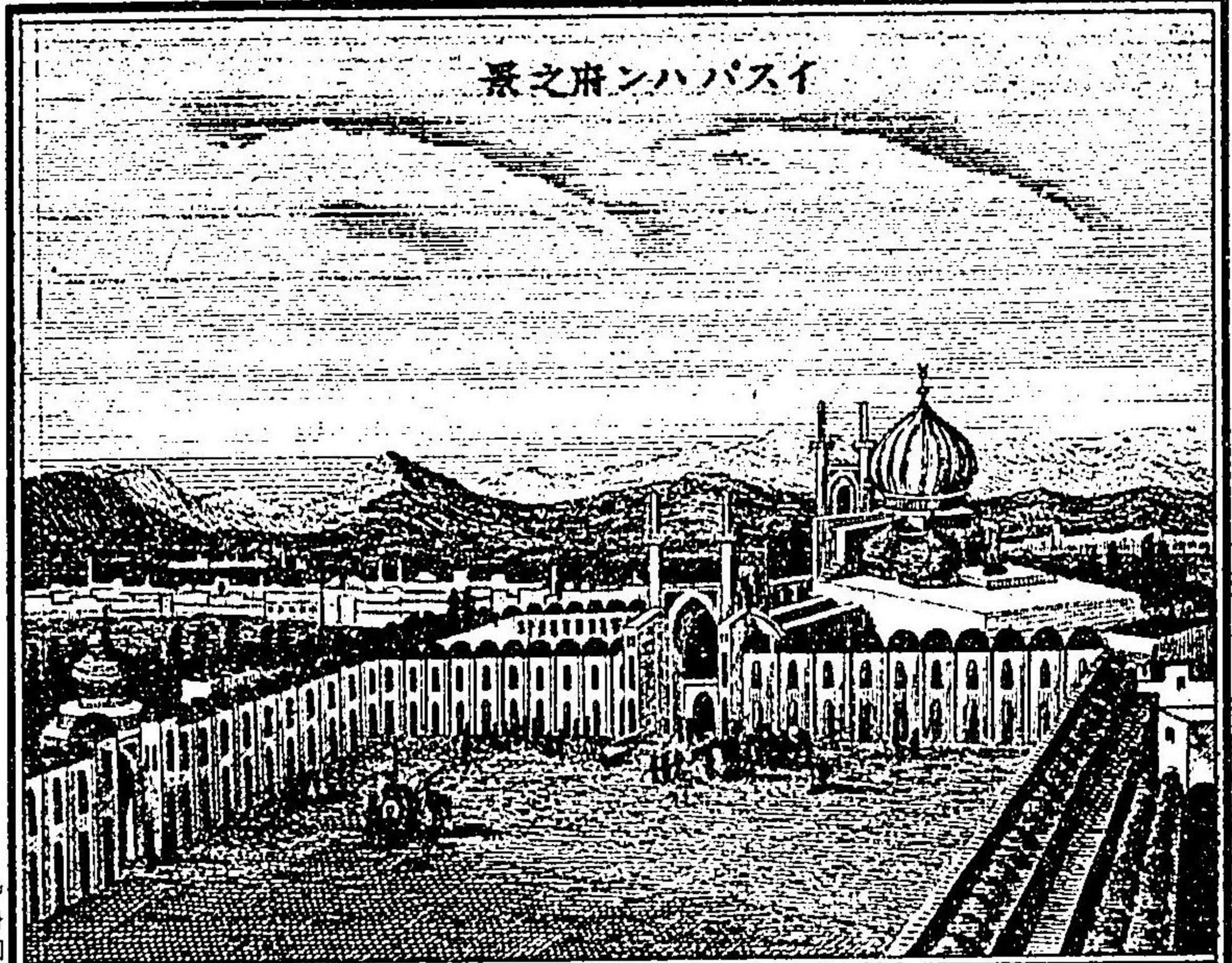


景内、幕帳人シマコルユチ



地勢ゼンテリ、ユート河の北岸に沿ひ河上には奇構の橋梁三箇あり中を渡りて行程は庭園高塔等を見て景色最も絶佳なり市内に入りて覽むるは家屋點々破壊して見る可堪はず其中に五町四方もありぬべき美麗を極めし巨宮あり此は回教の寺として其より北に最と古く且破損せし殿宇あり此は古しサーバスの建築したるものと云ふ外にイスタンブール等の巨館の遺物等多し蓋し二百年前は此國の首府にて當時は十八万の民ありし爾來戦乱數十回兵燹の爲め敗壞し現今人口二万ありテヘラン府之記

景之府シハバスイ



制度は倣ひて七省に分科したきと惜哉腐せしテラシ基礎なきは虐政土耳其と大差あり唯教育は稍進み富みたる者は悉く教師を聘して子弟をば教育するの慣ひありさきも下民は普及せず此國従来一銭の公債募集せざりしが近年佛は勸めらせ首府テヘランより東海濱の濱口レスト港へ鐵路をば布設するの企畫ありし電信並に郵便は歐洲人の手に成りて歐人之を管理せりイスバハン府之記

イスバハン府之記  
 シマコルユチに上陸し一種の駱駝駕籠は乗り  
テヘランよりシマコルユチに駱駝駕籠をば行かせしは  
 不潔を極めし且駱駝の速きを知らず 東北方へ進む事  
 三百五十英里余にイスバハンマハ一府あり





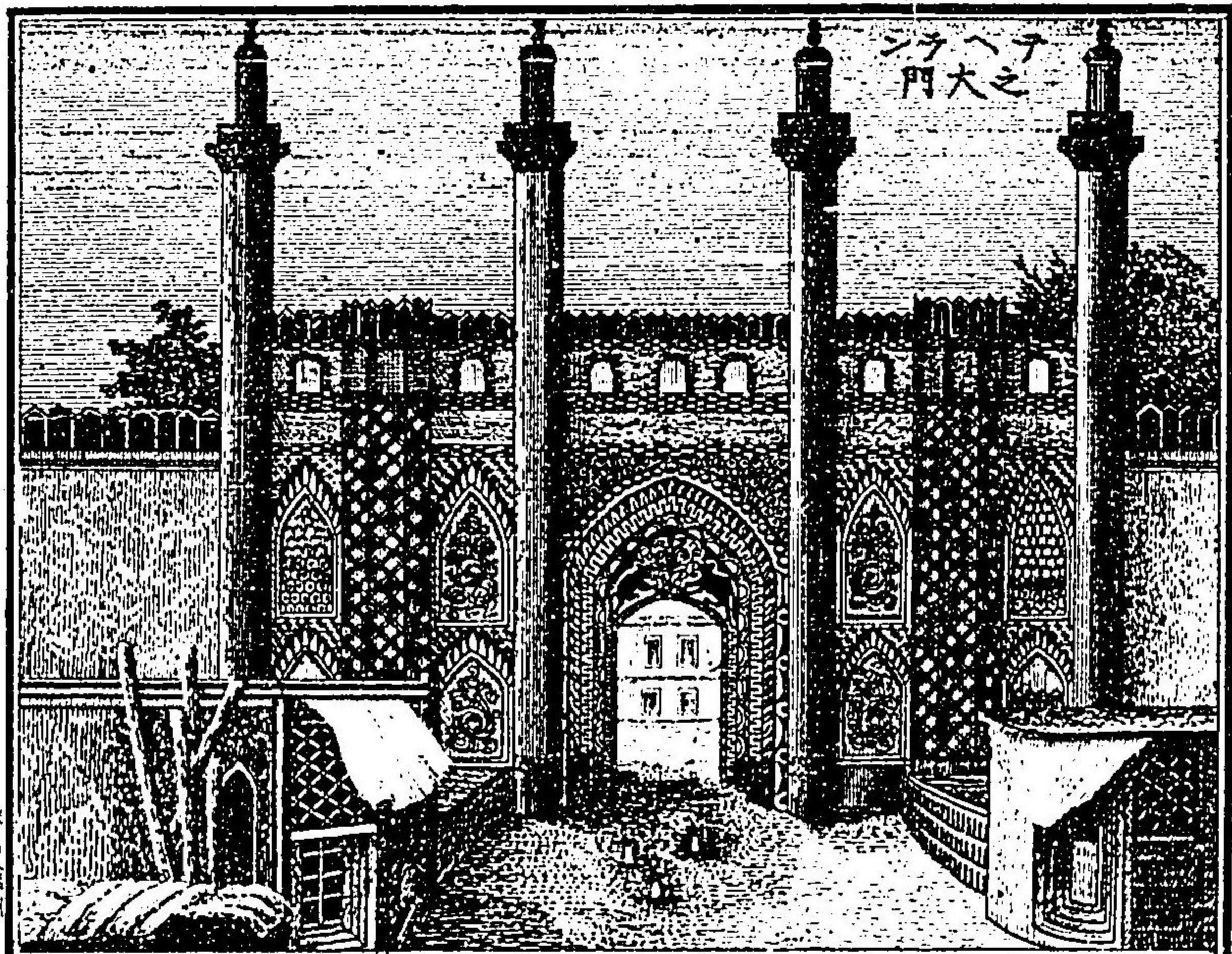
A PERSIAN GIRL AND HER TEACHER.

典教及嬢



A PERSIAN LADY.

女貴



イスパハン府を出立し北へ北へと進む事  
 二百四十英里余のテヘランといふ都會あり  
 此地は現今の首府にして周圍五英里塗造せし  
 牆壁を築き中央にアークといへる王宮あり  
 内外共く美を盡す此地の首府とありしより  
 未だ百年も満たざれば見るに足るべき名所なし  
 且又市街一般の家屋は泥土を塗りし身は  
 大家と雖も粗造にて街衢も甚汚穢かり  
 商家は金銀寶石や綿繡綿布等を賣る  
 府民の氣質は温和にて吾々他國の旅行者は  
 殊更鄭重に應接すともてチユルコマン人は  
 悍惡にして此種は常に沙漠に游牧し  
 隊商主人を抄掠し生活を為す土蠻なり



MOHAMEDAN TEMPLE,  
AT BOKARA.

二七



ボツカラ府  
回教之寺院

其盛んなる佛教のラッサ西に於ける如くなり  
又商業はロシヤペルシヤ支那鞏韌國等と  
隊商貿易繁昌し三千余頭の駱駝船  
常々此府に出入す。  
当地は夏月水涸れて飲料乏しき且悪しき  
疾病を醸し住民や旅客甚か困苦せり  
○今より十有余年前此地の汗王ムザフハルは  
屢々魯國と劇戦し連戦連敗計盡て  
一千八百六十有八年九月十二日  
遂に魯國に降参し國中富み且つ盛んなる  
サマルカンド府及びサルカドは後々畜あり  
カッタールガにてふ邑や近傍各地を分割し  
且つ五十万ルーブルを魯國に與へて和を講じ

十七

土耳其斯坦國之部

土耳其斯坦は一名を獨立鞏韌國といひ東は支那の新疆と境を為して南方は  
アフガンペルシヤと分界し西は裏海と瀕面し北シベリヤに隣して面積六十四万英方里  
人口六百五十万・域内數國に區分せり其中最も主なるは西にギョウアあり東北に  
コーカンありて中央にボツカラ國あり東南にシズースあり各自みな酋長ありて獨立す  
全國概ね瘠土にてボツカラギョウアは沙漠ありクズスより北方へピンジークーシユ山脈と  
ポロルの高山蜿蜒し其より出るアムー河及びシル河は西流し亞拉湖に注入す  
○政令並に法律は各酋長の意に由りて主殺與奪の權を執り國民一般回教を  
國教となし信奉す生産物は金銀や絹布良馬驢馬羊最も多々穀物は  
ボツカラ地方は産すのみ。

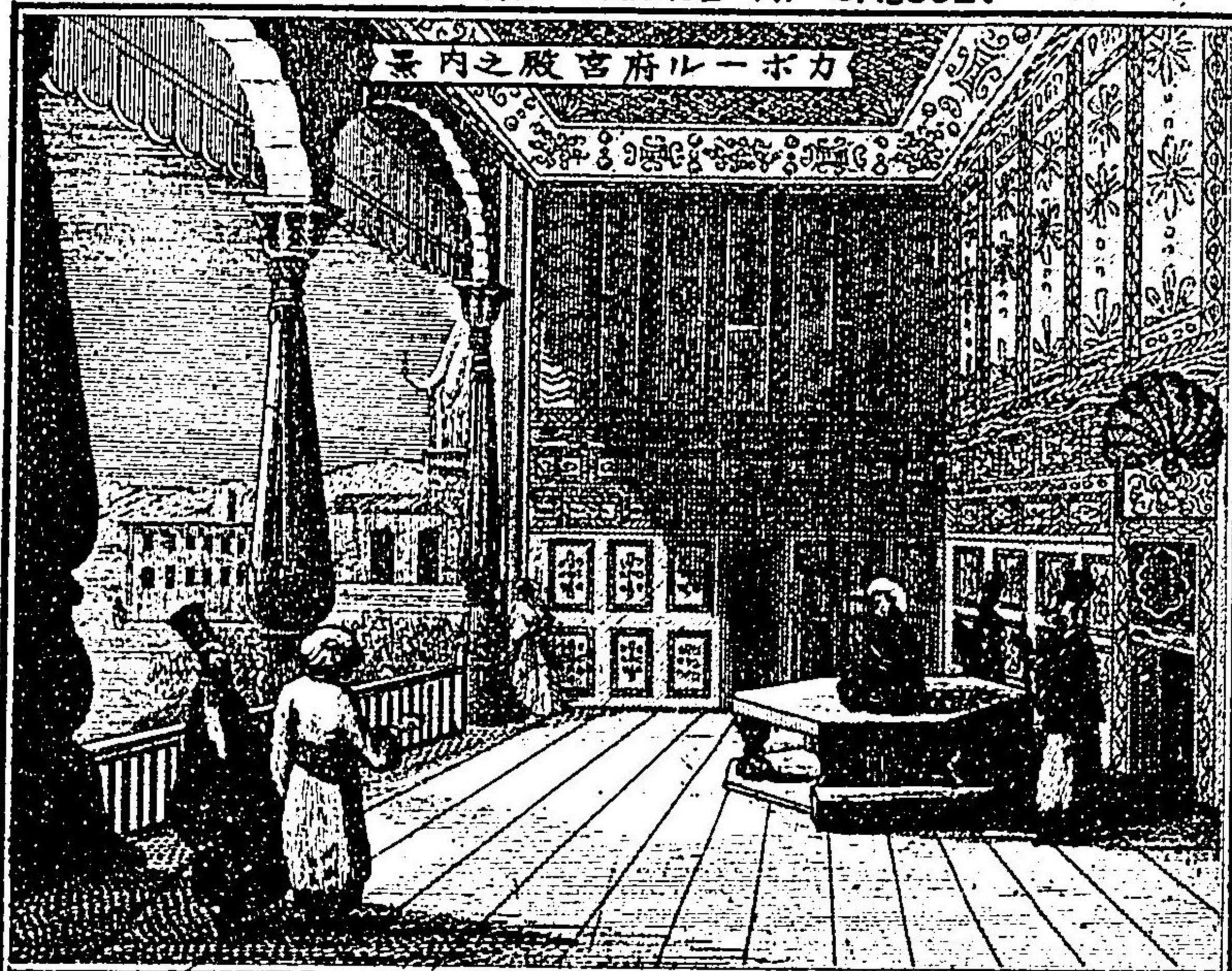
ボツカラ府之記

ボツカラ府はペルシヤテヘラン府より東北九百五十英里  
道中記すべきの奇事多きを以て省略す  
地位アムー河の上流にあり國中最も人口の多き土地にて此府は現今七万五千あり  
市内は回教大寺院三百余箇と附屬せる學校ありて生徒をば二万二千教育す









カポール府の首府として同名河流の西岸にあり市街の周圍三英里・人口六万余人あり河上は三大橋を架す彼のバザとサル王宮は堅固の城郭内にあり近傍公園等ありて清潔なせと各市街民家は石造の

カポール府之記

ヘルマントとて西流し大小諸川を相合しサラー湖に注入す氣候寒暖一ならず物産米穀綿砂糖毛氈絹布等とあす此國昔時は自ら一國を為し獨立す然るは國勢衰頽し國內三部に分裂す則ちカポールカンダール及ヘラット國とて今吾輩の着しとるカポール府より記載す



印度へ旅行すべければ彼の地で事績を尋んと土人より別きて東南へ進行する事四百余英里アフガニスタン東北のカポール府へ着しなり

アフガニスタン國之部

扱て此國は東方を印度に境し南方はベルチスタンと相接し西はペルシヤと取して北は則トルキスタン面積二十万方英里人口五百五万あり地勢一般山多々東北ヒンヅコーロス山二万尺余ありて其より西に大なるパロバミサンの山脈はペルシヤ地方へ遠く馳せ内部アムラン及び他の山脈各地に連亘す又西南の一方はセイスタンに沙漠あり河流の最も大なるは





列整人軍街市所一アナ

婦女は総て髪を結ひ其腦天又髻をふす  
 婚姻、男は二十歳、女は十五歳を例とせり  
 各家の内又は穴蔵の設けありて牛乳や  
 樹脂酒醬の類悉く之を焉又貯へり  
 且富人の室内は揚枝を編て造りたる  
 幾几を備へて飾具とす其形は前葉に示したるメルシ  
 ヤ國婦人の冠せ物に類せり  
 又各人の食物は麥穀樹脂や牛乳や  
 牛酪等を主として魚は好まず男女とも  
 酒を甚多嗜好して自ら造り之を飲む  
 富家は盃盤等の類純銀製を使用せり  
 且又アフガン人民は常に自國の種族と  
 戦闘するも抱はらず他國の客を親愛し



場市物青府ルーボカ

甚だ粗ふるものにして見るに足らず其中は  
 商業市場四ヶ所あり南北諸國の隊商や  
 東方印度と貿易す  
 此地は四十余年來印度在苗英軍に  
 屢々攻撃破壊さき面教其他の寺院等  
 兵燹の為め廢滅し名所の記すべきものはなし  
 ○固有土人の状貌は面色白く唇は  
 灰白色にて額面は甚だ廣々其眉は  
 弓形を為し頭髮は皆純黒なり而して  
 体格便嫺服飾は則ち男女の差別なく  
 半は表裏外套は織輕獸皮を用ひり  
 帯は極めて幅廣く男子の頭は中心に  
 辨髪を垂せ其餘は皆盡く剃除せり





番之府ルアノカ

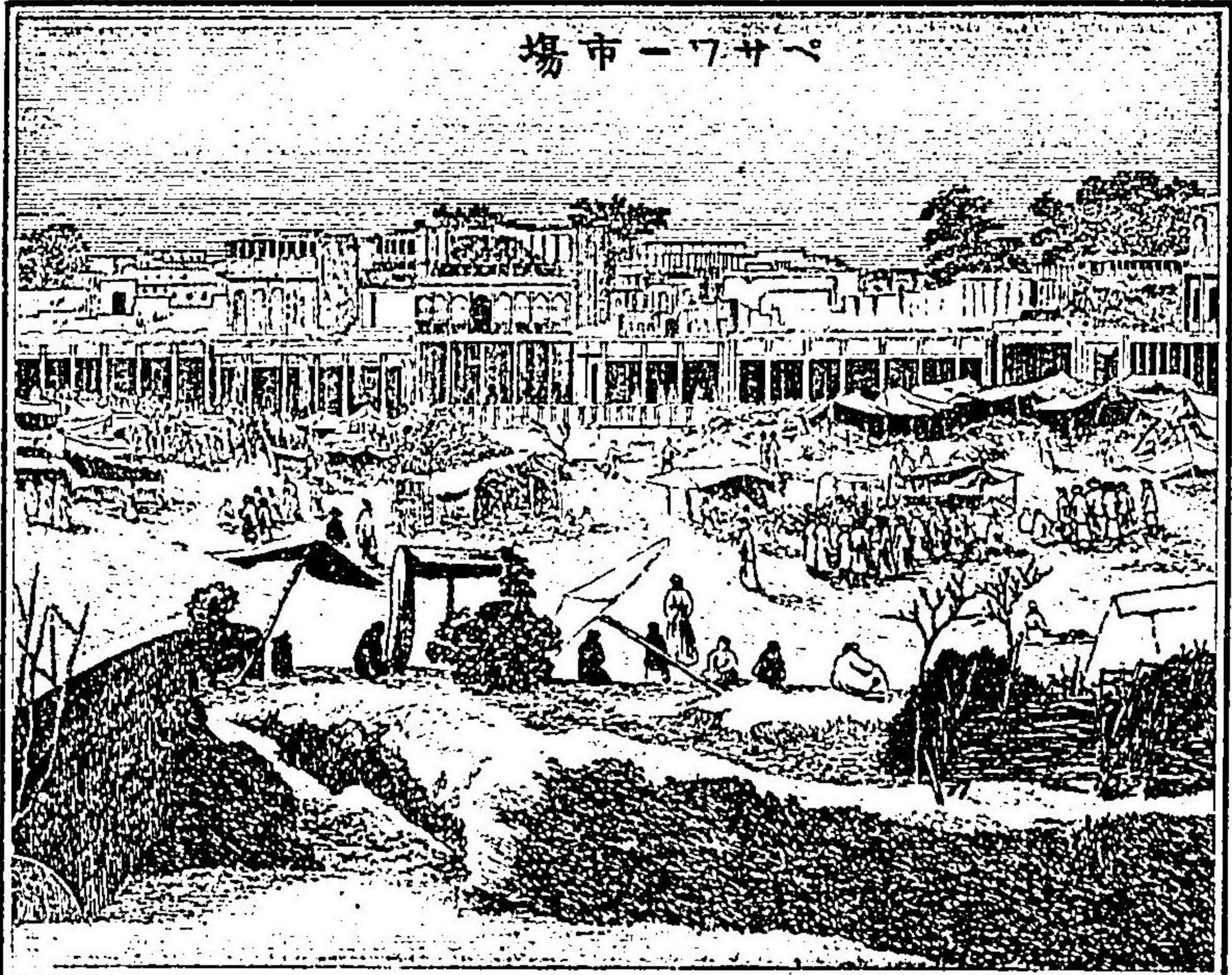
ペサワールの見物為し終り其より進路を迂回して西南方へ進む事四百五十英里余はカンドールと云ふ都會あり。

カンドール府之記カポール府より二百英里

即ちアフガン中央の一首府にして其地勢海面上より高き事三千四百九十尺市内二條の水道あり飲料とふし又運漕の便又供せり而して此府は印度其外の諸國と通商盛んよアフガニスタン中心の貿易市場と云ひつべし現今人口七万余他國の旅商又多し。

府の北方二英里は死山聳然特立し骨を露す其上は城の破壊せるを視る

場市一ワサペ



訪問する者ある時は輒ち程よく之を待ち權を盡して后ち罷めり。

さてカポールを出立しカポール河を下る事一百五十英里余はペサワールと云ふ一府あり

ペサワール府之記

此地は印度とアフガンの境界を為す谷あり蓋しアフガニスタン中有名都府の一として人口六万二千あり印度や近隣各國と通商貿易盛んよて富家豪商又多く市街の家屋は二層より三層四層は建築し甚だ美麗を極めたり又市内にはマホメット宗教上の経本を印刷し附し各國へ輸出する事多額あり。





ボランパス之景

地勢はアフガニスタンと大同小異疆内は高原多く、谿谷の間と或も海面を抜く  
 五千尺以上あり西方セスタン沙漠あり又バスカルド山脈は南北遠を連亘し  
 サヒランケツ山脈は其中央に起伏せり且北方はウースチー山脈斜に蜿蜒し

東端ハイラ山脈は印度國の境にてアフガン内地へ遠く走す  
 此山間に道路あり之をボランパスと云ふ印度アフガンベルチスタン  
 三ヶ國の要路にて長さ殆ど百英里間山を送りて山迎ふ  
 山又山の險路なり全國土壤一般に薄瘠にして肥沃なる  
 土地とはなく山間に遊牧場の在を視る生産物は山中に

蓋し此地は古代より彼の戦争の歴史上中軸と云ふ場處にして城の備へも堅固あり  
 然るに英は印度を得、猶中亞細亞を呑んとし、罅隙を窺ひ居りしが、一千八百三十有  
 九年の頃、アフガンの内地大に分裂し、諸汗各地に割據して、軋轢闘争絶間あし  
 時機を待ちたる英國は、シムシヤ汗を擁助して、シムシヤ汗はアフガン汗族の一人にして兄モーム  
 近年迄アフガン事件に軍を發しカブールや其他の諸城を陥せ、勢ひ電撃帝あらす  
 干渉せし艦船は即是也  
 次で当府へ闖入し城主トスマゴメドを倏ち降し其より後、全國倍々混亂し  
 今より九年以前、英の大軍乱入し、爾來数年騷擾なく、此府は非常な荒瘠し  
 實に衰老の姿あり  
 尚る西北のヘラットへ巡遊すべき苦なせと、格別奇觀あらざるは是より南へ進行し  
 ベルチスタンへ入らんす

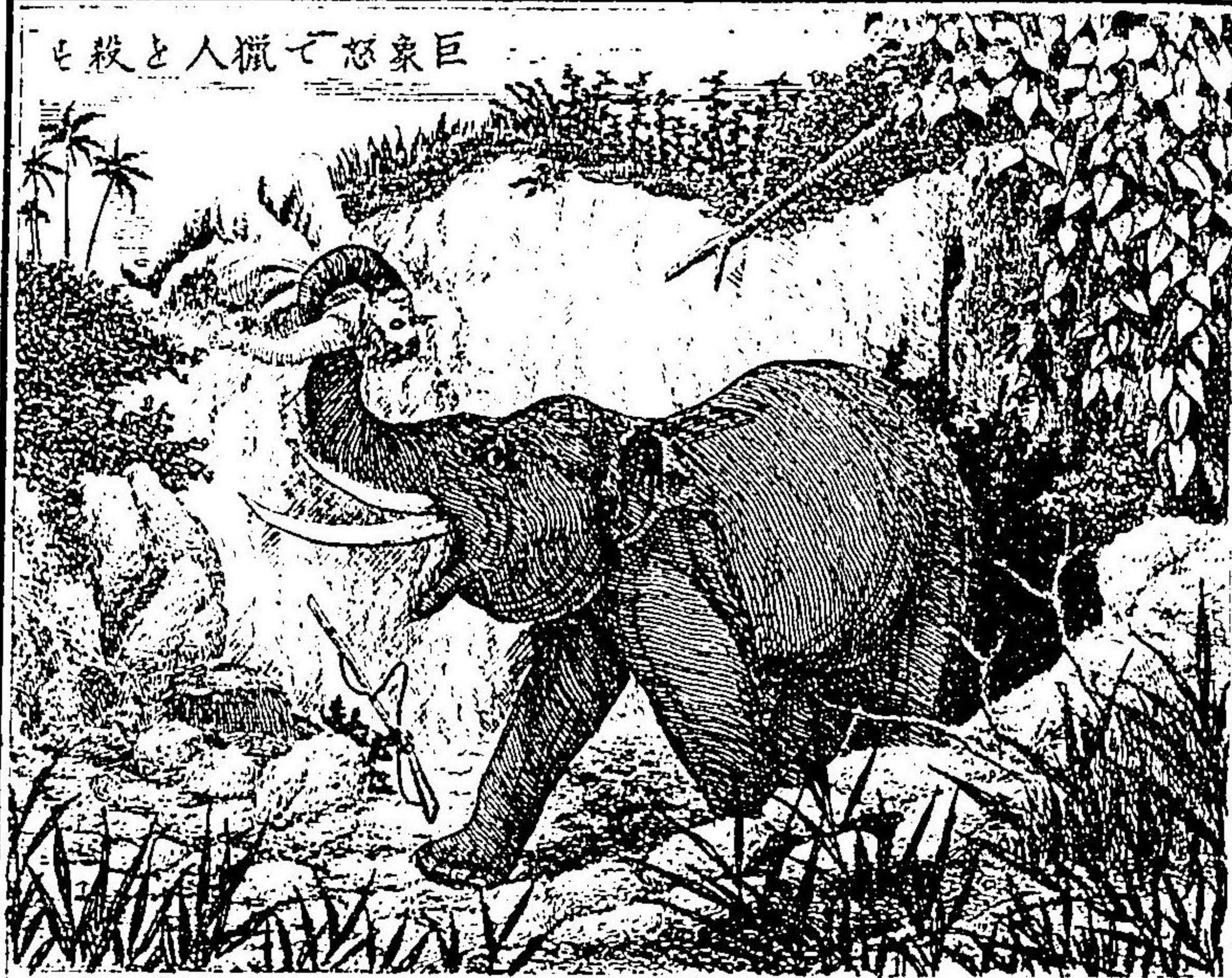
ベルチスタン國之部

即ちアフガニスタンの南に隣る國にして、西はベルシヤと相接し、南はアラビヤ海に沿ひ  
 東は印度と接せり、面積僅か十五万、英方里余、人口は一百五十二万あり



THE GREAT ELEPHANT  
KILLS THE HUNTERS.

巨象怒て獵人殺す

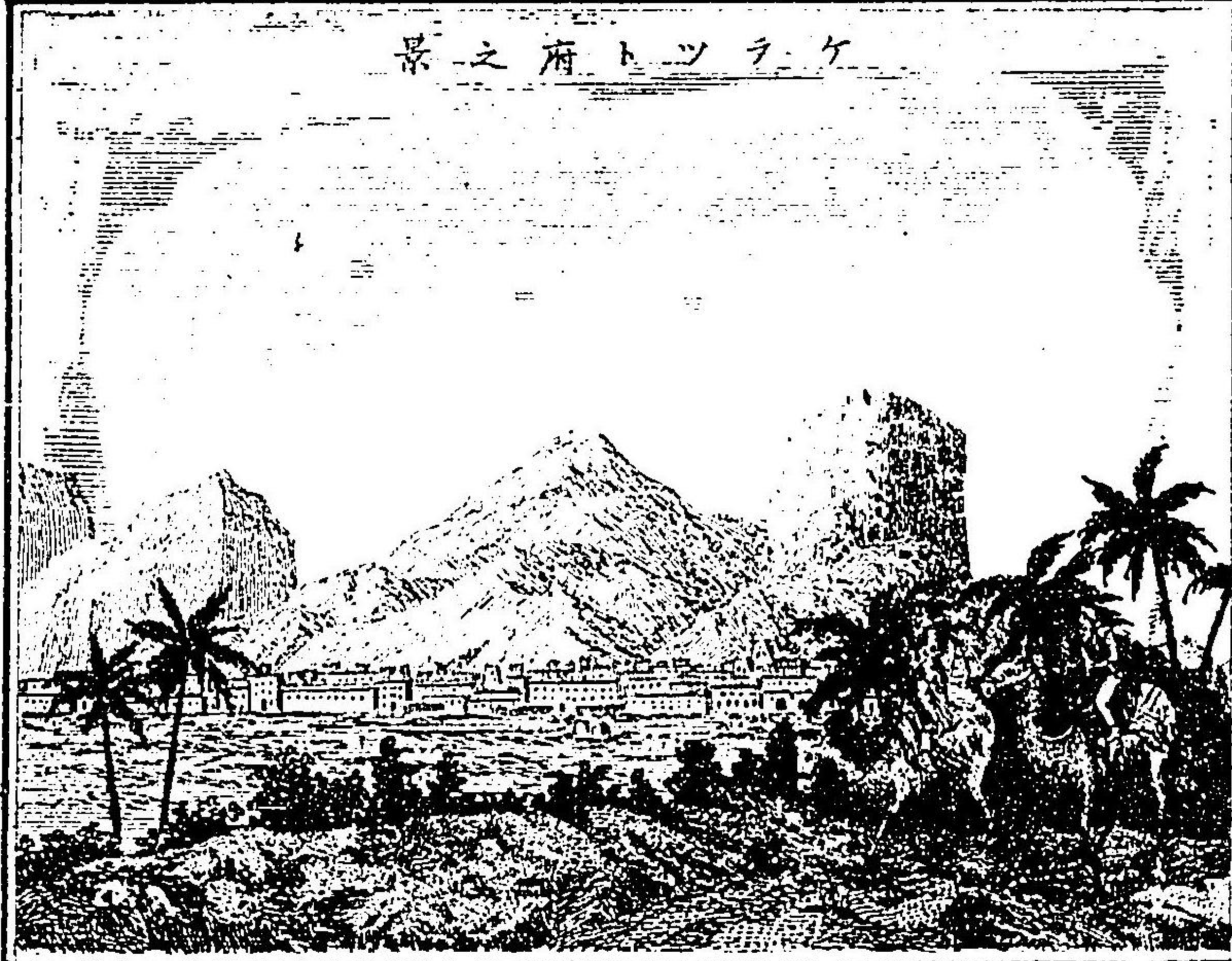


◎是より東に道を取り高原上を進む事二百五十英里余。ハイラ山脈嶮嶮す即ち印度の境なり深山幽邃崎嶇として路程峻険歩し難く一步一喘行程は象や猛虎の聲を聞く。

象は讀者の知る如く多蹄族又厚皮族陸地に産する動物中最大無比のものとして熱帯地方に生産し陰濕の地を愛すと云ふ妊娠日数は二十より二十二ヶ月間にして一百年を生期とす性質靈敏又入る馴れ易くして運搬と耕作上は働き且つ其牙と皮革とは世用を資する廣き故土人は巧み獵獲す且又往昔戦争に

VIEW OF KELAT

ケラット府之景



米綿砂糖煙草や青黛等あり又北部高原中は大小麥及び其他の禾穀あり◎ケラットより南方へ二百英里を行く時はケラットと云ふ都會あり

ケラット府之記

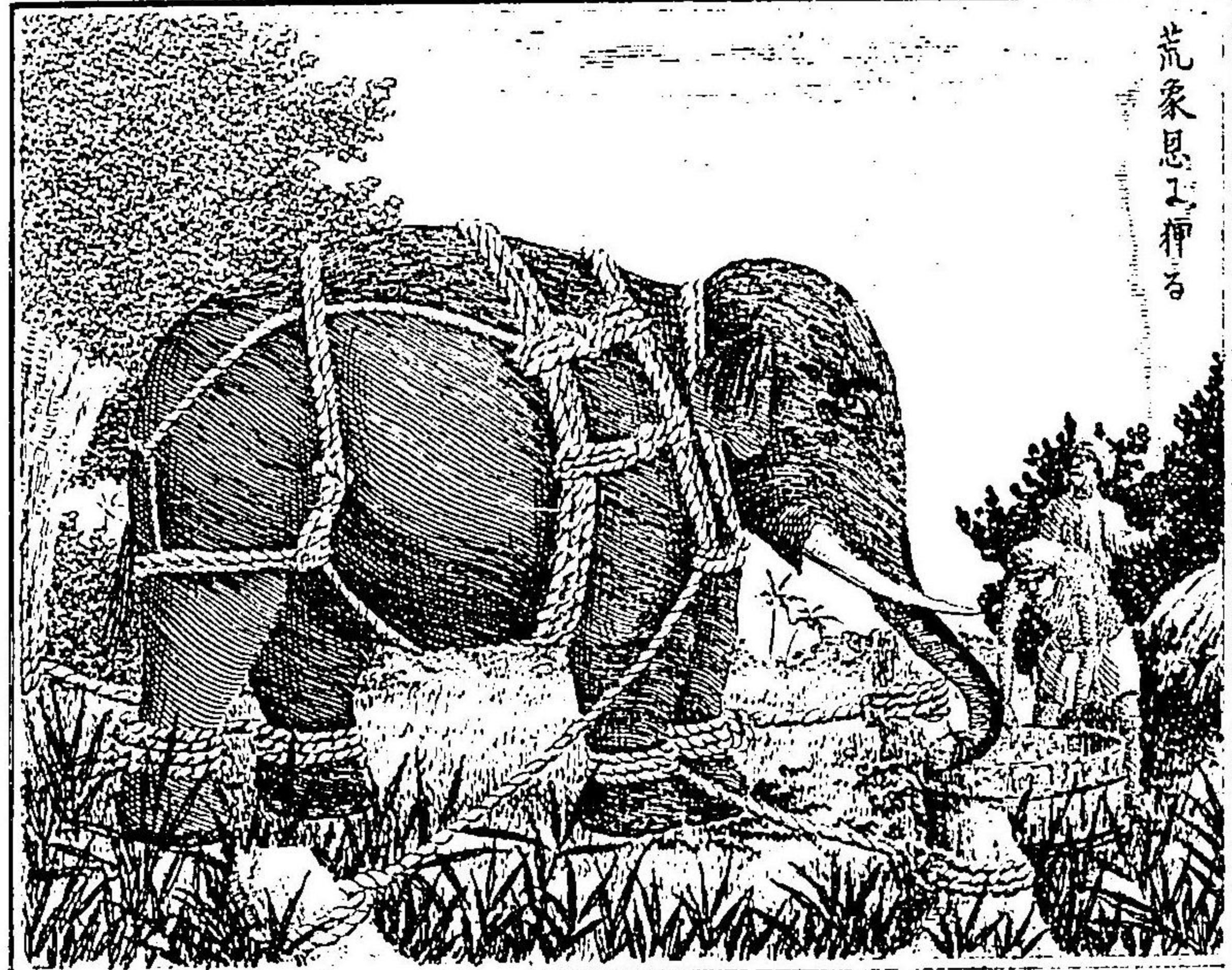
ベルチマンの首府にして人口一万二千あり地勢は海面上を抜く六千二百尺余府中記すべき奇觀あり又其風土人情もアフガン國と小異す今更にお記せし府外一の城ありて英の國旗を翻へし兵士の屯在するを見る蓋し此地も數年來英國屢々侵撃し一千八百七十有七年カアンなる者と條約を為し領地とす





猛虎旅人と

害を受けるのみとして後ち鴻恩を施すも  
終日馴るゝ車なしと。  
○其より漸々山を越へ印度の西端シンドー州  
北部の僻村に來りし土人牛車を牽き來り  
乗車を止めたるより之を傲ふて東南方  
ハイドラーツトへ行んとす然るに土人等ゆるやう  
此辺猛虎多く棲み旅客并に村人を  
殘害する事数知らず故に此地を通るには  
人々互に待合せ一隊と成り行くを以て  
同行を得て進發す未だ數里ならずして  
或る丘陵にかりしが遠近喊の聲を聞く  
今其故を尋ぬるに即ち猛虎獵として  
英國政府は郡村へ時々命令を為し執行す

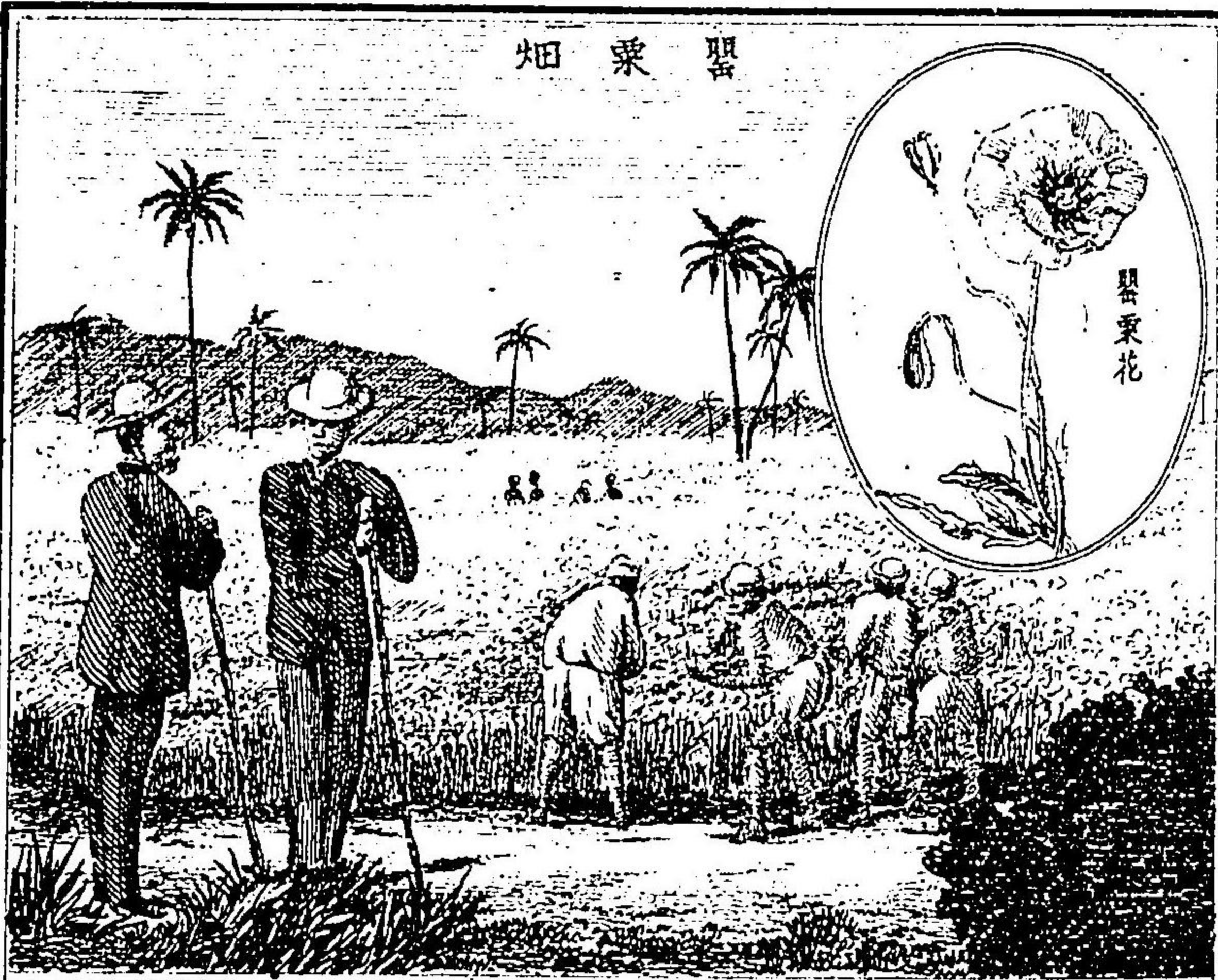


荒象思工押る

専ら象を用ひしは讀者の知らるゝ所なり  
○尚心を勵まして攀援級を登りしに  
稍平坦の場處ありて象の四足と全體を  
大き繩にて縋めば、四邊の樹木に括り附け  
株を與ふる状を視る何故なるかと尋ぬるに  
近日捕獲へし者なりと其方法は土人ども  
荆棘中に潜み居て微かに象の傍より  
先づ後足を最に大き繩にて巧みに括り附け  
次に四足に及しつ終に全體を縋むと必ふ  
斯て半月間斗り日々食物を與ふせば  
仇を忘れて徳となし其思に馴れ終身を  
土人に任せて働けり若また彼を凶器にて  
捕獵せんと欲するも決死之に抗敵し



罂粟畑



最高二万九千尺、世界に無二の巨山なり。此山脈の両端、各一條の大河あり。東河をブラマプトラトて西を印度河とて、又中央より迸出し、數條の支流を相助け、東北地方の濕水を吸翕しつゝ、ベンガルの灣へ注入する者を、ガンジス河と名稱す。以上三河の海中へ注入したる所より、東西兩濱諸共、斜に南へ走りつゝ、コモリン海角まで連結す。即ち東濱はベンガル灣、西濱はベルシヤ海とて、此よりボーク峽を隔て、錫蘭嶋を望むべし。

此面積の総計は、一百四十有六万六千五百七十有六方英里余ありて

虎獵

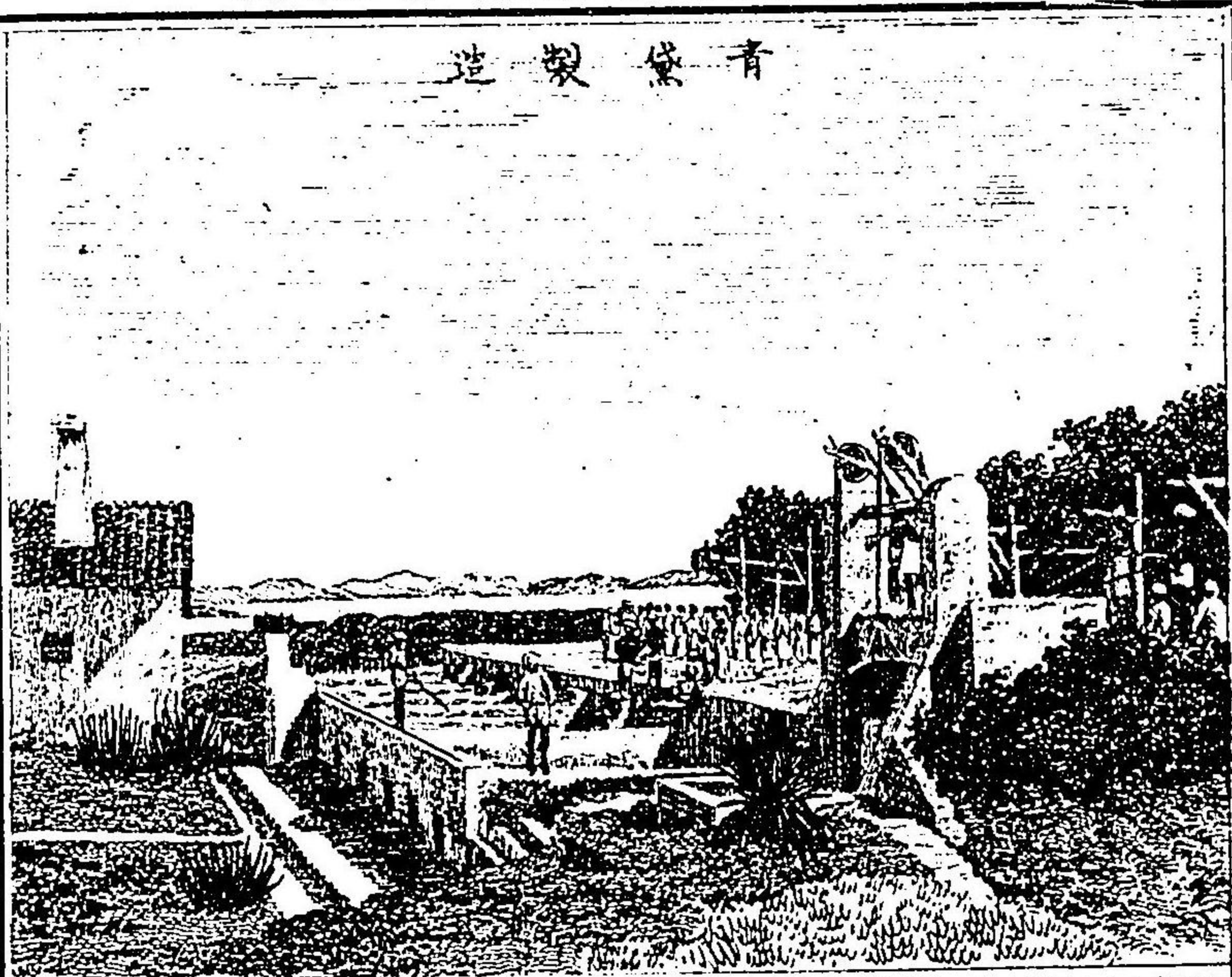


多數の猛虎を獲し者は、皆重賞を受となん。實に危険の處なり。蓋し印度の山野には、猛獸毒蛇多くして、年々非命に死する者、數十万に到るとぞ。談話を聞きつゝ、行程は前面一の大川あり、之を印度河とて、之を渡りて河に沿ひ南へ進む若干里、バイドラベットへ着したり。

東印度、又天竺國之部、一名温都斯坦とて、又前印度ともいへり。東北緬甸とて、北は西北方はアフガンとベルチスタンと隣接し、北は名高きヒマラヤの山脈、嶮峻として、西藏國と分界し、其山脈の峯巒は、一万六千尺より



靛製業



人口實は二億五千零百十有七万人  
 外に從來英領ビルマ八万七千二百二十方英里人口三百七十  
 三万六千七百七十一人と又昨年十一月英の政略なるビル  
 マ全國十九万の五百方英里人口百五十万とは現今亦英國東  
 印度政府の所轄なりと由も以上は通例の部詳かなり  
 此廣瀾なる面積と此數多き人口は  
 概略英の所轄する内は二三の獨立を  
 稱ふる者もあるがせし是又英の貢を納む  
 保護を受けるものなれば其實領地は外ならず  
 然り而して此國は古來人口稠密し  
 土地の豊饒なる事はヒマラヤ山の名と共に  
 宇内は絶て比類なし故に世人は此國を  
 英吉利國の宝庫と云ふ此廣大の宝庫は  
 米麥靛蠶絲絹木綿輕羅砂糖茶  
 金剛石鐵石炭海塩椰子油香料や

百菓並に竹類や支那を惱む鴉片草其他幾々の産物は皆此國土に充滿し  
 年々收入の金額は三億万弗以上あり

又此國は古代より宗教盛んに行き婆羅門佛陀を始めとし其他各種の神の名は  
 三億三千万ありて附屬の宮殿又多々世に宮殿の土地といひ奇妙異態の弊習は  
 城内各地に行はせ人情風俗一ならず注目すべきの異國なり

編者曰は今より讀者を内部各地の名所古跡へ案内せんとするに先ち此名高き天竺國  
 は何れの時代より人民蕃殖せしが又釋迦前後の國教及人民の情態並に近世大英國は如  
 何なる奸策を施して如此廣且大なる富國を己が領地と為せしかを聊さか左に陳述すべ  
 し

但し英が之を併呑したる顛末は彼の有名なるロベルトクライプの傳より引けり蓋だじ  
 クライプは東印度會社の筆生より起りて印度を度動し歐洲諸大國の國權商權を挫き終  
 こよく此大業を成就せしめたるが故なり又釋迦の略傳と教旨及其他主眼なる宗教の奇  
 談は各名所に就て其下に略述せり



無神論者難行苦操を修む

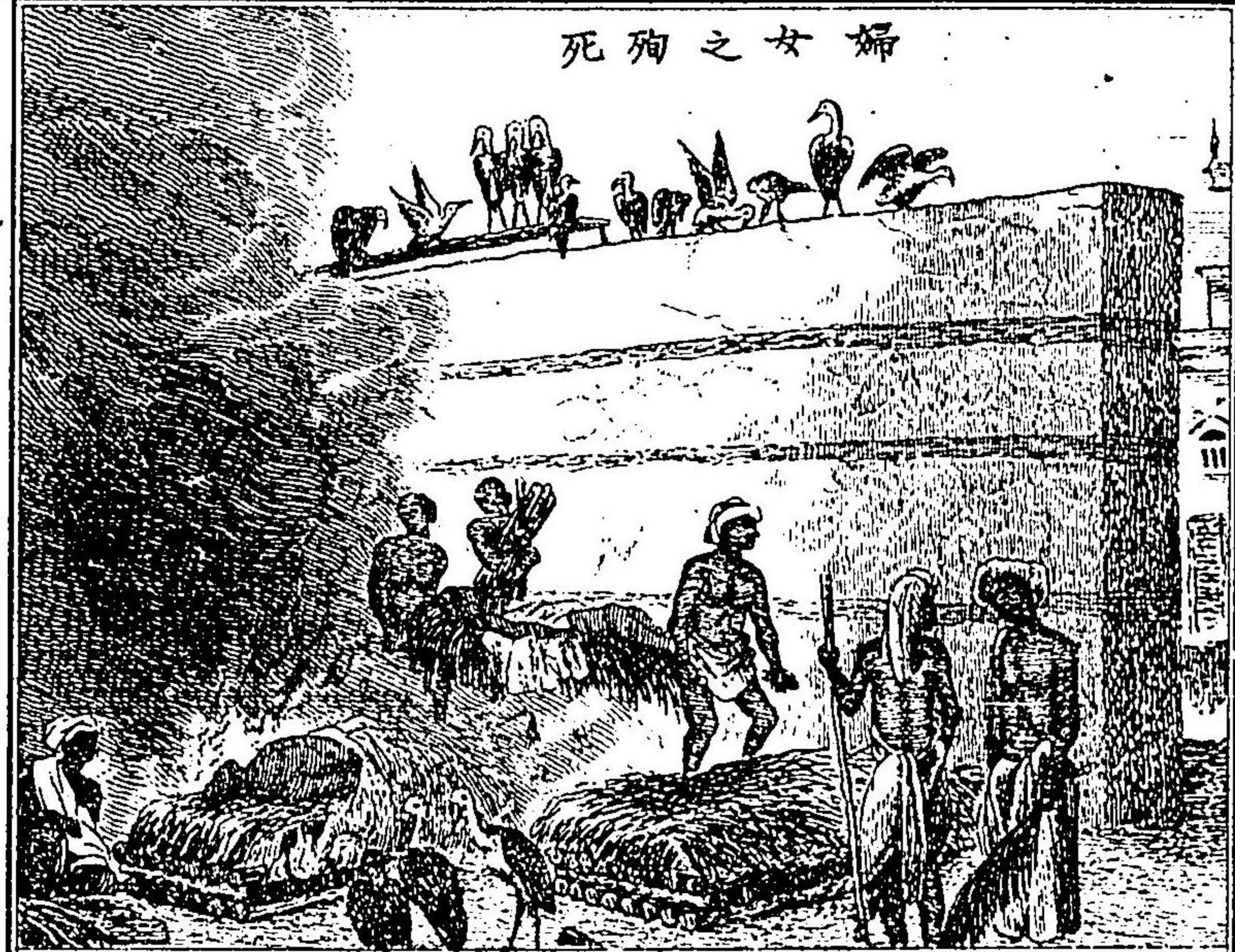


常々諸物の上より其根源とかり足はなく  
 到る所は廣遠と手ふる萬物を掌握し  
 眼を視る所なく耳かを聴る所なく  
 其存在は根柢なく小は微纖と密藏し  
 大は宇宙と充滿し其形状の大小は  
 得て名言すべからず世界を創造り又保存す  
 之を破滅るの權ありと  
 右の神をば本據とし種々高尚幽渺の  
 教旨を傳播しりしが無智の民は解し得ず  
 茲に於てか一般の人民は神旨を知らんと  
 三種の神を造りたり  
 第一ブラマ即達第二ビシニユ即保第三シバ即破  
 此三神を合併しトリマルチーと名稱し

○元來印度は文學の早く開けし國なきと其地の一の正史とし稱すべき者あらずして  
 古來或は系譜の類なきあらねど何故か皆年代を以てせず故に或人言つるやう  
 印度の史家の史を編むは譬へば景色を彫刻人の山嶽寺宇や樹林をば點綴するに其人の  
 工夫は随ひ遠近の之を排列して其真を問はざる如し是を實の証言は非ず一篇の  
 主眼となるべき緊要の事蹟すら猶飾るるに荒唐附會の語を以て信するに足る記録なし  
 させどし印度は文明の社會を始め開きたる旧き國の一なるは一般學者の定説として  
 古代印度はフエニシヤ及バビロン國等と貿易通商為せし事且又女王セコラトス  
 印度の曩盛を聞知して遠征せし等泰西の古史の傳ふる説より今より三千余年前  
 已に人民蕃殖し又二千二百六年前アレキサンドル大帝の此地を征せし記事を見て  
 當時既に開明の域に達せし事柄を察知するを得べきなり  
 ○又往昔より此國のベグスと名くる聖書の書中靈妙不測なる真神あるを明示せり  
 此真神は人目には觸る事なくまた他の感覺を以て認め得ず信拜徳行為す迎む  
 其真形は接し得ず空虚に非ざる氣に非ず光輝は非ず分子に非ざる魂魄は非ざる萬物に非ざる



死殉之女婦



HINDOO RELIGIOUS  
全 BEGGAR.



教徒之乞食

今之之を奉祀せり。且つ國民は以為く。元來神は萬物に羅織連結為し以て須臾も離せぬ者なきは。人の五官に觸るゝもの。悉皆神の分派なり。故に日月星辰も大河も名あるカンジスも。鰐魚も火焰も。フランシも。ベタスも。樹木も虫豸も。味噌も。椰子も。又糞も。牝牛の尿も。皆総て。尊信すべからざるかしと。其教漸々増加して。即ち前にも云ふ如く。三億三千余万あり。此教多き神體を祀せる民の目的は。凡そ魂魄なる者は。輪廻轉運やまずして。惡事を為せば。來世に卑しき獸の身になり。善行謹嚴なる者は。數百万年天堂の樂を享る事を得と。然るに學者は。魂魄の循環説を喜ばず。且以為く。平生に神を信する篤き者。天の樂を享る。重數百万年間にては。信教の報厚からず。我は別な工夫して。永世至福を享べしと。種々の理窟を並べ立て。自ら其身を苛責して。難行苦操を勵まし。喜怒哀樂の感を去り。或は寢堂に釘を打ち。其上に臥し。微動せず。或は枯立。元坐して。沈思。潜心。眼睛は。鼻尖の上を熱視せり。此人々をヨジといひ。又其道をヨガといふ。即ち前の畜の如し。

○又此國の人民は。古來四種の區別あり。何れも創造と云ふ神の。身体より化成者といふ。



其一、ブラミン族といひ、僧侶學者の稱として、神の口より成しといふ、其二、サトラス族といひ、國王官吏の稱として、此は手より成しといふ、其三、エシヤスといふ族は、農商良民等として、神股より成り、其四のサトラス族は、工匠や力役者の稱として、神の趾より成しといひ、四族の區別嚴として、彼此貧富を抱らざる、互に嫁する事を得ず、又其のサトラス族より、遙か下等の卑族より之を級外族といふ、是は元來各族の内より放逐せられたる、犯則者として、現今は全人口の半あり、且つ代々力役中、最も卑賤の業を執り、纒か糊口となせるのみ。

総て印度の人民は、宗教上は迷溺し、儀式繁密苛細して、喜怒哀樂の心をば、動かさず、毎に必ぎや先づ宗教の式より、其弊害の多端ある、宇内は絶て比類なし、右に示せし畜の如き、夫れ是きは其寡婦は、忽ち火中へ投ぜらる、或は生者を埋没し、又は幼女を殺戮し、且又冥婚無智の民、財産を棄て世を遺せ、乞食となり、名譽を失ひ、進んで取るの氣力なく、精勵勤勉切ならざる、國家を思ふの念慮なき、一種無類の情民として、唯前代より傳き、宗教上の法式を、依然然亂為さざるは、何如の國王君臨し

何如の政府が變革とし、之を顧慮する者は、かく太古以來、今も亦、異邦の人の治下に立ち、自ら視る事、一種の收稅物に異ならず、間々頗る快活の性力ありて、外人の凌轢するを、慷慨り、獨立せんとするあるも、卑屈怯懦の衆民は、妨害せらるるを、忍んで、手を束ねて、外人に空々黙従せざるのみ。

又此不幸の頑民は、アキサドル大帝は、崩れ、征服せらるる後、紀元一千年の頃、マホメットの酋長の、マモードなる者が、アラブを、殆ど二十九年間、年々歳々、侵襲せ、金銀宝貨を奪き、寺院偶像を破壊せ、暴威を以て、改宗を命ぜらるる其嗣子、全土を取らざる、後三百四十二年を経、韃靼國の人として、回教徒の俊傑として、世に雷名を震ひたる、バーベルなる者、又來り、侵略討滅領地とし、デルヒを都を定めたり、之をモンゴル家といふ、前葉七十三ページ、細字の部分を見よ。

然るに是より數年前、紀元一千四百九十八年、葡萄牙の航海者、ヴァスコガマといへる者、アフリカ喜望峯を経て、始めて印度に廻航し、マラール港に上陸し、鴻益偉業を奏し、つ、隨時此地に殖民し、歐亞の貿易商權を、葡人獨り專占し、巨利を得る事、一百年



像之ルーヒッサルーミ

IMAGE OF MEER SAHIB.



像之公ウイラク

IMAGE OF LORD CLIVE.



世に勝せたる文識なきも天性最も質樸な  
 代言事務を業とかし傍ら田畝を耕作して  
 生活となし居りしがカスキルと呼ぶ婦人をは  
 マンチエスターより迎へて兩来許多の子を生めり  
 ロベルト即ち其長子一千七百廿有  
 五年九月廿五日其地又誕生為しよりき  
 クライヴ幼より神経の過敏なると精神の  
 強健なるとは世の中又稀に見るところ  
 其熱悍として猛烈事冷も狂人童ならず  
 動しすきは兩親の心を痛め世の人は  
 皆惡漢とかし擯斥すクライヴ十八歳の時  
 父母も遂に見限りて廢物とかし東印度  
 會社の筆者遣せり。

卷之六

他國は航路を知るときは皆傍觀して羨めり既にして又和蘭も漸く航路を採知して  
 直接印度と貿易し次で英又之を聞きロンドン府下の豪商輩一の會社を組織して  
 女王エリサベスに請ひ敕許狀を求め得て大に氣勢を奮起しつ船舶五隻を美粧して  
 東方通商貿易の一大偉業を着手せり此時一千六百零二三年の事にして  
 之を東印度會社とす爾來會社は葡國らも屢々妨礙せらるし皆能く之を揮霍して  
 各地に塵舎を建設し且つ盜民の襲掠を妨禦するを名として南方マドラス港口へ  
 セントゼラルジ線を築き土人を備ふて戍兵となし之をシポイ兵とす其後五年東北方  
 ガンジス河の一支流ラークリ河の東岸への塵舎を建築し即ち現今東洋の盛都  
 一千六百六十有四年よりして五年迄ボンベール島の領主と戦ひ捷之を取り  
 會社の領地とすしより爾來数十年を経て會社は種々百般の惡弊生じて内乱を  
 加之佛人は當時此地へ渡來して英の權利を挫んと各州太守と相結び  
 外より刺衝せしより會社は大に衰微せり  
 話頭一轉此當時大英國のスコップ縣ドレートンの近傍よりチャードラウツて入あり



ム攻ヲスラドマト人主人佛



クライヴ一年余を経て漸々マドラス港に着き  
會社の業務に従事せり素より新参者の上  
幼時普通の教育も備めぬ位の人なれば  
最下等の職に就き多くの人の下より立ち  
快々として樂ますをせども傲慢無禮なる  
精神は毫も衰へず屢々社長の見諱に觸せ  
殆ど職務を被せんとおせし事も教知らざり  
遂に失望せし餘り死を決して小銃を  
装ひ己が頭天に向て之を放つと  
二回ありし何故か発弾せざれば怪んで  
銃中を檢るに彈藥は充分裝填為し居たり  
是に於てかクライヴは高聲自ら呼て曰  
天帝我を殺さぬは偶然に非ず必ぎや

他日我の大事業を為さしめんとするかりと

此時俄然マドラスに一大事變起りなきは是をクライヴが青雲の路を開きし端緒とす  
蓋し前段述べ如く佛人印度へ渡來して英の權利を挫かんやパンヂヤブ地方を攻略し  
殖民地となし土人らに自國の兵法教授して倍々軍備を擴張しジブラー之將として  
頻りに各地を略しつゝ勢ひ四隣を震動す偶ま英佛、本國に煥帝議位の事件より  
一大戦を開きしが英國之敗を取り佛は彌々氣力増しラホールドンチ將として  
印度へ遠征軍を遣り忽ちマドラス港を攻め會社の家産を始とし全都を悉皆焼燼し  
セントゼナルジ寨上へ佛の國旗を翻し英の士民を虜とし苛酷の處置を行へり  
時ヨロベルトクライヴは回教徒の身を信し暗夜に乗じて逃ぎ出でマドラス府の屬地たる  
セントダビドの小寨へ忍び行て英軍の中に加はり佛軍と数々刺戦したりしが  
数千人の勇將や猛卒中の名を博し時の英將ローレンス大之を愛しより  
後ち幾干しなや英佛は媾和を為して二國とも向後印度の國土をば蠶食するを嚴禁し  
條約書を交附せり其より以來クライヴは兵商二職を兼務せり



顧て印度帝國の史を閲するにパールルのモンゴル家を創建後前九十五ページに出づ  
 オランダゼベール帝の時一千六百五十八年即位 非常の隆盛を極めしが爾來國運壞頽し  
 虚位を擁する君主は懶惰と驕奢と耽りつゝ、バンク人を酔ふを嗜し地は溺せ或は佞人奸吏らの  
 詭譎を容き喜びて一生涯を深宮の内は登過し之は及へ、剽奸無頼の土寇兵  
 域内各地に蜂起しつゝ、パールンヤの如きは印度に未だ冠し十六億 来寇する事虚日なく頻りに空貨を剽掠し  
 六千六百万弗の財物を掠奪せし事あり 主人は戦鼓の響々を聞けば忽ちよ  
 米和を投じて米囊を擔ひつ財布を腰にして妻子の手を曳き深林へ皆を逃げ入りて虎狼らよ  
 啖噬せらるるを辭する事、勢ひか々の如き申へ、各地の太守皆救き互に君主たらんとし  
 内訌曾て絶るな々、モンゴル家の運命は將に煙滅せんとせり。  
 如斯の機は會し横肆無極の佛人や貪慾飽くなき英人ら、ナチツクの叛逆者 義務を全せん  
 曩に結びし條約は忽ち是より古と化し彼の佛將のジラレーはカーナチツクの叛逆者  
 某と結びて兵を擧げ漸次四隣を攻略し佛軍勝利の碑を建て猶且つ威名を後世に  
 傳へん為め、錢を鑄て之を其地の通貨とし且又勝利の都府を建て勢ひ猖獗逞し

今やマドラス在苗の英國人を放逐し將に印度を呑んとす。  
 フライヴ今此報を聞き忽ち來り告げて曰、我先づ彼を伐つべしと然るに此時英の將  
 ローレンス氏は歸國して軍事を熱せし人はなく、殊に佛將ジラレーは敢為豁達智勇あり  
 勢ひ猛烈なるを以て皆冷膽せる時なせば社長を始め各官吏周章狼狽又策の  
 出すべきを知らざりしフライヴ奮然躍起して僅々二百の英人と三百足らずの兵を率  
 英人は皆會社の役員アルコットの首府なり アルコットは印度の南都カー  
 時、佛の軍勢は土兵と合して六千騎、一日暴風刺雨して雷霆交り起さるや  
 フライヴ時機を失はば兵を勵まし突進し城門近々逼りしに城兵不意に驚きて  
 盡て城を棄て逃去せり、此時フライヴ以為我、一丸を費さず、此城寨を奪ひしは  
 不意に出づる故なせば決して安坐すべからざりと直に糧食を集めつゝ、牆壁等を増築し  
 守戦の準備嚴かりし、寨に違はず敵兵は諸方、数千の援を得、總勢一万二千余騎  
 雲霞の如く寄せ來り七重八重に取巻きつ、攻撃甚多急にして、劇戦する事幾十回  
 五十三日を経たりしが城壁日日に壞頽し士卒を失ふ二百人、残るは僅か三百騎





大クライヴ  
佛軍及印度兵と破る

巨利を啗はしめんとすクライヴ之を肯せず  
却て死者を辱め痛々憐して追出せり  
敵將何ぞ怒らんや時恰も回教の  
大祭日と当りしが佛將士兵を勵まして  
藥酒を興へ式を擧げ宗教上の熱心と  
藥氣の激發二者合し今回古は城兵を  
塵殺せんと勇を鼓し孤城を指し押寄せたり  
クライヴは又豫め敵の謀計探知して  
充分之に應ずるの軍備を為し稍疲を  
暫時榻上を臥し居るが忽然合奮の一聲  
夢を破らせ起き立ちて我の持場は行見せば  
敵真先は数百の巨象を追立て其額  
鐵板堅固と蒙して活き居る撞車と異ならず



加之糧罄きて城を守せる大將は  
帳薄間も生長し廿五歳の一少年  
如何なる點より視るとも龍城爲し遂得べきとは  
更に見へ古昔より如斯の場合には  
往々叛者なしとせず殊に今此城兵は  
形を殊にし色異し言語風俗不同なる  
土人過半の隊なきは危難多きを免せず  
然るに孤城の小隊が其將帥に服するや  
彼の有名なる十隊の斯撒帝に於る亦  
六親兵の拿破崙に於るよりも不勝り  
一致協力防禦せり  
一日敵の大將は使者を遣し以てるや  
請ふ和議を構せんと又竊かにクライヴへ



微弱の城門忽ち突き破らんとし、群象敵の彈丸を受るや否や忽ち驚き駈ひで散々、味方の軍を蹂躪し、又一方の佛軍は非常の勇氣を顯して空濠を越へ城中へ乗り入らんとししが、クライヴ單身馳せ向ひ自ら巨砲を運轉し又能く之を一掃し、其他諸方の城兵は銃砲後列に装ひて隙間をあらぎ連發し一箇の空彈あらざれば、宗教上の熱心も、藥氣も附いたの敵兵も一時消失せ逃り去せり。此日敵の斃る者殆んど一千二百余騎、城兵死傷十五名、さきもクライヴ偵みて敵若し夜撃を為さんと終夜驚誠怠らず、然る敵は大砲や彈藥糧食等を捨て夜の間に逃走せしとみ、遠近更一人の影をまじ見ざりけり。

此報一たびマドラスへ到達するや、英人は夢かとナリ驚きて觀喜する事限りなく、皆激勵きて二百余の英人並に七百の土人兵とを派遣して其勢力を援けたり。クライヴ二軍を將として是より敵を追撃し奮闘激戦絶間なく佛軍倍々加はりて其状兩虎の風雲を興して雌雄を決する、異ならずクライヴは攻城野戰機に投じ到る處は勝を得て佛の領地を没收し銃砲彈藥軍用金山の如く分捕し

卷之六

且つ先年佛將が傲慢以て建し彼の勝利の都府と記念碑を粉微塵に破砕して大英國の威力をば再び致し、輝かし意氣揚々とマドラスへ一先づ凱旋なしたり。此報佛に達するや、政府はシラレー將軍を歸國を命じて職を禡ぐ然るにシラレー前日の威權を引換へ今は早、轉軻落魄の身とありて終に毀証と譏諷の爲め憤まじ死に就り。さてクライヴはマドラスへ歸りし後、英將軍ローレンス氏も英國より当地へ歸任せしより、數學士某の妹たる、マスケリンと結婚し、間もなく新婦を伴て本國英へ歸航せり。蓋し今より十年前無用の長物視せられ、印度へ放棄せらるる憐れ陋しき少年と殆ど天地の懸隔あり、今やクライヴの齡僅か、廿七に滿ざるも國中第一の雄將と尊恭せざる者はなく、氏のロンドンへ着するや、皆歡呼して祝したり。

〔クライヴ歸國の後國會議員に撰擧せられ、又佛軍や土兵を攻略せし時多額の軍用金を分捕し且會社より贈物を得て非常の富人となりし等の語あきども繁を厭ひ略す讀者幸々察し是より二十ヶ年余を経て佛は英を伐んとし、兩國軍備頻なり、此時最も善良の將師を印度へ派遣して我殖民地を保護するは、又緊要の事なきは、會社はクライヴ氏を撰み、マラス府の知事となし、國王之に授くるに、大佐の官を以てせり、さうして於てクライヴ氏



再び印度へ渡航せり一千七百五十五年。  
任所へ着してな未だ二ヶ月間を経ざりしは、ベンガル州の殖民地カルコッタ府の支社より  
一の凶報達したり。

蓋しベンガル大州は印度國中比類なき最も肥沃の土地にして、已日前も七述ぶ如く  
英人此地に植民し、會社は非常盛んなり、然るる時の太守は、シウヤヤトウと云へる者  
ドローラ此時ベンガル、バルハール、オリッサの太守と、會社の隆盛なるを見て、心竊かに喜ばず  
り而してモンゴル家の下立未だ獨立せざりし、  
英人をして其跡を我地に断絶せしめんと、隣かに土兵四万人、軍馬三万有余頭  
巨象四百を募集して、七月十有八日、カルコッタ府を襲撃す、然るは英人軍備なく  
殊に不意の事なせば、皆な為すべきの術もなく、周章狼狽舟を乗り、他の殖民地へ逃せしが  
之が為めは死者や捕獲せらるる者もあり、シウヤヤトウは英民の財産悉皆掠奪し  
且つ其時捕へたる、一百四十六人を、方二十尺斗なる闇穴中に投入し  
残酷極まる處置を爲し、翌日獄戸を解きたるは、炎熱の爲め囚虜は概して腐敗せんとして  
臭氣耐へず番兵は、慍々廿三名の生き残りたる英人を、死體の中より引出せり

顔色憔悴、身體の衰弱せる状、其人の慈母之を見せしむも、其我賣子たりしかを  
知る能はざる程なりき。

さてマドラスの英人は、右の報知を聞や否、クライヴ陸軍総督、水師提督ワトソンは  
海軍総督官となり、英兵九百と土人兵一千五百を携へて、本國英も勝るある  
臣民財産所有せる、印度を征討せんとして、カルコッタを指し進發す。

然るにドローラは大難の眼前迫るを、知ずして、デルヒの朝へ書を送り、華麗の言詞を臆列て  
彼の大捷を奏上し、モルシー、デバットの、ベンガル州の首府なり、宮中へ居り、倭人や  
奸吏を庸ひ、且日夜淫逸娛樂を耽りたり、固より海外各國の事情を詳しく知らざれば  
歐洲全土の人口を、一万人とも足らずなど、思惟居たりし程なれば、英國人が敢て我  
疆を侵襲すべしとは、夢またも知らざりし、然るに豈に命らんや、微弱と思ひし英人が  
フーグリ河へ押寄せ、怒り、禁はず全軍を召し、カルコッタを指し急進す。

時、クライヴ平生の手並を顯し、一挙して、ウヰリヤン寨を撃取り、カルコッタ府を恢復し  
ドローラの軍を衝突す、ドローラ大に恐懼して、横金を出し、和議を請ふ、英軍之を許容して



巨額の償ひ金を取り漸々媾和したりしが、ドローはヤンデルゴールの佛國官吏と通謀し英の軍をば伐んとす。クライヴはワトソン偵知し、ヤンデルゴールを攻撃し先づ佛人を虜とす。ドロー倍々恐怖して、虚弱無主義の精神は、卑屈と虚傲の中間に浮つ沈つ定らざる。行為百端皆過失、名望忽ち地に墜ちて、一大叛党生じたり。此時クライヴ以為らる、今彼を已に叛者あり、叛者必ぎ我に依り、援を請ふに至るを慮じ、其時欺騙籠絡し、以て彼の口を籍り、民の心を誘導し、印度を吞む事難からず、暫ら其機を待つべしと。

案に違はずモシゴルの臣、ミールサツヒルを有る者は、クライヴと共前は像あり、ドローを殺してベンガルとオリッサ及びバハールの子ボツブとなり功成らば、デルヒの朝を轉覆し、帝位を篡奪せんとして、クライヴ方へ書を送り、共ニ援けん事を請ふ。此事なるや、クライヴが日頃渴望せし所、其乘賤なる心をは、喜ばしむるは蓋し又之に過る者あらす。忽ち之に同意して、ミールサツヒルを煽動す。サツヒル再び書を送り、君先づドローを攻め給へ。我は必ず内應せん。若功成らば謝礼とし、會社並に役員や海陸軍の將卒へ、多額の宝貨を贈んとす。

陰謀の約遂に成る。然るに斯る陰謀は、長々洩せざる事はなからず、オーストリアとイギリスと活眼、鋭敏、輕捷を、熱心等の性ありて、卑屈貪婪詐偽等の惡質とし、兼備へ常ニ政府の用途と、舶來物を商かひて、生活とせる人なるが、シムラヤドローを憎み、ミールサツヒルは學を為し、陰謀委員に撰まされて、充分機密を知しかば、忽ち逆意を惹き起し、サツヒル及クライヴに盡力陰庇の報酬とし、十萬弗を要求し、若又之を與へねば、ドローに賣を告んとす。サツヒル大に怒りしも、大望將に成就を告んとするの際なきは、為さず術も知らざりし、然るにクライヴ忽ち、オーストリアの請を容れ、其事成就せし上は、如何にも一十萬弗を與ふべしと約し、オリッソとイギリスと曰く、請ふ英國とサツヒルの間、結ばる豫約書へ、我が要求する一款を記載し、予に示せよと、クライヴ是を承諾し、忽ち一策按出し、ミールサツヒルと密議し、赤白二通の書を送り、白紙を以て真となし、赤紙を以て偽物とし、偽物のみに要求のケ條を記載し、明示せり。然るに海軍總督の、ワトソン氏は英國の名譽を汚すを顧みて、偽物の署名を肯せず。是に於て、クライヴは、卑怯にも未練にも、偽筆を以てワトソンの名を豫約書に署し、さりき



用意全く整ひて、クライヴ一の難件を、ドーラの許へ要求し、其開戦を促がせり。ドーラ急を軍備して、英の兵を邀へたり。サッピルはドーラと分隊し、陣營を異にし得なきと。時機の已に逼せるや、名利の心は忽ち恐怖の念を抑へらる。自ら決断せざりしが、クライヴ已に進發し、コンシラサルに到達し、ドーラの大軍數里あり、然るも、サッピルは猶躊躇して決すなむ。クライヴ數々急劇の催促まきと、徒らに遁辭を以て應じたり。是に於てか、クライヴは痛苦危険の地を立てり、其内應を約し、サッピル果して我為め、真實あるか、又彼は戦ふべきの勇あるか、毫も信用すべからず。且つドーラの大軍は我より多き二十倍、如何に熟練雄猛の豪傑なりとも、夫を之と戦ふ事は至難なり。前面一の河流あり、之を渡るは易きと、若し戦ひ敗るは、此小隊の我軍は再び踰へて歸り得ず。是に於てか、クライヴは精神始めて挫折して、自ら進退決し得ず。將士を會し、議し、過半は進軍非としたり。クライヴ又一度は之を是認したりしが、會議の終ると、同時忽ち氣力を恢復し、樹陰に憩ひて思考する。凡そ一時間斗り、遂に一大決戦を為すべき事と決心し、明日午前五時を期し、河を渡せと命じたり。

全軍河を渡せるや、終日行軍、又艱苦夜に入り、辛くも敵陣のプラッセルに近きつ、地利を察して野營せり。

又敵陣に在るドーラは、仄かサッピルの叛を知り、更に一層心配し、安眠せざるのみならず、其臆病にして粗暴なる精神は、一意に大難の方を近きと在る事を恐怖し、將士を疑ひて、左右を顧みるときは、皆敵人の如く見へ、己を擁護する者なきの思ひを為して、只一人慘然として居たりけり。希臘の詩人、此時の有様を描写しめんとは、必ぎ曰ん、彼の嚮又闇穴獄裡に横死せし多くの人の亡靈は、一時に眼前に現出せ、瞑志の聲を喊發し、以てドーラを悩すと、黎明已に曉を告ぎ、是を則ち印度の運命決する時として、紅日東天に上せるや、印度の大軍各所の陣門より出ず、其状は恰も海水漲溢し、怒濤を打つ異ならず、英陣を指し進發す。四万の歩兵は小銃や、刀、鎗、弓、矢を携へて、原野に充ち満ち、巨大なる戦砲六十六門を、一門毎に一列の、白牛をして曳かしめ、つ後ろに巨象を従へり。此軍隊の要處は、佛國援兵整列し、諸軍を指揮せり。此外に、尚亦一万余の騎兵ありて、その隊は、印度北部の最と猛き種族よりなるものとして、



二一  
標悍無敵の兵士あり。然るは英の軍隊は僅々三千一百騎。然し二千は土人より編成し居る者にして。是を又英人指揮し。其大隊旗は英國中最も名譽の表章と外に印度第一と云へる一語を大書して。其陣頭に掲げたり。兩軍與り大砲を激突進撃し居りしが。ドーラの砲兵英軍を倒せ能はず。英兵は大砲甚だ少きも連發命中せざるか。ドーラの雄將多く死し。全軍動くの色ありて。ドーラの恐怖も又増せり。此機に乗じて叛党は一先づ我の軍勢を引揚ぐべしと勧めしが。ドーラも己の此意あり立とあるは説を容れ退軍せしと指揮しつ。此命の爲め終り又我運命を失へり。クライヴ敵の色を見て。急に進撃したりしが。崩れ立ちたる臆病の節義を知らざる印度兵。まゝ一支も支へざる。散々逃行有様は。烏合の一揆が常備兵に追立てせしむるが如し。且又佛の小隊は。英に當て挑みしも。群り立ち居る敗兵に押崩されて退去せり。戦鬪前後一時間。ドーラの大軍盡く潰へ。再び集むる力なく。ドーラも其後魂死して。此時遂にクライヴは土地の大なる人口の英より多き大國を始めて征服したりけり。サツヒール右の戦争中。毫も應援せざりしが。勝敗の決見るや。否。祝詞をクライヴ氏へ贈り

翌日英陣中に入る。クライヴ不義を責めし。又イセビルを尊崇し。握手接吻。禮厚つく之を拜して。ベルガルとバハール及びオリッサの君主となし。條約の履行を直に催促し。其談判を開きしが。オリシンドはクライヴを信する固より厚けきは。必き約を履むべしと得々其場に入り來り。先づ祝詞を述べ。前日の千万弗を要求せ。然るは此時クライヴはオリシンドに實を告げ。赤條約は廢して。真個のものは是なりと。白條約を示しつ。更ら汝は一物も得る能はずと断言す。オリシンドは聞や否覺へざる。後倒れしが。非常な落膽せしと見へ。後ち悪人となり死し居りき。

三二  
今や會社と役員は。恰も財貨の降る如く。サツヒールは二百有餘の舟をガジス河に浮べ。四百五十万弗の銀貨を之に積み載せて。美麗の旗章を飄へし。音楽奏して目覺し。流き居るマドラスへ。約せし如く贈與せり。クライヴ一日ベンガルの金庫を開きて入り見る。印度君主の風習にて。金銀宝貨の山を成し。中には古代フニシヤ及び其他の人民が陸路印度と通商し。香料等と交換し。彼のフローリンにて貨幣等。鮮少からず。クライヴは此貴重なる紅寶石や。金剛石にて裝飾たる寶の山に徘徊し。幾千万の宝物を



景之トツペラドイハ



ハイドラバット之記  
 シンデール洲の首府にして印度河の東岸に  
 要害堅固の都會あり人口二万五千餘  
 市中の家屋は汚穢して武力の屋根の家多く  
 城内一の巨宮あり之をアミールスといふ  
 武力木材等を以て屋上を張り又壁を為し  
 赤白二色に塗飾せりまきとし全體粗造して  
 記すに足るべき奇觀也府中絹布を産出す  
 市街の東端歐風の白雲塔なる美館あり  
 是を鐵道の停車場英國人の所有とす  
 さて過日來旅行中崎嶇なる山路や廣漠の  
 原野を駱駝の脊に騎り或は牛車に助けられ  
 緩慢遅々たる蠻風を久しき呼吸し一里か不

攫取するも容易にて己の遠慮を除きては別に制する者はなからず此時實にクライヴは  
 九百万弗を領收せり蓋し此際クライヴは大英國の威を以て政治の主權を掌握し  
 サッヒル君は名のみならず其實奴隸となりけり  
 クライヴが如斯巨額の金額を私に領收したるより英國の國會は刺しを之を排撃せしが後ち國會は終  
 議決して曰ククライヴは固より罪愆を犯したる事顯著なりと由も亦國家の爲に偉勲を奏したり  
 其功は以て其過を償ふに足ると又クライヴは其後國家の爲に功績尠からず國王授くるコナイト  
 オスバツスの勲賞を以て且英倫の貴族に列し國會の議員に撰まざりし王ジョージ三世の如きは  
 深くクライヴを信愛し曾て内謁を許して宮中に入らるめ王手口接吻せしむるに至り然るもクラ  
 イヴは一千七百七十四年十一月を以て終に自殺を行ひけり實に行年四十九歳なりき  
 編者曰ククライヴが英國の名と共に會社の威を振ひ既印度政治上の主權を掌握せし以  
 未其全土を併呑するに到る迄の間猶記事あきま非きと雖も敢て必要を感じざるを以て  
 省略し左の教語を以て此一段を終るべし曰ク英國は兩後自國の權威を伸張せんとする  
 の謀画あるを曉匿し務めて謹防篤實の虚貌を裝飾し各太守と結びて始め甲の君を視る  
 恰も仇敵の如し以て君の歡情を惹き甲乙をして格闘せしめ其終に共ニ衰弊するの  
 時を待ちて羊鷄の利を收め漸次其雄偉を肆張し遂に本國とは一万余英里の波濤を隔  
 て地を於て僅々一年に足ざるの歳月間に南は翠波蒼々たるコモリンの岬頭より北は白  
 雪嶺々たるヒマラヤの峯頭に達する一大政府を設立し其餘勢を以て東はトルマ全國を併  
 呑し西はアフガニスタン及其他の諸邦を隸屬せしむるに到りけり但し一千七百七十三年英  
 政府はワルレンヘイスティング氏を印度に遣はし總督と爲し政務を主らしめ一千八百五十  
 六年二月七日苛酷の處置を以て終にデルヒ朝を廢し一千八百五十八年東印度會社の特  
 權を廢し之きが地を收めて女王ピクトリアの領地と爲せり矣尚後葉カルコツタの部を  
 視よ



VIEW OF THE FORTRESS OF BARODA.  
INTERIOR SCENE OF JUDICIAL  
COURT, BARODA.

七一



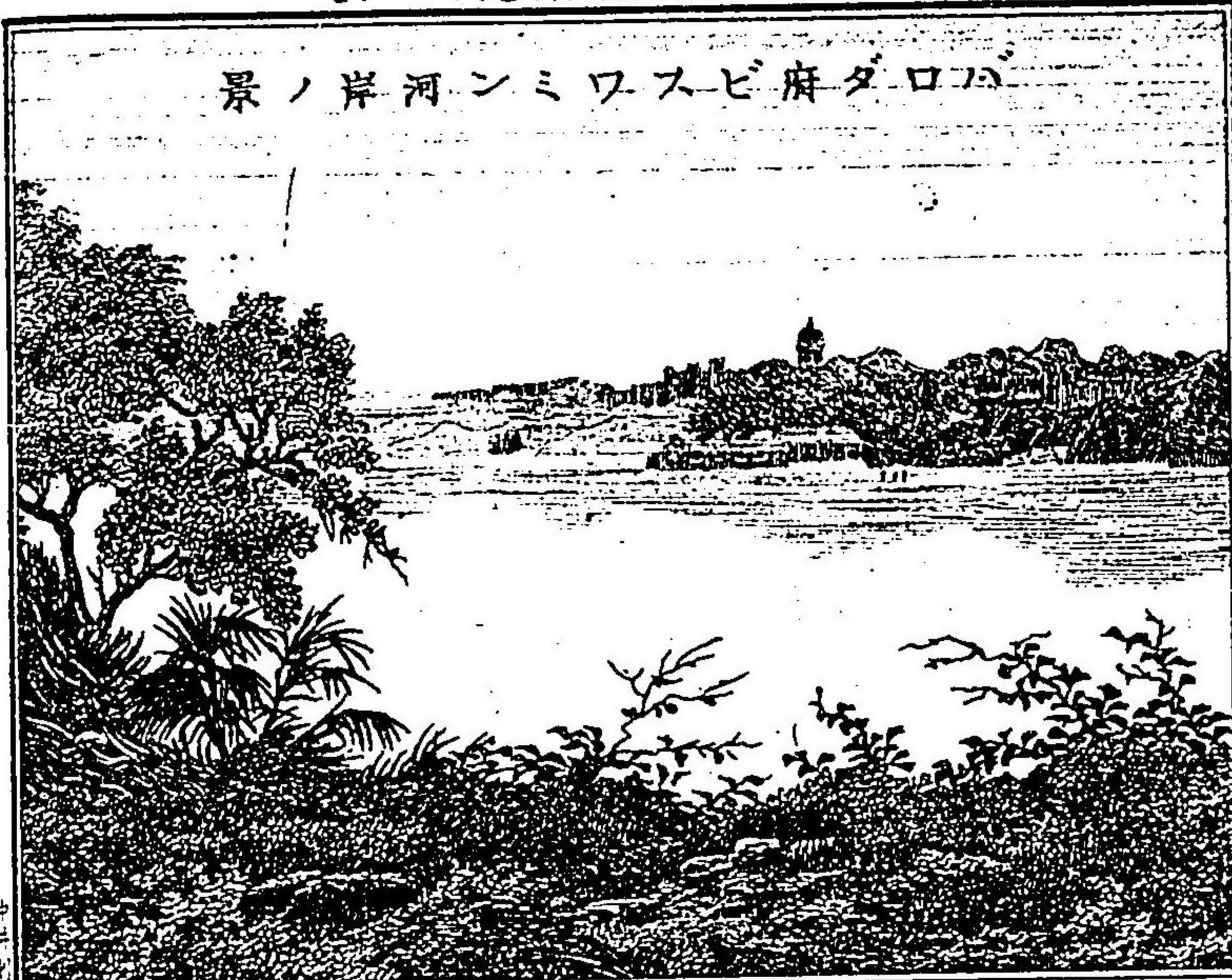
郭城之府ダロバ



景内之庭法府ダロバ

VIEW OF THE BANK  
OF VISWAMINE BARODA.

六一



景ノ岸河ニミワスビ府ダロバ

千里を行の思ひあり然るに此地も猶未だ  
野蛮の臭氣は脱せぬと白哲人種雜居して  
眼前今此利機を視る鉄道や現今は  
印度に名ある都府市邑到る處は連絡し  
恰も蜘蛛の巣の如く實は便利を極めたり  
我今バロダに到らんとして上等切符を購ひて  
乗車したるは列車中一の冷水浴室と  
各車は臭氣を排除せる焚香器等設備せり  
〔印度の風車は薄く此故あり〕是より二三の驛を過ぎ  
蓋し空氣不良なるが故なり  
バロダの都府は著しなり

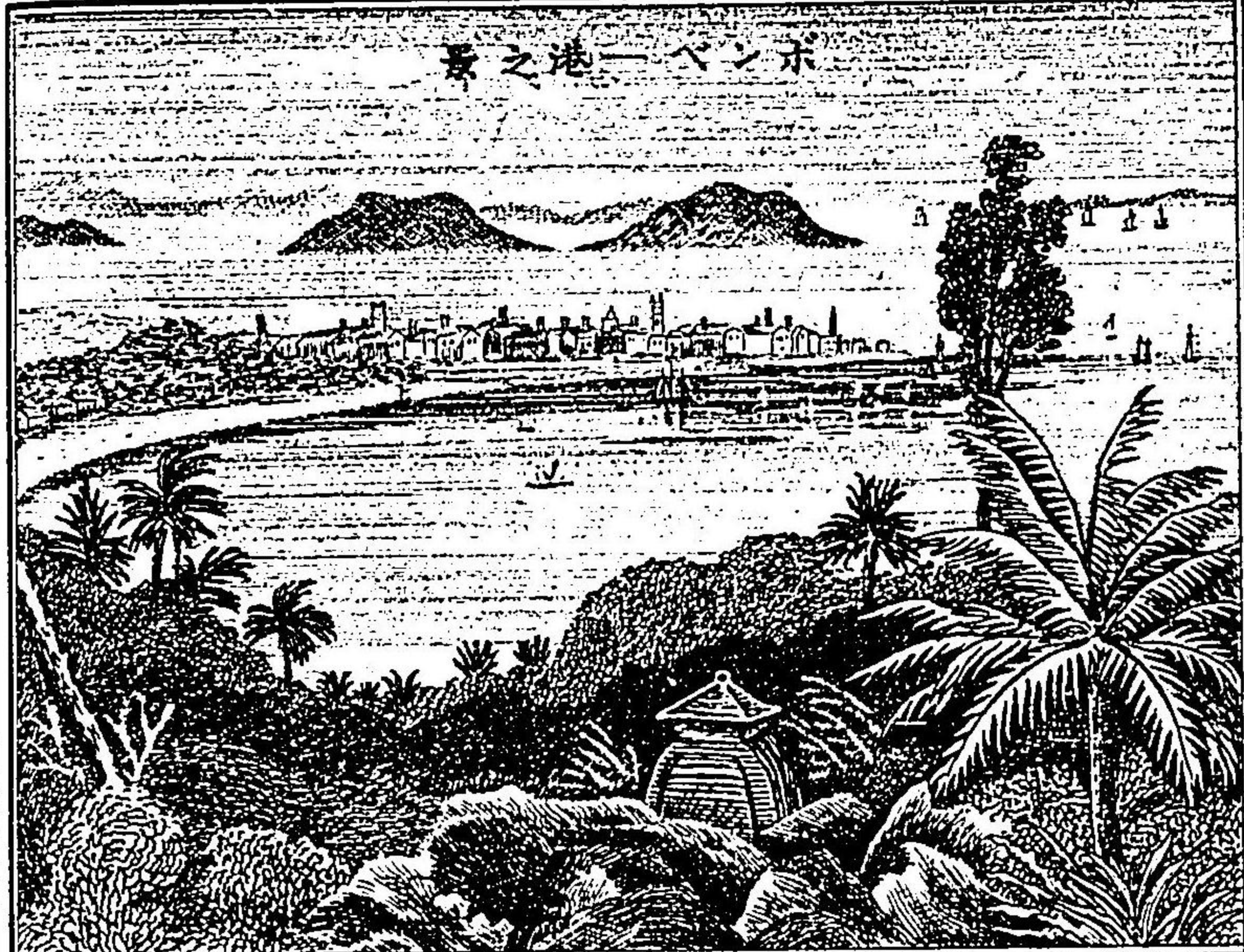
バロダ府の記 ハイドラバントより  
鐵路三百八十五英里  
同名洲の首府にして人口十萬二千余  
市街の區域廣闊は二重の郭壁圍繞せり





街市之ーボンボ

三方海に瀕面し東西洋の飛脚船  
 往復とし投錨し賣船客舫港に充つ  
 まゝ大陸の各都府へ鐵路縱横連續し  
 船車兩便全備して生理まゝく進歩せり  
 市街の道路は皆総てマカタンより成り其地質  
 石灰合蓄礫の如く平日霖雨稀かせば  
 馬車の交通至便なり市民豪商多き故  
 諸所の衙門牆壁や宅池に草木蔭樹し  
 三層乃至四五層の大厦軒を駢列し  
 百花常咲乱を噴泉池上に漲りて  
 清涼閑雅の景に富み政廳市廳や裁判所  
 税關學校病院や兵營等の建築は  
 皆歐風にして且美かりまゝと回教や佛教や



景之港ーボンボ

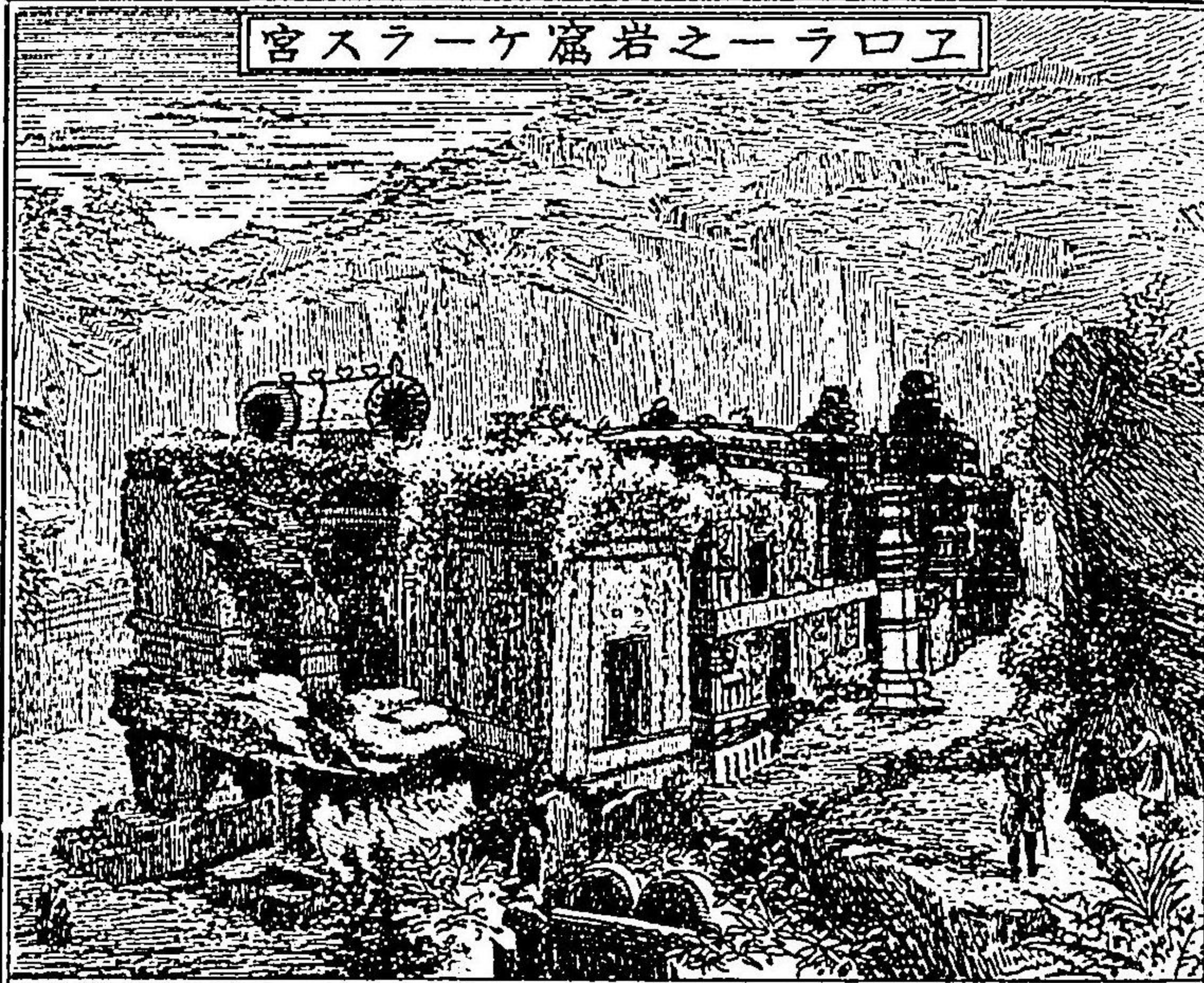
壁上各所は高樓や圓塔等を望見す  
 区内は四條の大衢あり商廓極比華美にして  
 其中央は市場あり内外商賈雜居して  
 貿易甚だ盛なり市街の東部は鎮臺や  
 府廳や裁判所ありて英人主人と管理せり  
 其前面は河流あり之をビスワツトといふ  
 巨大の石橋奇觀なり橋を渡せば南方に  
 停車場あり乗車して南へ走る二百余英里  
 西海中は鼎峙せる一島中は名も高き  
 ボンベール港に著しなり。

ボンベール府之記

同名全部の首府にして市街の表量八方英里  
 人口八十二万余印度第二の盛都にて

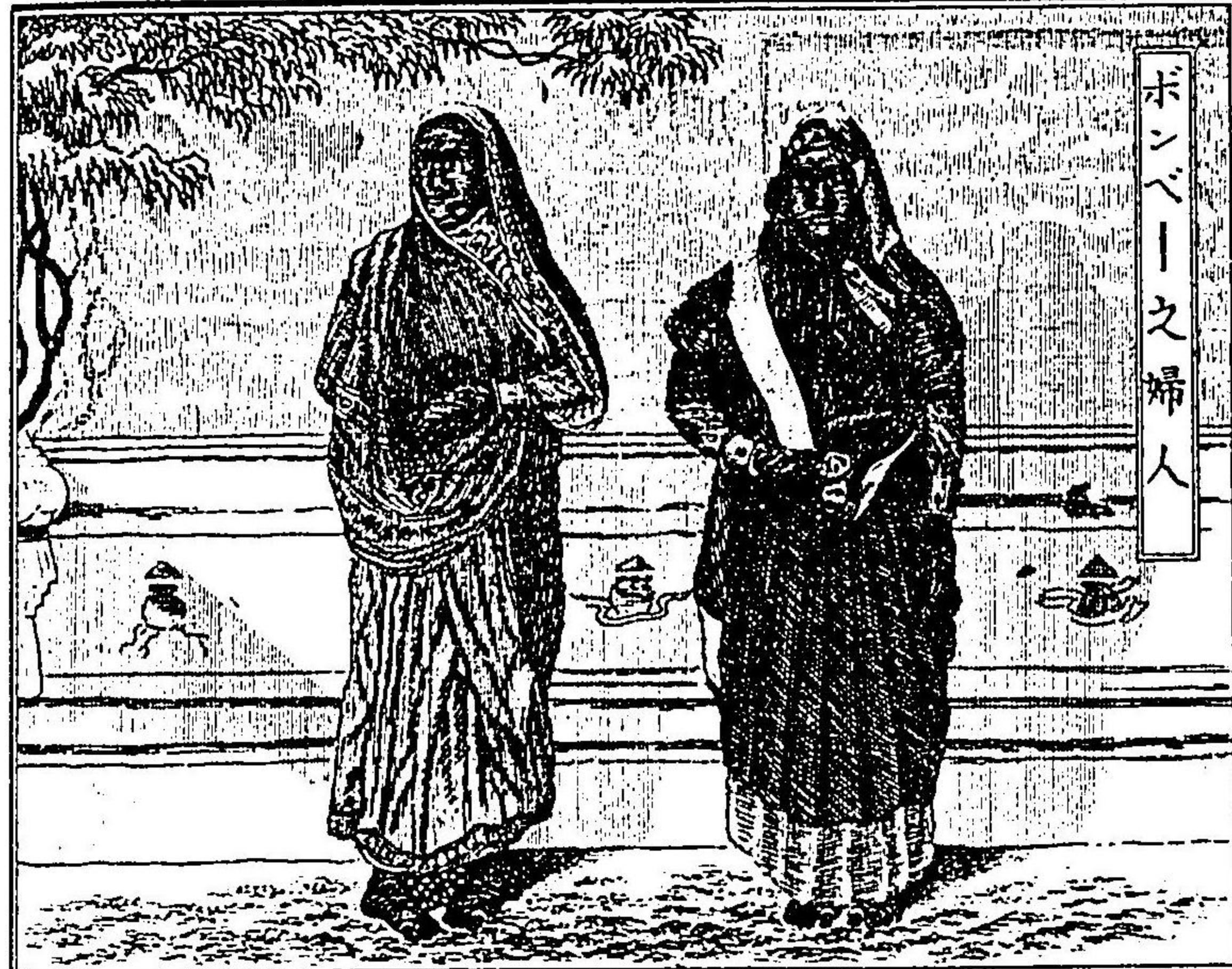


宮スラーケ窟岩之一ラロエ

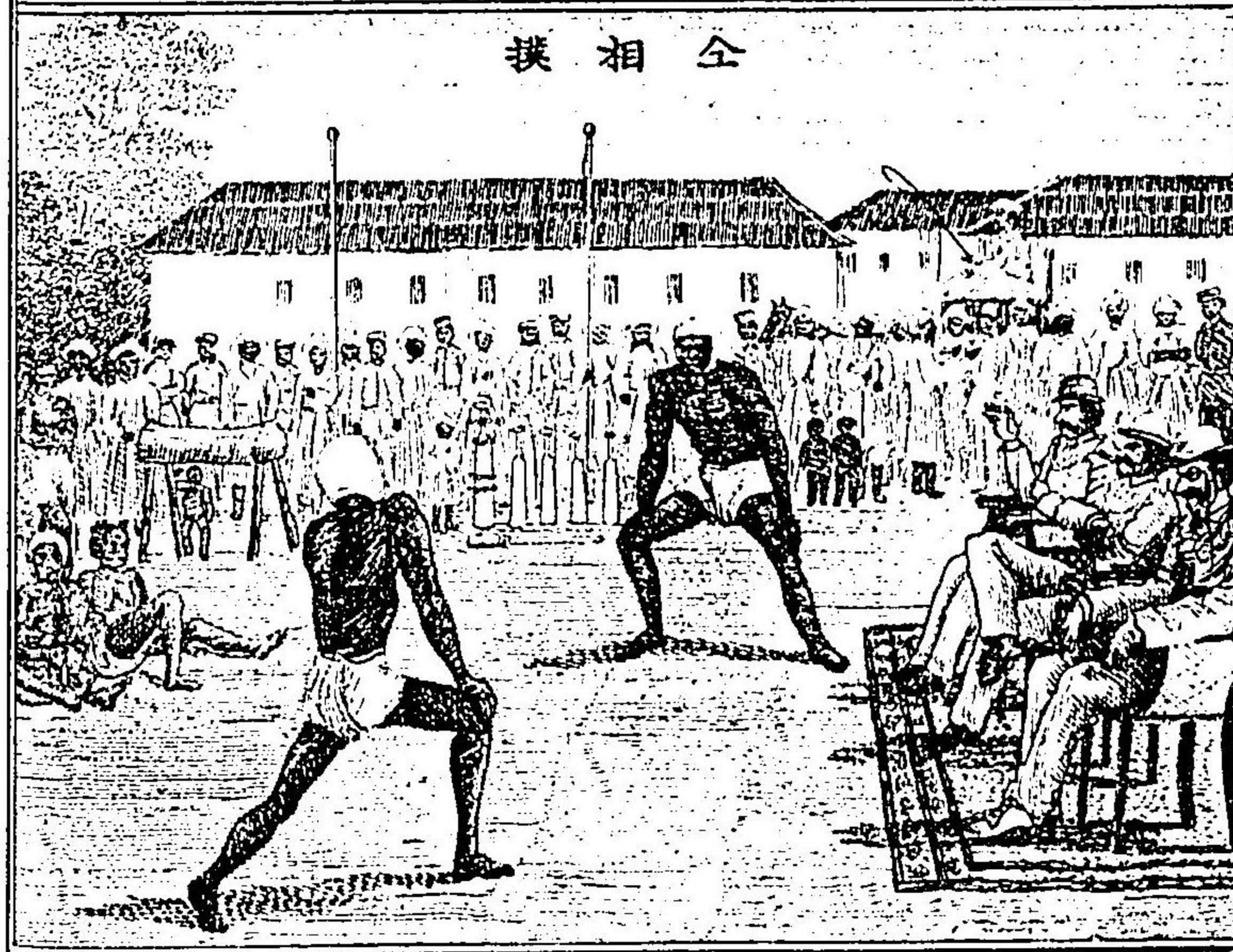


耶 兼 教 等 を 始 と し 其 他 異 宗 の 堂 宇 あり  
 且 又 木 綿 の 紡 織 場 及 び 無 数 の 器 機 局  
 煙 筒 林 立 天 を 突 き 黒 煙 空 に 沖 り て  
 景 況 頗 る 盛 なり。  
 輸 出 品 は 綿 阿 片 無 年 輪 の 良 材 や  
 咖 啡 椰 子 や 青 黛 や ラー セ ニ ル 類 等 と な す  
 殊 に 綿 花 は 歐 洲 の 製 作 上 に か ぎ り な き  
 必 需 の も の に 世 界 中 米 を 除 け ば 此 港 の  
 輸 出 額 を 最 と な す 本 來 綿 花 は 此 國 の  
 名 産 あり し 米 國 が 之 を 耕 植 し た る 以 ち  
 年 々 盛 美 に 赴 き て 印 度 は 第 一 と な り け り  
 岩 窟 宮 の 話  
 上 欄 に 示 し 耶 兼 教 等 之 宮 邦 本 邦 府 東 北 方

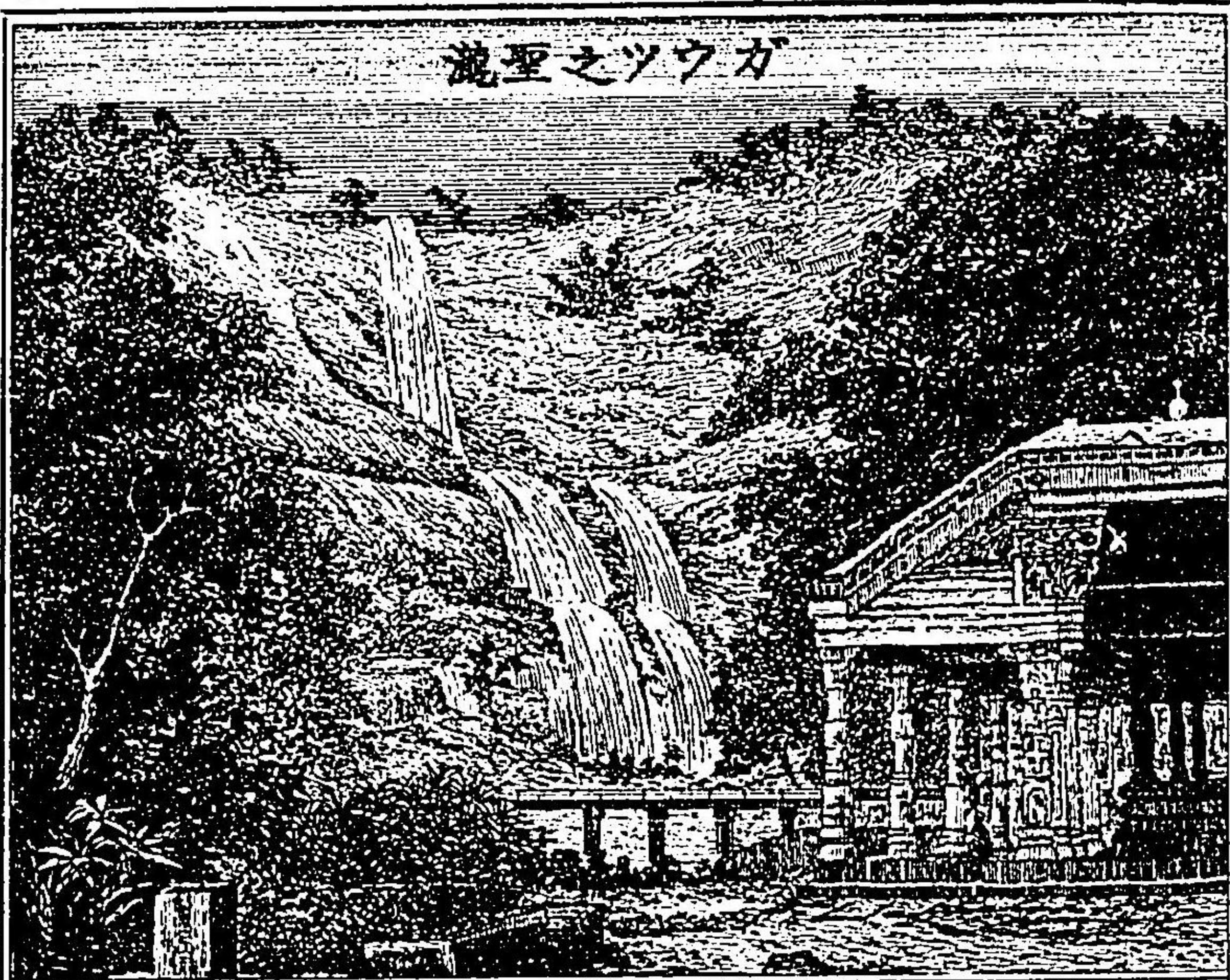
ボンベール之婦人



全相撲







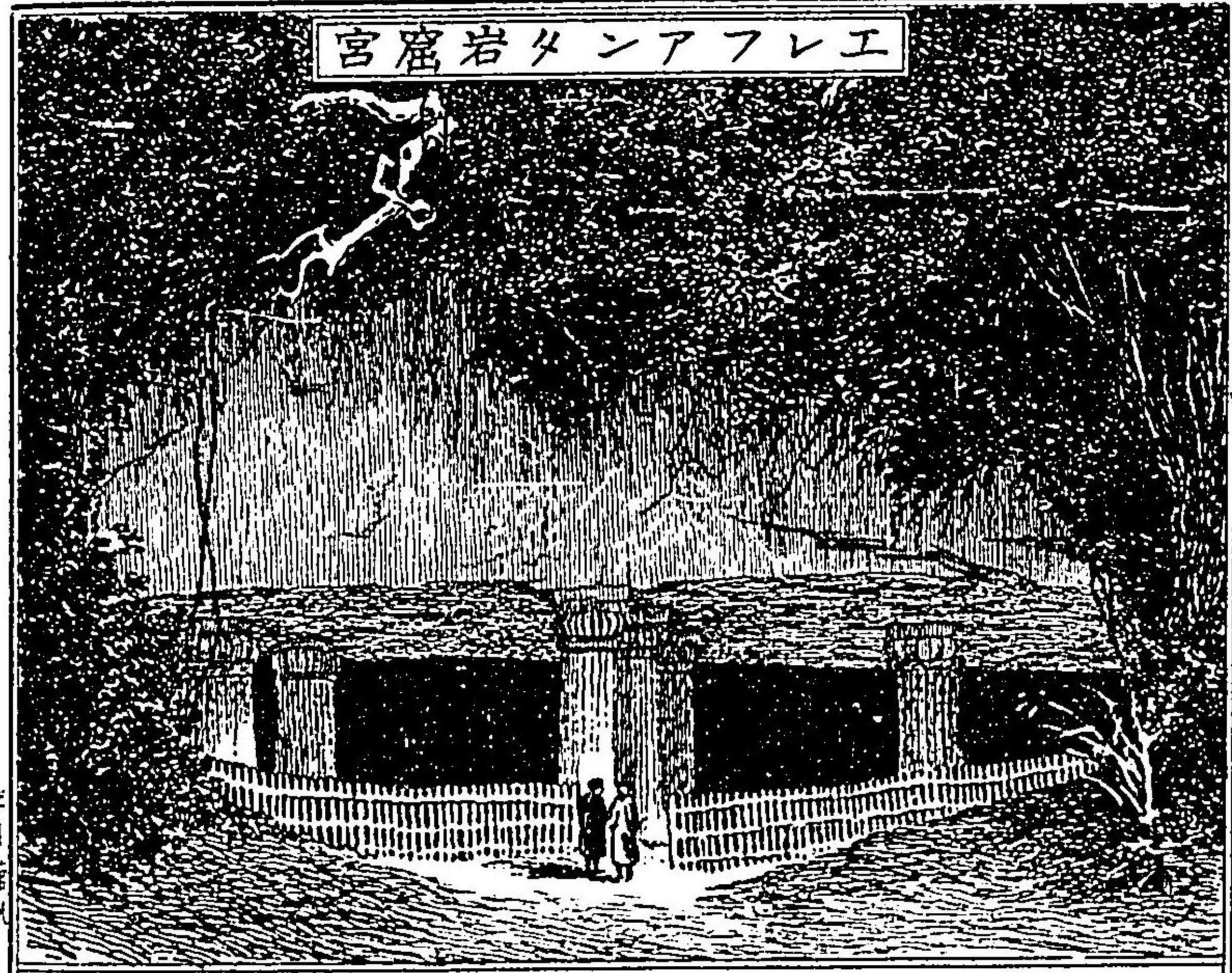
流聖之ツウガ

因て起りし所以なり又或る室は蓮臺に坐して種々の偶像あり。

此窟宮の近傍は壊頽したる大小の坑寺尚不且つ教ヶ所あり廢墟殘趾の形狀を觀察する其過半寺院に併し其餘は殿堂とせしものと見申蓋し此寺ボンビーの管下九百余基ありて其形狀の巨宏なる其建築の巧みなる觀る者驚絶せざるなり

さてボンビーより海船に乗りセーロン島に到らんとアラビヤ海を南航す西は眼泉際涯な々東は即ち南印度ゴーツの山脈共走せ終日終夜眺むべ々其中途より南方をツバングール地方と云ふ。

西曆一千八百八十四年一月中旬米國宣教師アーリーといへる人傳道の爲め此内地を巡遊せしが其旅行日記一編を作りて之を世に公せり我々又旅行案内の一助とならんかと兼々携帶せるもの取出して之を閱するにガウエリ河の上流ガウツといへる處にバラモン信者の尊ぶる一の聖滝ありて其傍に凡そ二十余年前建築したる古宮あり全體美質の白臘石を用ひ彫刻實に精緻を極む談宗信者は此瀧水を掬ひ飲用する事數十回以て體



宮窟岩タンアフレエ

エローと云ふ土地にあり蓋し西曆紀元後一百年代佛教徒バラモン教徒に攻らきて印度の西部に遁匿しが爾來此地に遺跡し四百年代山中に建築したる者にして全體巨大の岩石を材料となし柱壁や其他各部に奇態なる偶像を緻密に彫刻す又エレファンタの窟宮は大石洞の中であり坑の奥行五百尺幅は一百五十尺内部の高さ二十尺是又種々の偶像をば最も巧みなる彫刻の中にも創造と保存と破滅の三神並び立ち之をトリマルチーといひ三體一齊崇拜す又洞中巨大なる象の彫刻したるあり蓋しエレファンタと云ふ稱の



SEAPORT OF POINTDAGO AT SEYLON.

五二一

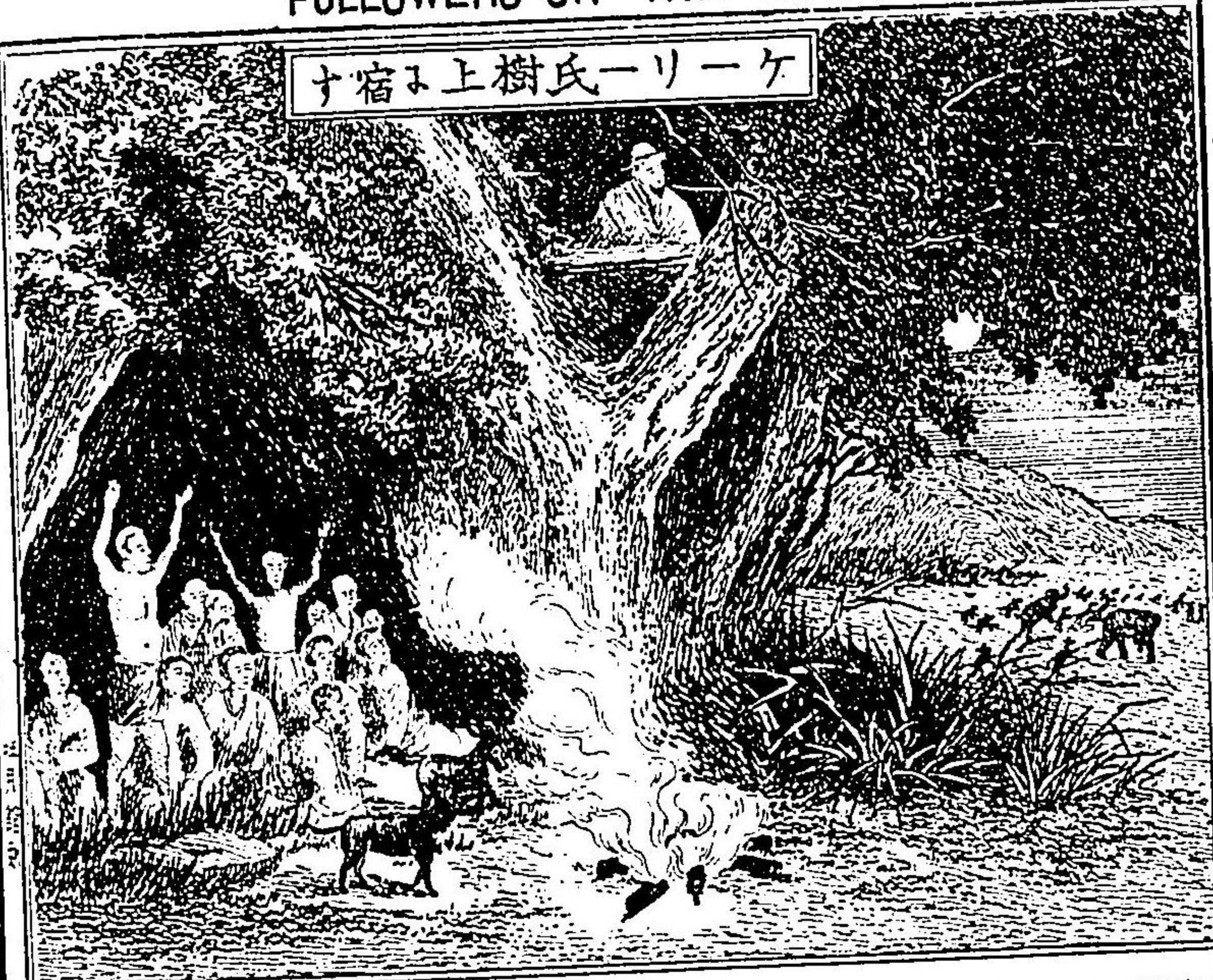


ポイントダゴの港の記  
 さて此港の地形なる低密回りて濤を抱き  
 港口正南方に向き南極環まで連りて  
 汪洋なる彼の大瀛中たゞ一點の島もなく  
 風なき平穩無事の日も南來怒濤打寄せて  
 港を盪し巨舶また搖動せらきて安からず  
 鞆鞆琅琅海面は常に白く其景象  
 實に活潑壯快なり又陸地は棕櫚椰樹  
 桂樹榕樹即菩提樹樹色森々蔚々たり  
 樹間に入家湧起して時々堂尖樹上より  
 抽づるを眺るは是を蓋しポイントダゴ市街あり  
 ○瀛松鋪を授するや土民の獨木舟を乗り移り  
 上陸市街に達すきは歐亞諸國の領事館

ABIDINGS OF MR CARY AND HIS FOLLOWERS ON THE TREES.

四二一

ケリー氏上樹に宿す



内の汚穢を清め又頭より之を瀝ぎかけ水の趾に達し濁せるを見て我身の罪を脱せし微なりといひ諸方より來りて其式を行ふ者教を知らずと  
 又氏は其より陸路マドラスへ出んとチンチウエリ部の寒村に達せしが土人曰く是よりマドラスへは三百余里ありて其間数十里人家更に少きのみならず猛獸多くして甚だ危険なれば宜しく用意を為さしと依て同氏は土人二十餘名を執り東ガウツの山脈を越へんとせしが日暮て道遠く素より人家とあらざれば老樹の梢上に丸木を横へ飯と床となしケツトを敷て泊せしが土人はケリー氏が兼て携へ來りし三頭の洋犬と共に樹下に番を為し絶へず火を焚き居たりし満月東天に昇るや林中猛獸の聲絶へず午後十時とも覺し頃一群の猛虎我を襲ひ來り將に害を與へんとす土人は兼て期したる事なれば益々火勢を熾し齊しく喊声を發して之れを防せしが兩來巨象豺狼等交るゝ來り實に慘境を極めしと如斯するのと数日を経て漸くマドラス府に到着しりと云ふ  
 仰ぎ眺めば松は早・コモリン岬の沖を過ぎ  
 東南方へ進航し・セーロン島の西南端  
 ポイントダゴへ着しなり



森之子椰島ンローセ



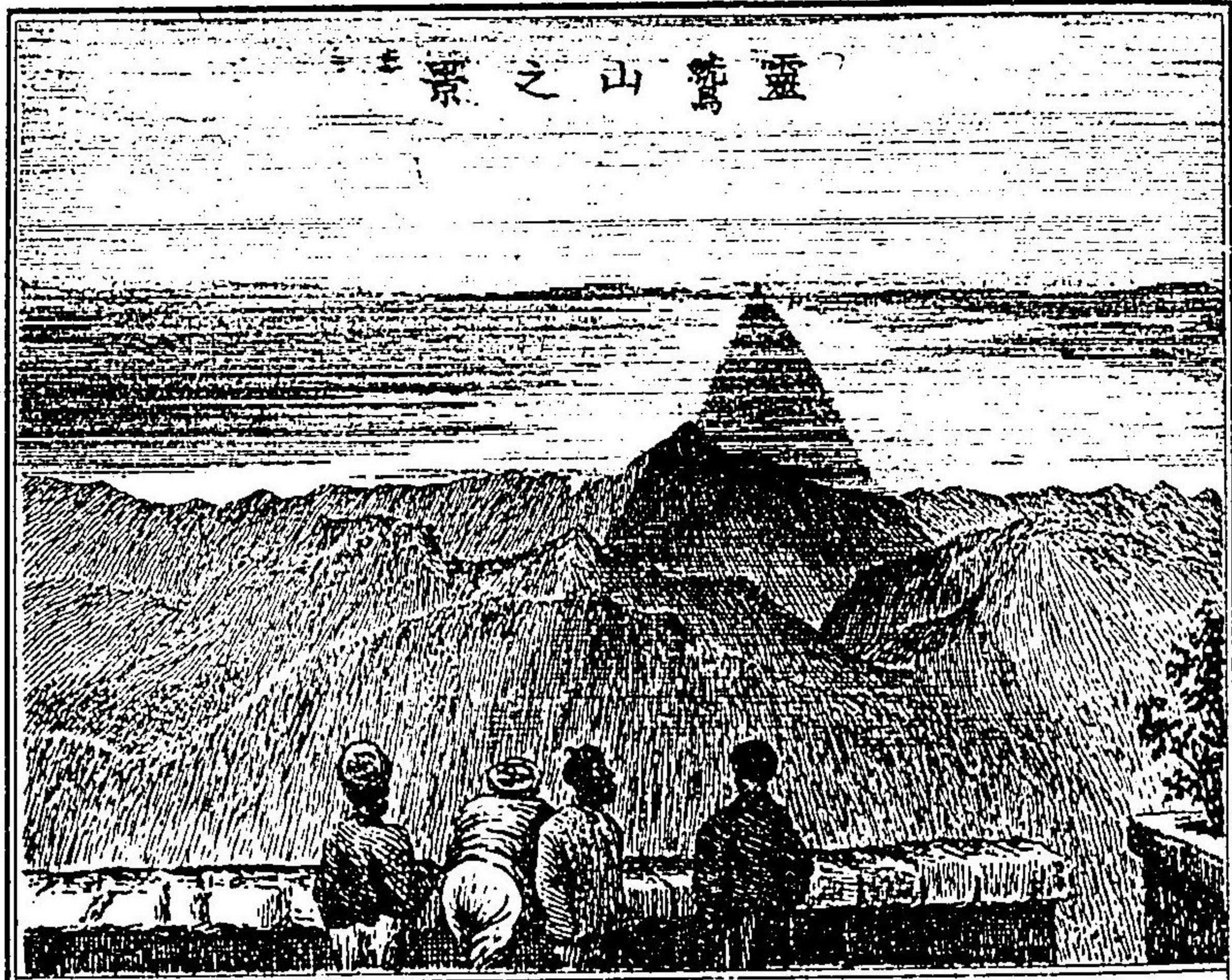
垣を匝らし其中ニ瓦葺の小堂一宇あり造営頗る精にして守人錠を開くきは  
釋迦牟尼跌坐の尊像を安置したり其相貌恰も日本ニ傳へ來て彫刻せる相貌と  
毫も異なる所なし是に於てか佛像の彫刻法又來歴のあるべき事を感じたり

英國政廳裁判所耶蘇救回教  
札拜堂土民の商邸且市場  
觀場娼樓等ありて街路平潤  
又清潔さて此市中又佛教の  
寺院を見ざき人口の過半は佛教  
信者にて現今人口四万あり  
○市街を離る此二英里より方より  
ふ地あり其岡上ニ浮屠ありて  
アトミタミパールといふ此を佛教の寺  
院なり伽藍大小四宇ありて

其釋迦牟尼の像前ニ白石を以て刻みたる兩弟子の像をみる此堂前ニ圓塔ありて  
内ニは金銀玉石の宝物を夥多藏むといふ僧侶ニ開張せん事を依頼しとせど肯せず  
所謂舍利あるものか垣外一の僧房あり屋宇甚潔からず僧侶は頭髮眉及び  
髻を剃りて黄色の綿布を以て右肩より左腋ニ結べり是を蓋し彼の七條の袈裟として  
此地の土民は衣服なく白布を以て左肩より右腋の腋下ニ回して下部を掩へり是を袈裟の  
因て製する所にて僧のみ然るに非るあり但し眉を剃りたるは僧侶のみ限りたり  
此房内ニ一人の老僧ありて其風貌宛然羅漢に似たる者是にて羅漢の像も此  
島の人種を寫したる骨相なる事を知せり我を延て一室ニ往き具多羅葉にて寫したる  
一經簡を示したり其上品は漆を以て金文字を表寫せり文字は梵字に非ずして  
巫來由文字なりといふ住僧之を客ニ賣る我一本を求めんと僧を問ひしむは是にして  
施主の志に任まると云ふ

◎又此寺より較北の岡上一の伽藍あり之を平カバットといふ岡を上る五丁余  
登道を拾ふ十餘級漸々伽藍に到達す此亦瓦葺の堂にして此堂内には釈迦牟尼が





其南は本音口島の初めあり。  
**靈鷲山之記** (位置北緯六度五十二分東經八十度三十  
 二分山の高さ七千尺島中第一の高山也)  
 其より行路を北に取リ牛車を働ふて野を走り  
 或は山河を跋涉して進行する事七十英里  
 漸々山下に達したり (沿道の村落椰子の木と葉を以て結屋  
 し食物は椰實芋芭蕉の實種包菓(五巻百世三丁)に在り及以椰葉  
 て食する者なく手て椰葉生活淡泊人をして太古の感を發せしむ  
 又田畑に稻を植ゆ年三回收穫あり椰樹野棕高三四丈の上葉を  
 椰葉製餅百種轉賣し中は艶美の花を著け椰葉として椰葉製菓  
 情温なりと云ふ所謂沃土の情) なる此山は釋迦牟尼の  
 修行したる靈處にて土人はアダムスビークンといふ  
 山下一の河流ありまきをニカヤンといひ  
 信者は河中に沐浴し終ての悪事を懺悔して  
 垢離を淨めて登るなり山路峻険崎嶇として  
 樹木翁蒼天を蔽ひ所謂鳥道歎徑にて



涅槃の大なる像ありて長さ二丈の臥像なり  
 まこと此像の面貌は前寺のもの異ならず  
 右を祖き手を曲げて右頬を支へ両足を  
 そろへて長を展臥せり左の肩より足までは  
 彼の黄色の袈裟を着て袈裟の表は鱗紋を  
 甚だ巧みに彫刻し頗る埃及國風の  
 紅工に似たり又周壁に天堂地獄の畫ありて  
 此は純乎たる埃及の畫法なれば僧は就き  
 其來歴を尋るに只往昔より傳き  
 貴重の遺物を養ふのみ。  
 此堂背に一宇あり其傍に釈迦牟尼の  
 分骨を埋めし墳墓あり全體白臘石のみにして  
 前面一の臺上二三の像を安置せり





農民

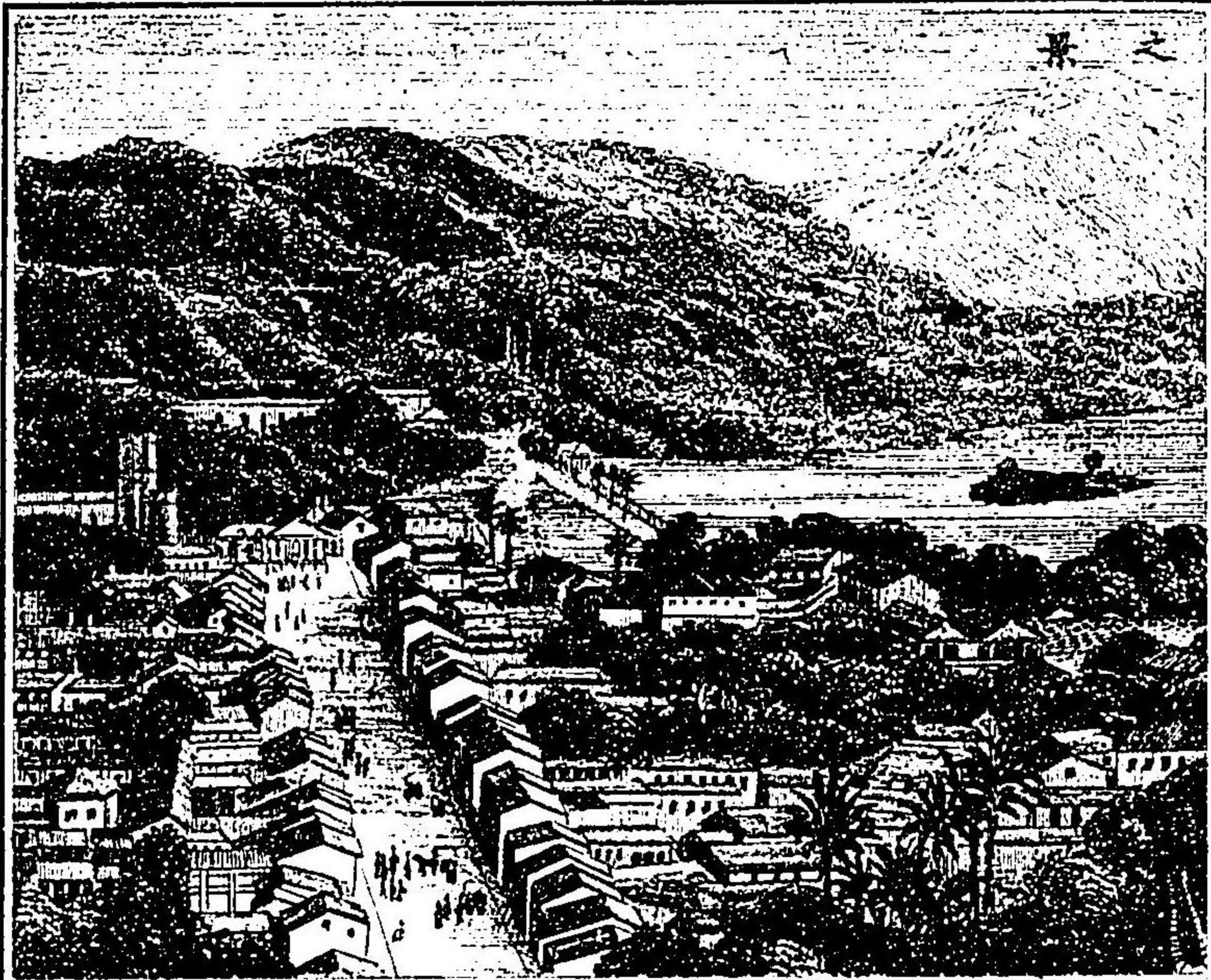
之をエルトカトンと云ふハ功德池はあきならん  
 土人はタルボク子といへり子池といふの意義として  
 婦人池水を服すきは必ず懐胎するといひ  
 固々信じて尊へり池邊の一の巨石あり  
 石の表に判然と足の跡ありそを之を  
 シリバナといひ釋迦牟尼の眞の足跡なりといふ  
 形は凡夫の足よりも三倍余あり是もまた  
 信者の尊ぶ所なり其堂内日若干の  
 僧侶住居し修行せり依てあきを訪問し  
 靈地の由来を詳細に探究せんと英語にて  
 二三の言語を交へしと彼は之を解し得ず  
 遺憾ながら是を過る北部の徑路をたせ下り  
 マハウエル河の源に流せし治ふて進む事

全釋迦之靈跡

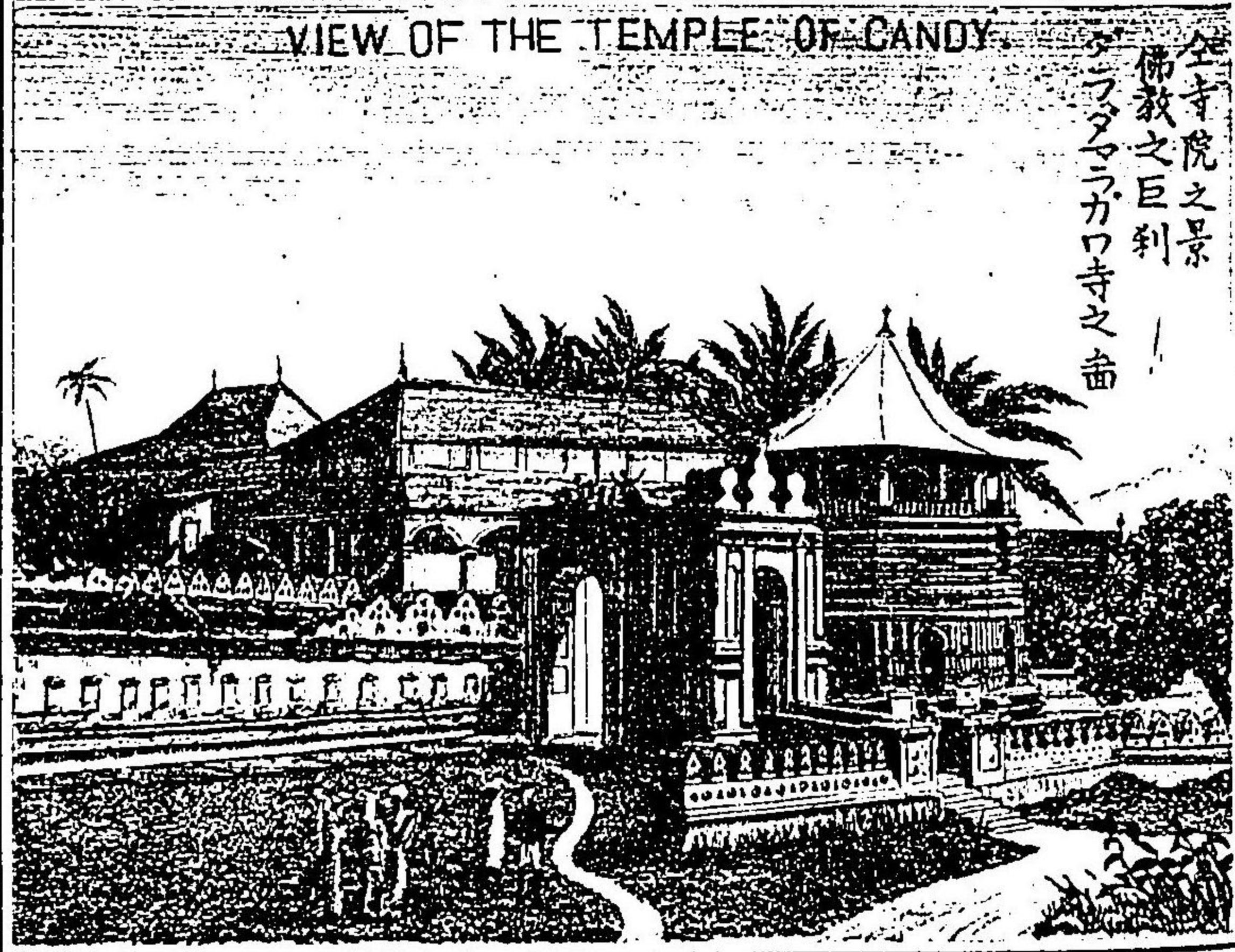


攀躋鐵鎖の設けあり中途に磴道ありて  
 右方天然石柱の並立するあり其上  
 長き石をば横架し一の大なる鳧鐘を懸く  
 祇園精舎の釣鐘は蓋し之を指すものか  
 暫時あつて憩ひしが此時前峯大陽の  
 光線を障礙け奇景ありそをより羊腸轉廻し  
 漸々嶺に達すせば少し斗りの平地あり  
 此處をハリスといふ木更にありて  
 飛鳥皆其背を視る左方二三の小殿あり  
 是き釋迦牟尼の修行せし靈蹟なりといひ傳ふ  
 昔は莊嚴華麗なる堂宇ありしも今あるは  
 全體大に破壊して風露をたも覆ひ兼し  
 最と痛ましき形状なり其の堂傍に大池あり

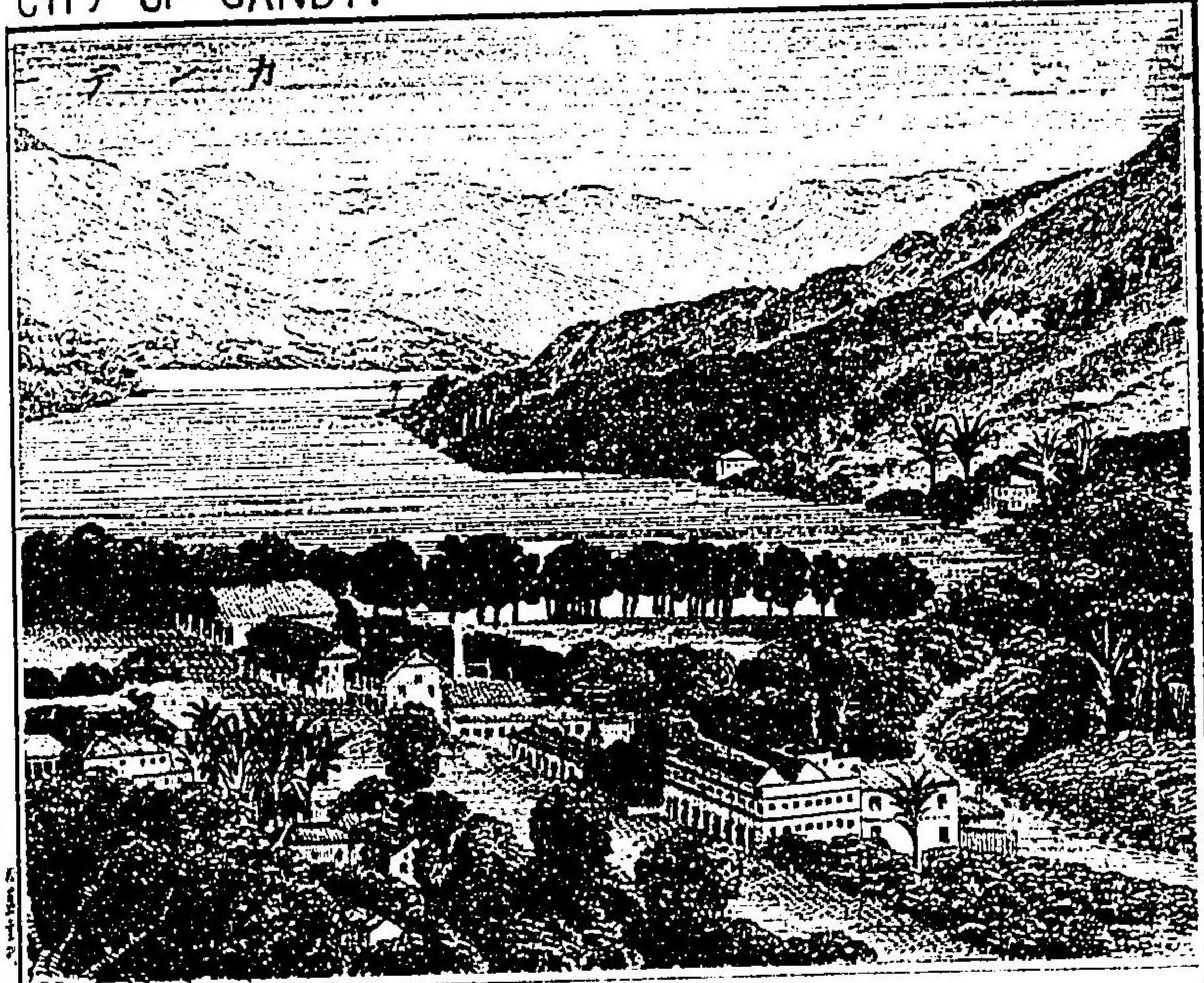




VIEW OF THE TEMPLE OF CANDY



全寺院之景  
佛教之巨刹  
カンデーニガワ寺之由

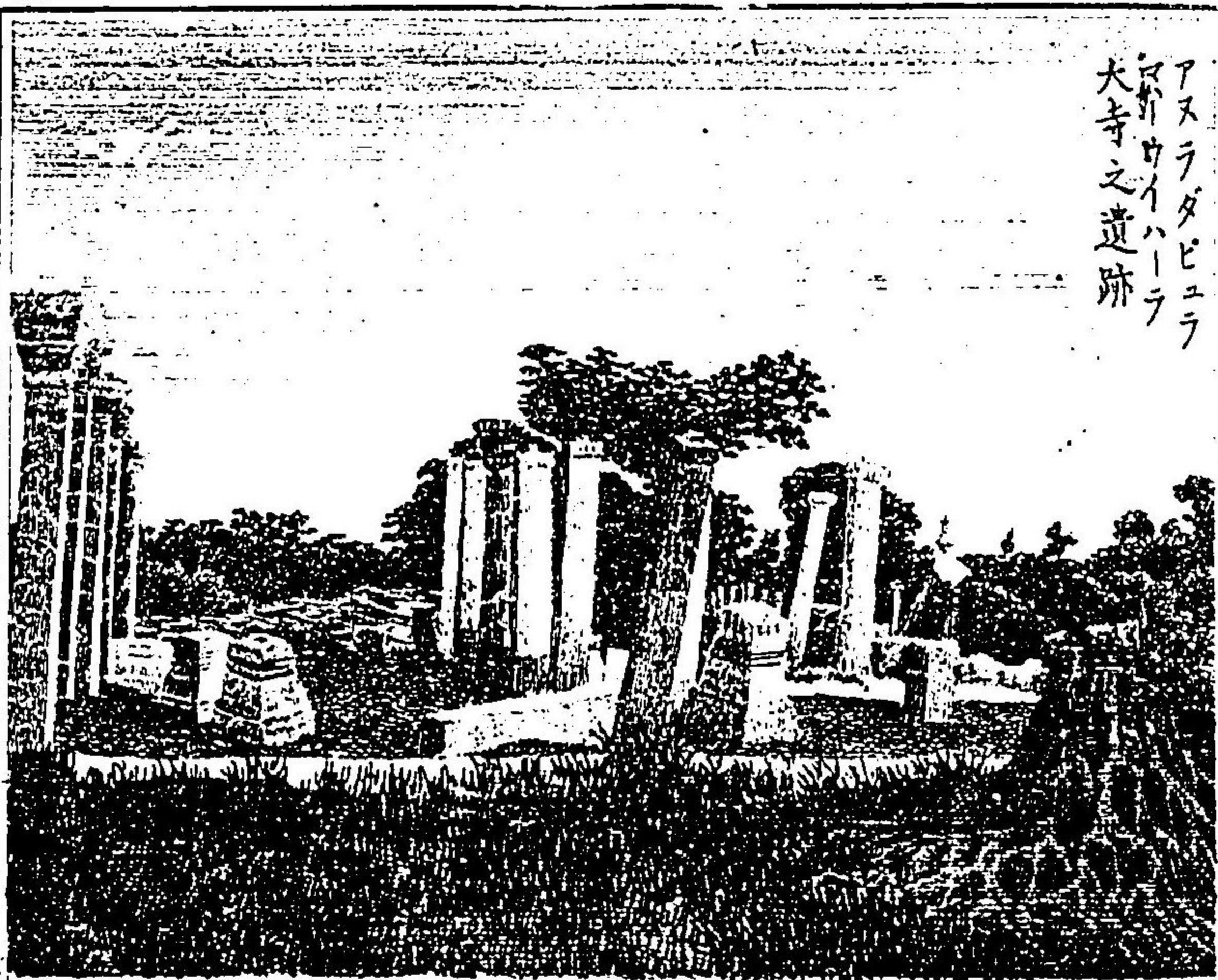


二十二英里余にしてカンデー府は著しなり  
 カンデー府之記  
 当地は以前此島のカンデー王國なりし時  
 全島中の首都なりし。一千八百十五年迄は獨立  
 然るに公年より全く英領を爲す。市の街は小山の上あり  
 其西方に長さ二英里幅一英里余の湖水あり  
 峯密之を環抱し風景絶佳の勝地なり  
 土人の家屋清潔からず全體木材造りよて  
 平屋多し然れども湖水に瀕せる處は  
 富家多く英人の居館もありて稍羨なり  
 建築物の觀るべきは元國王の宮殿や  
 英の政廳銀行や電信局や書籍館  
 耶蘇教回教禮拜堂湖岸に建てし鎮臺や



附屬の倉庫等となき。

◎市街を離る一英里余の湖水に瀕せる好處の一の大なる伽藍あり之をタラガワといふ  
 おき佛教の寺院にて現今印度に存在の佛寺中では他に比ぶ最も勝せし巨刹なり  
 [即ち右に命あり亦本書口画の中央に掲けし者は此寺院の側面として其舞踏並に行列は先年  
 英國皇太子ウエールス侯の当寺へ巡幸せし時僧侶の執行したる儀式を寫したるものなり蓋  
 し宗教上の祭典には相違あしと由り此事に付外部は垣を匝らして其中央に一対の  
 詳細の説明を以てはる記する能はず] 燈籠ありておを過ぎ直に穿形の門に入る前面大なる樓門あり柱壁とも彫刻を  
 右に鐘樓ありて左は僧侶の事務所とす庭園を行三十歩左に鏡我なる伽藍あり  
 おき本堂にして僧來り参詣の者を案内す僧侶の風は前記を同堂の正面莊嚴の  
 扉を開けば其中に黄金佛を安置せり我々近寄る事を得ず教歩を離れて跪坐せしむ  
 仰げば已に閉鎖せり故に佛像精細に熱視る事を得ざりしは實に遺憾に堪へざりし  
 堂前一の墳墓あり釋迦の齒牙を埋むと云ふ壇を築きて其上に一株の菩提樹を植む  
 境内二三の宝庫あり徑木夥多保藏せり僧侶は我をナンナといひ又堂を指しカランといふ  
 蓋し梵語の來語にして今に訛らざるを知る其他記すべき者はなし。

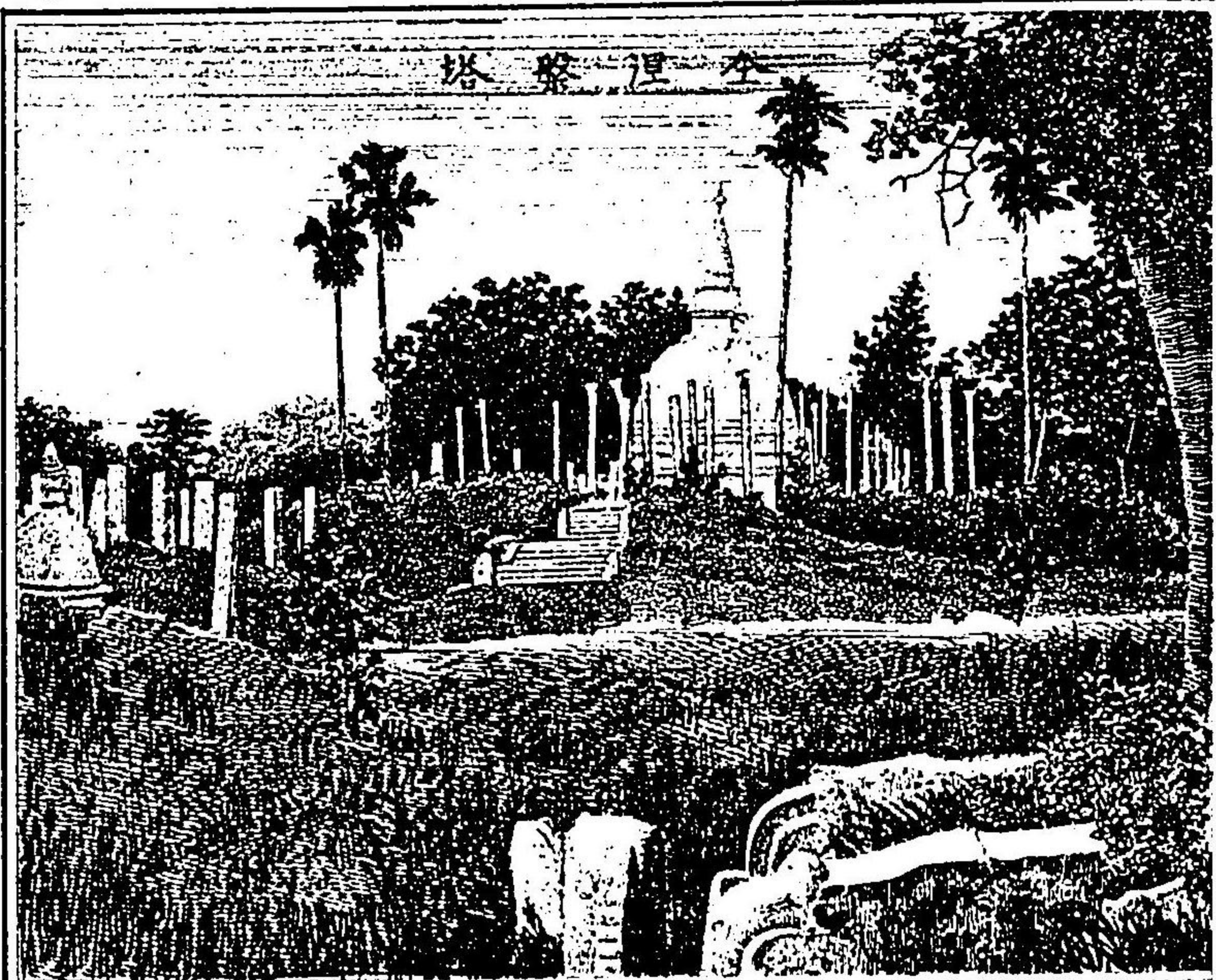


アヌラダピユラ  
大寺之遺跡

カンデーよりアヌラタピユラ及び  
 アレポネを経て南印度に渡行之記  
 さてカンデーを出立し北へと進む事  
 七十二英里半にしてアヌラタピユラに着たり  
 此處は古昔の都會として島中屈指の地なりしと  
 今は全を廢頽し僅かに佛寺の墟趾を想  
 上欄に掲げし石柱は釋迦が再度此島へ  
 渡來りて修行せし眞の靈跡なりといふ  
 石柱等緻密なる彫刻せし者夥多あり  
 次示せし燈道は詠門前の殘礎にて  
 全體美質の大理石高尚雅致の命を刻む  
 [住昔法顯三藏が渡天際際此門前を於て昔地の團扇商賈を逢  
 ひ最と愕然たる物語を著し事ありと果して是事ありしや] 其次ある石塔は所謂涅槃塔として

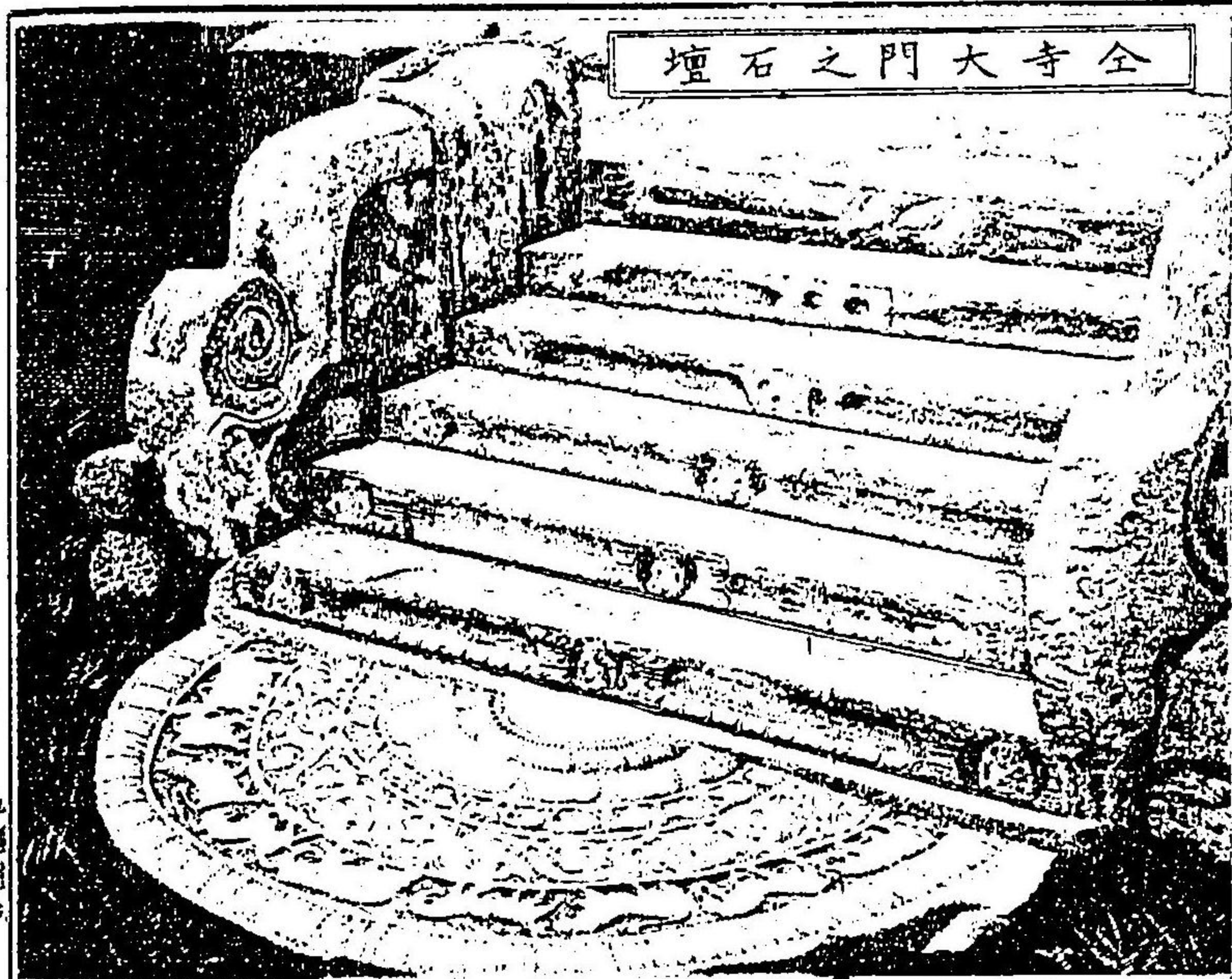


ITS TOWER.  
ITS STONE IMAGE OF BUDDA.



全寺石造釋迦之像

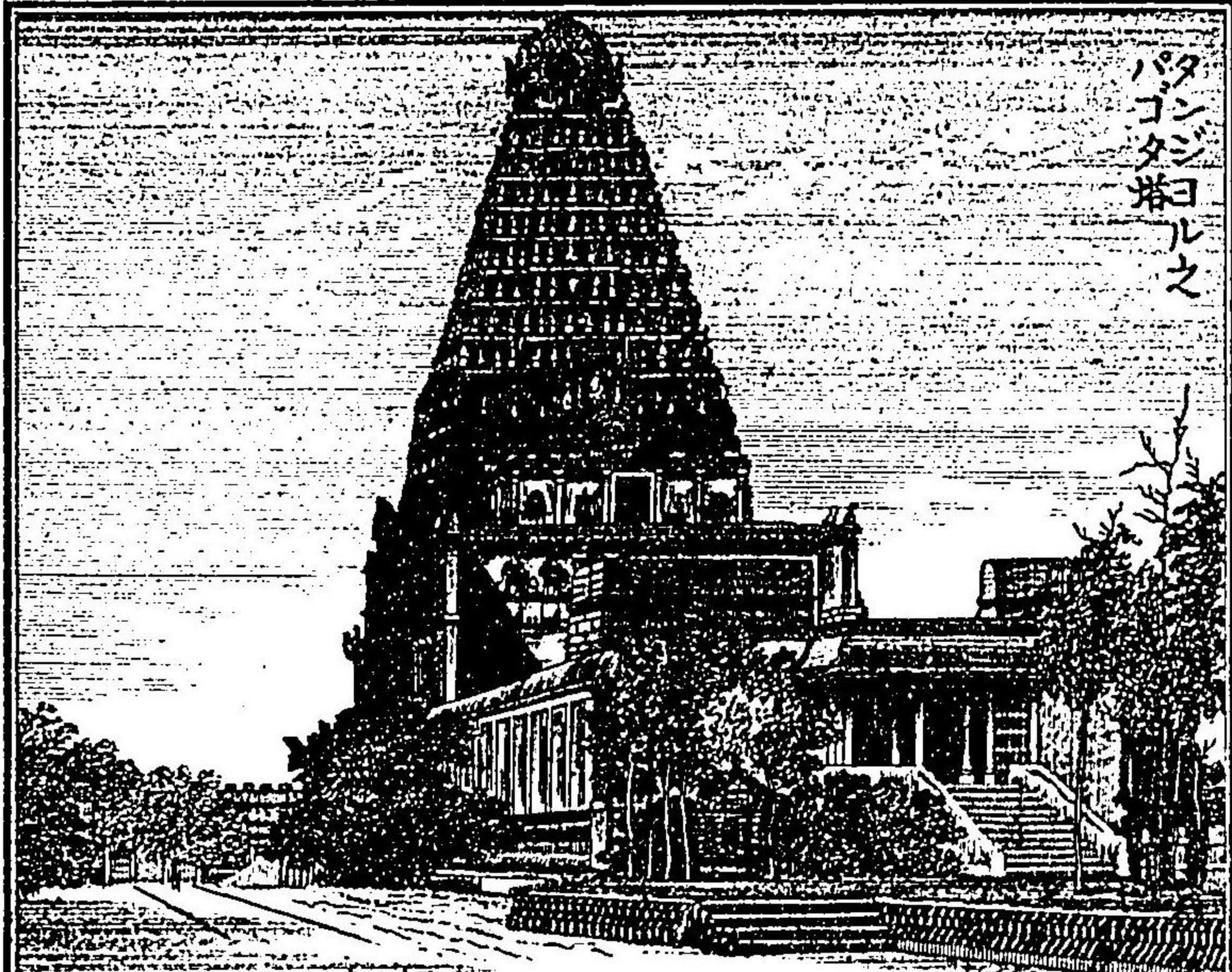
ITS STONE STEPS



全寺大門之石壇

美質の臘石造りなり又其次の大像は即ち釋迦の像にして高さ六尺五寸あり是は近年英人が寺院の墟址より掘出せし最も名高きものにして信者の尊ぶ所なり亦古の遺跡の近邊に二千余年を経過せし甚だ大なる榕樹あり所謂菩提樹にして亦昔はアソカといふ王が自ら植へしものなりと菩提樹は本書五卷百三十三ページにあるのと同種ふせはぬと示さるべし又アソカ王の事は後詳なり抑も是處は佛教に最も著名の靈地にて彼の耶蘇教のエルサレム・回々教のメツカも比較すべきの土地なるに教祖の靈跡類し會まかんでゴール等纒かゝる寺院の形あるも草萊茂らず荒蕪して寂寥なる事耶蘇教や



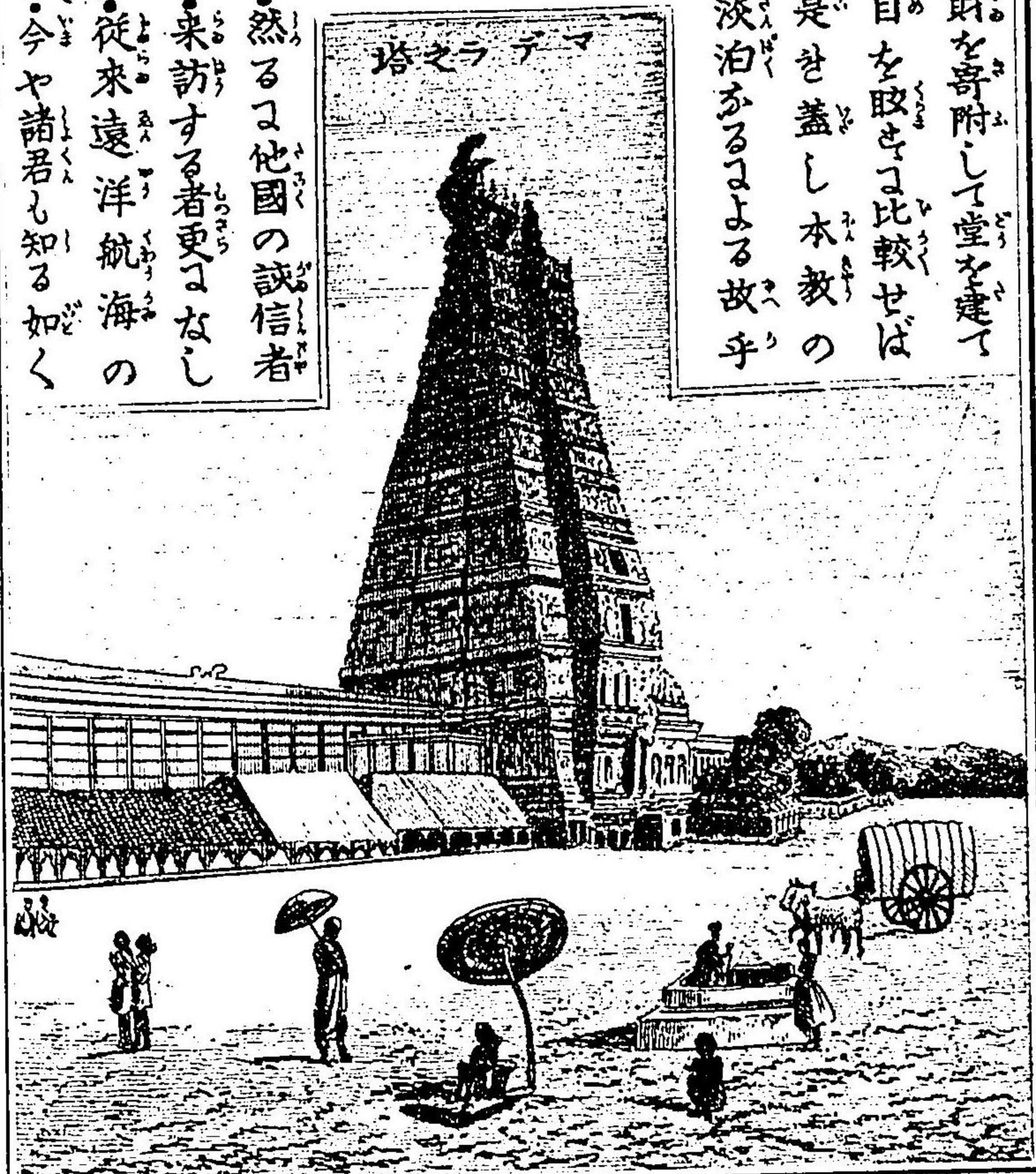


パゴダ塔之

天竺行は容易にて其佛教の弘まざる  
 東の端の日本より天竺國の南端の  
 此錫蘭まで只僅か一千八百八十里  
 二十日足るの暇あらば支那の諸港も見物し  
 黒き烟を金斗雲に代へ確又安着為し得べく  
 達せば直に電信機一分時間を費さず  
 安否を報する神通の活空も舌を巻といふ  
 快活便利の時なきは今より後は誤信徒  
 來り訪ふ者多からん」  
 さて此遺蹟を見終りて西北方へ進む事  
 四十五英里余にしてアレックポ港に到着し  
 ポークといへる海峡を横航する事百英里  
 南印度の一市邑ラムナットに上陸し

回教信者が靈蹟に財を寄附して堂を建て  
 文彫藻蹟金玉の目を眩き比較せば  
 殆ど雲壤の異あり是を蓋し本教の  
 よく塵表に脱落し淡泊なるよる故乎  
 我聞く釋迦の佛教は  
 東方亞細亞に蔓延し  
 今尚信者五億あり  
 即ち現今世界中  
 最も盛んの耶蘇教に  
 決して下らぬ信徒あり然るに他國の誤信者  
 此根本の靈場に来訪する者更になし  
 蓋し東亞の人民は從來遠洋航海の  
 術に慣せざる故からん今や諸君も知る如く

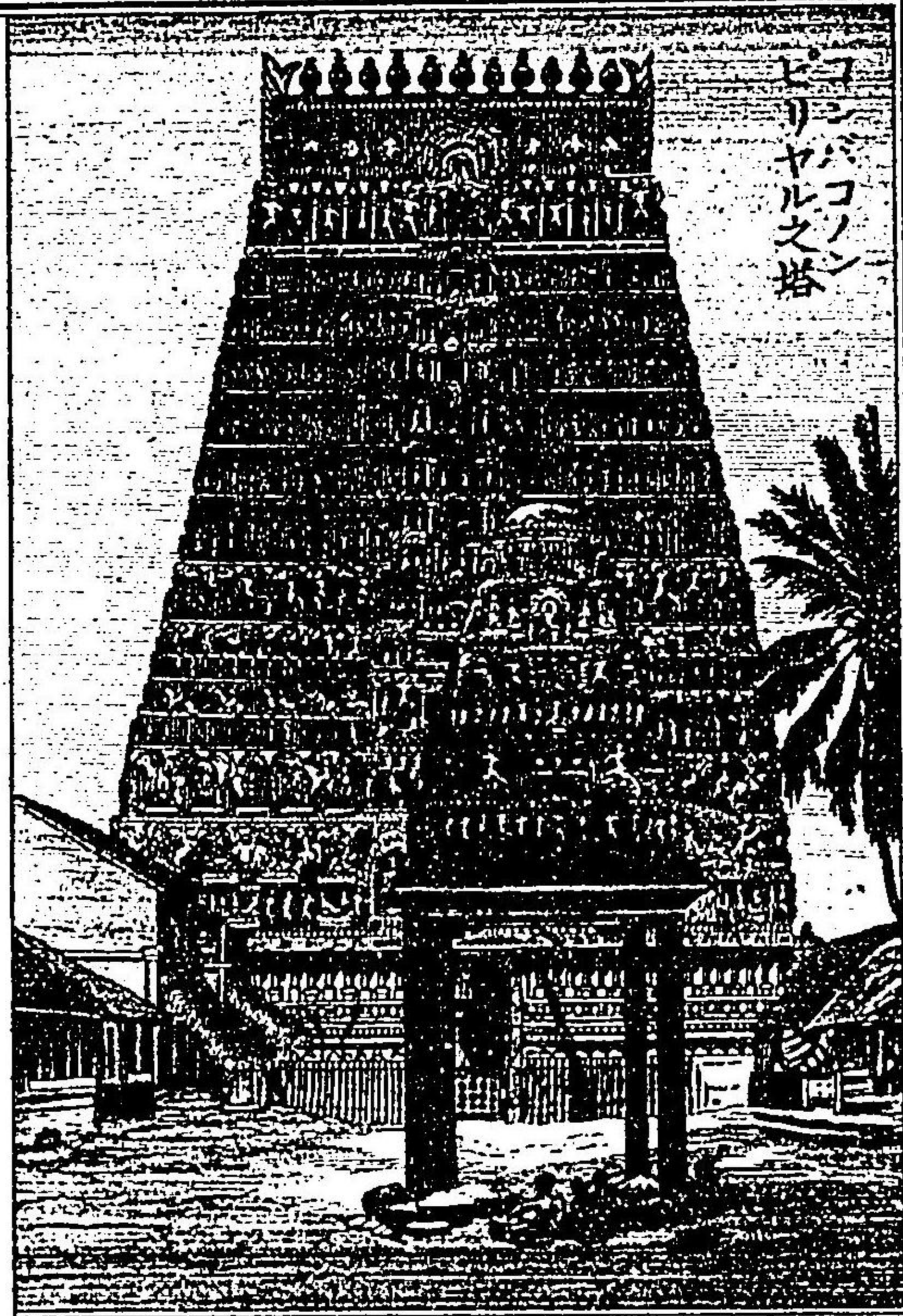
塔之ラデマ







東北方へ馳する事一百六十五英里にして  
 タンジール府に達したり。是地は人口八万余  
 要害堅固の城ありて寺院の數も甚だ多く  
 其中殊更名高きは、ピコタの宮の塔にして、高は  
 高さ二百二十尺、全堂すべて偶像や  
 今の世界に絶てなき動物の畜を密刺す  
 效に祀せる神體は、其數甚だ多々して  
 五百羅漢の鬚髯なり。〔元ヒルマより傳はりし者ト  
 是より東へ二十四英里、コバコンと云ふ地あり  
 人口九万一千余、此地に於ての名所は  
 右に掲げし塔にして、構造バコタのよき似たり  
 奉ずる所の神體は、ピリヤルといひ、其容貌  
 象の面と異ならず、身の丈五十四尺余



香火香烟堂に充滿、爐中炭火山を成し、焰々として其飛火は、老若男女の頭を墜ち  
 祈禱喧嘩、置しく鳴鐘打撃、間断なく、焦熱間煩悶す。是を其神祭式として  
 余輩の如きは暫時も内止る事を得ず、直に其處を逃れ出て、停車場より嵐車に乗り

ワイガ河を流り、マシニラ驛に  
 到す。此地は人口二万あり  
 マトラス府の管下にて、英の出張官  
 衙あり、市街廣闊、賑はしき  
 巨大の建物多き中、破滅神を祀  
 る、高さ三百五十尺、〔高は  
 内外とも〕奇態なる偶像を二面  
 彫刻、堂の中央大なる  
 シバの像を安置せり。我此寺内に入  
 り、時熱氣恰も燠く如く

ピリヤル之塔



HARBOUR OF MADRAS.



長さ二丈の奥を垂き棒の如き両手は牛馬の頭を擧げて、小さき眼を瞋き、家畜を保護する神なりと云き、再び瀟車を乗り二三の驛を通過してマドラス府に達し、マドラス府之記

マドラスは南印度第一等の都會にてカーナチックの地方、ベングアル灣の濱に在り、市街の面積郭外の地方を合計する時は三十平方英里、人口七十五万あり、従来近海淺沙にて、船舶出入便ならず、然るに近年波止を築き、大に浚疏せしより、其旧觀を一變し、帆樯林立、港に滿つ、演邊のセントジョルジ寮、天險無比の城堡にて

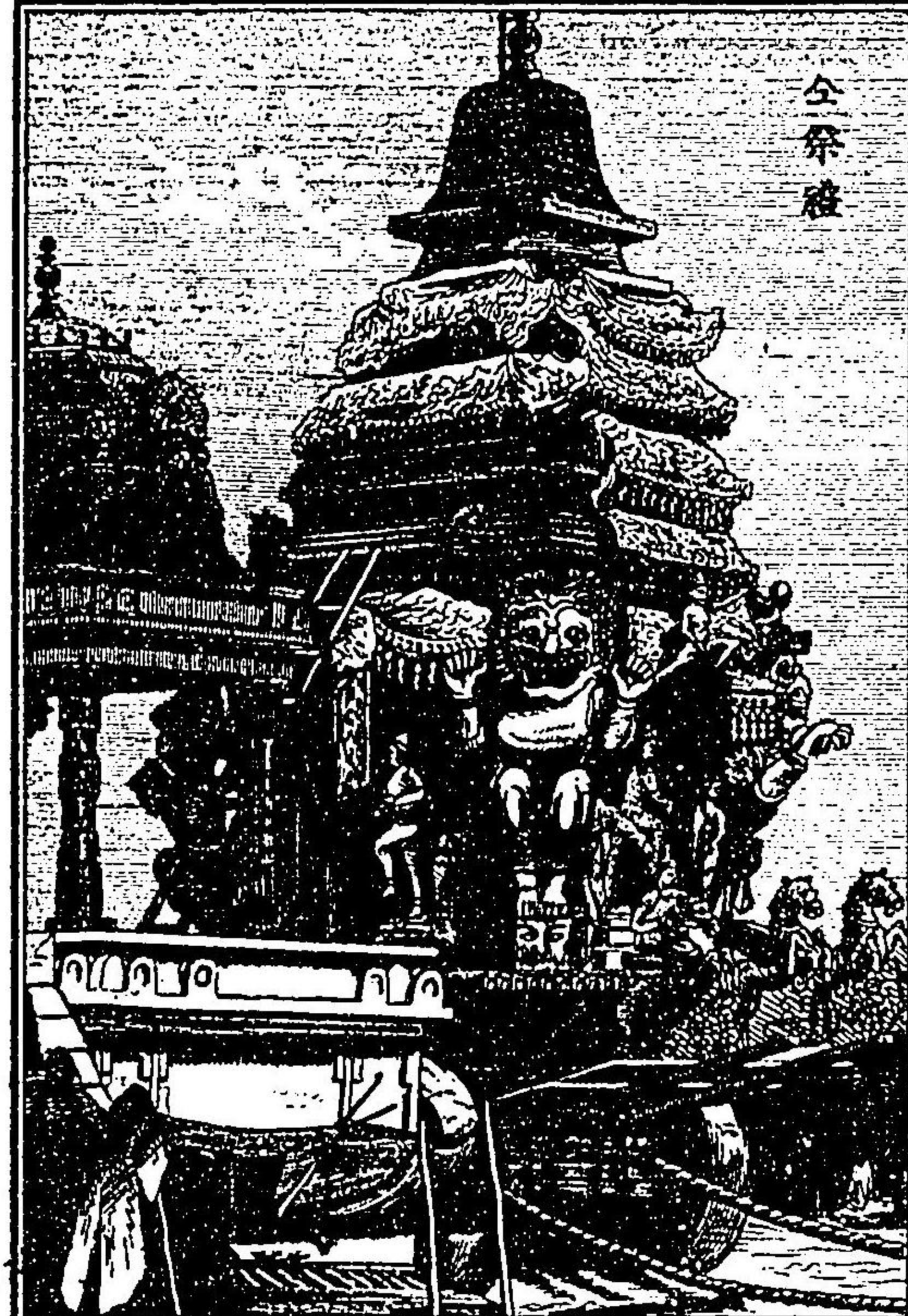
卷之六

VIEW OF THE NEW

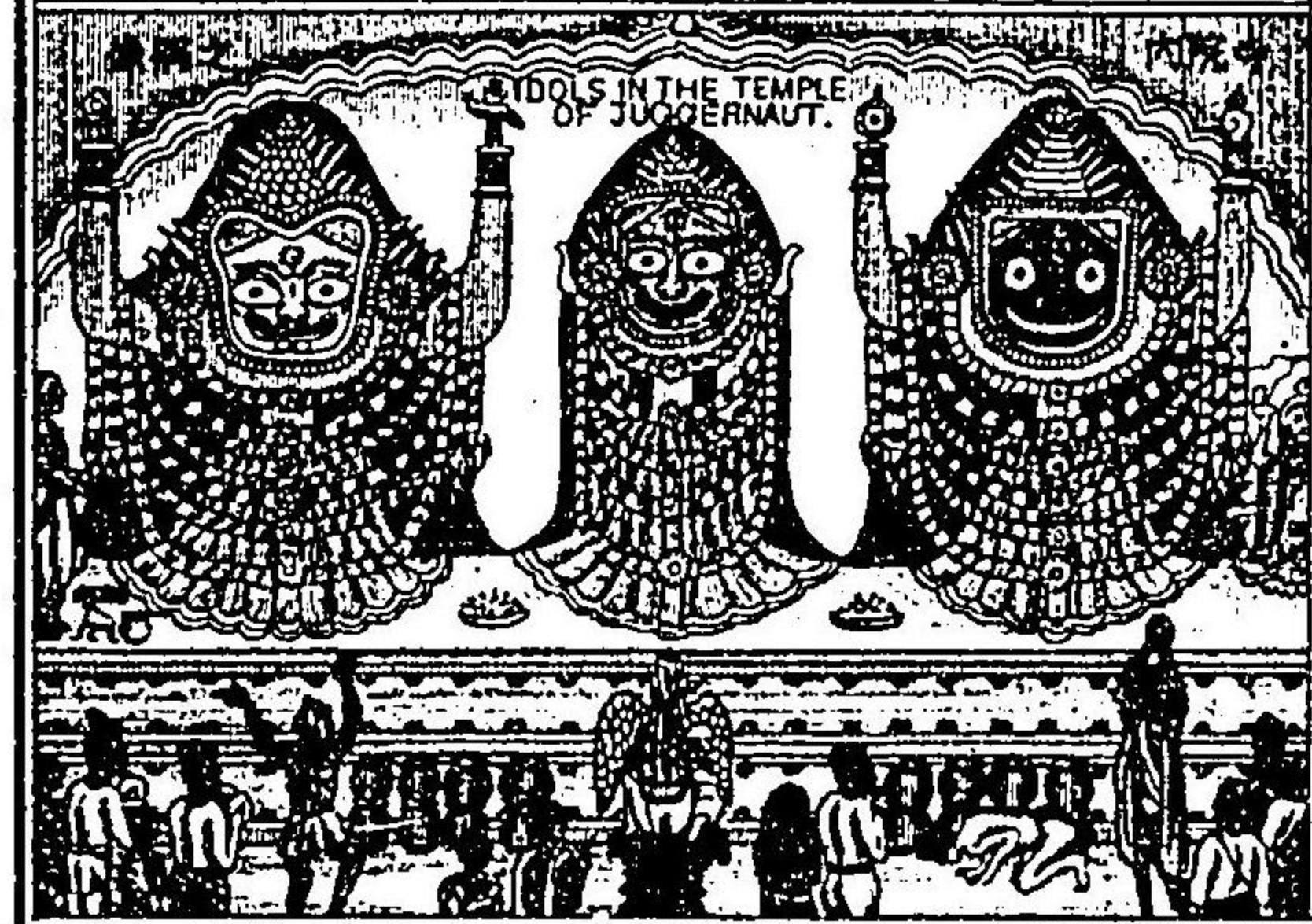


英の國旗を飄へし北濱街は政廳や大中學校裁判所、其他許多の公廨や大屋、此立偉觀あり、歐洲人の商館は皆廓外寛敞の土地を撰み、遊園や碧樹の間、散在し、土民の住地へ往來して盛ん、商車を営めり、此府の中にて最大の建築物は寺院にて、之をセントジョルジといふ、觀る者恍惚昏迷す、市街並に近郊の主なる道路は廣くして、入馬交通織る如く、實に繁華を極む、と隘陋陋街み、悉く土人の棲息する、とある、暗冥慘澹、一道の獄舎を行々、異ならず、尊大倨傲の英人は、みどり、土人を輕蔑し、文明國の利器を以て



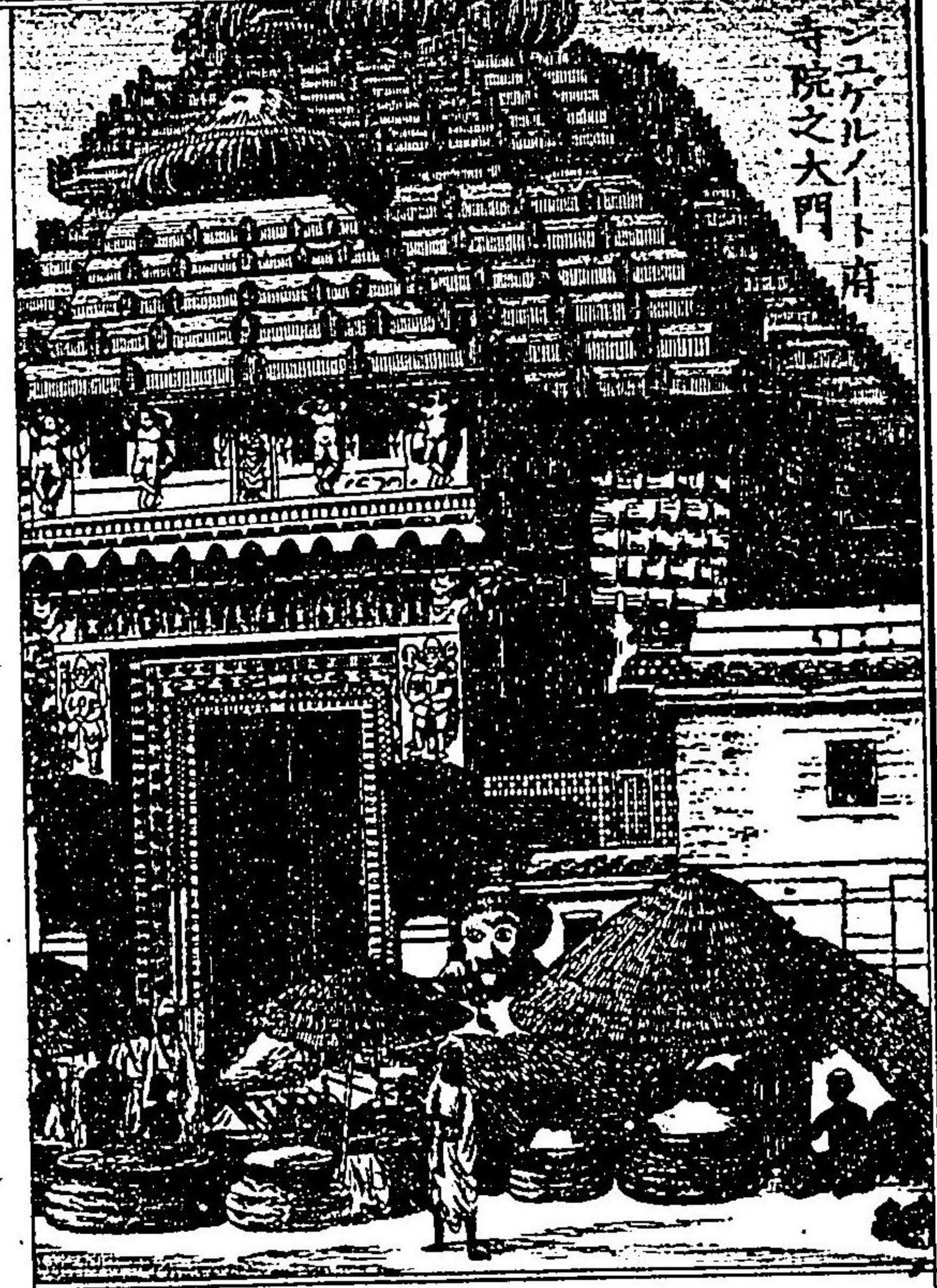


全祭禮



IDOLS IN THE TEMPLE OF JUGGERNAUT.

且つ其雙角を金色に塗り・神に擬して牽行す・衆多の信者途上にて此牝牛に遭ふ時は皆地に伏して禮拜す・奇異の風せし世話人が平日尊び蓄へし・談牛洩を頭蓋骨の飲器に入きて與ふせば・信者は三拜九拜し喜び勇んで之を飲み或は己きの身に灑き



シユアルノト南寺院之大門

三月三日の事にして冷し例年大祭を執行するの日ありし故に市内の各寺院種々の裝飾を加へたり各街到る處には百種異様の参拝人群を成して参向す其中殊更奇異なるは牝牛を祀せる寺にして或る一足の牝牛をば綺羅錦繡にて裝飾し

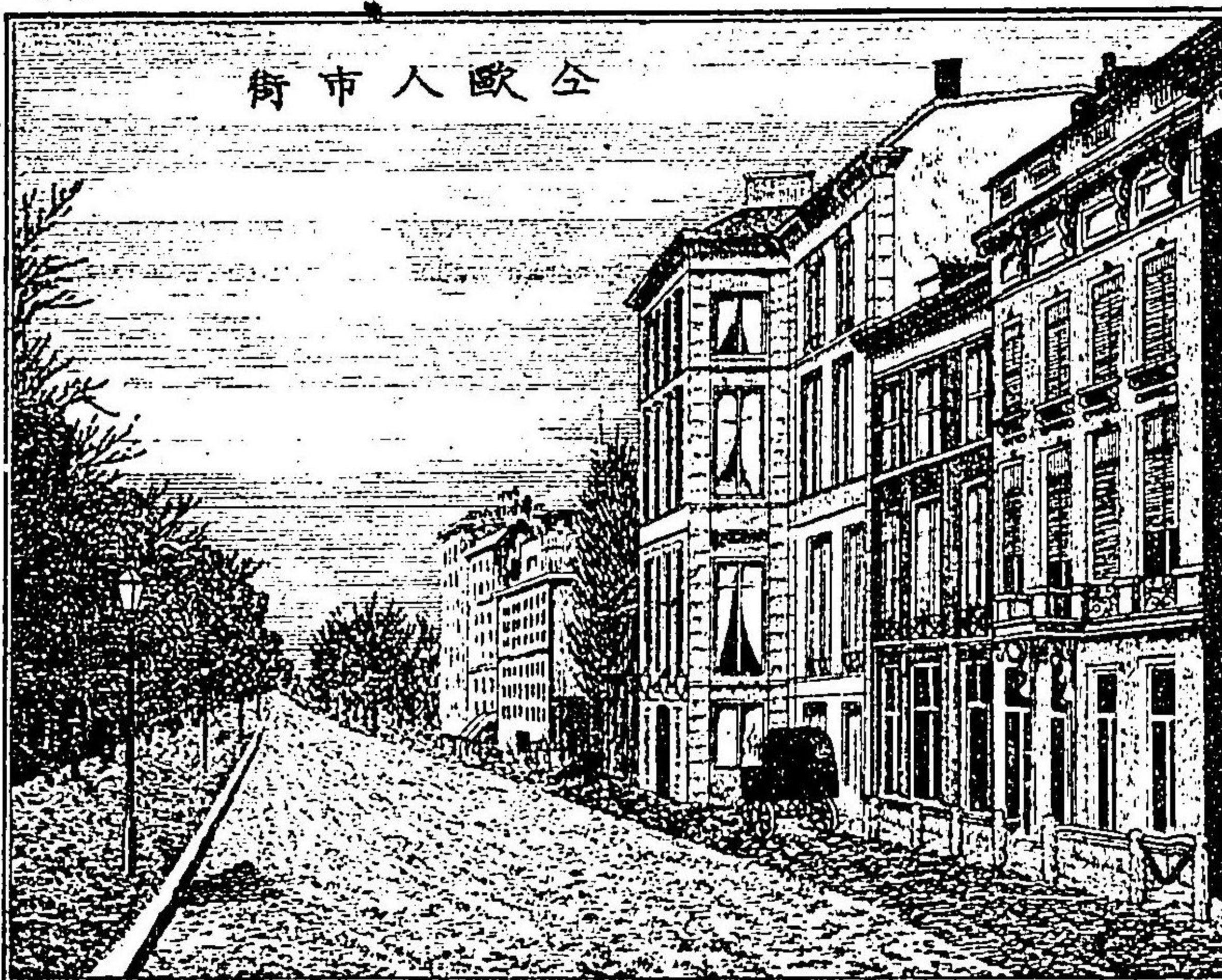
シユアルノト之記

野蠻の壓制を蒙り土民は倍々困弊し是は憫みの情態あり是より定期の海船乗りベンガル湾を乗り出で東北方に駛航する六百英里余りしてシユアルノトに着し

此地は人口三万余歐洲人も雜居して商業可なり繁昌す我此土地に着せしは



街市人歐全



南は原野に連きりその南方より眺望なは希臘風の大屋屋屹立揃比し儼然と一盛都府の偉觀あり。ウナリヤム寮はフライヴの築造したるものにして城内廣濶堅固なる印度國中比類なく。二十余万弗を費ししり又庫中是より廣き街路を隔河岸は政廳巍然と建つ。はき則ち英國が印度を統轄する所の大政府として行政は印度太守と通稱する委任官之を執行し在本國印度國務卿の指令に従ふものとて太守は領内は在る内外人及び英皇と同盟したる諸君長並に諸州の管内に在る英人の為め法令を設くるの權あり現任太守はガソフエリン氏にて年俸十二万五千弗と別年俸あり。

またハステング氏が築きたる埠頭を行きて顧眄せば港灣船舶蟻集して帆樯上は世界中國の旗章を眺むべく其より市街に進みふは市民議院や裁判廳・大中小學専門校

ム望ヲ懸南タコルカガリヨ河スジシガ



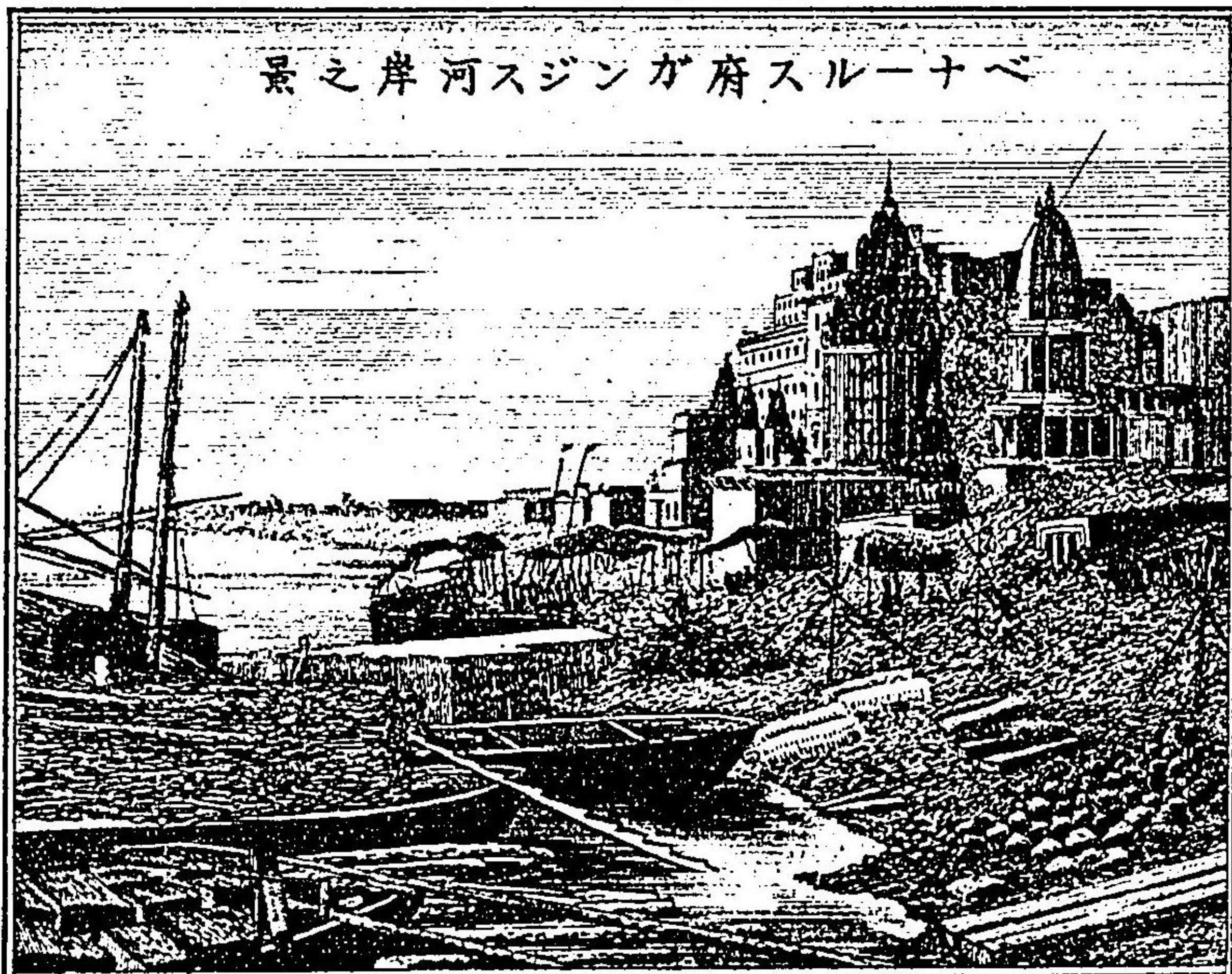
拜觀人に見せ附けつ誇り顔して立ち去せり又賣車の設けあり。棄身教のものにして信者は己の靴跟より足跟まで釘を打ち痛苦を堪へて之を拽く鐘鼓喧號間断なく信者は是より走せ來り車輪は抵觸死傷して此上なき栄譽を奪る者数を知らざる其愚なる見るに忍びぬ所なり。此港を抜船し東北方へ駛行する二百英里余にしてガンジス河の支流フウグリ河を添る。一百英里の左岸なるカルコッタ府は達しなり。

カルコッタ府之記

英領印度の首府にして市街は河畔に循ひつ五英里余に綿亘し西はガンジス河に臨み

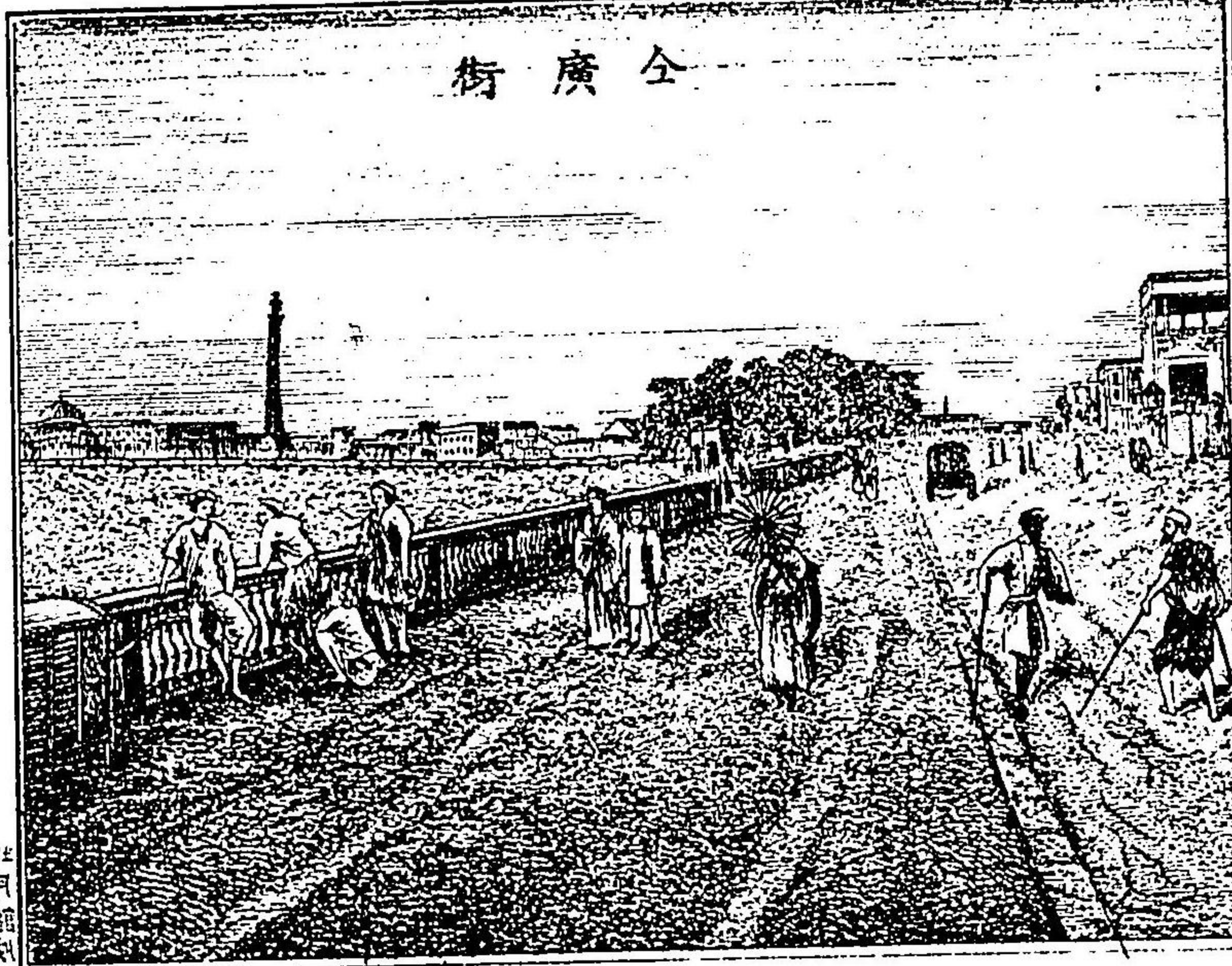


景之岸河スジンガ府スルーナベ



布を纏ひて四肢を呈露し鬚髮茶乱糾纏し  
 墨を欺々面貌より白粉黄彩粧飾し  
 或は膚色蒼濁たる垢手念珠を粘りて  
 哀叫號呼し錢を乞ふ貧僧あり又商人は  
 地上又物品を乱攤し中央に坐し之を鬻り  
 婦女子を視るは稀にして中寺以上の婦人は外出する事  
 稀なり俄ま出るも暗裏に來り  
 用類すべきは外より觀み可らず  
 たましく逢は卑賤の婦四肢を眞は銀環を附く  
 まま取者共が鞭を執り車前より起立て人群を  
 叱咤陸し行く者は英國人の我慢なり  
 さる此都府の人口は現今一百万ありて  
 他國の旅客数知らず雜踏極まる大都也  
 此府より英國へ電線三筋を架し陸路内地へ鐵路經緯しワグラー河へは  
 二千噸の船船を通す々々海陸の便完く倍り輸出額は毎歲一億三  
 万弗輸入八千七百方弗下らず全印度貿易高の三分一強を占  
 む温度は七月華氏の七十五度より十二月は六十五度あり

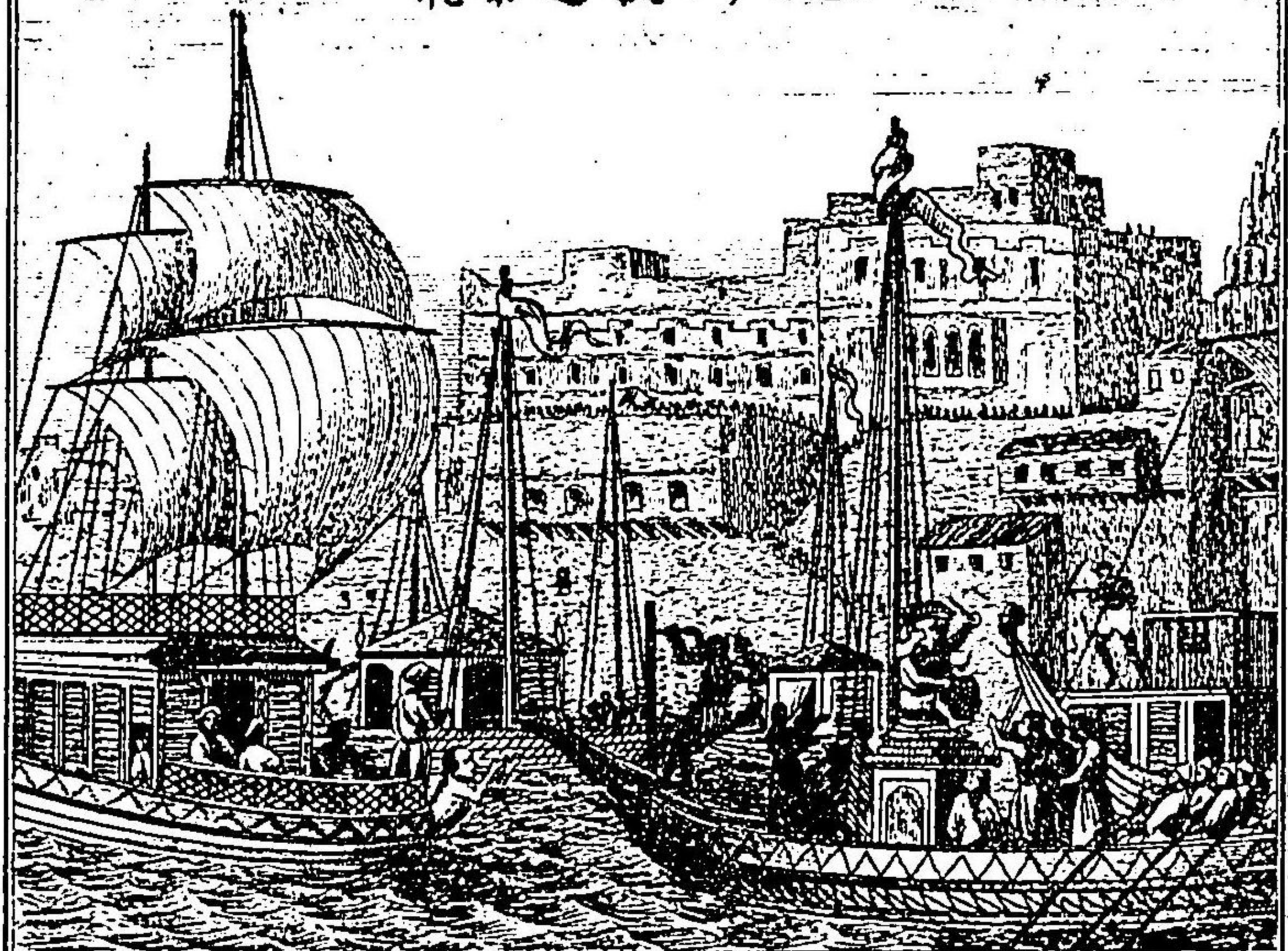
街廣全



バラモン耶蘇や回教の寺院二百六十字  
 造幣銀行商社あり郵電局や停車場  
 各種の新聞出版社學術研究會もあり  
 歐洲人の市街には遊苑觀場苦樂部等  
 文明の具完備せり然るに土人の住處は  
 街路彎曲屈折し眞道隱匿に入る如く  
 泥土を塗抹し暴露せる矮舎あり又竹材を  
 屈撓編綴為し以て構造したる陋屋や  
 壊せし煉瓦の市場あり塵埃積んで山を成し  
 汚水溷濁溝に満ち臭氣毒氣鼻を裂く  
 中には豪家を見受せど大なるのみならず不潔かり  
 此街頭より西顧するに絹帛を着る者稀にして  
 素朴の綿衣を着用し腰間鏡かざ尺余の



礼祭之教マラブ全

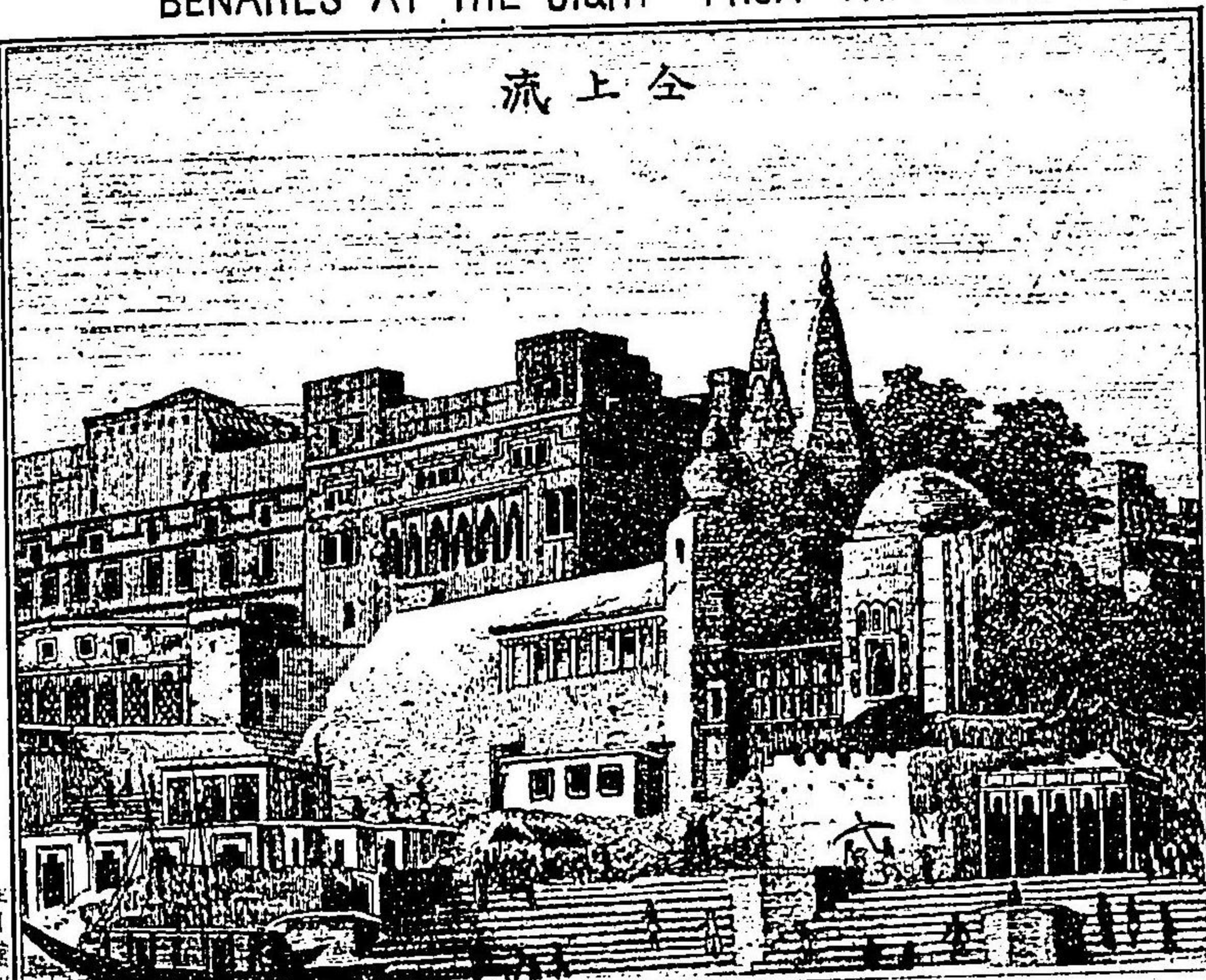


此月繪紙

又各宗の寺院は邪教を迷入る無智の民  
 或は阿片の昏睡に恵を叫ぶ乞丐や  
 酷熱炎地に坐して傍に熱火を置き雙眼を  
 瞬せず太陽を睨み或は寺堂の入口に  
 烙鐵を持ち佇立して信者来れば順番に  
 其舌身を烙貫し隨喜の涙を噎ぶあり  
 又ガンジスの河岸にはバラモン其他邪教の徒  
 群集を為し此水は神水なりと神の趾より尊びて  
 各自身體を濯瀧し真心を龍の祈禱る聲  
 水を度りて瓏々と耳邊に達し日暮は  
 燭を點して河に投げ其能く流水に從ひて  
 晁々滅せざる時は敬神厚きの徴といひ  
 又老幼の男女をば犠牲に供して投ずる等

卷之十六

流上全



此月繪紙

此府より瀟車を乘西北方へ駛する事  
 三百九十余英里にしてベナールス府に達しより  
 ベナールス府之記  
 地位ガンジスの南岸に甚だ盛んの都會にて  
 人口四十五万あり抑も此地は釋迦牟尼が  
 二千三百余年前始めて布教し數年を経  
 パレン教徒の破らるる最著名の古墟にして  
 今日荒涼瘠頽の觀を呈せず現時を不  
 古代の名高き巨刹寺一千四百七十字  
 儼然として存在し且も耶教や回教の  
 禮拜堂も許多あり市街の家屋は五層より  
 六七層のもの多く華美ならして古風あり  
 又遊苑の設けあり清涼閑雅の景に富む



寺金黃府全



釋迦の時代なりと云ふ果して然らば今を去る二千四百余年なり但し現今はバラモンの僧侶是を守護せりさて前にも述べ如く此地は釋迦が佛教を始めて説き土地にして關係も又多けきは尤も其履歴教旨をば聊か開陳致するし。

耳聞目撃する所皆奇異なるものば周旋羅記して餘興をば盡さんとすも限なき蓋し古寺中視るべきは名をゴルデンツルムと云ひ即ち黄金寺として寺院の高さ九十九尺廻り五十二尺余皆黄金の板を以て屋根を覆ひ堂内総て黄金の板を張り其名は昔か美觀なり創建年紀を尋るも其詳細は知れざきと

卷之六

今より二千餘年前

此年代付ては諸説紛々未確實の記録を得ざと云ふ歐洲人の如き  
は二十四百四十年前といへり蓋言らずと申し遠からざるべし  
兩國間カピラエと名くる一の國ありて或はカピラスと云ふ時の國王其姓を  
瞿曇といひ其名を首面駄那といひ皇后を

釋迦牟尼菩薩佛陀之像



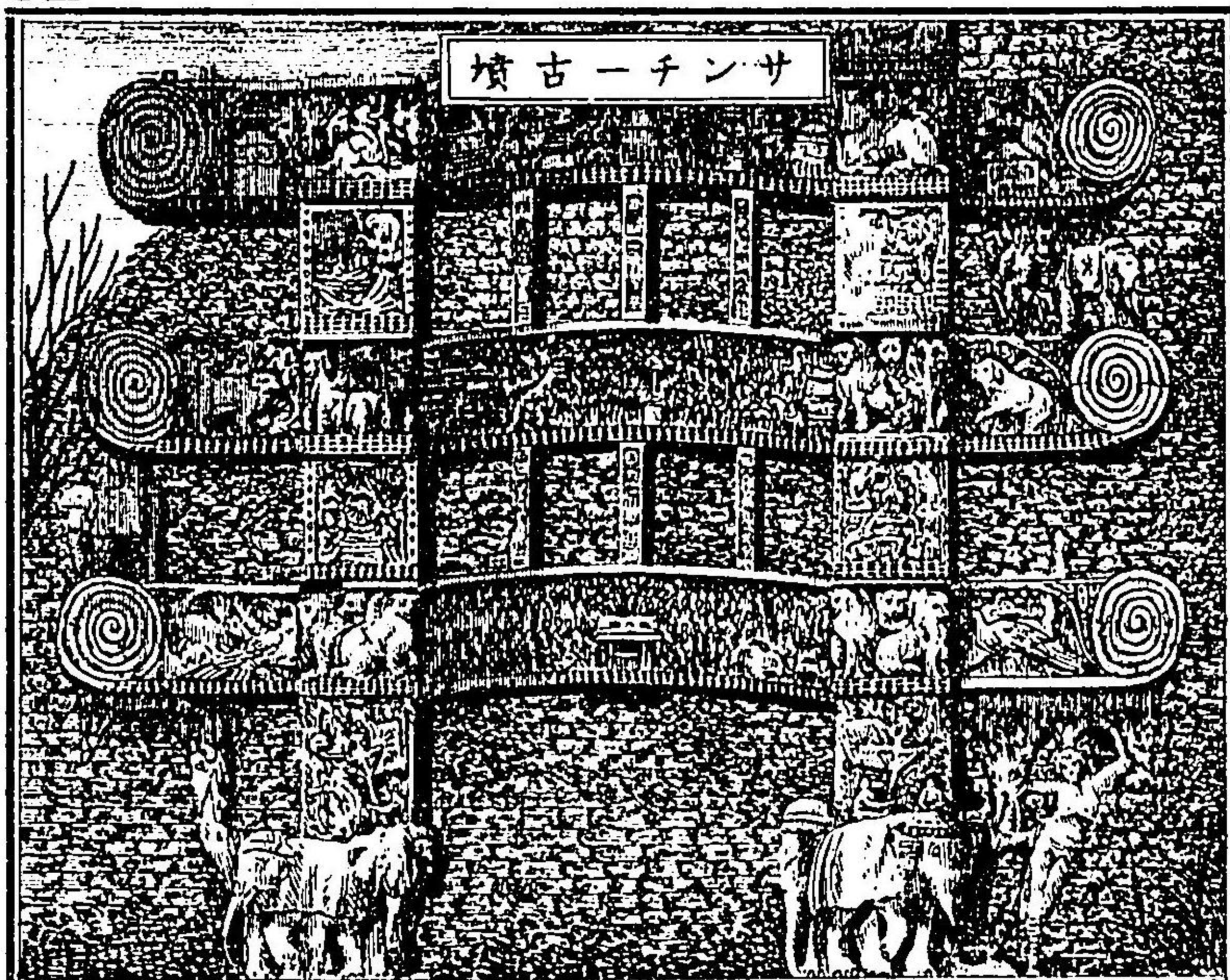
破らん事を力めしむ太子は曾て喜びず當時印度一般に奉ざる所のバラモン宗教  
教旨奈乱腐敗して迷信する者又多く流弊民を害毒す  
其長するに及んでや慈悲の心厚くして  
笑諠等を好むなく稍隱遁の念慮あり  
父王は太子の山林に遁きん事を恐せつゝ  
悉達十八歳の時美女を娶りて妻とあし  
日日妓歌酒肉の樂を盡して愁悶を

印度國學キナフヤンシンツクリト  
氏曰住古は神前供物を奉る  
「大い」注書を添へし其供物は牛馬等を用ひ其供物は牛馬猪の類は其類千遍なるを知らざり是を以て住古のバラモン人は皆牛馬肉を食し  
るも其供物は牛馬等を用ひ其供物は牛馬猪の類は其類千遍なるを知らざり是を以て住古のバラモン人は皆牛馬肉を食し







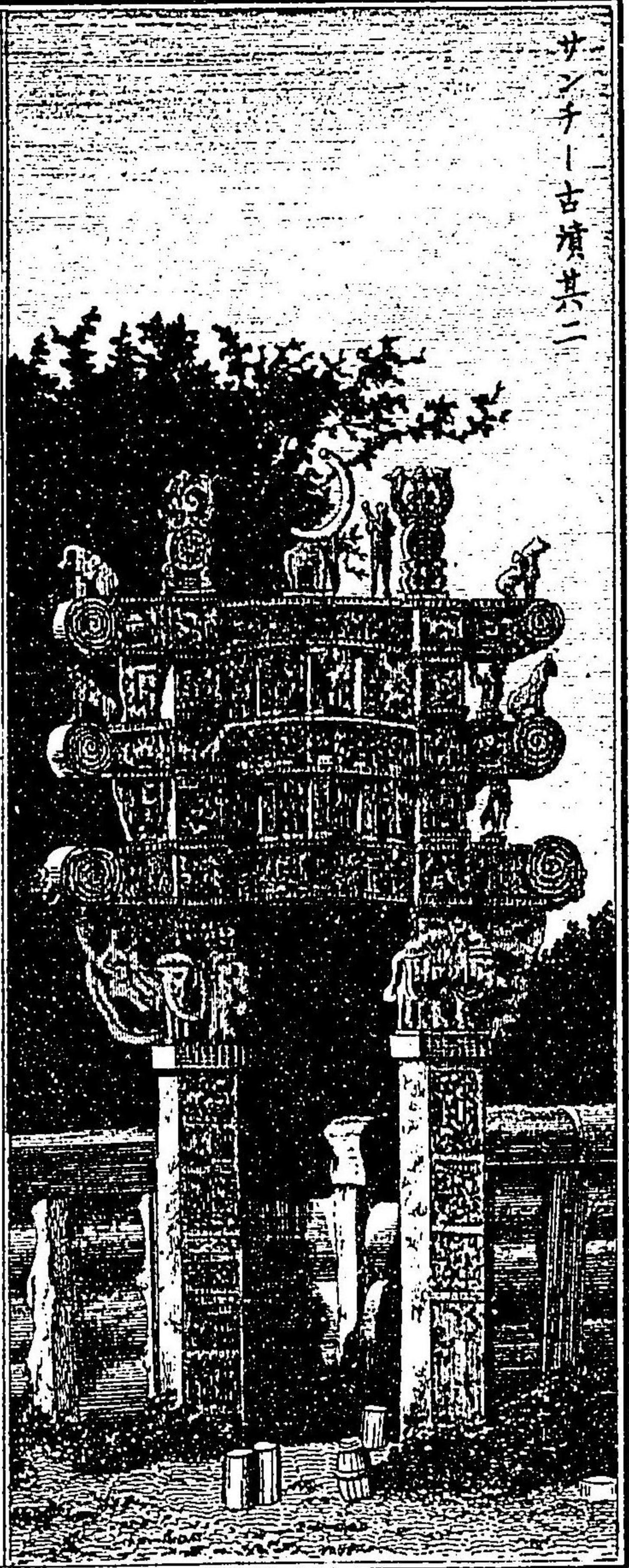


ありしが故に此時其會首... 三藏結集の時と云ふ之を名... 長ければ之を略す此會議を開き... 二回は其より百年の後として三回目は西曆紀... 此第三會議の頃より亞細亞諸國へ傳教師を遣... 都して當時印度の北部を悉く領せり即ち現今の... 處たり王の佛教に於ける恰もコンスタンチン帝... の耶蘇教に於けるが如く王初めは甚だ佛教を... 忌惡せしが後靈異を感ずる事ありて其門に入... り一意佛教を弘むるを以て己きが任とせり... 然きども王の佛教に於けるは彼の歐洲諸國の... 君主が耶蘇教を舊教なり執迷して尋く無事を... 残戮せしと大ひは其趣きを異し凡そ佛教を... 弘むるに兵力を用ひ殘暴を行ふ事なきは實に... 佛教の一大美事にして獨り之を播するに兵力を... 用ひざるのみならず或は他の凌虐を受くるも... 當りても亦兵力を以て之を抗する事鮮なし世人... 或は佛教徒の卑屈あるを據きりと云ふと雖も余は... (後文)示す所の佛陀の戒を讀み其決して然らざるを... 知るなり其は扱て置きテアリカ王は其佛教を歸する後頻りに

又た佛陀の既では入滅するや弟子相集つたり大會議を開らきて教祖が生前説く... 所あるの教義を論定歸一し之れを書き筆し以て經文を作くりて迦葉は弟子中の上坐... かつるブタガヤといふ處の一の墳墓を發見せり此地はベナールス府よりバトナ迄瀕車あ... りて其れより僅づか二十七里ばかりの處なり扱て此墳墓は今より廿三年前塔尖の少く... 現れざるより土人ら何物ならんと閑隙ある毎に砂を掘り出せり今より八ヶ年前の... ざりて石面に刺める文字顯わき之れを讀む即ち釋迦の墳墓なりけきば英政府人夫を... 使役し全たく掘き出せしと確道四十餘級を降るべく塔のたかさ八十尺臺石五十尺余あり... て精細に唐草様の彫刺を為せり其れより塔中に入れば紙迎黄金の立像を安置す而して拜... せる者の足下大なる石棺あり蓋の表面十人を坐せし蓋し此棺中分骨を收さめし... のならも乎又此墳墓の右方一の碑石あり漢字を刺さるを以て何物ならんと熱視す... る其の表面の中央に道龍と書し上には日本開闢以來余始諸干秋尊墓前大書し其の下... 明治十六年十二月四日と記せり是れ兼々聞くとその者のよて全くと我が國の北... 島道龍師が建てし碑石なり又た名勝の一と云ふて可からん予や此の墳墓の正確なる品を... 得んことを欲つて目下探索中なりと雖へども六卷出版の時期迫まり遠感ながら茲に揭載... する能たはず他日落手次第之れを印刷し附し出版す可ければ看者請ふ思しからざる... 抑も佛陀が自づから其の教旨を弘むるや天竺固有四族の區別を破り九十二ページを看... ぶ貴賤男女を論ぜず我が教道に導びき凡そ人外の賤奴と雖へども之れを拒絶するおく罪... 障解脱は衆生之れを得べしと説き其弟子をして各地に於いて各人其教へを傳導せしめ... してより教年ならずして教派を盛んにせり之れを要する人の義務は一家一村一國の狭よ... り推して全地球の廣き及よ不すべく又た凡そ人類の互がいは相憐み相兄弟... 視すべき事は印度に於て佛陀の前いま道を経ざるころなり其教旨如何の... 愛の二字の如きは實に佛陀始めて之れを説き出せりと云ふて可なり其教旨如何の... ぶときは余輩の論ずべきに非らずと雖へども佛陀が博愛兼仁を旨としたる事は彼... の有名なる大博士マクスミユル氏の如きも最も贊美する所なり



サンチー古墳其二



寺觀を建て堂宇を築造し或は傳教師を亜細亞諸國に送りて大ひに信仰の意を表したるは相違なしとす  
然るに王は西曆紀元前二百二十六年に寂滅し爾來又佛教の史傳其詳かなるを知る可らざると雖も諸學士が古貨幣及碑碣の遺  
文等より考證せし記録及び支那の僧侶が渡天せし事歴等は依て王の滅後其驕進の勢ひ少く挫折せざるも似たり亦是より先  
バラモン教徒はペナルス及び其他の各地に於て佛教の氣焰熾るるを見て漸く嫉忌を出し往々兵力を以て之を撲滅せんとし  
或は屠殺し或は放逐せしに因り西曆紀元後一千年代より千百年代に至りては全印度半島の中佛教遂に跡を絶ちヒマラヤ山麓のヒン  
種からざる諸部落の中のみ微々として氣息を存したりと雖も其後は復た影跡を見ざるに至り然るに錫蘭全島及亞細亞諸國  
鮮及日本等は倍々熾り弘まると蓋し近年以來  
上の諸國に於ても本を衰へたりと雖も今猶ほ**信者五億万人は降らざると云**  
西曆紀元前二百二十七年則秦始皇帝の時佛教の傳教師既  
より支那に入り紀元後六十六年則漢の明帝永平九年使を奉  
遣り更に佛法を求めて帝之を奉し國教となし孔子老子佛の三教とあり又朝鮮に入り西曆紀元後五百五十二年則本朝欽明帝十  
三年十月百濟王聖明の手を経て佛像及經論の我國に公然渡來せし事は讀者の知らざる所なり

佛道之教旨

さて佛道の真義と申は甚と深遠微妙の者ふまを學藝あるの人よ非れば之を悟る事  
を得ざる者かり龍樹菩薩曰く凡て佛道の真理は明かよ知らむと欲する者と智慧と  
見聞の二つを兼ね備へざる可らざると況や本書の如き一二紙葉の書き盡さる可きよ  
あらざ故に予は諸學士の説は甚と其大体を一言するのみふまは看者夫を誤る勿れ  
○蓋し佛教の大主義は佛陀の四大節目と名くる者の中は包含を其四大節目と申は  
第一 人よ艱苦離る可らざるを説き 第二 艱苦の原因を願望即ち慾よ在る事を  
説き 第三 艱苦離る可らざるを説き 第四 艱苦の脱べきを説き 第五 艱苦の脱  
べきを得るの法を説ける者也  
而して其教は難易の二門あり薄智の凡夫よは易門を示して之を導く彼の地獄極樂  
の説は則ち易門に屬し其難門と申は則ち性理論よして理學中最も深遠高尚なる者よ  
して人能く之を解するは苦む今其要領を擧げんは佛道よては萬事萬物を以て空  
妄無實と云ふ圓寂の眞體よ運る事を勸む圓寂の眞體とは其實不可思議よして思想  
言語の及ぶ所よあらざると云ふは之を約言せば一切の慾念を斷ち本來無一物の眞  
理を悟り成佛して清淨の身よあるの主義なり  
右の如く難易の二門よ分つと雖も素と佛教の極意は則ち解脱の外他ふまを以て僧  
俗共よ遵守すべき所の教則を設け俗と雖も無益よ現世の災累を多く徒らよ因劫  
伐作るを許さず其僧俗共よ持てべき所の禁誡五則あり即ち  
第一誡 殺む勿ま 第二誡 盜む勿ま 第三誡 犯姦む勿ま  
第四誡 偽る勿ま 第五誡 醉酩む勿ま  
又ニルバナを求むるを專業とせざる者の爲めよ設くる禁誡五則あり即ち  
第一誡 食時を過るの後食を爲す勿ま 第二誡 踏舞演劇歌曲音樂を視聽する勿ま

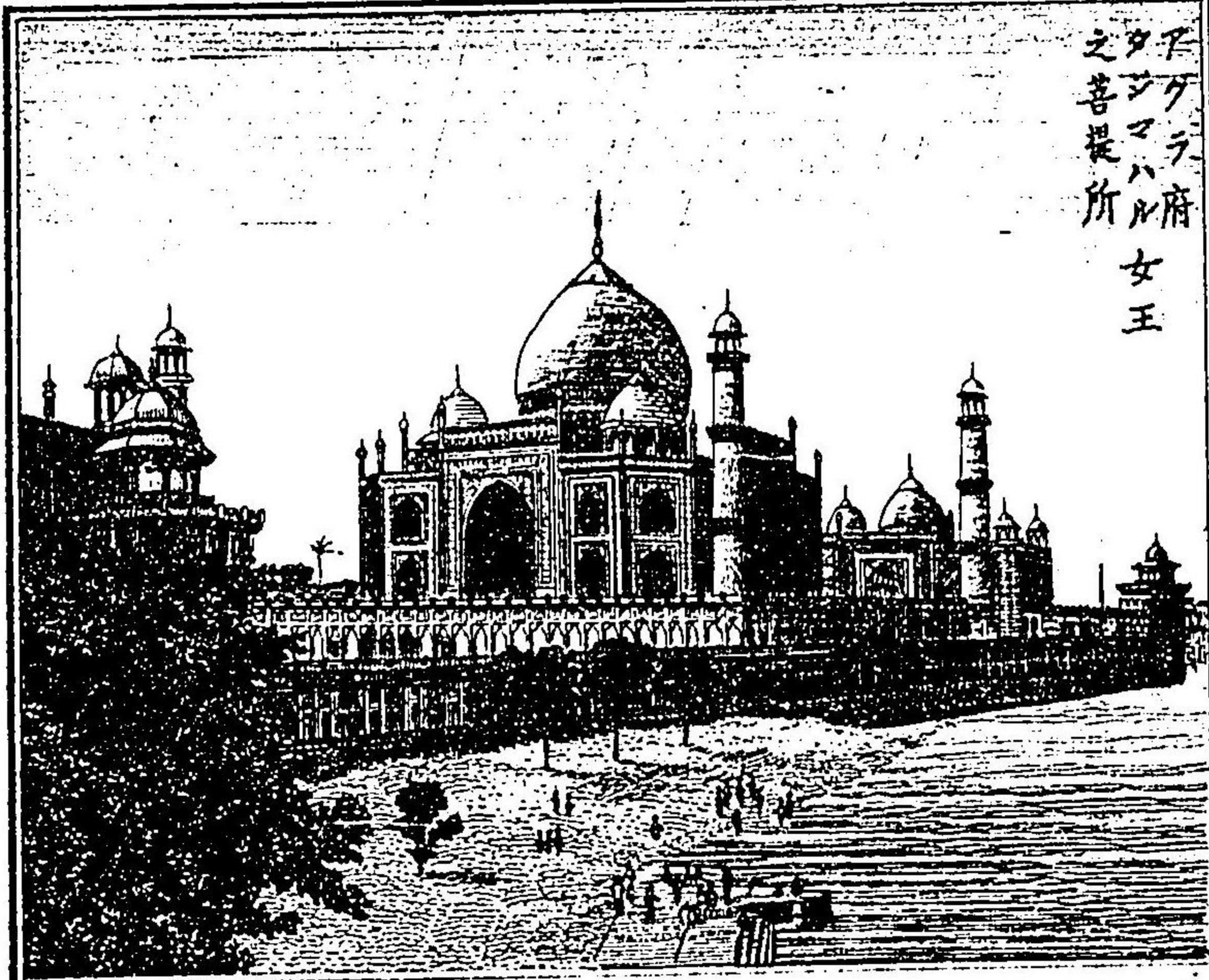






ガンジス河岸の都府を過ぎカルラッラ府を送るあり。産物中の主なるは、米と青黛鴉片とす。○鴉片は諸君も知る如く、罌粟より製するものにして、過日來より旅行せし、ベンガルバハルオーデ等、ガンジス河傍の各洲は、田畠何まも白色の罌粟を培植せざるなく、毎年一月二月は、は花開きて満野みち、雲を欺き、其長さ、数百英里に達すあり、其實を結ぶ及んでや、及物を以て外莢を切り、少しづつの汁液を採り、之を鴉片に製造す。蓋し鴉片は利用せは、實に貴重なる藥種にて、世を益する大かれど、今英人が此地にて、製造するは世を益し、已きを利するは非ぞして、他國の愚民を賣鬻ぎ、國を悩す具は供す。○一千八百八十三年清、金額實は五千七百四十、嗚呼文明の名を以て、宇内は誇る英政府、何ぞ之を禁せざる、万六千八百八十弗に至る。○又青黛は一種の灌木にして、葉を剪り、染料とすものにして、ガンジス河の下流より、デルヒ府迄河畔は、必ず之を播種す、輸出甚多額あり。

○米は田畑とも植ゆ、畑のものは粗品あり、其水田は作るもの、雨節收穫、物中の第一は居るものにて、若し夫れ雨水氾濫し、汪洋陸土を没するや、稻禾已に成長し、其幹高く時方は、成熟するは逢ふ時は、土人小舟を浮べつ、穂を刈り以て收穫す。



アグラ府  
タジマハル女王  
之墓所

澤水瀾漲田は満ちて、未だ低落せざる時、農夫の市場は趣くや、老を援け弱を負ひ、拳家携へて皆去きり、今其情を察するは、船を出すの後にて、或ハ水量暴漲し、爲めは家屋流没の災害あるも、夫れ之を防禦するの術もあらず、唯だ一家族相保して、恙あきを僥倖す。蓋しガンジス河岸の地、概ね然らざるはあらず。

此府より又流車を乘り西北方へ駈行する二百英里余りて、アグラ府に達し、アグラ府之記

位置ガンジスの一源河ジャムナノ右岸に經營す、人口十萬二千余、是れ又沃地の盛都會



市街廣潤清楚にて・商業可ふり繁昌す・此府内にて見るべきハ・タジマハルてふ寺院にて  
 是は千七百年代ニ・サーゼハンといふ王が・愛妃の爲めに建ふり蓋し回教寺院あり  
 其全體の材料ハ・赤色美質の石より・其要所は白色の美石を以て粧飾す  
 宮室甚多き中・中央のもの絶美にて・或る石柱の一本ハ・高さ七十五六尺  
 直經十尺余ありて・透明玉に異ならざり・周圍は赤白桃色の美石を以て各種の  
 花を造り鑲嵌す・又庭園の設けあり・佳木芳草等を植へ・池中は噴水二ヶ所あり  
 奇異を放ちて觀を添へ・其内外の絶美ふる・其構造の巧みふる・遂一筆紙に彈ききぎ  
 但し此地は千八百零八年の十二月・英國之を攻畧し・鎮臺支廳等を置き  
 且つ此寺院へ四五名の官吏を派出し保護を爲す・尚不此地にて觀るべきの名所ふき非きど  
 略して其より流車を乗り・西北方へ進む事・一百二十余英里よりて・デルヒ府に達しり

デルヒ府之記

此府は前にも述べ如く・古來印度君主の京城とせし名都にて・一千五百六十年  
 アクバル王の時代には・面積二十方英里・人口一百万ありて・非常の盛を極めし

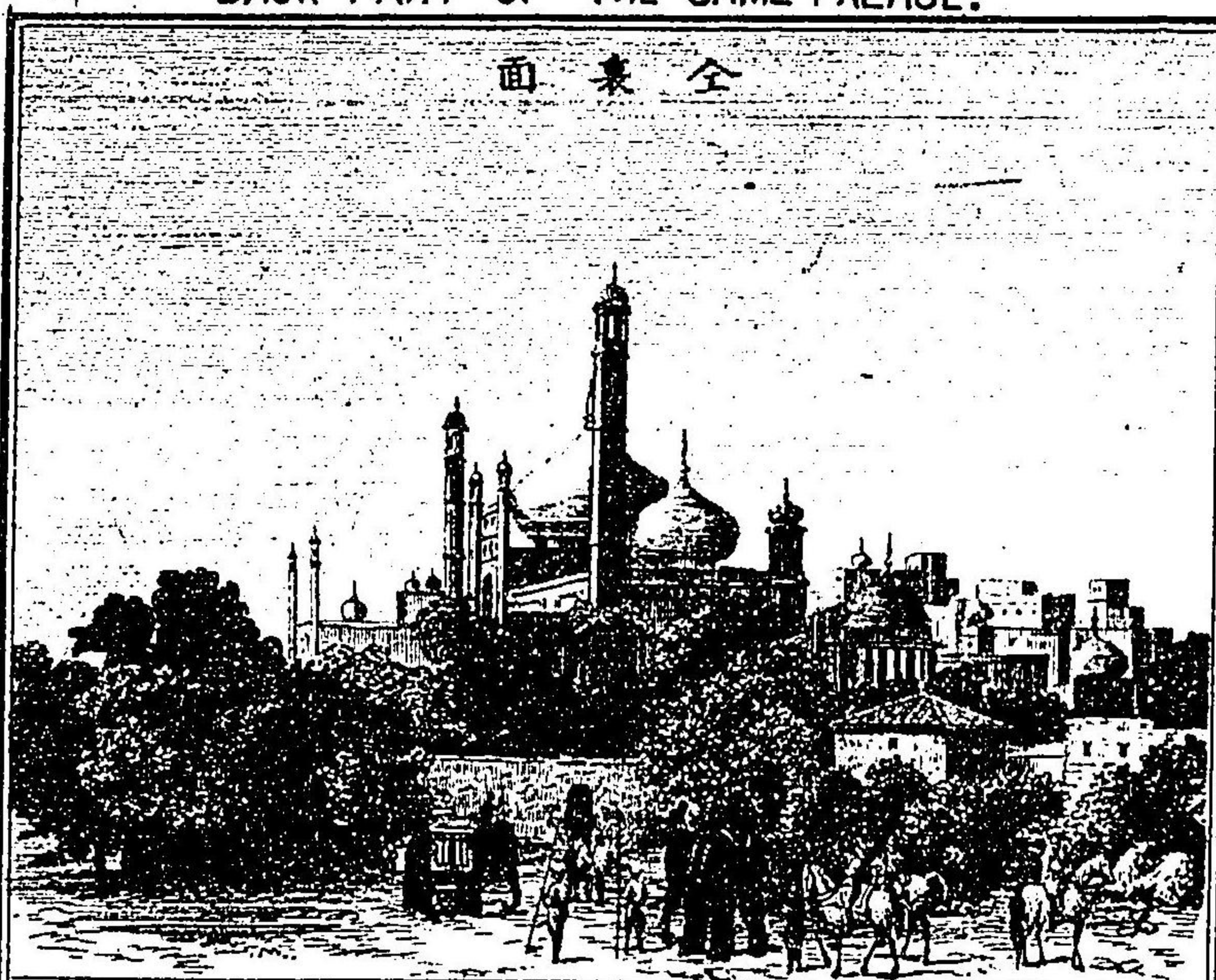
STREETS OF DELHI.



星移りもの變り・今より二十九年前  
 英はモゴルの王家を全く瘞して領地とせ  
 故に現今衰頹し・シヨムナ河の兩岸に沿ひ  
 丘上合して八方英里・人口十有五万とす  
 さまじも古昔の遺蹟等甚だ多く國民の  
 來り訪ふ者又絶へざり且つ富商も多くて  
 パンヂヤカシニルベルチスタン・アフガン等と通商し  
 歐洲人も雜居して河畔の市衢は賑へり  
 然るに丘上王宮の四邊は建る武家屋敷  
 大小破屋連接し瓦落ちて壁壞れ  
 棟樑梁椽板檻の腐り黒り撓折し  
 或は榛蕪地を満ちて之を理むる者もふく  
 甚しきに至りては・蕪莽荒蕪狐狸等の

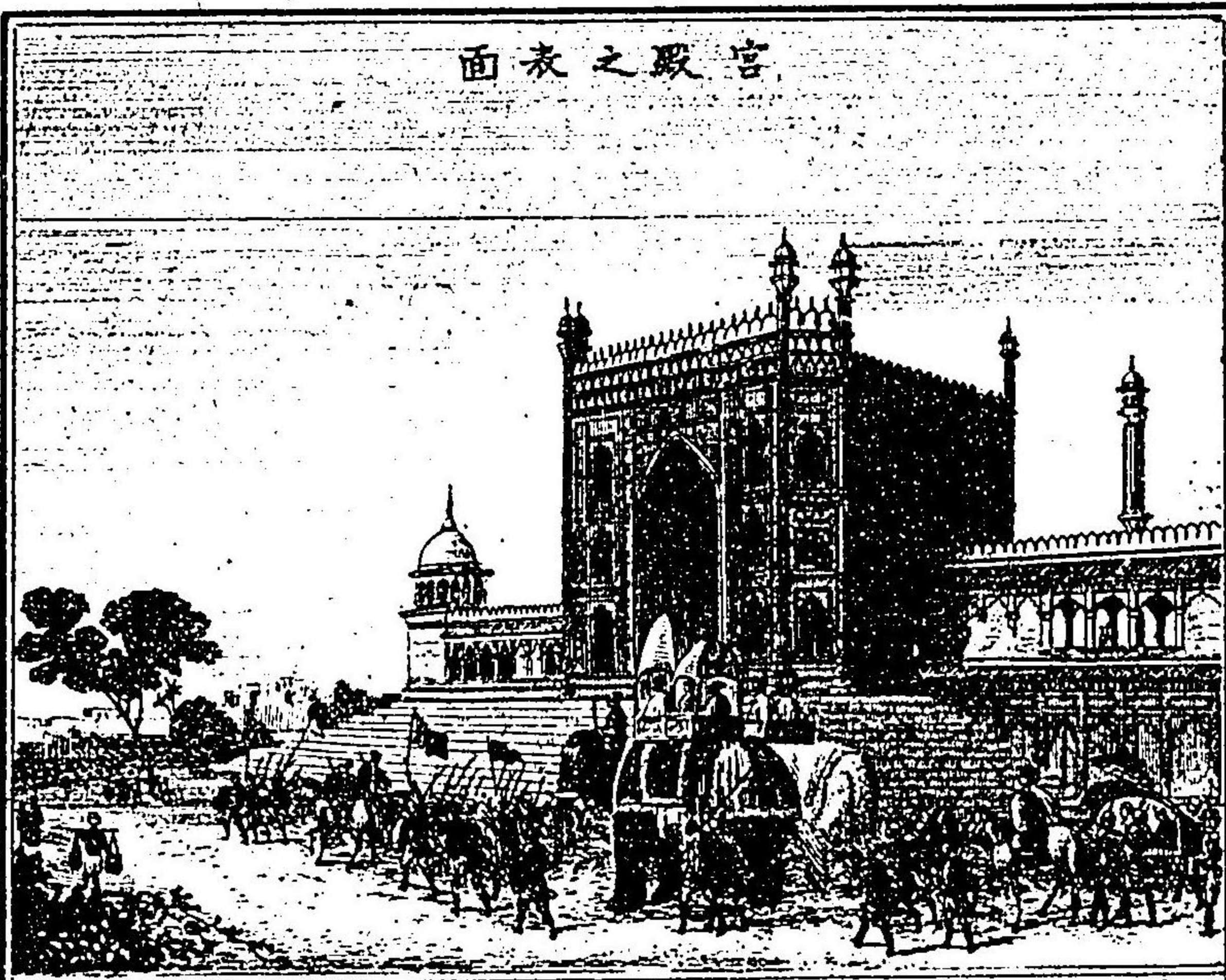


面表全



鳴呼厭制と無氣力の国家を毒する酷む哉  
 ○さて此地まで観るべきは即ち王が居住せし  
 宮闕より其地疆殆ど二方英里あり  
 花剛石を累積し基礎と為して其上は  
 軟白石を以て積み高塔を築き匝りて  
 其正面の処は大理石の門を建つ  
 高さ五十尺余四方は尖塔天を突き  
 此大門より左右とも數百尺の処まで  
 長廊ありて各処は方又圓の樓を建つ  
 其より門に入る時は數百歩を経て大小の  
 宮殿閣閣参差し此宮総て赤白の  
 美石を以て材とし各要処は華麗なる  
 花紋鳥獸等を鏤り以て之を粧飾す

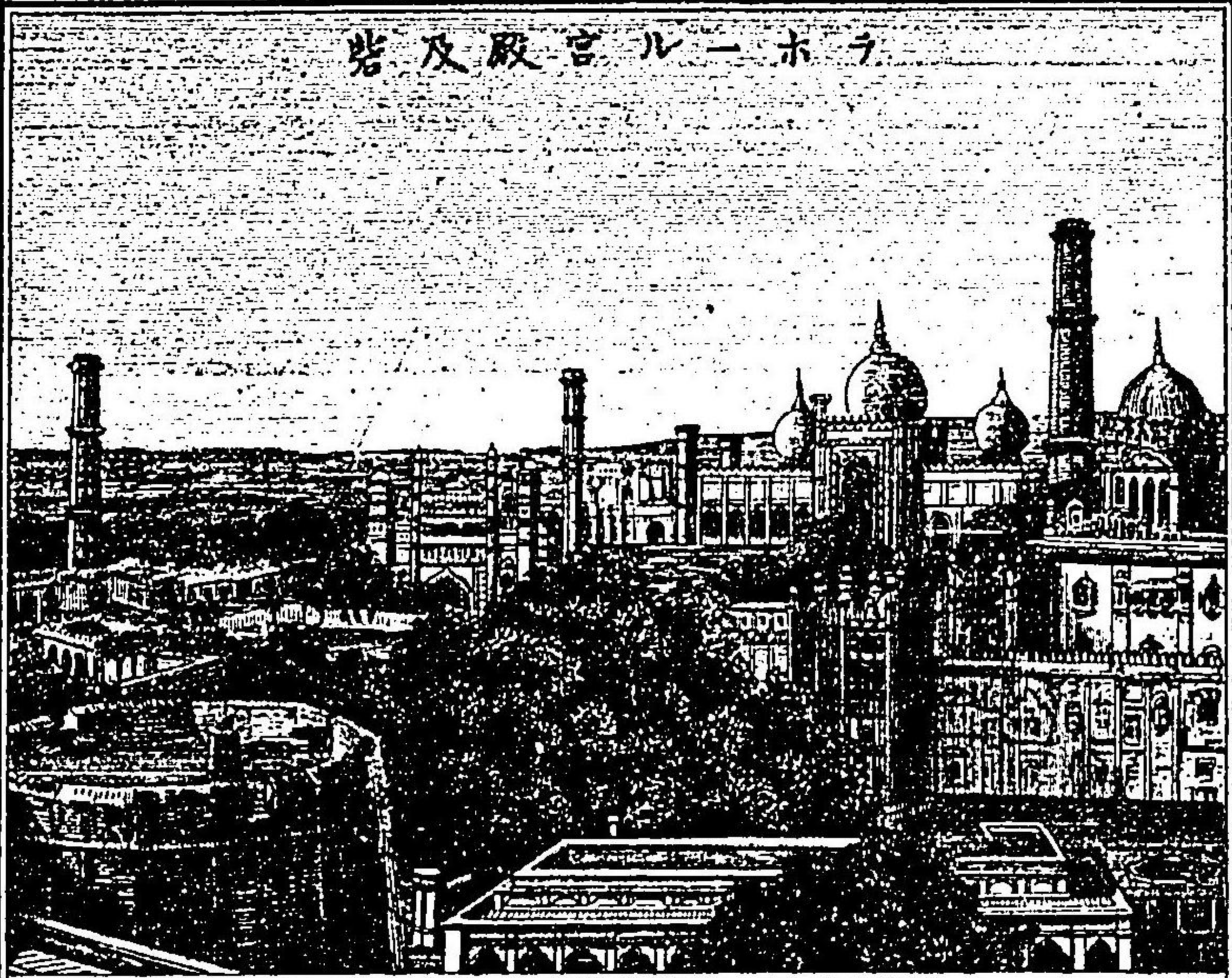
面表之殿宮



巢窟とふまる者多く偶々人の住むあるも  
 傾橋蛛網の懸るあり寂寞として愴々  
 其モゴル家の旧臣は賤工乞食等を為し  
 空しく路頭を迷ふ者幾百千の數知らず  
 實は憐みの姿あり  
 蓋し斯く成り果てしるは英は取らまじ故ふまじ  
 其原因を繹まは全く素餐の貴族らが  
 民を壓抑箱制し妄りし租税を重課して  
 国家の為めを盡すべく飽迄奢り馬鹿となり  
 榮華の夢を貪りて天罰と亦国民の  
 卑屈無氣力且つ智なく邪教を昏醉迷溺し  
 国家を愛せざるに因る其英人が罪惡の  
 如きは二段の事にて余輩は敢て責めざるあり



ラホール宮殿及砦



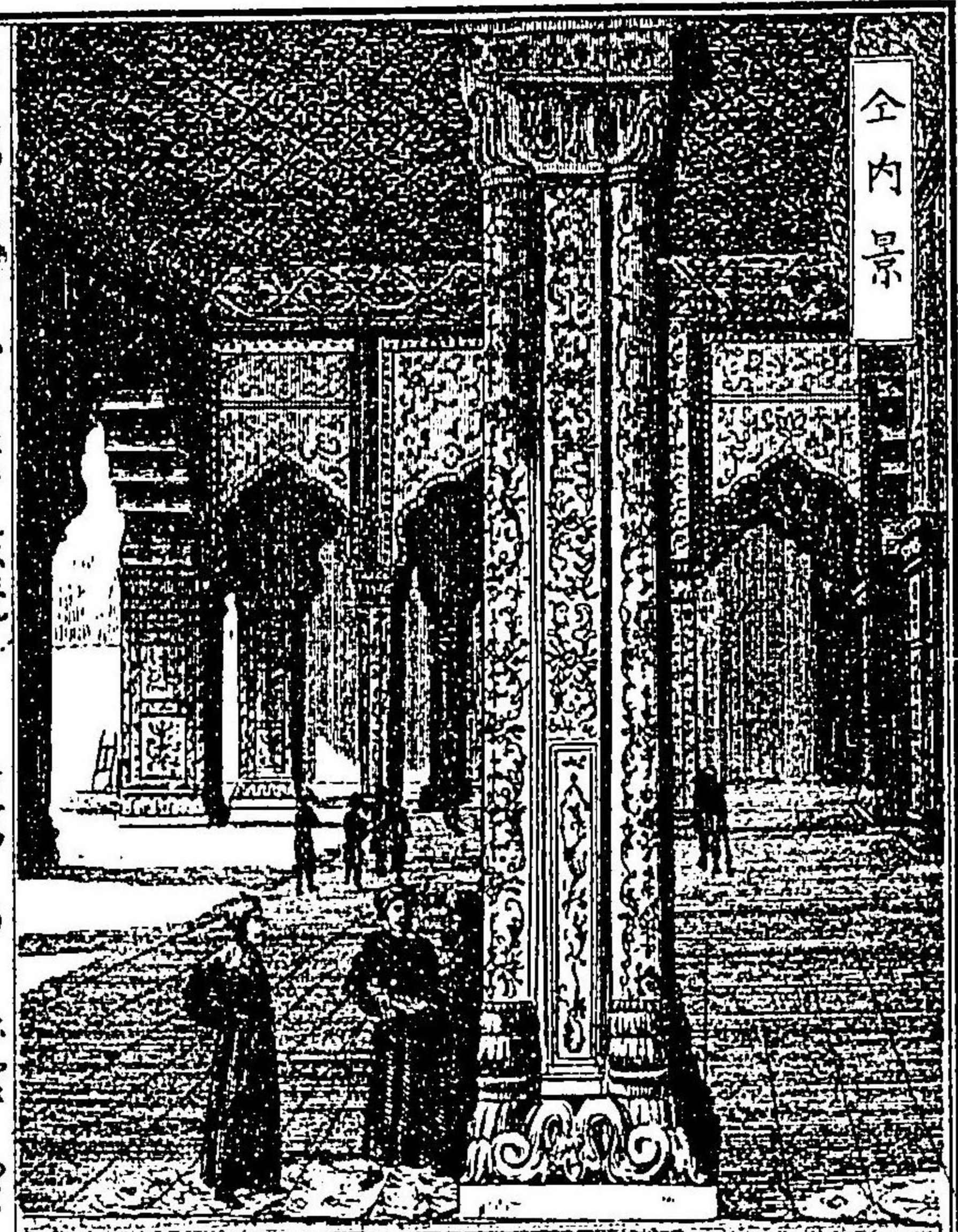
大同小異あるを以て、餘は畧すべし。總て此印度に於ての宮殿は、壯麗ふきども華美ふらむ彼の歐洲に著名なる宮殿甚だ多きこと皆華美にして實價ふし。否々印度の宮殿は壓制邪惡の殘物か、或は宗旨の迷夢をば呈露する外、外ならざる是ぞ全く實價ふき贅物ふりと云ふべき乎。看者宜しく察すべし。

○其より諸王の墓を見て、停車場より瀛車を乗り西北パンヂヤフ州に入り、教多の驛を經過してラホール府に達し、行程三百二十五英里。

ラホール府之記

さてラホールはパンヂヤフの一首府にしてラビー河の南方沃地の盛都にて、現今人口十二万

全内景



又宮中の各処に庭苑ありて奇樹を植へ、小山を造り池を鑿り亭を為り橋を架し吟哦憩息所とふす。又數十の庫廩あり、金銀珠玉や其他の宝物貯藏の所とす。

(宝物概略英人の掠奪する所とあり現今存在)

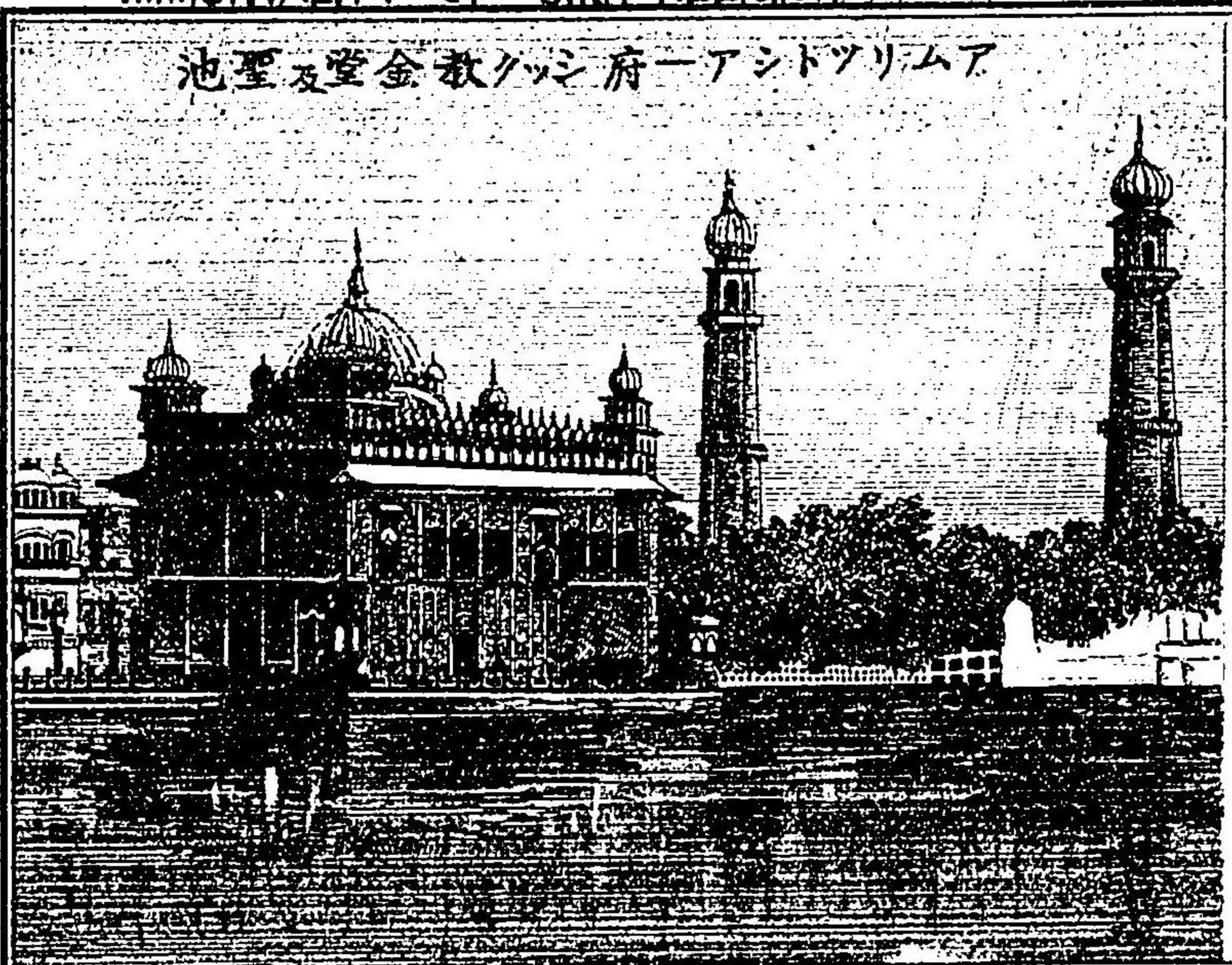
尚不宮中の模様等記事ふきは非きと

看る者驚歎絶ざるふし、其より室に入る時は、柱壁及其他、みま赤白二色の大理石中、珠玉を散嵌せ、其宮中の室房は総て三百五十あり、就中彼の国王が住居する処は、透明絶美の珠玉を最も多く用ひしり、殊更上は掲げしる一畝の如きは、宮中第一等の室にして、看者の目を眩奪す。



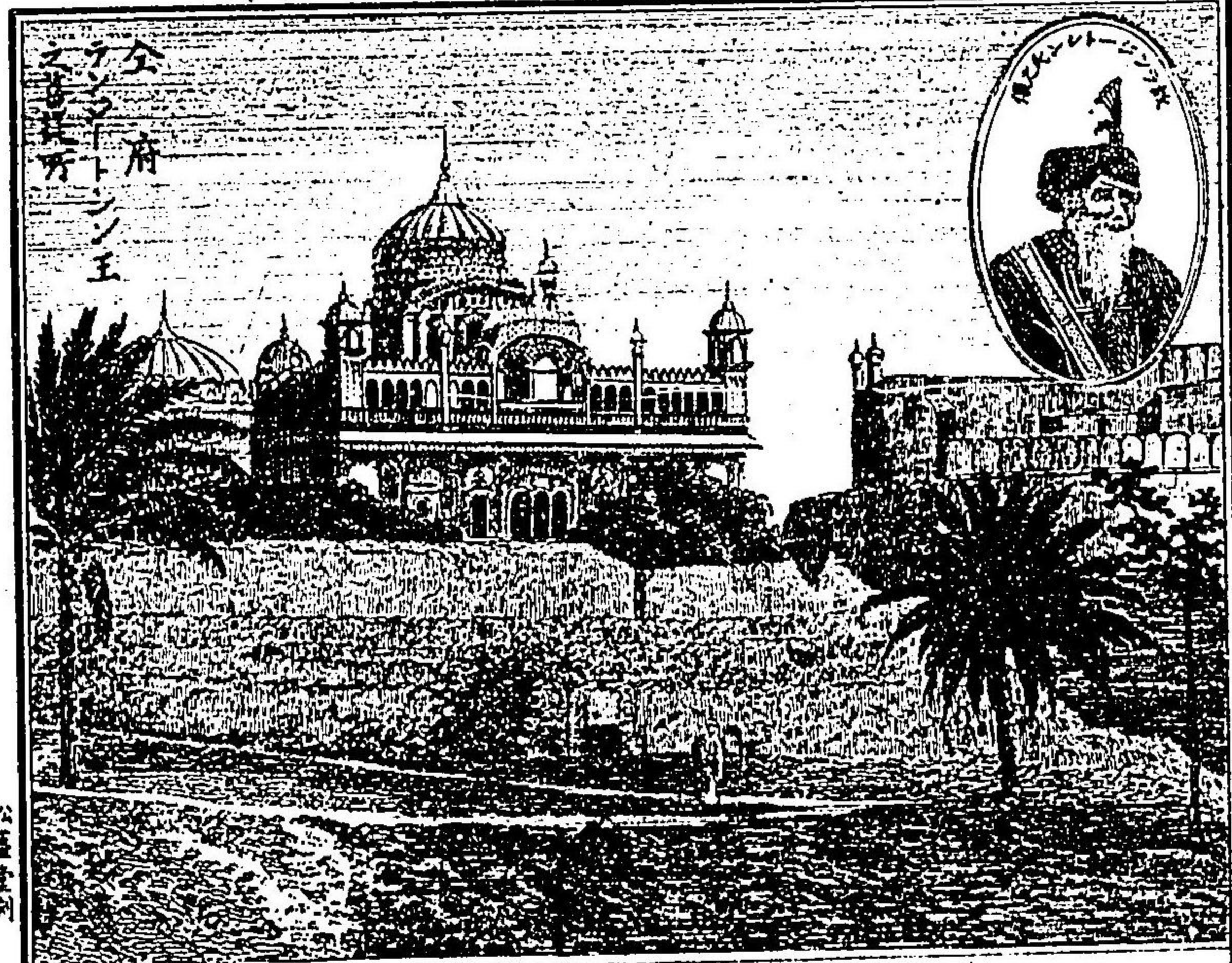
GOLDEN TEMPLE AND FOUNTAIN OF IMMORTALITY OF SIKH RELIGION, AT AMRITSIR.

池聖及堂金教クシ府一アシトツリムア



アムリツトシアーといふ一の都會に到着す  
 アムリツトサ一府之記  
 パンデヤーブ中の大都會人口十有四万あり  
 此地はシツク教の爲め甚だ名高き所にて  
 金堂聖池の在るに因る蓋しシツクといふ稱は  
 サスクリットの言にして弟子といへる意義なりと  
 此宗教は印度人ナナツクといふ理學者か  
 今より四百余年前説き起したる者にして  
 ナナツクは一千四百九十三年に死せり  
 此人既死後九人の高僧次いで出で教祖の旨を弘めたり  
 印度の語にて此僧をグルといへり譯しなば  
 先生といふ意義ありと  
 さて此堂は二字ありて池に臨める宏闊を

BURIED PALACE OF RANJITO SIN, LAHORE.



市街の外郭は城郭を二重に匝らし其周囲  
 凡七英里半ありて堅固の砲臺配置せり  
 此地は回教大小の寺院甚だ多くて  
 ゼハンギルといふ王の宮殿並に墳墓あり  
 其周囲は園ありて之をサイゼハンといふ  
 此外牧拳を遣ふ  
 蓋し此地は今を去る一百三十八年前  
 北部土人の有とあり其より五十年を経て  
 ランジートシンと云ふ回教人の手に移り  
 爾來シツク教徒らと数々戦闘ひ敗れ取り  
 一千八百五十年英軍故なく攻め入りて  
 遂に領地と爲したりき  
 又此地より瀛車を衆り三十英里を駛行して



禮拜堂とし他の一は、僧房と為す者として、禮拜堂は方形の五層を建し巨閣あり堂の中央圓形の甚だ大なる樓ありて小樓四方六箇あり高サ一百五六尺全體紅白兩色の美石を用ひ棟楹也梁桷板楹等近も花紋の類を密刺し音巧なる事類ひなし其正門より入る時は内部は総て黄金の薄き板を張結りて少しも残す所なく多くの房室皆然り是も金堂と云ふ稱の因て起りし以所あり前日ヘナルス府に於て見物したるものよりも遙かに優りし美觀あり

又後面の大池をば聖池と稱し諛信者必ず之に沐浴し後ち會堂を集まり堂の中央廣室を會堂と為し正面の一の壇を設けたり偶像等は更にあく白衣を着せし高僧坐して美麗の聖書を左手持ち朗讀せし後ち説教す説教既し終りまば信者齊しく唱歌して奏樂を為し之を和す耶蘇の儀式は髣髴たり今其教旨を尋るよえとナツクは回教とバラモン教を合併し教を立しものとして偶像を祀らず唯一の無形の神を奉じつ、耶蘇は凡人なりといひ常之を敵視せり

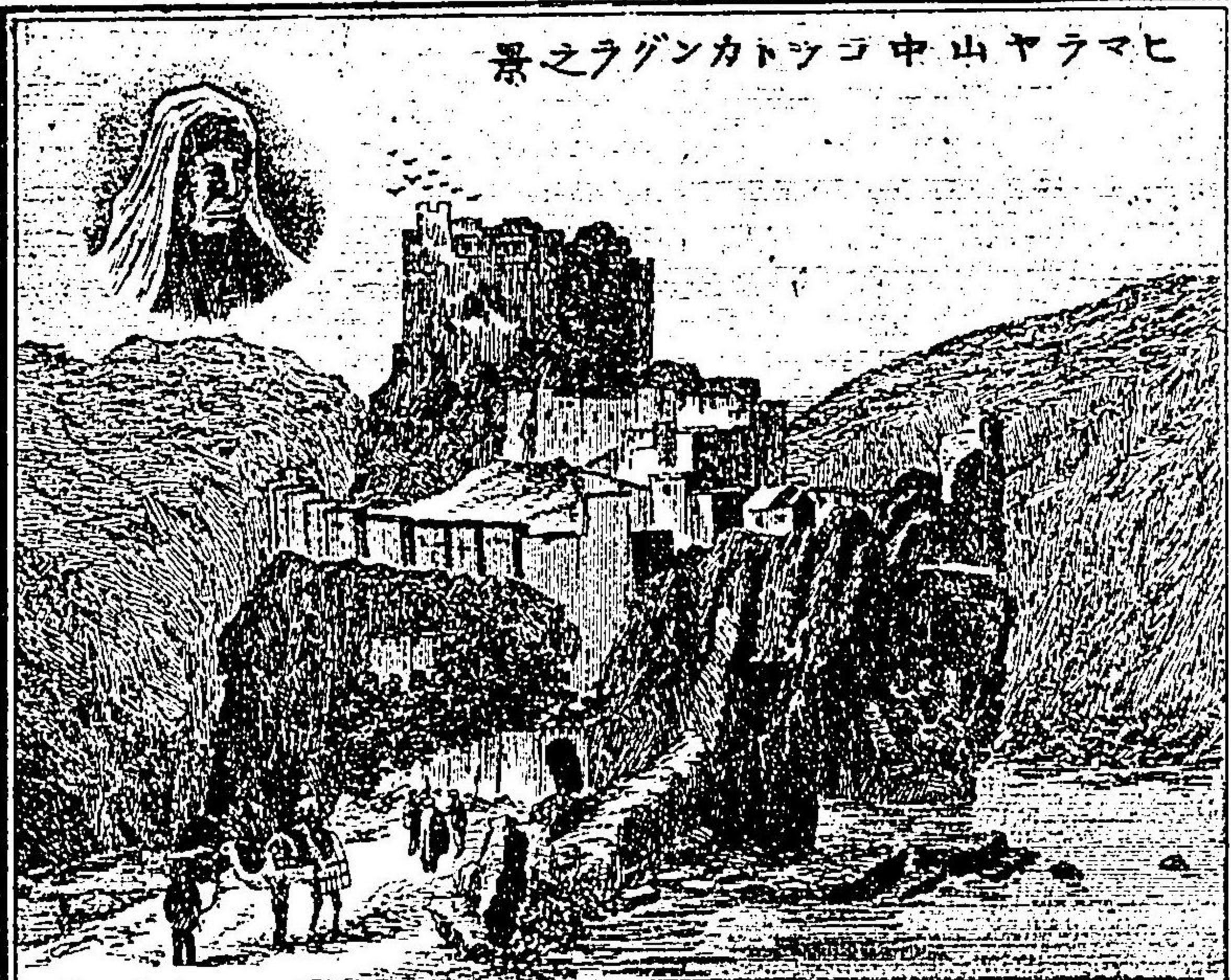
さて此府は右の外、格別奇觀ありまは今より路を北取りカシムル領に入らんとす



女府之婦人

然るは是より北地はヒマラヤ山脈崎嶇して地勢自然は高くなり道路險悪なるが故鐵路の布設かきのみか西藏國へ越んよは彼の海面より高さ事一万八千尺余の險路を歩まざるを得ず又其邊の國音は南部中部と事異り彼の現今不通なる梵語は類似して通辨等も六ヶ穀其艱難や思ふべしとまは西藏へ旅行するの須路あり且つ我折角此地を來て世界一の雪山を越へざるのみか見せずも歸朝するは遺憾あり否余の遺憾のみならず讀者は對して謝辭を断然心を定めつ、牛車を僦ふて北進す凡そ七十六英里





景之ラグンカトコ中山ヤママヒ

今日は暑氣を避ける爲め、是より來りしものなりと(七四)依て全氏は実を告げ、首府追送らん事を請ふ氏は速かに承諾し、暫時として解纜し下流へ航する數十英里、時は舟中ハウス氏は自作の地畝を予に示し、地理民情を教へられ且つ西藏への行路をも詳しく誌して與へらる斯くする間、舟は早スリナガル府に着せしが互に離別を惜みし、全氏は下流の各地にて傳道時日は限りあり、再會を期し別を告ぐ余は厚意を感謝して、互に名指と交換し上陸すれば氏の舟は流に循ひ進み行き余は橋上を過るとし、舟上橋上遥望し手巾を以て相招き、氏は少馬舟を停り

遊は山ヤママヒ人洋西



撃ぐあり、屋根を覆ひて其下、歐洲人の乗るを視る、予や喜ひ走せ寄りて何國の八かと尋ねる、英國龍動基督教傳道會社の宣教師、ハウスといへる人として平日ハサワは出張し、布教するの人なるか、今回カシミル州の首府スミナガルは傳道し

カシミル州はかりし、山路よく峻しく、二頭の猛牛足を折り、一歩も進む事を得ず、よ、於て是非もあぐ、導者を備ひ山を越へ、或は谿間を歩行する、十有三日此里程、凡そ一百八十英里、素より宿屋も非きは、樵夫農家は宿を請ひ、レスランダより來りしかスミナガルて、河流あり、然るま前の河岸は、一種の船を



橋驛ルガナミス府首之ルミユシカ



船導傳ルガナミス

影を見送り去りたりき其友千の露如たる感情洵も切なりし。

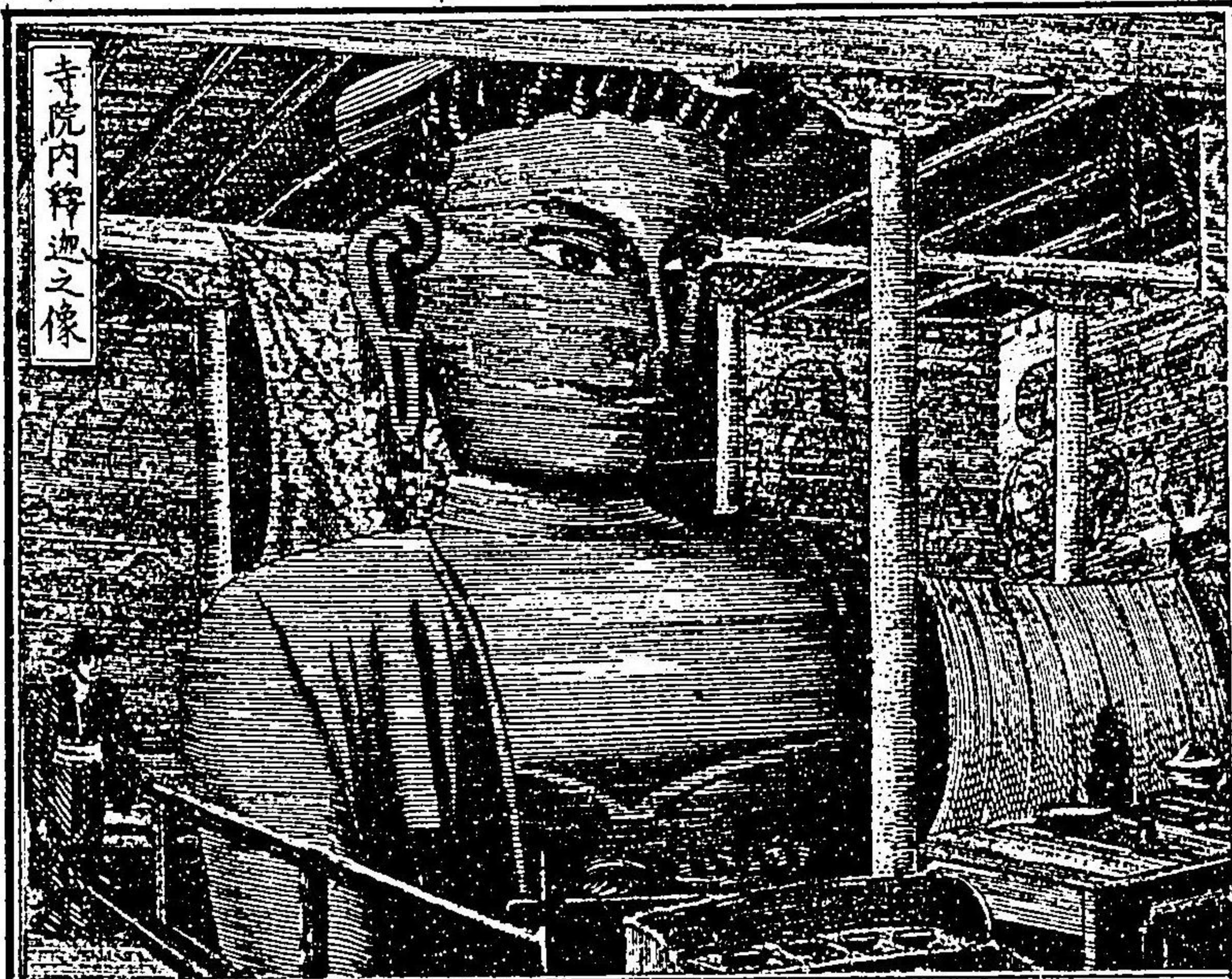
スリナガル府及登雪山之記 (アムリットシアーより)

此地は即ち首府として人口凡そ四万余人種素より交通不便なる僻地の都會なるが故  
 家屋の如き華美ならずされども府民の山林や鑛山田地を所有せる富者乏しからずして  
 土人質朴勤勉且つ親愛の情義あり右に示せし女子の圖は即ち此地の貴女として  
 身は金銀や珠玉の粧飾を為し其衣服毛織縮帛等を着け歐洲人と比較すも  
 決して耻ざる所なり此地は於ての産物は材木鑛物獸皮等毛布の類を多とす  
 蓋し毛布は土人らが擧て製するものにして貴賤男女を抱らず巧み之を紡織す  
 歐洲貴女の尊べる肩掛は即ち之なりと。

さて此地は強の導者四人を備ひつゝヒマラヤ山を越へんとし東北方へ進むこと  
 凡そ三十英里までコトカングラ村に着く蓋し小山の上あり(七三)其より行路を北に取  
 大山脈をかゝりしが道幅少しく廣くなり行路拾別険ならず(此邊避暑宜しパンチヤフの  
 の來る者多し其圖は)逕路行行數里を行く漸く高く陡しくて崖道大ひは荒蕪して  
 即ち前よりあり



IMAGE OF BUDDHA  
IN THE TEMPLE.



寺院内釋迦之像

イフレストといひ高さ或方八千七百七十八尺あり之を世  
界無比の高峯とす夏季と冬季も方尺以上は白雪絶へき  
衆願みて雀躍も箕居休憩して眺むるは  
衆山匝環抱し連峯猶不且雲まかり  
四方の眺め更は無く唯幽邃して清きのみ  
須臾して降りしが足滑滝止まらず  
危険を犯す幾十回或は泊り又降り  
一日半を経過して西藏國の西の端  
ラダック國の首府あるレイト云々地を達したり  
西藏國之部 支那領  
北は崑崙山を隔て支那鞞鞞と境界し  
西南方はヒマラヤの大山脈に接し  
印度は隣し東方は支那の本部と界せり  
面積六十万方英里之を前後は區別せり

STREETS OF LADAKH.

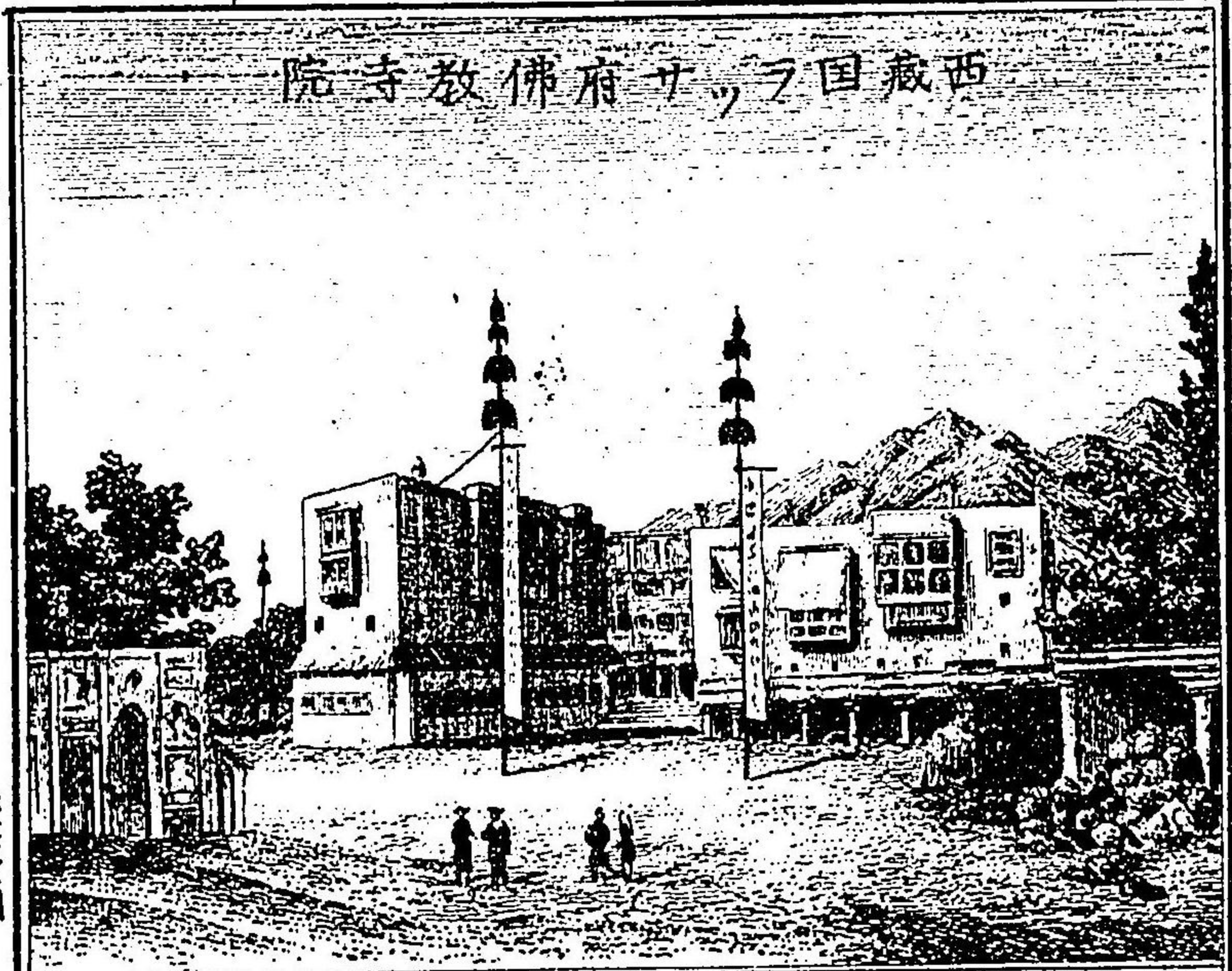
街市之レ国ラダク



一步一步は隘くあり足を駐むる所なく  
仰げば峯は雲入り幾萬尺とも測らざる  
心奪れ氣も疲る一歩も歩る事を得ず  
是に於てか肩輿に乗る(前は直あり麻布を以て  
造れる経便のものなり)  
導者は雲を排ひつて石を穿ちて降りしが  
樹木蕪蒼蒼天を蔽ひ回顧寂然音絶へて  
人世もある心地なき盤屈敷次登りしが  
暮色既に山は満つ依て岩窟中に入り  
用意の水を飲用し果實を食ひ飢を凌ぎ  
其夜は是に泊せしが翌朝未明に出立し  
或は東より北より崎嶇たる峭險攀登り  
斯く為せる事三日間最高道に達したり  
(但し海面を核く二万八千尺我國富士山の頂嶺より  
り高さ車三千尺余あり而してヒマラヤ山脈中最高の峯を



院寺教佛府ラツサ国藏西



拉薩聖廟

地勢は世界第一の高陸にして海面を接  
 一万余より最高は一万二千尺ありて  
 大略我國富士山の極絶頂と較ぶべし  
 國內湖水多しして大なる河流二條あり  
 西をラダツク河と云ひ東をサンポー河と云ふ  
 ラダツク河は印度河の水源 生産物は金銀や  
 サンポー河はラマツク河の源也  
 硫黄 獸皮 等にして 東南方には五穀あり  
 内地邊土の住民は総て矇昧野蠻にて  
 廣野を轉去せるもあり 或は部落を為すあり  
 其極西のラダツクは即ち余輩が印度より  
 進入したる土地を指す是より紀行を始むべし

ラダツク國レエ府之記

此地は以前西藏の領地ありしが印度より

カシエルの王之を取る然るは今より十年前 羈絆を脱し獨立す 此ラダツクの面積は  
 僅々三万英方里 人口一万五千とす 蓋し檀制政治にて 國民佛を信奉す  
 レエは人口一万余 家屋は粗悪の石材や丸木材にて築造し 寺院と政廳を除きは  
 床の設けあらずして見るは足るもの更なし 一の佛教寺院あり 構造甚だ大にして  
 釋迦の像を安置せり 僧侶の威權強くして 國王之は服従す  
 此地をば出立し ラダツク河は循ひて 東へ進む 四百余英里 源盡きし所より  
 ヒマラヤ山の一派脈 ガンギヤス山を乗り越へて サンポー河の源は出て 流きは浴ふて 東行す  
 凡そ八百五十余英里 北より來る一河あり 之をラツサ河と云ふ 依て之を 訴る  
 四十英里余より ラツサ府は着たり

ラツサ府之記

西藏國の首府として 人口五万二千あり 家屋は石を以て造り 市街甚だ清楚あり  
 是地は於て觀るべきは 清國政府の鎮臺と 無数の佛教寺院と 元來西藏國民は  
 皆佛教を信奉し 其盛なる 亞細亞中 他國に比き所にて 古來僧徒の首領を



グライラマと尊稱し、法王として國內の政權を委し且之を活佛と云ひ尊崇す  
 國人曰く此ラマは宿る所の靈魄は往古佛陀の靈なりと蓋し此のラマ滅するや  
 其魂の轉寄せし兒子を求めて之を擧げ其位を嗣がめり其子を求むる方法は  
 種々の器具を陳列し中ラマが生前より愛玩したる物を雜ぜ之を兒子の前置き  
 兒子盡く此遺物は觸る時は是き其生前已き屬したる遺財を辨する證とせり  
 扱て此ラマの威權たる非常な高きものにして人民路は逢ふ時は地上は伏して敬礼す  
 若し拜せざる者あらば嚴刑處す者とせり然るは今を去る事一百五十余年前  
 支那は屬し政令はラマの宰相四五名と支那の官吏と協議して施行するを例とせり  
 市内は壯大華麗なる佛教寺院數十あり中ラマの宮殿は結構壯觀華美にして  
 無数の佛堂高塔を宮の四方に建立し其中無数の佛像金銀珠玉充滿す  
 蓋しアジア各國中如此金銀を佛寺僧侶に擲ちて其冥福を祈る者  
 又と見ざる所なり且つ國民中長男を除くの外は皆度して僧侶と爲すを例とせり  
 女僧の數も又多し國中一の陋習あり他一家數人の兄弟中へ一人の

女を娶りて共々妻を爲せる一事あり此都府の産物は金銀香水精工品  
 佛像佛具毛氈之毛織物を最とあり

### 近日第七卷出版

付讀者諸君に申上べき一事あり他本志本書は第六卷を  
 以て完結致す可筈の処今回は釋迦耶蘇マホント等の靈跡  
 會名名所旧跡多く且つ精細に調査せられたる故以て已を得ず第七卷を出版せざる可らざる  
 至れり而て其七卷は數月前英國は政略せられたる縮向國マングレー府は遊び數十の名所を  
 見物志アバ府及其他の旧跡を一覽次でこり半島に至りシカポールを経て暹羅へ渡航し内部  
 ロースの嶽に似たる人種の地を杖を曳きカボシヤを経て交趾支那は出安南國の各地を遊歴去て  
 支那乃名所旧跡  
 普ねく見物志臺灣朝鮮等を経て長崎は寄港し神戸の上  
 陸して芽出さく大坂へ飯へり世界一週の祝めとして  
 仕つるべくも付何卒前巻とくも愛顧を垂れ全地球上  
 の寫真名所をして完備せられん事を謹んで奉希望候也

### 地球の番を進呈

世界 萬國名所番繪第六卷終







掲げて示す指南車の。方ハ違々る文の道。さて上欄は種々の  
實字を彙字類を分け。其又實字に正當の。英語を一々記入して  
英漢文字を對照し。其中卷の下欄は。いと文法は必用乃  
用字の例をイロハコシ。多の古哲の用ひたる。句を各一々採萃し  
叮嚀及覆例を挙げ。且其字毎に解を添。又其一字の顛倒で  
文意の違ふ理由を記。異同の便を示したり。以上欄は上卷の  
實字に對し虚字を考。且又一々英語をも。記入し盡し遺憾なく  
少るに従來我が國に。未だ類をな新書し。さて其下卷の下欄は  
先づ歐文を漢文す。又漢文を歐文す。且又和文を漢文に  
翻譯するの例を挙げ。次に名家の名文を。掲げて示す作文例  
其又上欄門を分け。例ハ記事や論說の。其類漢文と云ふなり  
名家の用ひし熟語を。奇妙に摘とり解を添し。記して漏さぬ三體書  
故に此書を繕ければ。英と和漢を専門に。或ハ三休もろもろに  
充分獨学を得べし。諸君真偽を試まよ



